

〈論 文〉

宝永元〔1704〕年空念上人筆録アイヌ語彙 「狄言葉」の言語学的考察¹

佐藤 知 己

- 目次
1. はじめに
 2. アイヌ語の歴史的研究について
 3. 空念資料について
 4. 空念資料の分析
 4. 1. 空念資料の翻刻
 4. 2. 用字法
 4. 3. アイヌ語の引き当て
 4. 4. アイヌ語史の観点から注目される表記上の特色
 4. 5. 語彙的、文法的特色
 5. おわりに
- 参考文献
- 日本語表記仮名索引
アイヌ語表記仮名索引
仮名引きアイヌ語索引
日本語見出し語索引
引用アイヌ語索引

キーワード：空念上人、アイヌ語古文献、アイヌ語史

1. はじめに

本稿では國東（2010）で初めてその存在が広く知られるようになった、曹洞宗の僧侶空念上人（1655?-1731）筆録のアイヌ語語彙集「狄言葉」（以下、「空念資料」と略称）を言語学的に考察する。

¹ 本稿は平成25年度科学研究費（研究代表者佐藤知己、基盤研究（C）「古記録によるアイヌ語の歴史的研究」）による成果の一部である。また、内容の一部は国立民族学博物館における研究会「言語の系統関係を探る」（2012年5月26日、研究代表者国立民族学博物館教授菊澤律子）、北海道立アイヌ民族文化研究センター主催の講演会「加賀家文書のアイヌ語を読む」（2013年7月28日、別海町）で発表した。

國東 (2010: 5-10) によれば空念上人は福井県福井市南山町の曹洞宗普門寺の開祖で、当初は福井藩士の若党であったが、出家して禪の修行をし、元禄三 [1690] 年より社寺に納経のため諸国を行脚し、蝦夷地には宝永元 [1704] 年に渡海し、各地に足跡を残している。その中で聞き知ったアイヌ語をその年の8月28日にまとめたものが本書である。今後、さらに古い資料、内容的に重要な資料が発見される可能性はあるが、年代が明記されており、採録の経緯が比較的明らかな資料としては、貴重なアイヌ語資料として今後も比類ない価値を持つものであることは疑いない。難解な箇所も少なくなく、今後も研究が必要であるが、以下ではこの資料がアイヌ語の歴史的研究の観点からどういう点で貴重なかを具体的に示すことにする。

2. アイヌ語の歴史的研究について

空念資料について考察する前に、アイヌ語の歴史的研究全般に対する筆者の立場を簡潔に述べておきたい。アイヌ語は古い記録が乏しく、現代の方言資料が豊富にあるわけでもない。また、同系言語もこれまでのところ知られていない。歴史的な研究にとっては不利な状況にあるわけである。言語学は実証的な学問であるから、アイヌ語研究者がアイヌ語の歴史的な研究について悲観的な考えを持つのも無理もないことかもしれない。しかし、言語の研究というものは、通時的な研究と共時的な研究の両面から行われるのが望ましいという点についてはおそらく異論はないであろう。アイヌ語の歴史的な研究は確かに困難かもしれないが、全くせずに済ますという考えも極端なように思われる。今すぐは無理かもしれないが、今後、何十年か後に、思いがけない新しい知見が積み重ねられて、アイヌ語の歴史的な発展について突破口が開かれる可能性が全く無いとは言えない。その時のために基礎的な研究を積み重ねておくことは無意味ではないであろう。また、実証は困難かもしれないが、歴史的な観点を持つことによって、共時的な研究面でも新しい発見がなされることもあり得る。様々な可能性を考えることは決して無駄ではないと思う。

アイヌ語の過去について、様々な可能性を検討するとして、我々が留意しなければならない事は何であろうか。それは、以下の考察でも具体例を挙げて指摘しているところであるが、過去の研究者によって無意識に取られている誤った態度である。すなわち、「アイヌ語は変わらない」という暗黙の認識である。これが一種の偏見であることは、言語研究者なら誰しも理論的には心得ているはずだが、アイヌ語を研究しているとなつて現代のアイヌ語の知識で過去のアイヌ語を解釈してしまいやすい。もちろん、これは不可避的なことではあるのだが、自戒を込めて言えば、我々ももっと、「過去のアイヌ語は音韻、文法の両面で、現在のアイヌ語とは似ても似つかないものであったかもしれない」という可能性を常に忘れずに研究する必要があると思う²。時には、思い切った推論も必要ではないかと思う。アイヌ語のたどってきた歴史的な状況を考慮すれば、外的、内的両面の

² これは実は私の独創ではない。ウイグル語学の庄垣内正弘先生のご示唆による。ある時、私のそれまでの研究について「お前のやり方ではアイヌ語の過去の姿はわからない。もっとよく文献に現れているものを見なければ」と強く諭されたことがある。その時初めて、自分もアイヌ語の過去について無意識の偏見（アイヌ語は変化しない）を持っていたことに気づかされたのである。深く感謝申し上げます。また松本克己『古代日本語母音論』（ひつじ書房、1995）にも刺激を受けた。僭越を承知しつつ記して感謝申し上げます。

要因によって受けたアイヌ語の変化は相当大きなものであったに違いない。しかも、我々の手の中にあるのはそのパズルの全体の中の、ほんの数個かもしれないのである。そのわずかな手がかりの中から、本来の図柄を想像することは不可能と言えれば不可能かもしれないが、辛抱強く考察を進めることによって、新しい証拠発見への道を模索し続ける必要があると思う。ただ、その空白は大きく深い。ある場合には既成観念を打ち破って、全く別の見方をすることも必要ではないかと思われる。「実証性がない」と一笑にふすのは簡単だが、そのような努力を怠るべきではないと考える。最近も、ある研究者が「主格人称接辞はアイヌ祖語には存在していなかった」という意見を述べたそうである。筆者は直接に発表や論文に接していないので、その根拠について論評する資格はないが、正直、第一印象としては、「何を馬鹿げたことを言っているのか」という気持ちであった。特段に何か実証的な反証を持っているというわけでもないのに、直感的に頭から否定してしまうのである。それは、アイヌ語の主格人称接辞というものが現代の我々にとってはあまりにも当然の概念であるからであるが、実は理論的には過去のアイヌ語でもそうであったという絶対の保証はないのである。様々な可能性を偏見にとらわれずに検討することのほうが大事である。この方はあらためて私にそのことを気づかせてくれた³。ただ、推論が重要だ、とは言っても、たとえば「縄文語」、「X語」という用語を導入しただけでアイヌ語の過去をすべて「説明」というようなやり方は *obscurum per obscurius*、未知のもので未知のものを説明しているだけだから、事実上何も新しく得られるものがないわけで、あまり感心しない。あくまでも言語学的な根拠に基づくべきである。逆に言えば、どんなにわずかであっても言語学的に実証的な証拠に基づいて推論しているのであれば、その説は検討に値すると思う。ちなみにアイヌ語の人称接辞については、筆者も思いきった仮説を持っている。確かに主格人称接辞はアイヌ語ではある種、「影が薄い」存在ではある。特に、一人称行為者から二人称受動者への行為を表す、いわゆる「複合人称接辞」（「主格・目的格人称接辞」とも）においては、これまでに知られている現代のどのアイヌ語方言でも不規則な形式になり、明白な主格の形式は現れないか、二次的発達と思われる形をしている⁴。前述の研究者が実際、どのような根拠に基づいて主格人称接辞の新しさを推定したのかはわからないが、もしも主格・目的格人称接辞における主格マーカーの欠損、劣勢を主要な根拠にしているのだとしたら、筆者は必ずしも賛成できない。もっとも、筆者の説明にしたところで、ほんのわずかなピースで全体像を描くことは困難である。説明できない事例も確かに多い。かなり大胆、強引な解釈であることは認める。しかし、アイヌ語の複合人称接辞の不規則性の問題は、もっと別の解釈の可能性もあるのではないかと思う。一人称行為者から二人称受動者への行為は、沙流方言、千歳方言では *eci-* という形式で表される。通常はこの形式は分析できない形式とされるが、強引に *e-* と *ci-* に分けることができると仮定すると、*e-* は二人称目的格、*ci-* は一種の「自動詞化」の要素と考えることも可能であ

³ もっとも、目的格人称接辞しか持たない言語は世界的にみると決して珍しくない、ということが示されていないとあまり説得力はないであろう。また、一つでもそういう言語の例があれば、アイヌ語もそうだった、と言ってよいかというと、話はそう簡単ではないだろう。

⁴ いくつかの方言にみられる *eci...-an*「私がお前を」のような形式における *-an* のような要素のことをここでは意図している。

ろう⁵。やはり一人称主格は現れていないわけであるが、これは主格接辞存在そのものの欠損というよりは、文法構造の方面から考察すべき問題ではないかと考える。無視できないのは、主格人称接辞の欠損が起こるのは、一人称行為者から二人称受動者への行為の場合だけで、二人称行為者から一人称行為者への行為の場合は、多くの方言で、規則的な e-en- というパタンが現れる、という点であろう⁶。細かな点を捨象して考えると、主格の「欠損」は、「一人称行為者から二人称受動者」という組み合わせの場合にだけ顕著だ、ということになる。これは一体、何を意味するのか。ここで想起されるのは、世界の多くの言語で報告されている「逆転 inverse」という現象である。Klaiman (1992: 239) によれば、例えば北アメリカのクリー語では、二人称が一人称よりも文法階層上、上位にある。従って「二人称行為者が一人称受動者に行為を及ぼす」場合は、より「ノーマルな」状況であるので、direct (順行、と訳しておく) のマーカーが動詞に付く。これに対して、「一人称行為者が二人称受動者に行為を及ぼす」場合は、ある種、有標な事態であるので、inverse (逆行、と訳しておく) のマーカーが動詞に付くという。動詞にマーカーが付くか付かないか、などの細かな形態的な条件は違うけれども、一・二人称の組み合わせによって動詞形態が左右される、という点ではアイヌ語も大局的には類似のパタンを示しているのではないかと考えることもできよう。すなわち、「一人称行為者から二人称受動者への行為」はアイヌ語の人称の階層上、有標な組み合わせなので、形態的にも不規則な形式になっているという可能性である。もっとも、現在知られている形式がオリジナルな構造そのものである保証はないであろう。もっと複雑な構造であった可能性は大いにある。ただ、単純な人称の欠損と見えたものは、実は欠損ではなく、アイヌ語の過去に存在した「逆転」という文法現象の残存、変形ではないかと、考えるわけである。これが実証性に乏しい、単なる思いつきに類するものであることは筆者自身が一番よく承知していることであるが、大切なのはより多様な角度からアイヌ語を見る、ということではないかと思う。根拠も明示せず、頭から否定するのではなく、間違っているかもしれないが、さまざまな仮説を立てて、それをもとに少しでも考察を進めて行くということがアイヌ語の研究をより広範囲に発展させるきっかけになるのではないだろうか。以下の空念資料の考察においても、実証がある種困難な、大胆な仮説を多々述べることになるが、ここで述べたような趣旨を念頭において検討していただきたいと思う⁷。

3. 空念資料について⁸

空念資料は現在、空念上人が開基された福井県福井市南山町普門寺の所蔵である。空念上人の事

⁵ 理論的には*ecici- もあるべきだが実際には知られていない。「重音脱落」で説明するしかないが、少々苦しい。要検討。

⁶ 沙流、千歳方言はこの点で例外的である。主格の e- が欠損するので、別途考察の必要がある。

⁷ 学術的な反論を期待するが残念ながら現実には厳しい。学術的なコメント(書評、論文引用など)というものは本来内容の重要な側面に対して同意するか反対するかを、実証的な証拠をあげて述べるべきものだと思うのだが、あらゆるものを既知かつ自分達のものごとく自然に思えるということはある種幸福なことかもしれない。

⁸ 空念資料発見時、新聞社からの照会に対して、年代が明記されているアイヌ語文書としては最古ではないか、というコメントを筆者はした。これは通常のアイヌ語研究者としては必ずしも不適当な発言ではなかったと思うが、この情報化時代に資料の専門家から見ればこの断定が十分なものであるはずがなく、おそらく関連の専門家からすぐに陸続と反論が来るだろうと思っていたが、実際はそうではなかった。古い資料の数がやはり少ないということなのか、関心を持つ人の数が少ないのか、どういう事情によるのか、興味深く思っている。

績、及びこの文書の発見の経緯については國東（2010）に詳しい。筆者は2012年10月に普門寺を直接訪れて文書を閲覧、撮影させていただいた。現在、普門寺のご住職をされている田原晰方師のご厚意で閲覧が実現した。ここにお名前を記して深く感謝申し上げます。田原師によれば、この文書は数十年前、先代のご住職の時代に普門寺が火災で焼失した際、危険を冒してかろうじて雪中に次々救出された文書の一部ということである。火災の影響で、四囲が焼け焦げ、特に下部の焼損が激しく、残念ながら一部判読困難、不可能な箇所もある。惜しむべきことではあるが、現代の我々は、この貴重な文書が数奇な運命にもかかわらず300年以上もの間、大切に伝えられてきたことに深く感謝すべきであろう⁹。

4. 空念資料の分析

4. 1. 空念資料の翻刻

空念資料の翻刻を以下に示す。便宜上、見出し語に通し番号を付し、國東（2010）の写真の掲載ページも併せて示した（なお、古文書で普通に用いられる助詞の「より」を表す文字は印刷の都合上「ヨリ」と翻刻してある。また、欠損部分は判読可能な部分のみ翻刻し、欠損がある可能性を注記していないので注意されたい¹⁰）。

p. 194

1 — 春ハ 者い可類 2 — 夏ハ さく 3 — 秋ハ徒可 “くふ

4 — 冬ハ ま多 5 — めしヲハ あま母 6 — 飛へヲハ 飛や者 “

7 — 粟ヲハ むじ路 8 — 火ヲハ あ遍 “ 9 — あめヲハ あぶと

但雨降る杯ハあふど免しと言

10 — 雪ヲハ お者 “せ 11 — 風ヲハ 連いら 12 — 日月ヲハ 徒、婦

13 — 星ヲハ のちう 14 — 雲ヲハ 尔しくろ 15 — 人ヲハ 志やも

⁹ ご住職の田原師は学術的な目的のためなら、ということで、快く、筆者の自由に貴重な文書を閲覧させて下さった。ご配慮に深く感謝申し上げます。ちなみに、幼少時から厳しい修行を積まれた禅僧らしく、お人柄も印象深い方であった。「托鉢行をしたことのない方には、世の中の真の姿というものはおわかりにならないかもしれませんね」と何気なくおっしゃったのが深く印象に残った。田原師は文書の行く末を大変心配されていて、保管、保存に公的な援助が得られないものか、苦慮されていた。文書の貴重性に鑑みるともっともなことで、文書の傷み具合からみて、早急な対策が望まれることをここに記し、筆者も一臂の力を提供しなければと考えている。

¹⁰ 筆者は古文書の専門家ではないので國東（2010）に載る北海道開拓記念館の三浦泰之学芸員による翻刻に多大の恩恵を受けた。この翻刻がなかったならば筆者には手も足も出ない箇所が多くあったであろう。記して感謝申し上げます。國東（2010）との主な差異は、本稿では用字法の研究の必要上、変体仮名もできるだけ忠実に翻刻したことである。また、細部では意見が相違したところも若干ある（例：國東「念比」、本稿「念頃」など）。

16 — なく事ヲハ ちし可類 17 — 念頃人ヲハ とくい 18 — 我と言事ヲハ てう可ひ

19 王ろ支と言事ヲハ うゑん 20 — 死寿類と言事ヲハ らい

21 — 物之無キ事ヲハ い志やま 22 — 物の在事ヲハ あ年ハお可い

23 — 浪ヲハ の多 24 — 海ヲハ あ川い 25 — 舟をハ ちつ婦

26 — 足袋ヲハ けり 27 — 川をハ 遍川 28 — 上川と言事ヲハ 遍ないた

29 — 下川と言事ヲハ 者ゝ那い多 30 — 川の深事ヲハ お本

31 — 同浅キと言事ヲハ お者く 32 — 右道と言事ヲハ 者るきるう

33 — 中道と言事ヲハ 志ん志起るう 34 — 左道と言事ヲハ 志もんるう

35 — 道廣キと言事ヲハ ほろ 36 — 道寿く那支と言事ヲハ ほん

p. 196

37 — 来る可と言事ヲハ ゑ可 38 — 殿といふ事ヲハ かもいとの
ゑ川くや共言

39 — 將軍様ヲハ ほんの可もひ 40 — 禁中様ヲハ ほんゝの可もひ

41 — 神ヲハ 志いのの本り可もひ 42 — 侍と言事ヲハ 尔し者

43 — 内ノ者と言事ヲハ うしおい 44 — その物と言事ヲハ 婦

45 — 喰事をハ あ遍ゝ 46 — 吞事をハ くう 47 — 薪と言事ハ ちく尔

48 — 火薪と云事をハ あべあ連 49 — 水をハ 王川可

50 — 湯をハ せゝ可 51 — 汁をハ おは 52 — 塩をハ 尔し

うしおれの事

53 — 塩をハ 志川本 54 — 粥をハ うせ 55 — 行事ハ おま

- 56 — 衣類をハ ちめ婦 57 — お川と、いふ事をハ ほく
- 58 — 妻をハ まちい 59 — 女をハ 本川祢 60 — 子共ヲハ 本”ほ
- 61 — 男の子をハ 本く年本”ほ 62 — 女の子をハ ま川年本”ほ
- 63 — むごひといふ事をハ おのゝ 64 — 尔くひといふ事をハ 志とま
- 65 — き川く尔くひ事ヲハ 本ろのやい志と満 66 — 御身ト言事ハ や尔
但さがり多類言葉
- 67 — そ那多と言事をハ ゑちやう可ひ 68 — み多くないと言事ハ 可もやし
貴様とハさ可”り言葉
- p. 198
- 69 — 父殺ト言事をハ おな多ら 70 — 母殺ト言事ヲハ おなバ者
- 71 — き多ひと言事ヲハ い川志や介”り 72 — さむいと言事ハ めいらいけ連
- 73 — 飛多”るい事ヲハ 者らさん多”ひけ連 74 — 餅をハ しと
- 75 — あ多ゝ可と言事ヲハ ほ川婦 76 — 痛ト言事ヲハ い多しや(ゝ)
- 77 — う連しいと言事ハ きろゝあん 78 — 肴ト言事ハ せ川婦
- 79 — ま那こをハ し起 80 — 鷹をハ 志起なへ 81 — 腹ヲハ 志川く
- サケ い王し
- 82 — 鮭の魚ヲハ 志べ 83 鱒ノ魚をハ いじ屋耳
- あ王び い祢
- 84 — たこをハ あ川い那 85 — 鮑ヲハ あい飛” 86 — 稲ヲハ せ
- 87 — 坊主をハ 遍そり 88 — 山ノ神をハ の本”類可もい 89 — 山ヲハ
- 90 — 海ノ神ト言事ヲハ あついで可もい 91 — 酒ハ酒なり 92 — 熊ヲハ 本くゆく

93 — 鹿ヲハ ゆつく 94 — 水神ヲハ 遍 川可もひ 95 — 久敷ト言事ハ な可らてい

96 — 紙をハ 可ん飛。 97 — 米 ちい志やまも 98 — 帰る可と言事ハ へと川ふ

99 — 口をハ 者ろう 100 — 貴キ事ハ くミち 亦 志やう可い 101 — 骨折と言事ハ 志んき

102 — 難儀をハ ころ 103 — 太儀ト言事ハ 右同断 104 — 煩ヲハ やいの婦

p. 200

105 — あ多満ハ 志や者 106 — 飛多いハ のい本ろ 107 — 口ノ内ニ而物のとける事ヲハ るう

108 — あ満いと言事ハ とふへ 109 — 口ノからいと言事ハ 者類可流

に可^ゝ す

110 — 苦キ事ハ 志う 111 — 酸キ事ハ 志や可^け 112 — よめ取ヲハ 志う

あゆ くしら

113 — むこ取も 右同断 114 — 鮎ヲハ む 115 — 鯨をハ くん遍^ゝ

たい

116 — 鯛をハ せいましけ 117 — 海川の貝類をハ せい

118 — 生子ハ うた 119 — う久ひハ 志ぶん 120 — 蟹ハ あん者や

121 — 惣而丸キ貝ヲハ 徒ふもこりゝ 122 — のりハ お者こ婦^ゝ

めよとり貝とて色赤ク形あげびのこつく

123 — 海草ハ何ニても てむ尔 124 — 濱ハ お多 125 — 砂をハ右

126 — 磯ハ し満 127 — 畑をハ とひ 128 — 田ハ 田那り少も無之也

129 — 杉の木をハ 志ゆんぐ 130 — 松をハ 婦川婦 131 — くりをハ やむ

くハ

なし

可^き

132 — 桑ノ木をハ く連婦尔 133 — 梨の木ハ 右同断 134 — 柿ハ右同断 一本も無之

ひ

135 — 檜ノ木ハ まさ 136 — 婦^ゝなの木 右同断 137 — ならノ木 尔志よ

さる

138 — 本らの木ハ ふ志尔 139 — 猿ハ一匹も無シ 140 — 本うゐんと獸物猫このことし

志^ゝや

141 — としぬけと生物 142 — 川をそハ え志やまん 143 — 蛇ハ とく尔
尾長鳥のことし

p. 202

可ハ寿^ゝ

だい志^ゝや

144 — 蛙ハ おま介るし 145 — 大蛇ハ あい祢川婦 146 — 見、すハ とに

可

者ち

147 — 宮守 無之 148 — 蚊ハ き、里 149 — 者いハ も寿 150 — 蜂ハ 志^ゝや屋

セ、な起の

151 — あ婦^ゝハ 志らう 152 — 婦よう 少もなし 153 — うなかふし ゑ可ふ年

可ら寿

とひ

154 — なめくぢり 右同断 155 — 烏ハ 者すく類 156 — 鳶ハ やと多

きじ

157 — 雉子ハ無シ 158 — 山鳥ハ 婦ミ類い 159 — 鳩ハ くしほ
とい多とも言

徒る

可^ゝん

可も

160 — 鶴ハ 遍多ちり 161 — 雁ハ くいとう 162 — 鴨ハ こべ志
者やこい
ほれいち

つ者^ゝめ

163 — 燕ハ ちひ屋川 164 — 可もめハ 可ひこ

鷹類 王し く満た可

165 — 家をハ チセ 166 — 鷺ハ か者^ゝちり 167 — 熊鷹 あち

うくひ寿

168 — 若い鷹 右同断 169 — 水こひ鳥 なし 170 — 鷺ハ 本^ゝほうくち

是ノ下ノ国の言葉なり セミ 可は可ら寿

171 — 鳩ハ くしゑとい多 172 — 蟬ハ や起 173 — 川鳥ハ 可つけん

可ハセミ

174 川蟬ハ 志やう可ひ 175 — 山姥をハ 志よう多んころ 176 — や年ハ せ起たひ

ミ祢

177 — 峯ハ き多ひ 178 — けら者^ゝハ の起 179 — 入口ハ 本^ゝ、

180 — 戸をハ あ者^ゝ 181 — 何ニ而も長キ物ハ 志をふ 182 茶ハ茶也

ちやはん

183 — 茶碗ハ 右同断 184 — 茶せん 右同断 185 — ご起を い多げ

可満

186 — 者しハ 者^ゝす 187 — なべ 志う 188 — 釜 右同断

p. 204

け多

189 — 柱ハ ゆく寿へ 190 — 樫ハ 里可尔 191 — 者りハ いてめ尔

192 — や年ハ 可つしやう 193 — 四方のかこいのな類ヲハ 志やまのふ

祢ま

だい

194 — 座敷をハ しやう 195 — 寝間を しやうき 196 — 臺所を う志や

197 — 水走り 右同断 198 — 志やくしをハ 可せう婦 199 — 飛さくハ 婦起な

200 — まな板 右同断 201 — 包丁ハ ゑびらけ 202 — 可んなべハ いよまれ

又ハき者^ゝ下け共言

203 — 屋くはん 右同断 204 — 御なべ ふれ可尔志ゆ 205 — むしろ 右同断

206 — こもハ てのま 207 — 畳ハ 右同断 208 — うす縁 右同断

209 — 魚を突や寿ハ をうつ婦 210 — 自在か起ヲハ 志や王

211 — いろりハ いぬへ 212 — 火者しハ あ遍^ゞ者し

213 — 惣而山の木をハ ちく尔といふ 214 — 山ノ谷をハ 遍^ゞつ徒る

215 — 山ノ尾をハ くう 216 — 山ノ平ハ う類ことり 217 — 山ノ頭上を ゆぶりきたい

218 — 山ノ後ハ おしまけ 219 — 山ノ下をハ ゆぶりやうろうほう

220 — 山ノ脇ハ 志やまけ 221 — 山ノ平地ハ てなし 222 — 山ノ奥ハ かつち
ま多へてとく

223 — 天丈ハ く多り 224 — 父ハ 者ん遍^ゞ 225 — 母ハ 者本う

226 — むこハ かふゝ 227 — 妻ハ こしまち 228 — 女房を まち

229 — 姪ハ ま川可りこ 230 — 甥ハ かりこ 231 — 一類共ハ あ者^ゞ

p. 206

232 — 伯父ハ 志りか多者ちり 233 — 高き処へ上ルを へめ寿

234 — おそ起事ハ かつむいり 235 — 者や起事ハ 徒いなし

236 — いそけト言うをハ 右同断 237 — 御太儀ト言を うちな可連

238 — 骨折ハ い志起^ゞなんこ路 239 — 下ニいとハ 志りか多あ遍^ゞ

240 — 泊るといふ事ハ 連う志り 241 — 明日とハ う志やた

242 — いけとハ おまん 243 — 何ニ而も出ルといふ事ハ へとく

244 — 物の尔へ類といふハ 本う婦 245 — な満尔へな類事ハ 婦

246 — 舟ノと満ハ やれきな 247 観音立給ふ処をハ あなま希

248 — 海上な起多るをハ のと飛び可 249 — 大波立るあらいをハ 　　るやべ本
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　亦　いとへ
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　こい
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　王ん里る

人ヲ

250 — 火のもゆるをハ あ遍^ゞあり 251 — 可つ堂、くをハ あへれん本う

252 — 火ヲさしくべるヲ 連ん本う 253 — 腹痛ヲ 徒いあ類可

254 — 寒起をハ めらいけ 255 — あつ起をハ 本う婦け

256 — 天氣能をハ 志り飛類可 257 — 天をハ 志り 258 — 何ニ而も

能可といふ事を 飛^ゞるか 259 — 山へ上ルをハ の本り遍めれ寿おりた

260 — 山ヨリ下ルを 志やん 261 — 天上へ上ル事ヲ 里起多あ満
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　亦らん

p. 208

262 — 休と言事 ゑ志起^ゞなん 263 — おけといふ事ヲ ほつ本う
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　ころ志んき

264 — 先ゆけと言ヲ 本起の者い 265 — 跡ニ残連といふヲようしおまん
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　なんころ

266 — 堀といふヲ なんこ路 267 — く、里付多といふことを 志な、

268 — 沖ニ在嶋を 連婦多ん嶋の本^ゞり 269 — 石をハ ま多嶋と言

270 — 沖をハ 連婦多 271 — 是悲ないといふを ゑち連ん可ひ

272 — 主といふハ ゑち 273 — 小袖ハ 志やら遍 274 — 頭ノ髪 いもくふ

者

275 — 飛びヲ 連起 276 — 齒ヲハ みまけ 277 — 舌ヲ 者るう

278 — よぶといふ事ヲ 本川ゑ 279 — 追懸るといふヲ のし

280 — 徒なぐといふ 志りごて 281 — 物ヲとく事ヲ 飛^ゞ多

282 — 者な寿事ヲ 志ゆら 283 — 物ヲ追といふ おけ遍^ゞ

飛可し

284 — 西風ハ 志む連ら 285 — 東風ハ あし 286 — 同飛可多も同前

287 — 南風ハ 同連いら 288 — 北風ハ まく那 289 — 静ヲハ 者うけ

つな

290 — 介むり立を 志ぶやあん 291 — 納る事ヲ ゑ志やむ 292 — 網をハ や

293 — あ者^ゞハ あ者^ゞ也 294 — 是ヨリハ同断 295 — 物のおれる事ヲ 者ちり

296 — 物ヲこ本寿事ヲ 本いつけ 297 — 日の暮を 徒ふらんむ

p. 210

298 — 夜の事 志りくん祢 299 — 夜明多ることいふヲ 志り遍け

300 — 暁といふヲ 志りおのまん 301 — 昼前といふヲ とののしけ

302 — 昼をハ とうかつふ 303 — 昼過をハ とうかつふ本け連

304 — 今日を たんど 305 明日を 尔志や多 306 — あさ川てヲ おや志ゆむ

307 — 明後日を 志むけ 308 — 昨日を ぬまん 309 — 一昨日を 本しけのぬまん

310 — 見事といふを いらま可し尔 311 — 浦山敷を あいの者^ゞ

亦いら志れな共

312 — 戀事ヲ ゑち本可ひ 313 — むさい事ヲ いつ志やけ連

314 — 既ニ言事ヲ お志やうら 315 — よふ来多といふヲ 飛る可

あ

316 — 皆此方へよれといふヲ おふび多の志やたお可ひ

317 — よく行とふヲ 飛る可のおまん 318 — よいといふを 飛るか

の数

319 — こ連てもといふヲ たん遍^ゝ 祢 可い起飛るか 320 — 物ヲ法を

一 志年ふ

二 ツ婦

三ツニハ 連婦 四つニハ い年婦 五つニハ あし起年ふ 六つニハ い者ぬ遍^ゝ

七つニハ あるあん遍^ゝ 八つニハ 徒遍^ゝさん遍^ゝ 九つニハ 志年遍^ゝさん遍^ゝ

十二ハ 王ん遍^ゝ 二十ハ 本つ 三十ハ 王ん遍^ゝ本つ 四十二ハ 徒本川

五十八前ノ五つの言葉同前 百ハ あしき年本つ 千ハ 王ん遍^ゝ志年まな本つ

万ハ 王な本つ 一東ハ 志年志やけ 二十五ヲハ あしき年い可志満本つ 右是迄物の数可そへ候事

321 — 誰子といふヲ 祢尔本^ゝほ 322 — 御身可子といふヲ や尔本^ゝうほ

p. 212

323 — 何方ヨリ来ルトいふヲハ 祢王ありき 324 — とこへ行トいふヲ 祢多おまん

上り言葉

下言葉

325 — 御前様トいふを ゑちお可ひ 326 — うぬとハ や尔 327 — 一切の道具の

底をハ ら婦^ゝ多 328 — 一切ノ物の内ニ在をハ ら婦^ゝ多お可ひ

329 — 一切の道具外底ヲ あ志やま 330 — 破れる物を あん遍^ゝうぶし

331 — 人の物を あんぬんくる遍^ゝ 332 — 何者といふヲ 祢んくう

333 — 万ノ物誰可物といふを 祢んこるべ 334 — 物をと可め類事ヲ 年んゝ

335 — 我といふヲてう可ひ 336 — 爰へ来ルといふヲ 多んこ多んゑく本ろ

337 — 天をハ 里起多ん 338 — 雨のふるをハ あし 339 — 靨をハ

340 — 筆も 同前 341 — 墨ハ 者^ゞ川し 342 — 舟のおもてハ ちつふな

343 — 舟のともをハ ちつ婦お志よろ 344 — 舟ノ中を ちつふのしけた

345 — 舟の帆を 可や 346 — 帆柱 ち川婦可や尔 347 — 縄を 者りき可

348 — 王らをハ 王つてし 349 — 黒米 むりくり 350 — 白米ヲ 飛^ゞりけり

351 — 草ニ而も何ニ而も苜候事を か満かり 352 — 物を突を ゆだ
又ハ もし共言

353 — 米ハ 志ゐ 354 — 人を同道シ而合せんといふ 徒らハゑくぬ可るなんころ

355 — 正月を とい多年 356 — 二月ヲ 者ぶらく 357 — 三月ヲ もちうふ

358 — 四月ヲ きうう堂川ふ 359 — 五月ヲ 志ん志^ゞつ婦

p. 214

360 — 六月ヲ まうつ、婦 361 — 七月ヲ 尔よらく徒ふ 362 — 八月ヲ やるいつふ

363 — 九月ヲ う連ほけつ婦 364 — 十月ヲ 志ゆなん徒婦

365 — 十一月ヲ くゑ可ひつ婦 366 — 十二月ヲ ちう類徒婦

367 — 物の曲多るを へうけ 368 — 少トいふを 本ん 369 — 物の遍多を やひやる

370 — 此方へよれといふを 遍満可らい 371 — 舟ニ乗レトハ ち婦^ゞおふ

372 — 色トいふを 連多類べ 373 黒トいふを くん祢

374 — 青キ事ヲ 志う年ん 375 — 赤キ事ヲ ふう連

376 — 一切物の形ハ 志りき 377 — 浅黄のちらしハ に志やう
うせ

378 — 木綿を うせ川 379 — 袋ハ 右同断 380 — 帯ヲ く

381 — 下帯を 飛やう川ゝけ 382 — 手ぬくいを せん可起

383 — か川ぎをハ なる堂類 384 — 弓を くう 385 — 矢を あい

386 — 矢ノ根を あいるむ 387 — 鉄砲ハ 鉄砲也 388 — 合掌ハ お可む

389 — よろこびを おのふゝ 390 — なけくを お志よら 391 — 念頃成近付を
よつたなしのかる

392 — あの子といふ事 おつ可ひ 393 — ま川寿くとハ なるおまん

394 — 惜惜るとハ へ婦け 395 — 物のこ本るゝ事ヲ 連うけ

うミ

396 — 五躰寿^ゝくことハ あち可せしけ 397 — 道をハ る

398 — 陸道を 屋べ可類 399 — 多者こをハ たん者^ゝこ

p. 216

400 — 者やくいそけといふヲ 本くれ者^ゝへ 401 — 火打ハ 火うち也

402 — 火ヲもミて出スを ち起志やゝ 403 — 本くちハ むるん

404 — 木の耳の本くちハ かる志 405 — 銭をハ いちゑん

406 — 本しいことを らんるし 407 — 金ハ かる 408 — 銀ハ 連多るかる

409 — 達者といふ お起らしの 410 — よ王川多可といふヲ 志んぎ

411 — 汗の出を 本婦らい 412 — に志んをハ てろき 413 — 物ノ多有事を 遍ろ

414 — 兄を ゆふ本^ゝう 415 — 弟をハ 者^ゝ起 416 — あ年を 志や者

417 — 妹をハ 飛志やう本う 418 — 乳をハ ゑ可し 419 — 飛ち^ゝを 志

420 — 笠ハ かぶら 421 — 舟の可ひを かぢ 422 — 婦しきをハ ね

423 — 不知といふ事ハ いらもし可れ 424 — 腹を くい 425 — 痛事ヲ ある

426 — 鼻を 糸川婦 427 — く志やミを 糸しな 428 — 耳をき志やら

か多

429 — 本んのく本ハ ぐち 430 — 肩ハ 本なし 431 — せな可ハ せ川る

432 — 血をハ と川と 433 — 腰をハ いへけ 434 — きんハ の起

435 — 志りをハ おそろ 436 — 玉く起ハ ち 437 — 玉門を 本川キ

438 — 女を めのこ 439 — 念頃人ハ おもひ 440 — もゝをハ おむ

441 — 飛ざをハ こ可しや者ゝ 442 — こむらをハ う連べ 443 — 足ハ て満

p. 218

444 — ゆびハ て起 445 — 乳呑事を とつといく連といふ

446 — 本うぐ王んとの お起くるミ 447 — 弁慶をハ 志やまよん類

448 — 庄屋をハ おとな 449 — な多ハ 者満な多 450 — ま起りハ 糸りけび
又にし者とも言

451 — まさ可りを むくかり 452 — 可満ハ よく遍 453 — 鍬ハ く川く王

454 — 脇差ハ 糸むし 455 — やりハ おつ婦 456 — 大豆ハ大豆也

右此狄言葉拙僧嶋、廻申候節有増

聞覚候故記之

寶永元年甲申南呂廿八日 越前符中丹生郡

正光空念

4. 2. 用字法

まず、日本語の表記に用いられた仮名の分析結果を述べる。音韻史が明らかになっている日本語の表記の検討がアイヌ語の分析において重要な役割を果たすので、この部分の分析は極めて重要である。詳しいデータは末尾の文字索引にすべて掲載されているので、以下では主な点のみを述べる。

「あ」： 日本語表記に用いられた例 (以下同様) は13例である。例： あ多満 (頭)、あ年 (姉)。

「い」： 73例。例： いろり (爐)、いふ (言う)、手ぬくい (手ぬぐい)。

「う」： 11例。例： う連しい (うれしい)、火うち (火打)、本うぐ王んとの (判官殿)。

「お」： 5例。例： おそ起 (遅き)、おれる (折れる)。

「か」： 5例。例： かこい (囲い)。

「が」： 1例。例： さがり多る (下がりたる)。

「可」： 29例。例： 可ハ寿^ゝ (蛙)、来る可 (来るか)、あ多^ゝ可 (暖か)。

「可^ゝ」： 2例。例： さ可^ゝり (下がり)、に可^ゝ (苦)。

「き」： 6例。例： きじ (雉)、高き。

「ぎ」： 1例。例： か川ぎ (被衣?)。

「キ」： 9例。例： 貴キ。

「起」： 7例。例： ご起 (御器)、寒起 (寒き)。

「支」： 2例。例： 王ろ支 (悪き)、ま起り (マキリ)。

「く」： 31例。例： くしら (鯨)、なめくちり (なめくじり)、なく (泣く)。

「ぐ」： 2例。例： 徒なぐ (つなぐ)、本うぐ王んとの (判官殿)。

「ク」： 1例。例： 赤ク。

「久」： 1例。例： う久ひ（鱈）。

「け」： 10例。例： いけ（行け）、いそけ（急げ）。

「げ」： 2例。例： あげび（通草）、飛げ（鬚）。

「ケ」： 1例。例： サケ（鮭）。

「介」： 1例。例： 介むり（煙）。

「こ」： 21例。例： こ本寿（こぼす）、ことく（如く）、たこ（蛸）。

「ご」： 2例。例： むごひ（酷い）、ご起（御器）。

「さ」： 9例。例： さがり（下がり）、あさ川て（明後日）、飛さく（柄杓）。

「ざ」： 1例。例： 飛ざ（膝）。

「サ」： 1例。例： サケ（鮭）。

「し」： 19例。例： い王し（鯛）、くしら（鯨）。

「じ」： 1例。例： きじ（雉）。

「シ」： 3例。例： 無シ（2例）、同道シ。

「志」： 4例。例： 志り（尻）、志やくし（杓子）、く志やミ（くしゃみ）、に志ん（鯡）。

「す」： 2例。例： 見ゝす（蚯蚓）、うす縁。

「ス」： 1例。例： 出ス。

「寿」： 9例。例： うくひ寿（鶯）、死寿（死す）。

「寿`」： 2例。例： 可ハ寿`（蛙）、五躰寿`く（五体づく）。

「せ」: 5例。例: せミ (蟬)、可ハせミ (翡翠)。

「セ」: 1例。例: 合セン (会わせん)。

「そ」: 6例。例: そ那多 (其方)、いそけ (急げ)。

「た」: 3例。例: たこ (蛸)、たい (鯛)、く満た可 (熊鷹)。

「だ」: 1例。例: だい (臺)。

「多」: 20例。例: 多者こ (煙草)、よふ来多 (良う来た)。

「多^ゞ」: 1例。例: 飛多^ゞるい (ひだるい)。

「堂」: 1例。例: 可つ堂^ゝく (かっ叩く)。

「ち」: 6例。例: ちやはん (茶碗)、火うち。

「ぢ」: 2例。飛ぢ (肘)、なめくぢり。

「つ」: 12例。例: つな (綱)、あつ起 (暑き)。

「ツ」: 2例。例: 七ツ、三ツ。

「川」: 6例。例: お川と (夫)、き川く (きつく)。

「徒」: 2例。例: 徒る (鶴)、徒なぐ^ゞ (繋ぐ)。

「て」: 6例。例: 何^ニても、舟のおもて、こ^ニ連ても (これでも)。

「而」: 9例。例: 草^ニ而 (草にて)。

「と」: 95例。例: と可め類 (咎める)、我と、とこへ (何処へ)。

「ト」: 22例。例: ト言事。

「な」： 26例。例： なく（泣く）、者な寿（放す）。

「那」： 4例。例： ま那こ（眼）、道寿く那支（道少なき）。

「に」： 2例。例： に可^ゝす（逃がす）、に志ん（鯡）。

「ニ」： 23例。例： 何ニ而も。

「尔」： 4例。例： 尔くひ（憎い）、尔へ類（煮える）。

「ぬ」： 2例。例： うぬ（汝）、手ぬくい（手ぬぐい）。

「衾」： 3例。例： い衾（稲）、ミ衾（峯）、衾ま（寝間）。

「年」： 3例。例： や年（屋根）、あ年（姉）。

「の」： 50例。例： 人の物、本んのく本^ゝ（盆の窪）。

「ノ」： 28例。例： 桑ノ木、口ノ内。

「ハ」： 332例。例： 可ハ可ら寿（川鳥）、春ハ、あめヲハ（雨をば）。

「者」： 11例。例： 者い（蠅）、者（齒）。

「ひ」： 9例。例： とひ（鳶）、う久ひ（鰯）、むごひ（むごい）、尔くひ（憎い）。

「び」： 4例。例： よろこび、ゆび（指）、あ王び（アワビ）、あげび（アケビ）。

「飛」： 9例。例： 飛へ（稗）、飛多い（額）。

「ふ」： 49例。例： いふ（言う）、よふ（良う）、ふる（降る）。

「婦」： 2例。例： 婦よう（ブヨ）、婦しき（不思議）。

「婦^ゝ」： 2例。例： 婦^ゝな（ブナ）、あ婦^ゝ（虻）。

「へ」: 12例。例: 山へ、な満尔へ (生煮え)。

「べ」: 4例。例: なべ (鍋)、さしくべる。

「遍」: 遍多 (?)。

「本」: 8例。例: 本くち (火口)、本しい (欲しい)、本んのく本^ゝ (盆の窪)。

「本^ゝ」: 1例。例: 本んのく本^ゝ (盆の窪)。

「ま」: 6例。例: ま那こ (眼)、まな板。

「満」: 7例。例: あ多満 (頭)、あ満い (甘い)。

「ミ」: 6例。例: く志やミ (くしゃみ)、せミ (蟬)。

「む」: 8例。例: むごひ (酷い)、むこ取。

「め」: 6例。例: めし (飯)、あめ (雨)。

「も」: 25例。例: もゆる (燃ゆる)、一匹も。

「や」: 8例。例: や年 (屋根)、志^ゝや (蛇)、ちやはん (茶碗)、者屋起 (早き)。

「屋」: 1例。例: 屋くはん (薬缶)。

「ゆ」: 2例。例: もゆる (燃ゆる)、ゆけ (行け)、ゆび (指)。

「よ」: 10例。例: よぶ (呼ぶ)、いよ (居よ)、よふ (良ふ)。

「ら」: 12例。例: 可ら寿 (烏)、王ら (藁)。

「り」: 21例。例: いろり (爐)、やり (槍)。

「里」: 1例。例: くゝ里 (括り)。

「る」： 18例。例： さる（猿）、帰る可（帰るか）。

「ル」： 7例。例： 出ル、来ル、上ル。

「類」： 6例。例： 死寿類（死する）、尔へ類（煮える）。

「れ」： 5例。例： おれる（折れる）、よれ（寄れ）。

「レ」： 1例。例： 乗レ。

「連」： 3例。例： う連しい（嬉しい）、残連（残れ）、こ連（これ）。

「ろ」： 3例。例： 王ろ来（悪き）、むしろ（筵）、いろり（爐）。

「を」： 160例。例： 水を、道を。

「ヲ」： 126例。例： めしヲハ（飯をば）、四月ヲ。

「王」： 6例。例： 王ろ支（悪き）、本うぐ王んとの（判官殿）。

「ん」： 5例。例： ちやはん（茶碗）、本うぐ王んとの（判官殿）。

日本語の表記は一般的な表記に従ったものと言え、音声、文法上で特段に特色のある日本語であったことを思わせるものはいまのところないと言って良い。これらの仮名も、おおむね、これまでに知られている18世紀初頭の日本語の音韻を表記したものと考えて良いであろう¹¹。

次に、アイヌ語の表記に用いられた仮名であるが、現代の形式との対応関係は複雑で、今回は一つ一つの事例について細かくまとめる余裕がなかった。今後の研究を期したいが、特に日本語表記の仮名と比較した場合の明らかな分布上の偏りを示すものについて注目すべきものを挙げておく。

「お」はアイヌ語の表記では42例であるが、日本語の表記では5例しかない。日本語の表記では、助詞「を」の使用が極めて多いので、アイヌ語では「お」、日本語では「を」というような単純な使いわけではないと思われるが、アイヌ語の表記に「を」を用いているのは「何ニ而も長キ物ハ志をふ」（181）の一例だけである点を考えると、「お」はやはりこの資料のアイヌ語表記の特徴の一つとすることができる。

「志」もこの資料におけるアイヌ語の表記に特徴的なものの一つである。アイヌ語表記に「し」

¹¹ わずかだが、「よふ来た」（よく来た）のように関西方言の特徴と思われる音便を示す事例があり、この点は考慮すべきであろう。

が用いられていないわけではないがアイヌ語の表記における「志」の例数が88例であるのに対して、日本語表記の例は5例であることを考えると、やはり「志」がアイヌ語表記に特有なものであるという印象には一定の根拠があると言えよう。

「つ」にあたる仮名は、アイヌ語表記では「つ」、「川」、「徒」の三種が見られるが、計77例ある。これに対し、「つ」、「川」、「徒」の三つは日本語表記にも見られるが、計20例しかない。アイヌ語と日本語の音声構造が異なるために、おそらく、仮名を用いてアイヌ語を正確に表記するには様々な困難があったと思われる、「つ」、「川」、「徒」が多用されているには、そのような表記上の困難さが反映されているのではないかと思われる。従って「つ」の通常の日本語の音価からはかなり離れた音価に該当する可能性があり、それだけ説明が困難なものも少なくないであろう。今後、さらなる研究が必要である。

「尔」はアイヌ語表記に23例用いられているが、日本語表記の例は4例である。これに対し、日本語、アイヌ語ともに「に」の用例は少ない（アイヌ語3例、日本語2例）。

「婦」はアイヌ語表記に39例用いられているのに対し、日本語表記では4例である。アイヌ語表記には「ふ」も多数用いられているので、「婦」がアイヌ語表記で主流というわけでは必ずしもないが、この文献におけるアイヌ語の表記上の特色の一つと言えよう。

「遍」はアイヌ語表記で32例用いられている。日本語表記では1例のみである。「遍」もアイヌ語表記の主な特色の一つである。

「本」はアイヌ語表記で47例、日本語表記で9例である。この表記もどちらかと言えばアイヌ語表記に特有なものと言えるであろう。

いずれにしても、仮名は日本語の表記のための文字であるので、アイヌ語の表記にはかなり無理があったと思われる、一つ一つの仮名の用例が意味するところを明らかにしてアイヌ語の古い姿を推定することは必ずしも容易でない。ここでは概略のみを記し、今後の研究を期したい。

4. 3. アイヌ語の引き当て

以下に現代のアイヌ語で相当、あるいは関係すると思われる形式を挙げる。誤解を避けるために一言すると、挙げられている形式は常識的にみて相当する、あるいは関連すると思われる語形に過ぎないのであって、その語形がそのまま、空念資料の示しているアイヌ語の姿かどうかはまた別の問題である。今後も主に表記の面から、現代とは違っていたであろう音声的、文法的特色について考察を加えていく必要がある。なお、語形を挙げる場合、基本的には筆者の調査した千歳方言の例を挙げた¹²。なお、同一の典拠からの語形が複数連続する場合は「、」で区切り、典拠が変わる場合

¹² なお、これまでもしばしば述べてきたことだが、文献から該当語を博捜することは有益とは思いますがここではその方法は取らない。語形の引き当て自体が文献研究の最終目標ではないこと、時間の制約のある中で一人の力には限界があり、識者の指摘に任せるほうが研究が早く進むこと、他の文献に出ている語形はそれ自体が厳密には文献研究の対象となるべきもので、責任が持てないこと、などによる。たとえば古代日本語のデータベースの充実は寿ぐべきことだが、それのみを以て「江戸時代の契沖や宣長より自分は偉い」と言うとしたら些か悲しい。自分が実際に調査をして責任が持てる方言の語形をまず挙げた。なお、アイヌ語をご教示いただいた故白沢ナベ氏に深く感謝申し上げる。

は「。」で区切って区別してある。例えば、「matne「女である」、poho「～の子供」とあれば、matne、poho は共に千歳方言の資料、これに対して「pirkano「良く」。oman「行く」（服部1964）」とあれば、pirkano は千歳方言の資料だが、oman は服部（1964）からの引用であることを示す。

1. 者い可類(春)： paykar「春」。
2. さく(夏)： sak「夏」。
3. 徒可くふ(秋)： cuk「秋」という形式はあるが、不詳の形式。
4. ま多(冬)： mata「冬」。
5. あま母(めし)： amam「米」。
6. 飛や者(飛へ)： piyapa「稗」。
7. むじ路(粟)： munciro「粟」。
8. あ遍(火)： ape「火」。
9. あぶと(あめ)： apto「雨」。
9. あふど免し(雨降る)： apto「雨」(「免し」は不詳。文字が小さく不明瞭なので、「免」とみえるが、「悪」の変体仮名の可能性もある。その場合は apto as「雨が降る」か。なお要検討)。
10. お者(雪)： upas「雪」。upas (服部1964、樺太方言、宗谷方言)。
11. 連いら(風)： réra「風」。
12. 徒、婦(日月)： cup「太陽、月」。
13. のちう(星)： nociw「星」。
14. 尔しくろ(雲)： niskur「雲」。
15. 志やも(人)： samo「日本人」(日本語風に変形された形式。通常の形式はs sam)。
16. ちし可類(なく)： ciskar「嘆く、悲しむ」。
17. とくい(念頃人)： tokuy「友人」(服部1964)。
18. てう可ひ(我)： cókay「私たち(除外的)」。
19. うゑん(わろ支)： wen「悪い」。
20. らい(死寿類)： ray「死ぬ」。
21. い志やま(無キ)： isam「無い」。
22. あ年ハお可い(在)： an wa「あるよ」、okay「ある(an「ある」の複数形のpe「物」の前での異形態)。
23. のた(波)： noto「良い天気」。nota 'the surface of the sea' Batchelor (1938)。
24. あ川い(海)： atuy「海」。
25. ちつ婦(舟)： cip「舟」。
26. けり(足袋)： ker「履き物」。
27. 遍川(川)： pet「川」。
28. 遍ないた(上川)： pena ta「上流に」。
29. 者(下川)： pana ta「下流に」。
30. お本(川の深事)： ooho「深い」(服部1964)。
31. お者く(浅キ)： ohak「浅い」。
32. 者るきるう(右道)： harki-「右座の」、ru「道」。
33. 志ん志起るう(中道)： si-「本当の」、noski「真ん中」、ru「道」。
34. 志もんるう(左道)： símon-「左座の」、ru「道」。
35. ほろ(道廣キ)： poro「大きい」。
36. ほん(道寿く那支)： pon「小さい」。
37. ゑ可(来る可)： ek a?「来るか」。
37. ゑ川くや(来る可)： ek ya?「来るか」。
38. かもいと(殿)： kamuy tono「偉い殿様」。
39. ほんの可もひ(将軍様)： pon 小さい、-no ととも～である、kamuy 神。
40. ほん、の可もひ(禁中様)： pon「小さい」、pon「小さい」、-no「とても～である」、kamuy「神」。
41. 志いのの本り可もひ(神)： sino「本当に」、nupur「霊力がある」、kamuy「神」。
42. 尔し者(侍)： nispa「旦那、紳士」。
43. うしおい(内の者)： ussiw「召使い」。
44. 婦(その物)： p「もの」。
45. あ遍(喰事)： ipe「食事する」(誤写か。あるいは *pe「～を食べる」という動詞があったか)。
46. くう(呑事)： ku「飲む」。
47. ちく尔(薪)： cikuni「木」。
48. あべあ連(火薪)： apeare「火を焚く」。
49. 王川可(水)： wakka「水」。
50. せ、可(湯)： sesekka「湯」(服部1964)。
51. おは(汁)： ohaw「(具入りの)汁」。
52. 尔し(文字欠損)(塩)： 不詳。
53. 志川本(塩)： sippo「塩」。
54. うせ(粥)： úsey「湯」。
55. おま(文字欠損)(行事)： oman (服部1964)。
56. ちめ婦(衣類)： cimip (服部1964)。
57. ほく(お川と)： hoku「～の夫」。
58. まちい(妻)： macihi「～の妻」。
59. 本川祢(女)：

不詳。honne「ゆるい」(服部 1964) と関係があるか。60. 本^ゝほ (子共) : poho「～の子供」。61. 本く年本^ゝほ (男の子) : hoku「夫」、ne「である」、本^ゝほ poho「～の子供」。62. ま川年本^ゝほ (女の子) : matne「女である」、poho「～の子供」。63. おのゝ (むごひ) : onono「ばんざい」(服部 1964)。64. 志とま (尔くひ) : sitoma「恐れる」。65. 本ろのやい志と満 (き川く尔くひ) : poronno たくさん、yaysitoma「恥ずかしがる」。66. や尔 (御身) : eani「お前」。67. ちちやう可ひ (そ那多) : eciokay「お前達」。68. 可もやし (み多くない) : kamyasi「化け物」。69. おな多ら (父殺) : 不詳。70. おなバ者 (母殺) : 不詳¹³。71. い川志や介^ゝり (き多ひ) : icakkere「汚い」。72. めいらいけれ (さむい) : merayke「寒い」。73. 者らさん多^ゝひけ連 (飛多^ゝるい) : 不詳 (「ひだるい」は「空腹」の意 (『広辞苑』による)。*santaykere のような形式か。「者ら」は par「口」の可能性もあると思われる¹⁴)。74. しと (餅) : sito「団子」。75. ほ川婦 (あ多ゝ可) : pop「煮立つ」。76. い多しや (文字欠損) (痛) : itasasa「虐待する」。77. きろゝあん (う連しい) : kiroro an「うれしい」(服部 1964)。78. せ川婦 (肴) : cep「魚」。79. し起 (ま那こ) : siki「～の目」。80. 志起なへ (座當) : siknak「盲目である」。81. 志川く (腹) : sik「目」(?)。82. 志べ (鮭の魚) : sípe「サケ」。83. いじ屋耳 (鯛ノ魚) : icaniw「マス」。84. あ川い那 (たこ) : atuynaw「たこ」(服部 1964)。85. あい飛^ゝ (あ王び) : aype「アワビ」(知里 1976)。86. せ (文字欠損) (稲) : 不詳。87. 遍そり (坊主) : hesuri「坊さん」(服部 1964)。88. の本^ゝ類可もい (山ノ神) : nupuri kamuy「山の神」。89. (文字欠損) (山)。90. あつい可もい (海ノ神) : atuy「海」、kamuy「神」。91. 酒 (酒) : sake「酒」。92. 本くゆく (熊) : hokuyuk「雄グマ」(知里 1976)。93. ゆつく (鹿) : yuk「鹿」。94. 遍^ゝ川可もひ (水神) : pet「川」、kamuy「神」。95. な可らてい (久敷) : inankarapte「こんにちわ (しばらく会わなかった人に、昨日会った人等には言わない。入って来る人と家の中の人と両方から言う)」。96. 可ん飛^ゝ (紙) : kanpi「紙」。97. ちい志やまも (米) : ci「煮える」。siyamam「米」(服部 1964)。98. へと川ふ (帰る可) : hetopo horka「逆に」。99. 者^ゝろう (口) : paraho「～の口」。100. くミち (貴キ事) : ku-mici「私の父」(?) (千歳でも聞いたことはあるが自分は使わない。ku-kor hápo と言う)。100. 志やう可い (貴キ事) : 不詳。cókay「私たち」、eciokay「お前たち」のような形式か。101. 志んき (骨折) : sinki「疲れる」。102. ころ (難儀) : 不詳。103. ころ (太儀) : 不詳。104. やいの婦 (煩) : yaynu「思う」。105. 志や者^ゝ (あ多満) : sapa「(～の) 頭」。106. のい本ろ (飛多い) : noyporo「(～の) 額」。107. るう (とける) : ru「解ける」。108. とふへ (あ満い) : tópen「甘い」。109. 者類可流 (からい) : parkar「辛い」。110. 志う (苦キ) : siw「苦い」。111. 志や可け (酸キ事) : sukkake「酸っぱい」。112. 志う (よめ取) : 不詳。113. 志う (むこ取) : 不詳。114. む (鮎) : 不詳。115. くん遍^ゝ (鯨) : hunpe「鯨」。116. せいましけ (鯛) : 不詳。117. せい (貝類) : sey「貝」。118. うた (生子) : uta「海鼠」(久保寺 1992)。119. 志ぶん (う久ひ) : supun「ウグイ」。120. あん者や (蟹) : anpayaya「カニ」。121. 徒ふもこりゝ (丸キ貝) :

¹³ あるいは、「殺す」という意味の動詞ではなく、名詞 (おそらくは親族名称)、しかも、一種の「罵倒語」のようなものである可能性がある。要検討。

¹⁴ *par-santaykere「口を空にする」のような形式があったのかもしれない。

mokorir「巻き貝」。122. お者こ婦^ゝ(のり)： ohawkop「海苔」(服部 1964)。123. てむ尔(海草)： tenmun「水草(川の中に生える)」。124. お多(濱)： ota「砂」。125. お多(砂)： ota「砂」。126. し満(磯)： suma「石」。127. とひ(畑)： toy「畑」。128. 田(田)。129. 志ゆんぐ(杉ノ木)： sunku「エゾマツ」。130. 婦川婦(松)： hup「トドマツ」。131. やむ(くり)： yam「クリ」。132. く連婦尔(桑ノ木)： turepni「桑」(久保寺 1992)。133. (梨)(梨の木)。134. 柿(柿)。135. まさ(檜ノ木)： masa 'shingles' (Batchelor 1938)。136. 婦^ゝな(婦^ゝなの木)。137. 尔志よ(ならノ木)： nisew「ドングリ」。138. ふ志尔(本らの木)： pusni「ホオノキ」(服部 1964)。139. (猿)。140. 本うゐん(獣物猫このことし)： hoynu「貂」(服部 1964)。141. としぬけ(生物尾長鳥のことし)： tusuninke「リス」。142. え志やまん(川をそ)： esaman「カワウソ」。143. とく衿(蛇)： tokkoni「マムシ」。144. おま介るし(蛙)： omakirus「キリギリ」(服部 1964)。145. あい衿川婦(大蛇)： 不詳。146. とに(見ゝす)： tunin「ミミズ」。147. (宮守)。148. きゝ里(蚊)： kikir「虫」。149. も寿(者い)： mos「ハエ」。150. 志^ゝや屋(蜂)： soya「ハチ」。151. 志らう(あ婦^ゝ)： siraw「アブ」。152. (婦よう)。153. ゑ可ふ年(うなかふし)： 不詳。154. なめくぢり(なめくぢり)。155. 者すく類(鳥)： paskur「カラス」。156. やと多(鳶)： yatotta「とんび」。157. (雉子)。158. 婦ミ類い(山鳥)： humiruy「ヤマドリ?」。159. くしほ(鳩)： kúsuwep「ヤマバト」。159. とい多(鳩)： toyta「畑仕事をする」。160. 遍多ちり(鶴)： retatcir「白鳥(?)」。161. くいとう(雁)： kuytop「雁」(服部 1964)。162. こべ志(鴨)： kopeca「鴨」(服部 1964)。162. 者やこい(鴨)： 不詳。162. ほれいち(鴨)： 不詳。163. ちひ屋川(燕)： cipyak「シギ(?)」。164. 可ひこ(可もめ)： kapiw「カモメ」。165. ちせ(家)： cise「家」。166. か者^ゝちり(鶯)： kapatcir「ワシ(?)」。167. あち(熊鷹)： 不詳。168. 者い鷹(者い鷹)。169. (水こひ鳥)。170. 本^ゝほうくち(鶯)： popokociw「ウグイス」(服部 1964)。171. くしゑ(鳩)： kúsuwep「ヤマバト」。172. や起(蟬)： yaki「セミ」。173. 可つけん(川鳥)： kakken「カワガラス」。174. 志やう可ひ(川蟬)： sokai「翡翠」(久保寺 1992)。175. 志よう多んころ(山姥)： 不詳。176. せ起たひ(や年)： cise kitay「屋根」。177. き多ひ(峯)： kitay「頂上」。178. の起(けら者^ゝ)： noki「軒(のき)」。179. 本^ゝゝ(入口)： 不詳。180. あ者^ゝ(戸)： apa「戸」。181. 志をふ(長キ物)： suwop「箱」(?)。182. 茶(茶)。183. 茶碗(茶碗)。184. 茶せん(茶せん)。185. い多げ(ご起)： itanki「椀」。186. 者^ゝす(者し)： pasuy「箸」。187. 志う(なべ)： su「鍋」。188. 釜(釜)。189. ゆく寿へ(柱)： ikuspe「柱」。190. 里可尔(桁)： rikani 'a beam' (Batchelor 1938)。191. いてめ尔(者り)： itemeni「梁」(久保寺 1992)。192. 可つしやう(や年)： 不詳。193. 志やまのふ(四方のかこい)： 不詳。194. しやう(座敷)： so「床」。195. しやうき(寝間)： sotki「部屋」。196. う志や(臺所)： usarun mintar「土間」(服部 1964)。197. 水走り(水走り)。198. 可せう婦(志やくし)： kasup「杓子」。199. 婦起な(飛さく)： 不詳。200. まな板(まな板)。201. ゑびらけ(包丁)： epirkep「小刀、剃刀」(久保寺 1992)。201. き者^ゝ下け(包丁)： 不詳。202. いよまれ(可んなべ)： iyomare「酒をつぐ」。203. 屋くはん(屋くはん)。204. ふれ可尔志ゆ(御なべ)： hurekani「銅」(服部 1964)、su「鍋」。205. むしろ(むしろ)。206. てのま(こも)： 不詳。207. 豊(豊)。208. うす縁(う

す縁)。209. をうつ婦 (や寿) : op 「槍」。210. 志や王 (自在か起) : suwat 「鍋の鈎」。211. いぬへ (いろり) inunpe 「炉縁」 : 。212. あ遍`者し (火者し) : apepasuy 「火箸」。213. ちく尔 (木) : cikuni 「木」。214. 遍つ徒る (谷) : 不詳。215. くう (山ノ尾) : tu 「尾根」 (服部 1964)。216. う類ことり (山ノ平) : hur 「坂」、kotor 「湾曲面」。217. ゆぶりきたい (山ノ頭上) : nupuri kitay 「山頂」。218. おしまけ (山ノ後) : osmake 「~の後ろ」。219. ゆぶりやうろうほう (山ノ下) : nupuri corpok 「山のふもと」。220. 志やまけ (山ノ脇) : samake 「~の側」。221. てなし (山ノ平地) : kenas 「河畔林」。222. かつち (山ノ奥) : 「かつち (水源)」 (日本語方言?)。222. へてとく (山ノ奥) : petetok 「川の水源地」。223. く多り (天丈) : 不詳。224. 者ん遍` (父) : hanpe 「父」 (服部 1964)。225. 者本う (母) : hapo 「母」 (服部 1964)。226. かふ、 (むこ) : kokow 「婿」。227. こしまち (妻) : kosmaci 「~の嫁」。228. まち (女房) : maci 「~の妻」。229. ま川可りこ (姪) : matkarku 「姪」。230. かりこ (甥) : karku 「甥」。231. あ者` (一類共) : apa 'a relation' (Batchelor 1938)。232. 志りか多者ちり (伯父) : 不詳。233. へめ寿 (高さ処へ上ル) : hemesu 「上る」。234. かつむいり (おそ起事) : katu 「~の有様」、moyre 「遅い」。235. 徒いなし (者や起事) : túnas 「早い」。236. 徒いなし (いそけ) : túnas 「早い」。237. うちな可連 (御太儀) : ocinakkari 「日本人 (隠語)」。238. い志起`なんこ路 (骨折) : e-sinki 「お前が疲れる」、nankor 「だろ」。239. 志りか多あ遍` (下ニいよ) : sirka ta 「土の上に」、an pe 「いるもの」。240. 連う志り (泊る) : rewsire 「泊める」。241. う志やた (明日) : nisatta 「明日」。242. おまん (いけ) : oman 「行く」 (服部 1964)。243. へとく (出ル) : hetuku 「出る」。244. 本う婦 (尔へ類) : pop 「沸く」。245. 婦 (な満尔へな類事) : hu 「生である」。246. やれきな (舟ノと満) : yar 「ぼろぼろである」、kina 「ござ」。247. あなま希 (観音立給ふ処) : 不詳。248. のと飛び可 (海上な起多る) : noto 「良い天気」 (服部 1964)、pirka 「良い」。249. るやべ本 (大波立るあらい) : ruyanpe 「荒天」。249. いとへ (大波立るあらい) : 不詳。249. こい (大波立るあらい) : koy- 「波」。249. 王ん里る (大波立るあらい) : rir 「波」。250. あ遍`あり (火のもゆる) : apeare 「火を焚く」。251. あへれん本う (可つ堂、く) : ape erepo 「薪を燃やす」252. (火ヲさしくべる) 連ん本う : repo 「炉の中央に入る」。253. (腹病) 徒いあ類可。tuye 「内蔵」、arka 「痛い」。254. めらいけ (寒起) : mérayke255. 本う婦け (あつ起) : popke 「暑い」。256. 志り飛類可 (天気能) : sirpirka 「天気が良い」。257. 志り (天) : sir- 「天気」。258. 飛`るか (能可) : pirka 「良い」。259. の本り遍めれ寿おりた (山へ上ル) : nupuri 「山」、hemesu 「上る」 (「山に登る」は nupuri kohemesu とする)。260. 志やん (山ヨリ下ル) : san 「下る」。260. らん (山ヨリ下ル) : ran 「降りる」。261. 里起多あ満 (天上へ上ル) : rik ta 「上に」。262. ゑ志起`なんころ志んき (休) : e-sinki 「お前が疲れる」、nankor 「だろ」。263. ほつ本う (おけ) : hoppa 「残す」。264. 本起の者い (先へゆけ) : hoskino 「先に」、paye 「行く」。265. ようしおまんなんころ (跡ニ残連) : iyos 「後に」、oman 「行く」 (服部 1964)、nankor 「だろ」。266. なんこ路 (塀) : nankor 「だろ」 (?)。267. 志な、 (く、里付多) : sinasina 「しっかり縛る」。268. 連婦多ん嶋の本`り (沖ニ在嶋) : rep ta 「沖に」、an 「ある」、suma 「石」、nupuri 「山」。269. 石 (嶋) : suma 「石」。270. 連婦多

(沖) : rep ta 「沖に」。271. ゑち連ん可ひ (是悲ない) : eci- お前達の、renkayne 思い通りに。272. ゑち (主) : eci- お前達が。273. 志やら遍 (小袖) : saranpe 「上等の着物」。274. いもくふ (頭ノ髪) : 不詳。275. 連起 (飛び) : reki 「～の髭」。276. みまけ (齒) : mimak 「齒」(服部 1964)。277. 者るう (舌) : paroho 「～の口」。278. 本川ゑ (よぶ) : hotuye 「叫ぶ」。279. のし (追懸る) : nospa 「追いかける」(服部 1964)。280. 志りごて (徒なぐ) : sirkote 「つなぐ」。281. 飛`多 (物ヲとく) : pita 「解く」。282. 志ゆら (者な寿事) : sura 'to let alone'。283. おけ遍` (物ヲ追) : okewe 「追出す」。284. 志む連ら (西風) : sumrera 「西風」(服部 1964)。285. あし (東風) : 不詳。286. 飛可多 (飛可多) : pikata 「風の種類」。287. 連いら (南風) : réra 「風」。288. まく那 (北風) : maknaw 「風の種類」。289. 者うけ (静) : hawke 「弱い」。290. 志ぶやあん (介むり立) : supuya 「煙」、an 「ある」。291. (納る) ゑ志やむ : isam 「ない」。292. や (綱) : ya 「綱」。293. あ者` (あ者`) : あば【網端・浮子】漁網の上縁部につけ、浮かせる浮き(『広辞苑』)。294. (是ヨリハ同断)。295. 者ちり (物のおれる) : hácir 「倒れる、落ちる」。296. 本いつけ (物ヲこ本寿) : ohetke 「こぼれる」。297. 徒ふらんむ (日の暮) : cup 「太陽」、ram 「低い」。298. 志りくん柵(夜) : sirkunne 「暗くなる」。299. 志り遍け(夜明多る) : sirpeker 「夜が明ける」。300. 志りおのまん (暁) : sironuman 「夕方」。301. とののしけ (昼前) : tononoski 「お昼」(服部 1964)。302. とうかつふ (昼) : tókap 「昼間」。303. (昼過) とうかつふ本け連 : tókap 「昼間」、okere 「終える」。304. たんど (今日) : tanto 「今日」。305. 尔志や多 (明日) : nisatta 「明日」。306. おや志ゆむ (あさ川て) : oyasim 「あさって」。307. 志むけ (明後日) : oyasim simke 「しあさって」。308. ぬまん (昨日) : núman 「昨日」。309. 本しけのぬまん (一昨日) : hoskinuman 「一昨日」。310. いらま可し尔 (見事) : iranmakaka 「きれいに」。310. いら志れな (見事) : 不詳。311. あいの者 (浦山敷) : ainupata 「いいなあ」(久保寺 1992)。312. ゑち本可ひ (戀事)¹⁵ : 不詳 (eciokay 「お前達」?)。313. いつ志やけ連 (むさい) : icakkere 「汚い」。314. お志やうら (既ニ言事) : 不詳。315. 飛る可 (よふ来多) : pirka 「良い」。316. おふび多の志やたお可ひ (皆此方へよれ) : opittano 「皆」、sata 「手前の」。okay 「いる」(服部 1964)。317. 飛る可のおまん (よく行) : pirkanó 「良く」。oman 「行く」(服部 1964)。318. 飛`るか (よい) : pirka 「良い」。319. たん遍`柵 可い起飛るか (こ連ても) : tanpe 「これ」、ne 「である」、kayki 「も」、pirka 「良い」。320. 志年ふ (一) : sinep 「一」、ツ婦 (二) : tup 「二」、連婦 (三ツ) : rep 「三つ」、い年婦 (四つ) : ínep 「四つ」、あし起年ふ (五つ) : asiknep 「五つ」、い者ぬ遍` (六つ) : iwanpe 「六つ」、あるあん遍` (七つ) : arwanpe 「七つ」、徒遍`さん遍` (八つ) : tupesanpe 「八つ」、志年遍`さん遍` (九つ) : sinepesanpe 「九つ」、王ん遍` (十) : wanpe 「十」、本つ (二十) : hot 「二十」、王ん遍`本つ (三十) : wanpe 「十」、hot 「二十」、徒本川 (四十) : tu hot 「四十」、あしき年本つ (百) : asikne hot 「百」、王ん遍`志年まな本つ (千) : 不詳、王な本つ (万) : 不詳、志年志やけ (一東) : sine sike 「一東 (魚を数える単位。二十匹にあたる)」、あしき年い可志満本つ (二十五) :

¹⁵ 「戀」は「應」かもしれない。

asikne「五つの」、ikasma「余り」、hot「二十」。321. 祢尔本^ほ (誰子) : nen「誰」、poho「～の子供」。322. や尔本^{うほ} (御身可子) : eani「お前」、poho「～の子供」。323. 祢王ありき (何方ヨリ来ル) : ney wa「どこから」、arki「来る」。324. 祢多おまん (とこへ行) : ney ta「どこに」。oman「行く」(服部 1964)。325. ゑちお可ひ (御前様) : eciokay「お前達」。326. や尔 (うぬ) : eani「お前」。327. ら婦^多 (一切の道具の底) : raw ta「下に」。328. ら婦^多お可ひ (一切ノ物の内ニ在) : raw ta「下に」。okay「ある」(服部 1964)。329. あ志やま (一切の道具外底) : asama「～の底」。330. あん遍^{うぶし} (破れる物) : an pe「ある物」、opus「穴があく」。331. あんぬんくる遍^ゝ (人の物) : anun「他人」、kor「持つ」、pe「もの」。332. 祢んくう (何者) : nen「誰」、kur「人」。333. 祢んこるべ (万ノ物誰可物) : nen「誰」、kor「持つ」、pe「もの」。334. (物をと可め類事) 年んゝ : 不詳。335. てう可ひ (我) : cókay「私達 (除外的)」。336. (爰へ来ル) 多んこ多んゑく本ろ : tan kotan「この村」、ek「来る」。337. 里起多ん (天) : rik ta an「上にある」。338. あし (雨のふる) : as「降る」。339. (硯)。340. (筆)。341. 者^ゝ川し (墨) : pas「炭」。342. ちつふな (舟のおもて) : cip「舟」、nan「顔」。343. ちつ婦お志よる (舟のとも) : cip「舟」、osor「尻」。344. ちつふのしけた (舟ノ中) : cip noski ta「舟の真ん中に」。345. 可や (舟の帆) : kaya「帆」。346. ち川婦可や尔 (帆柱) : cip「舟」、kaya「帆」、ni「木」。347. 者^りき可 (縄) : harkika「縄」。348. 王つてし (王ら) : wattesh 'a straw'。349. むりくり (黒米) : 不詳。350. 飛^りけり (白米) : 不詳。351. か満かり (苺) : 不詳。351. もし (苺) : mose「刈る」(服部 1964)。352. ゆだ (物を突) : iyuta「つく」。353. 志ゐ (米) : 不詳。354. 徒らハゑくぬ可るなんころ (人を同道シ而合セン) : tura wa ek「連れて来る」、nukar「見る」、nankor「だろう」。355. とい多年 (正月) : toetanne「一月」(久保寺 1992)。356. 者ぶらく (二月) : haprap「二月」(久保寺 1992)。357. もちうふ (三月) : mo kiuta chup「三月」(久保寺 1992)。358. きう堂川ふ (四月) : kiu-ta chup「旧三月四月」(久保寺 1992)。359. (五月) 志ん志^つ婦 : Shinchi-chup 'The month of November'。360. まうつゝ婦 (六月) : 不詳。361. 尔よらく徒ふ (七月) : Nihorak-chup 'The month of September'。362. やるいつふ (八月) : Yarui-chup 'The month of August'。363. う連ほけつ婦 (九月)。364. 志ゆなん徒婦 (十月) : Shinan-chup 'The month of October'。365. くゑ可ひつ婦 (十一月) : Kuikai-chup 'November'。366. ちう類徒婦 (十二月) : Chiurep-chup 'December'。367. へうけ (物の曲多る) : heuke「曲がっている」(久保寺 1992)。368. 本ん (少) : pon「小さい」。369. やひやる (物の遍多) : 不詳。370. 遍満可らい (此方へよれ) : hemakaraiba 'to return towards a river's source'。371. ち婦^おふ (舟ニ乗レ) : cip o「舟に乗る」。371. 連多類べ (色) : retar pe「白いもの」。373. くん祢 (黒) : kunne「黒い」。374. 志う年ん (青キ) : siwnin「青い」。375. ふう連 (赤キ) : húre「赤い」。376. 志りき (物の形) : sirki「模様」。377. に志やう (浅黄のちらし) : 不詳。378. うせ川 (木綿) : usep「反物」(久保寺 1992)。379. 袋 (袋) : pukuru「袋」。380. く [文字欠損] (帯) : kut「帯」。381. 飛やう川ゝけ (下帯) : chi-hotke-i「褌」(久保寺 1992)。382. せん可起 (手ぬくい) : senkaki「布きれ」。383. な者堂類 (か川ぎ) : 不詳。384. くう (弓) : ku「弓」。385. あい (矢) ay「矢」。386. あいるむ (矢ノ根) : ay「矢」、rum「矢の先端」。387. 鉄砲 (鉄砲) :

teppo「鉄砲」。388. お可む(合掌): onkami「拝む」。389. おのふゝ(よろこび): ononosh「めでたい」(久保寺 1992)。390. お志よら(なけく): osura「捨てる」。391. よつたなしのかる(念頃成近付): 不詳。392. おつ可ひ(あの子): okkay「男」(久保寺 1992)。393. なルおまん(ま川寿く): nani「すぐに」。oman「行く」(服部 1964)。394. へ婦け(惜惜る): kopepka「苦勞話をする」(?), ohetke「こぼれる」(?)(「惜惜る」は不詳だが「愚痴る」(?))。395. 連うけ(物のこ本るゝ事): rewke「曲がる」。396. あち可せしけ(五躰寿く): 不詳。397. る(道): ru「道」。398. 屋べ可類(陸道): ya「陸」、peka「通つて」、ru「道」。399. たん者ゝこ(多者こ): tanpaku「タバコ」。400. 本くれ者ゝへ(者やくいそけ): hokure「さあ、早く」、paye「行く」。401. 火うち(火打): piwci「火打ち」。402. ち起志やゝ(火ヲもミて出ス): ci-自発、kisa「揉む」、-sa 部分重複(=「揉み続けること」(?))。403. むルん(本くち): munin「腐る」。404. かる志(木の耳の本くち): karus「キノコ」。405. いちゑん(錢): icen「お金」(服部 1964)。406. らんるし(本しい): kon rusuy「欲しい」。407. かる(金): kani「金属」(服部 1964)。408. 連多るかる(銀): retar「白い」。kani「金属」(服部 1964)。409. お起らしの(達者): okirashnu「強い」(久保寺 1992)。410. 志んぎ(よ王川多可): sinki「疲れる」。411. 本婦らい(汗の出): 不詳。412. てろき(に志ん): heroki「ニシン」。413. 遍ろ(物ノ多有事): 不詳。414. ゆふ本ゝう(兄): yúpo「兄」。415. 者ゝ起(弟): aki「～の弟」。416. 志や者(あ年): sáha「～の姉」。417. 飛志やう本う(妹): 不詳。418. ゑ可し(乳): ekasi「祖父」。419. 志[文字欠損](飛ち)。420. かぶら(笠): 不詳。421. かぢ(舟の可ひ): kanci「かじ」。422. ね[文字欠損](婦しき)。423. いらもし可れ(不知): eramuskari。424. くい(腹): tuy「内臓」。425. ある[文字欠損](痛事): arka「痛い」。426. ゑ川婦(鼻): etuhu「鼻」。427. ゑしな(く志やミ): esna「くしゃみをする」。428. き志やら(耳): kisara「～の耳」。429. くち(本んのく本): 不詳。430. 本なし(肩): 不詳。431. せ川る(せな可): seturu「背中」。432. と川と(血): totto「乳」。433. いへけ(腰): ikkewe「～の腰」。434. の起(きん): noki「～の睾丸」。435. おそろ(志り): osoro「尻」。436. ち(玉く起): ci「陰莖」。437. 本川キ(玉門): pokihi「～の女陰」。438. めのこ(女): menoko「女」。439. おもひ(念頃人): omoye「馴染男」。440. おむ(もゝ): om「腿」。441. こ可しや者ゝ(飛ぎ): kokkasapa「膝」。442. う連べ(こむら): 不詳。443. て満(足): kema「足」。444. て起(ゆび): teke「～の手」。445. とつといく連(乳呑事): totto「乳」、ikure「ものを飲ませる」。446. お起くるミ(本うぐ王んとの): Okikurmi「オキクルミ神」。447. 志やまよん類(弁慶): Samayunkukr「サマユンクル神」。448. おとな(庄屋): ottena「えらい人」(服部 1964)。448. にし者(庄屋): nispa「紳士、旦那」。449. 者満な多(な多): kamanata 'a large knife' (Batchelor 1938)。450. ゑりけび(ま起り): epirkep「小刀」。451. むくかり(まさ可り): mukar「まさ可り」。452. よく遍(可満): iyokpe「鎌」。453. く川く王(鋏): kupka「鋏」。454. ゑむし(脇差): emus「刀」。455. おつ婦(やり): op「槍」。456. 大豆(大豆)。

4. 4. アイヌ語史の観点から注目される表記上の特色

アイヌ語の表記には少なからず興味深い問題点があるが、以下ではそれらのうち、アイヌ語史の観点から注目すべきものではないかと思われる点について重点的に述べることにする（なお、アイヌ語表記の詳細については末尾の諸索引も参照されたい）。

まず、pirka「良い」に相当する形式の表記について述べる。この形式に相当する、あるいはこの形式を含むとみられるものは以下の通りである。

志り飛類可 (256)

飛ゝるか (258)

飛る可 (315)

飛る可 (317)

飛ゝるか (318)

飛るか (319)

佐藤 (2008, 2009) で指摘されているように、空念資料よりも成立年代が古いと思われる「松前ノ言」(「びる可」)、空念資料とはほぼ同時期の「蝦夷談筆記」(「びる可」)、「北海随筆」(「ピルカ」)と空念資料はこの語の r に「る」に相当する仮名を用いるという点で一致している。より後代の資料、たとえば『藻汐草』(寛政四 (1792) 年) にも「ピリカ」とならんで「ピルカ」という表記も見られるので、この表記上の特色が無条件に年代の古さを示すものとは言えないが、年代が明記された空念資料の表記は逆に他の資料の成立年代について示唆するところが大きいと言える。なお、者るき (32) (harki「左」) のような類例も現れている。とはいえ、「飛び可 (248)」という後代の資料に現れてくる表記も一例見られるので、あるいはこの時代にも既に変化の始まりが兆していたとも考えられる。つまり、今日、pirka の発音では、r の後に明確な [i] の音色の母音が聞かれるのが筆者の経験からは一般的であるが、この時代のアイヌ語では [r]、あるいは [ra] のような発音 (音韻論的解釈はまた別であるが) であったのではないか、ということである。

次に、長母音的な表記について述べる。佐藤 (2008, 2009) 等でも触れたように、古い時期に属する資料では長母音を表記したのではないかと思われる例が少なからず見られるが、空念資料もこの点では同様な性格を示す。以下にそれらの例をあげる。

連いら (11) réra「風」

てう可ひ (18) cókay「私達」

めいらいけれ (72) mérayke「寒い」

志いの (41) síno「本当に」

徒いなし (235) túnas「早く」

ふう連 (375) húre「赤い」

ゆふ本う (414) yúpo「兄」

とふへ (108) tópen 「甘い」
 とうかつふ (302) tókap 「昼間」

これら長母音的表記を持つ語は、語頭の開音節にアクセントを持つ、例外的なアクセントパターンを示す語であることが多いことが知られているが、空念資料でもその傾向は明らかである。しかし、逆に、現代の資料で例外的アクセントを持つ語が空念資料では長母音的表記を持たない例も少なからずあり、問題を残している（以下の例を参照）。あるいは、過渡的な状態を示すものかもしれないが、é、óを含む語の例がないのは偶然なのであろうか。これらのわずかな例からだけでは何とも言えないが、興味深い。今後、さらなるデータの収集、研究が必要であろう。

者ちり (295) hácir 「落ちる」
 志や者 (416) sáha 「～の姉」
 志もん (34) símon 「右の」
 志べ (82) sípe 「サケ」
 い年婦 (315) ínep 「四」
 うせ (54) úsey 「湯」
 くしゑ (171) kúsuwep 「ハト」
 むまん (308) núman 「昨日」

次に、17世紀初頭のアイヌ語の /hu/ の音価及び関連する問題について述べる。空念資料において特に注目される例として、「くんべ」(クジラ)がある。もちろん、現代のアイヌ語の発音(千歳方言)では hunpe [ɸumpe] 「クジラ」に相当するものであるが、「く」という表記が特異である¹⁶。/hu/ に「く」が対応しない例も数多いので(例えば「婦ミ類い(山鳥) humiruy 「ヤマドリ」)、決定的な証拠とすることは必ずしもできないが、この表記は過去のアイヌ語の発音について極めて示唆的である。すなわちこれは、今日 [ɸu] と発音されている音節が、古い時代には両唇摩擦音ではなく、声道の後部で発音される声門摩擦音を頭音に持つ [hu]、あるいは軟口蓋摩擦音を頭音に持つ [xu] のような音であった(あるいは過渡的な状況にあった)のではないか、という可能性を示すものではないだろうか。仮にそうだとすると、アイヌ語の日本語からの借用語とみられる形式において、日本語の両唇摩擦音 [ɸu] に対応する形式に対して [ɸu] ではなく、[pu] が現れるのはなぜか、という問題も自然な説明が可能になるように思われる。すなわち、現代のアイヌ語の関連する発音は概略以下のようである。

[pa]、[pi]、[pu]、[pe]、[po]
 [ha]、[çi]、[ɸu]、[he]、[ho]

¹⁶ 他に、「く連婦尔(桑)」もひょっとすると同様な例として良いかもしれない。実証はできないが、*hurep ni のような形式であった可能性があるからである。

これに対して、空念の資料を重視するならば、古い時代には（細部は別として）次のような発音であった可能性がある。

[pa]、[pi]、*[pu]、*[pe]、*[po]

[ha]、[hi]、*[hu]、*[he]、*[ho]

このような推論は、日本語からの借用とみられる語彙に付随する問題を考える¹⁷上で重要な示唆を与えるものである。千歳方言を例にとると以下のような例がある。

pisakku 「柄杓」

pito 「人（ただし口承文芸で kamuy 「神」と対になった常套表現で用いられる）」

piwci 「火打石」

pera 「しゃもじ」

pákari 「計る」

pasuy 「箸」

pone 「骨」

sippo 「塩」

púri 「習慣」

pukuru 「袋」

puta 「蓋」

山口（1993：1635）は、日本語のハ行音が [p] であった時期について「いわゆるハ行転呼音の生じた時期には [ɸ] になっていたであろう。ハ行転呼音とは、カハ（川）>カワのごとき現象であるが、[p] > [w] よりも [ɸ] > [w] の方が考えやすい。ハ行転呼音は、『万葉集』（奈良朝末期成立）にその早い例が見られるから、奈良時代にはすでにハ行子音が [ɸ] であったことになる」と述べている。

このような日本語の音声史から上記のようなアイヌ語の形式を見ると、当然のことながら、仮にアイヌ語が日本語から借用したと考えた場合、日本語が [p] の時代にこれらの単語を借用したか、それとも [ɸ] の時代に借用したか、という問題がまず第一に起こってくる。[p] の時代に借用したのだとするとその意味するところは甚大である。アイヌ語の形式が日本語の書記記録以前の状

¹⁷ 民博での筆者の発表のおり、pp のような重子音を含む単純語は現代のアイヌ語では固有語と思われる形式には非常に少ないことを補足したが、その際、発表者のお一人であった東京外大大学院生大滝靖司氏より、pirakka、pisakku のような形式も似た特徴を示しており、併せて考察すべきではないか、という御意見をいただいた。日本語のハ行音と sippo との関係だけに注意が向いていたためにそこまでは思慮が及ばず、非常に有益なコメントであった。大滝氏に深く謝意を表したい。大滝氏の御意見を取り入れて再考してみると、patci のような形式も同様な重子音的特徴を持っていることに気付く。発表時は、日本語の古い時代のアクセントが関係している可能性を主として考えていたが、大滝氏のご意見からすれば借用に際しての音修正規則の観点からさらに細かく検討すべき問題であろう。

態を直接例証する貴重な例ということになるからである。しかしながら、日本語の専門家の立場は慎重である。例えば橋本（1928：40）は、「アイヌ語は F 音（佐藤註： 両唇摩擦音）もあるが常に u の前にのみ用ゐられて、用法が甚だ限られてゐるのであるから、此等の事実も、唯古代日本語の波行音が唇音であつた事を示すだけであつて、p 音であつたか F 音であつたかを決定する根拠とする事は出来ないのである」と述べている。橋本の見解は一見もっともなようにも思えるが、まず、理論面では重大な問題があると思う。古代の日本語のハ行音の発音がいかなるものであったかについては容易に決定し難い、という極めて慎重な態度を取っておきながら、アイヌ語についてはいとも無造作に現代のアイヌ語の発音（Fu）を元に「p 音であつたか F 音であつたかを決定する根拠とする事は出来ない」と述べるのはどうしたわけであろうか。借用の際に起こる可能性を検討するのであれば、当然、古代日本語と同時代のアイヌ語の音声構造を元に論じなければ理論的にはおかしいはずであるが、この部分に関する限り、橋本の念頭にそのような理論的必要性が浮かんだ形跡は皆無である。アイヌ語に〔φu〕という発音があつたかどうかは決して自明なことではない。古代の日本語の発音の推定は学問的に極めて困難だが、古代のアイヌ語の発音の推定は容易なのだろうか。あたかも、アイヌ語は古代から現在に至るまで不変であると考えているかのようである。また、具体的な推論の内容にも問題がある。つまり、アイヌ語に〔φu〕という発音があつたにもかかわらず日本語の「フ」を〔pu〕で写している、と言っていることになるわけであるから、橋本の発言は、橋本の慎重な態度とは裏腹に、アイヌ語の借用語の p は歴史以前の日本語の〔p〕の直接的証拠である、という主張を強力に支持するものになつたはずである。しかるに、「用法が甚だ限られている」という、あまり明確でない理由でこの可能性を一方向的に否定しているのは不可解である。橋本の態度は日本におけるアイヌ語の学問的位置付けをある種象徴するものに思われる。それはともかく、ここで議論を空念資料に戻せば、空念資料の「くん遍^レ」の「く」が、古い時代のアイヌ語が「クジラ」を意味する語の頭音を現代のような〔φu〕ではなく、〔hu〕と発音していたことを示すものと解釈すると、古い時代のアイヌ語が日本語の〔φu〕¹⁸を〔pu〕で取り入れるということも、それほど不自然とは言えないことになるであろう。この点で、空念資料はアイヌ語の音声史や借用の問題を考える上で貴重な視点を提供してくれるものと言って良いであろう。もっとも、これを支持するような文献的証拠を他に求めようとしても今のところかなり難しいのもまた事実である。例えば、空念資料よりもかなり古いと思われる「松前ノ言」についてみると、以下のように現代の発音の〔ha〕、〔he〕、〔ho〕にはハ行の仮名と思われるものが使われていて空念資料のようにカ行の仮名で表記するような例は見られない。参考までに現在 p を含む形式の例も含めて示せば以下のようなものである。

「松前ノ言」（ただし一部を抜き出して示してある。仮名表記されたアイヌ語、訳語、現代の千歳方言の順に提示）：

¹⁸ 母音を〔u〕と表記してよいかどうかは問題だが、仮にこう表記する。

者ん遣ね ち可ひ hanke 「近い」
者てき これ者可り patek 「だけ」
びる可 よき事 pirka 「良い」
おひ多 ミな opitta 「皆」
遍ろ川け に志ん heroki 「ニシン」
あ川遍い 火 ape 「火」
あ本ん こ、へこゑ ahun 「入る」
本ろのおん可い 大なる物 poronno 「たくさん」

これらの例のうち、特に ahun 「入る」に対応する表記が「あ本ん」となっている点はここでの仮説と必ずしも一致しない。「あこん」または「あくん」とはなっていないのである。また、これらの文献資料は古いとはいえ、問題の借用が起こった時点から数百年以上経過している可能性もあり、借用を説明する証拠としては、他に資料がない以上、やむを得ないとはいえ、なお慎重に扱う必要があるのは勿論である。今後の資料の蓄積をまって再考する必要があると言える。

アイヌ語の音声史と関連付けて解釈すべきではないかと思われる興味深い事例としては、他に以下のようなものがある。

て満 (足) (443) kema 「足」
てなし (山ノ平地) (221) kenas 「河畔林」
てろき (にしん) (412) heroki 「ニシン」

くい (424) tuy 「内臓」
くう (山ノ尾) (215) sítu 「尾根」(不確かだが、sí- 本当の、tu尾根、のように分析できるものと考える。)

これらが誤写のような偶然的な要因によるものではないとすれば、現代の形式との「ずれ」をどのように理解すべきかが問題となるだろう¹⁹。「て」: ke、「て」: he に着目すれば、後ろ寄りの子音を含む音節に対して前寄りの音を含む音節を表すとみられる仮名「て」が当てられているということもできる。しかし、「く」: tu の例では、逆に前よりの子音 t を含む音節に対して後ろ寄りの子音を含む音節を表すとみられる「く」が用いられており、統一的な説明が難しい。従って、たとえば次のように考えることもできるだろう。つまり、一見矛盾するような「て」、「く」の使用は、実は子音の前後とはもっと別の特徴を表そうとしたために生じたものではないかと考えるのである。まず、kema、kenas、heroki においては、いずれも関連する母音が前舌母音の e である点が注意

¹⁹ 「けり (足袋) (26) keri」、「へめ寿 (上る) (233) hemesu」のように「け」、「へ」(及びそれらの変体仮名)を用いた表記のほうが普通である。

される²⁰。現代の日本語においては、「け」、「へ」の頭子音の発音は、「か」、「は」の場合に比べると口蓋化の影響によってかなり前寄りになる。もし、空念の日本語でもそうであったとしたら、口蓋化の程度のごく少ないアイヌ語の*[ke]、*[he]の発音を聞いた場合、口蓋化の程度が強い日本語の「け」、「へ」とは異なる、相当に「耳慣れない音」という印象を受けた可能性があると思われる。前寄りの子音である t の場合は後寄りの子音である k に比べると口蓋化による調音点の変化は相対的に小さいから、口蓋化の程度の少ない子音を表すのに「て」を使用する可能性はあるのではないだろうか。

次に、「くい tuy (内臓)」、「くう tu (尾根)」のように、現代の tu に「く」が対応する例について述べる。tu には「と」、「川」、「徒」が対応する場合がほとんどであるが(「へとく hetuku (出る)」、「あ川い atuy (海)」、「徒いなし tunas (早い)」など)、わずかに「く」もみられるのはなぜであろうか。この時代の日本語でも「つ」の子音は破擦音であっただろうが、アイヌ語の tu の t は破擦音ではなかっただろう。そのため、「徒いあ類可 tuy arka (腹が痛い)」のような例もみられるものの、tu の表記には、破擦音を表す可能性のある「川」、「徒」よりも、破擦音ではない「く」のほうがより適切と考えられる余地があったために、このような表記のゆれが生じたのではないだろうか。

次に、現代の資料では十分な解釈が困難だが、空念資料の例が、あるいは重要な示唆となるかもしれない事例について述べる。空念資料には以下のような例がある。

あへれん本う (人ヲ可つ堂、く) (251)

連ん本う (火ヲさしくべる) (252)

これらの例をどう解釈するかは意見の分かれるところであろう。筆者は主に西南部方言を専門としているが、それさえも知識が限られている。この単語は筆者のよく知らない方言ではありふれた単語なのかもしれない。あるいは西南部方言の単語だが、筆者が知らないだけなのかもしれない。知識不足を承知の上で、これらの例だけで決定的なことが言えるわけではないが、既に述べたように様々な可能性を用意しておくことがアイヌ語史の解明には必要だと考えるので、批判は覚悟の上で少々思い切った推測を述べる

そもそも「あへれん本う」の訳語は判読が困難で解釈の分かれるところではあるが、一応、ここでは「可つ堂、く (かつたたく)」と読むことにする。この語はこれまでのところ日本語の主要な辞典類にはみえないが、「かつさばく」のような単語はあるので、同類の「かつたたく」という語が空念の日本語方言にあったのではないかと推測した。あるいは「突くようにたたく」という意味の語だったのではないだろうか。現代のアイヌ語千歳方言には、ape erepo「火を炉の真ん中で燃やす」という語があるようであるが²¹、あるいはこれに相当する語、もしくは関係する語ではないかと思われる。erepo という形式がもしあったとすれば、*e-rep-o「～の先端を・沖・に入れる」

²⁰ く連婦尔(桑)を turepni に該当するものとみなせば u の例もあることになり、また別の解釈が必要であろう。

²¹ 一例しか例がなく、話者が言いよんでいるため、なお検討を要する。

という構造が推定される。前後の文脈は、「お婆さんが長い丸太の薪をどんだん炉の中央に繰り出して焚いているうちに、あんなに長かった薪も、とうとう短い燃えさしになってしまったが、年寄りの一人暮らしで、新しい薪を取りに行くこともできない」というものなので、この解釈にもある程度の整合性はあると思われる。つまり、「丸太の先端を燃えて行く先からどんだん炉の中央へ押し出して火を掻き起こす」という動作から、「人間をそのようにつついてぐいぐい押しやる、突くようにしてたたく」というような、ある種の婉曲表現に転用された可能性を示すものではないかと思う。さて、意味とは別に、ここで問題となるのが「れん本う」、「連ん本う」という表記である。二例みられるので、誤写の可能性は低い。しかし、推定される*repo「沖・に入れる(炉の中央にくべる)」とは少し距離があり過ぎるようにも思える。このような表記は一体何を意味しているのだろうか。

アイヌ語のアクセントは、理論的には様々な問題を含んでいて、いまだに全面的な解決をみえない点が少ない。合成語のアクセントもそのような問題の一つである。合成語については、前部要素のアクセントが合成語全体のアクセントを決定する場合が多いことが知られている²²。例えば、turép「ウバユリ」と tá「掘る」が合成されて一語になると、turépta「ウバユリ掘りする」となって、tá「掘る」のアクセントは消失する(弁別的でなくなる)。ká「糸」+eká「縫る」→káeka「糸縫りする」、kéra「味」+án「ある」→kéraan「うまい」。これに対して、前部要素がCVC型の一音節語である場合には事情が複雑である。kím「山」+erók「～に住む」→kimérok「山に住む」、sík「目」+eráyke「で殺す」→sikérayke「にらむ」のような例では、前部要素のアクセントが保持されず、アクセントは第二音節に置かれる。ところが、同じくCVC型の一音節語であるのに、このパターンに従わないものもみられる。pír「傷」+ó「入る」→píro「傷つく」(*píro とならない)、rép「沖」+oráye「へ押しやる」→réporaye「炉の中央へ押しやる」(*repóraye とならない)。以上を簡単にまとめると次のようになる。

- 1) 前部要素が開音節で始まり、そこにアクセントがある場合、合成語のアクセントもそこに置かれる。
- 2) 前部要素が閉音節で始まる場合は、前部要素のアクセントは語頭の閉音節に置かれ、合成語全体のアクセントも語頭の閉音節に置かれる。
- 3) 前部要素が開音節で始まり、そこにアクセントがない場合は、アクセントは第二音節に置かれ、合成語全体のアクセントも第二音節に置かれる。
- 4) 前部要素が閉音節の一音節語で、後部要素が母音で始まる語の場合、通常は第一音節末の子音と後部要素の母音が結合して一音節をなし、合成語は第一音節が開音節始まりの語になる。その場合、合成語のアクセントは、a) 第一音節に置かれる場合と、b) 第二音節に置かれる場合とがある。

²² 合成語のアクセントにおける前部要素の優位性については旭川方言を研究されていた篠崎俊幸氏による(p. c.)。

アイヌ語では、開音節始まりの語は第二音節にアクセントが置かれるのが普通であり、このパターンからはずれる場合（すなわち、1）と4 a)) については、その形式がアクセントの例外を引き起こす特別な形式であることをレキシコン中に注記しておく必要がある。

アイヌ語の合成語のアクセントの共時的な規則としてはこのようなまとめで一応概略が得られたことになるわけだが、問題はこのような不規則なアクセント規則が生み出された歴史的な背景である。文献的な証拠が皆無に近い現状では手がかりがあまりにも乏しく、すべての相反する事実を統一的に説明するような枠組みを提示することは不可能であるが、色々な可能性を検討してみることも必要であろう。

まず、上記の1) の例外的なアクセントの場合であるが、これに関しては以前、別海町における講演会において次のような仮説を述べたことがある。要するに、現在、語頭の開音節にアクセントを持つ例外的なパターンを示す語は、かつては「短母音+未知のわたり音」という一種の閉音節に由来し、そのいわば「名残り」が例外的なアクセントとして残っている、というものである。この未知のわたり音の証拠は現在のアイヌ語には残っておらず、ただ不規則なアクセントしか手がかりがないわけであるが、根室地方のアイヌ語方言を記録した江戸時代の資料「加賀家文書」には、他方言には通常みられない語頭 h 音を持つ形式（下記の「ヘーセ」）が記録されており、この音が例外的なアクセントの原因となったわたり音の存在を示すものなのではないか、と述べた²³。

千歳方言	推定される古い語形
réra 「風」	*reHra
húre 「赤い」	*huHre
húra 「匂い」	*huHra
kéra 「味」	*keHra
mína 「笑う」	*miHna
úna 「灰」	*uHna
ése 「承知する」	*HeHse（加賀家文書「ヘーセ」hése「承知する」）

この仮説自体は憶測の域を出ず、実証することも不可能であるが、この考えは今回扱った空念資料の不可解な形式やアイヌ語の合成語アクセントの解釈にも関連性を有するのではないかと思われる点がある。すなわち、合成語において、CVC型の前部要素にはアクセントを保持するものとアクセントが次音節に移動するものの二種があるわけであるが、同じCVC型で異なる振る舞いをするのはなぜか、これまでは説明がつかなかった。しかし、CVC型でアクセントを保持するものも、実はこのわたり音*Hを有していたと考えると、例外的なアクセント（開音節で始まる語がそこに

²³ なお、講演会後の質疑で年配の男性から網走の古名「ハバシリ」、近辺の地名「ハシリコタン」も問題の*H音の表れではないか、とのもっともな指摘があった。私もこの事実を知ってはいたが、指摘されるまで自分が話そうとしていることと重要な関係のあることには正直、全く思い至らなかった。私の話を一度聞いただけで即座に適切なコメントをされた頭脳の回転の驚くべき鋭さに驚嘆させられた。一般向けの講演会でも、誰が聞いているかわからないものであるとあらためて感じた。

アクセントを持つ) をうまく説明できるように思われる。

*píHr 「傷」 + *óH 「入る」 → *píHroH → píro 「傷つく」

*réHp 「沖」 + *oráye 「へ押しやる」 → *réHporaye → réporaye 「炉の中央へ押しやる」

比較： *kím 「山」 + *erók 「～に住む」 → kimérok (音節の再構成が起こって合成語全体は開音節で始まるため、アクセントは第二音節に置かれる。)

ここで注目されるのが、空念資料の「あへれん本う (人ヲ可つ堂、く) (251)」、「連ん本う (火ヲさしくべる) (252)」という例である。「れん本う」、「連ん本う」が*répo 「沖に入れる」に相当するものであったとすれば、この「ん」は、rep 「沖」が合成語においてアクセントの移動を引き起こさない形式であることから推定される、*réHp のわたり音 H に相当する音を表しているのではないだろうか。「ん」の日本語表記の例からは、「ん」は撥音を表した例しかみられないが、必ずしも鼻音を表そうとしたものではなくて、何らかの「長さ」を表したものと解釈できる可能性はあると思われる²⁴。様々な諸要因の全体的な整合性を得るにはほど遠いものではあるが、一つの仮説として提示してみた²⁵。

その他、この時代の音声上の特色について示唆的な事例としては、「もの」を意味する「婦」という表記が挙げられる。「その物と言事ヲハ 婦」(44) とあるのであるが、なぜ「婦」を見出し語として挙げたのであろうか。「衾んこるべ 誰可物」(333) という例もあるので、「べ」を見出し語として挙げてもよかったはずである。子音 p を「婦」で表した可能性ももちろんあるが、ひょっとするとこの「婦」という表記は、p の異形態 pe が確立する前の、過渡的な*pə という状態を写したものである可能性もあるのではないだろうか。

また、散発的な例ではあるが、「ゆぶりきたい (山ノ頭上)」(217) (nupuri kitay 「山の頂」)、「ゆぶりやうろうほう (山ノ下)」(219) (nupuri corpok 「山のふもと」(?)) という例もある。「ゆぶり」という表記がなぜなされたか問題である。「ぬ」と「ゆ」の誤写、という可能性も考えられるが、他に類例がないことを考えるとその可能性は低い。しかしながら、日本語、アイヌ語の「ゆ」の仮名の用法にも手がかりになる事実がないようである。この表記を額面通りに解釈して、現代の nupuri にあたる語形が*yupuri のような語形であったという推論は「狂気の沙汰」とまでは行かないまでも、かなり思い切った仮定かもしれない。そこまで極端ではない案として一つ考えられるのは、「ゆ」が硬口蓋鼻音の [ɲ] のような発音を表しているのではないか、という可能性である。

²⁴ 「本川衾 (女) が honnep 「弱者」のような形式であるとするれば、佐藤 (2008) で指摘されている撥音と促音の表記法のゆれの例とみることができる。もしそうであるとするれば、拡張解釈になるが、「ん」、「つ」に相当する仮名がアイヌ語表記では区別なく用いられて、鼻音に限定されずに、ある種の子音的要素 (*H) を表記するのに用いられた可能性を示すものかもしれない。

²⁵ 例えば、repún 「沖へ出る」は rep を含むがアクセントは第二音節へ移動している。新しい変化とみなさざるを得ないが、なお一考を要するだろう。また、他にも両方のパターンを示すものがあり (sir-an 「様子である」、sir-ónuman 「日が暮れる」)、問題はそう単純ではない。

「志ゆら（者な寿事）」(282) (sura「放す」) のような例があるので、このような位置における子音の口蓋化はあり得ないことではないと思う（もっとも、筆者の経験も含め、現代のアイヌ語方言については報告がないが）。ただ、このような発音を仮定した場合、アイヌ語の音韻構造全体に及ぼす影響は小さなものではなく、[ɲ] の音韻的地位の問題や u に相当する母音の音韻論性格の問題など、検討しなければならない問題は非常に多い。ここでは問題点を指摘するにとどめ、今後の研究を期したい。

4. 5. 語彙的、文法的特色

空念資料のアイヌ語の方言的特色であるが、以下のような基礎語彙の例に現代の西南部方言の形と一致するものがある点が注目される（服部 1964）。ただし、空念上人の足跡から考えて複数地方の語彙が混在している可能性があり、詳細は今後の研究を期したい。

者^ゝろう（口）(99) paroho (?) 「～の口」
志や者^ゝ（あ多満）(105) sapa 「～の頭」

空念資料には、他の資料にはあまり例がないと思われる語彙が含まれている点に注意される。例えば次のようなものである。

おな多ら （父殺）(69)
おなバ者 （母殺）(70)

こららは相当する形式が見あたらないものであるが、「おな」の部分が共通しているので、「多ら」、「バ者」はその被修飾要素ではないかと思われる。そうすると「殺す」という動詞であるというよりは、名詞で、「おな」の部分は「くそばばあ」の「くそ」のような罵倒要素、「多ら」、「バ者」の部分がそれぞれ「父」、「母」の「軽蔑語 pejorative」である可能性もある。他資料からのさらなる情報が期待される。

者らさん多^ゝひけ連 （飛多^ゝるい）(73)

この例も相当する形式が見当たらないものである。「ひだるい」は「ひもじい」意であるから、*i-parasan(?) raykere 「それに parasan(?) を殺させる」のような語形であろうか。「腹が減ったなあ」のような間投的表現であろうか。これも他資料からのさらなる情報が期待される。

中には、アイヌ語も日本語も手がかりがないものもある。

ゑ可ふ年 （うなかふし）153

「ㇿ可ふ年」というアイヌ語も不詳であるし、「うなかふし」という日本語も手がかりがつかめない（「うなかふす」は動詞で「うなだれる」の意（『広辞苑』）。ただ、前後の見出し語が生物の名称であるので、これもそうである（水生昆虫のような）可能性がある。日本語の方言語彙などの研究から、さらなる情報が期待される場所である。

空念資料は年代が明らかで、現存のアイヌ語彙の中では最も古い、という点に特色があるが、語彙の中にもそのことを指し示すものがある。

な可らてい （久敷）(95)

空念資料が発見された時に新聞社からの求めに応じて行ったコメントの中でも言及したが²⁶、この語は、年代こそ明らかでないが、空念資料よりも成立年代が古いと思われる「松前ノ言」に「な可らてい 久しき」として現れる語と同じものであろう。この語は服部（1964）に帯広方言として報告されている inankarapte 「こんにちは」に相当するものと考えられる。「松前ノ言」以外にもこの語を記録した資料があることになり、「松前ノ言」の信頼性を高める発見と言える。この語は江戸時代後期の資料では一般的ではないようであり、空念資料、松前ノ言のような古い資料に特徴的な形式である可能性がある。

おつ可ひ （あの子）(392) (okkay 「男」(久保寺 1992))

「あの子」という訳語は若干問題を含んでいるが、「年の若い男」を感じさせる訳語である。okkay は現代のアイヌ語諸方言では「男」の意で、特に年少の男を意味する語ではない。しかし、佐藤（2003）でも既に指摘したように、古いアイヌ語資料である「松前ノ言」、「津軽一統志」、デ・アンジェリス神父の「蝦夷国報告書」でも相当する語はいずれも「若い男」を意味するとされている。空念資料でも同じ扱いをされていることをは、他の古い資料の信頼性を補強するものと言える。

文法的な点に関して注目されるのは、動詞の単数形、複数形に相当すると思われる語形をこの時代に既に記録している点である。

ㇿ可（来る可）(37) （ek 「来る」(単数形)、a 「か」)

柀王ありき（何方ヨリ来ル）(323) (ney wa 「どこから」、arki 「来る」(複数形))

おまん（いけ）(242) (oman 「行く」(単数形))

本起の者い（先へゆけ）(264) （hoskino 「先に」、paye 「行く」(複数形))

この時代におけるこれらの形式の機能は厳密には不明であるが、全く異なる語形に対して同じ意味を当てているのは興味深い。いわゆる単数形、複数形の両方が記載された年代の判明している最

²⁶ 2010年8月1日付北海道新聞朝刊。なお、この取材で筆者は初めて空念資料の存在を知った。情報を伝えていただいた北海道新聞の小坂洋右氏に感謝申し上げる。

も古い資料として空念資料は貴重である。

5. おわりに

以上、空念上人が残された「狄言葉」について言語学的な側面から考察を加えた。ある面では大胆な仮説も織り込んだわけであるが、乏しいとはいえ、できるだけ実証的な根拠を挙げつつ推測を述べたつもりである。これを契機に空念資料を含めた古いアイヌ語の記録のさらなる言語学的な検討がなされることを期待したい²⁷。

追記：

本別方言には、包括的一人称複数主格他動詞の人称接辞に a- と an- という異形態があり、概略、後続の語幹が子音で始まっている場合には a- が現れ、母音で始まっている場合には an- が現れる。しかし、母音で始まっているでもそこにアクセントがある場合には、a- が現れる（切替1996）。この交替を歴史的に説明することは筆者には容易でないが、本稿で言及した*Hの仮定がここでもある程度有効ではないかと考えたのでここに言及しておく。すなわち、母音で始まり、かつそれが開音節である場合、その音節にアクセントが置かれる事例はアイヌ語の一般的なアクセント規則に対する例外をなすことは本文中で触れた。その場合、*VH- が仮定されるわけだが、これを上記の a-an- の交替と関係付けるとすれば、a-、an- に共通の祖形として、*aH- を仮定するという可能性も考えられるのではないだろうか。子音で始まる語幹が後続すると*Hが脱落し、母音で始まる語幹が後続する環境では*Hはnに変化したと考えるのである（この変化の音声学的な説明は暫くおくとして）。他方、アクセントのある、母音で始まる開音節は、本稿の仮説では、*VH- という形を持つと仮定される。その場合は、*aH-VH- という連続が生ずるはずであるが、「異化」あるいは「重音脱落」の作用で初めの*Hが脱落し、*a-VH- → a-V-（Vはアクセントを持つ）となった、と説明するのである。なお、*VCCV- 語幹の場合、なぜHがnにならないのかは問題である。音声的な要因だけではこのままでは説明が困難である。あるいは、nを持つ形式もかつてはあったが、nが語幹の一部と誤って分析される可能性があったために淘汰された、という可能性もあるかもしれない。いずれにせよ、単なるspeculationに過ぎないものではあるが、*Hの仮定に関連する現象の可能性があるのでここで触れた。

²⁷ 最近、平山裕人『アイヌ語古語辞典』（明石書店、2013）という書籍が出版された。平山氏は驚くべき博識と精力をお持ちの方のようで次々とアイヌ民族関連の著書を出版されており、この本も主要な古いアイヌ語資料を利用しやすくまとめたものようである。今後の研究に有用であると思われる。本稿で扱った空念資料も含まれている。書店で手にとっただけで今回は内容を筆者の分析と比較検討する時間的余裕がなかった。おそらく目的や方法は筆者とは異なるであろうが、関連する研究として書名を挙げておく。

参考文献

- Batchelor, John (1939) *An Ainu-English-Japanese Dictionary*. Tokyo: Iwanami Shoten.
- 知里真志保 (1976) 『知里真志保著作集別巻2』東京：平凡社.
- 橋本進吉 (1928) 「波行子音の變遷について」『岡倉先生記念論文集』、『国語音韻の研究』, 1950: 30-45. 東京：岩波書店.
- 服部四郎 (1964) 『アイヌ語方言辞典』東京：岩波書店.
- 服部四郎 (1967) 「アイヌ語の音韻構造とアクセント」『音声の研究』13: 207-223.
- 服部四郎・知里真志保 (1960) 「アイヌ語諸方言の基礎語彙統計学的研究」『民族学研究』24(4): 307-342.
- 北海道教育委員会 (編) (1992) 『久保寺逸彦アイヌ語辞典稿』札幌：北海道教育委員会. (本文では「久保寺 (1992)」と記載している)
- 加賀家文書 (北海道大学文学部言語学情報学講座所蔵マイクロフィルム、池上二良、浅井亨氏撮影、フィルムNo.1~39).
- 切替英雄 (1996) 「アイヌ語十勝方言による昔話「島を引いて泳ぐオタスの少年の物語」の辞典と文法 (1)」『北海学園大学学園論集』88: 123-286.
- Klaiman, M. H. (1992) Inverse languages. *Lingua* 88: 227-261.
- 國東利行 (編) (2010) 『廻国僧正光空念師 宝永元年 (1704) 松前・蝦夷地納経記付アイヌ語集』札幌：北海道出版企画センター.
- 佐藤知己 (1998) 「天理大学附属図書館所蔵「松前ノ言」について (1)」『北海道大学文学部紀要』46(3): 41-64.
- 佐藤知己 (1999) 「天理大学附属図書館所蔵「松前ノ言」について (2)」『北海道大学文学部紀要』47(4): 53-88.
- 佐藤知己 (2003) 「酒田市立光丘図書館所蔵「蝦夷記」のアイヌ語について」『北大文学研究科紀要』111: 6-29.
- 佐藤知己 (2008) 「アイヌ語古文獻における言語学的諸問題」『北大文学研究科紀要』124: 153-180.
- 佐藤知己 (2009) 「18世紀前半のいくつかのアイヌ語資料について」『北大文学研究科紀要』127: 29-58.
- 山口佳紀 (1993) 「日本語の歴史 音韻」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典2』: 1634-1647. 東京：三省堂.

索引

日本語表記仮名索引

本文の日本語の表記に用いられた仮名の索引である。原則として仮名として用いられているもの以外の漢字は含めていない。また、今回は時間の余裕が無く、本文の位置を簡単に知るための番号を付す方策が取れなかった。必要な場合は「仮名引きアイヌ語索引」などで本文の該当箇所を確認されたい。

アイヌ語表記仮名索引

本文のアイヌ語表記に用いられた仮名の索引である。必要な場合は「仮名引きアイヌ語索引」などで本文の該当箇所を確認されたい。また、文字の欠損が疑われる場合にも判読可能な部分のみを挙げてある。そのままでは完全な語形かどうか疑われる事例もあるので詳細は國東（2010）の写真を参照されたい。

仮名引きアイヌ語索引

本文の変体仮名表記を現行の仮名表記にあらためた索引である。日本語は原文を参考にはしたが、実用的見地から適宜、修正、省略してあるので詳しくは本文を参照されたい。

日本語見出し語索引

日本語は原文を参考にはしたが、実用的見地から適宜、修正、省略してあるので詳しくは本文を参照されたい。また、漢字の読み、仮名遣いは仮のもので、不統一な点があることを諒とされたい。

引用アイヌ語索引

引用した現代のアイヌ語形の索引である。千歳方言の表記は現行の一般的な表記法に従った。諸資料からの引用は原則原資料のままとした。ただし、服部（1964）の喉音音素記号は省略してある。

日本語表記仮名索引

ハ	むじ路	8	—	火ヲハ	あ遍	—	あ	めヲハ	あふと						
							あ	王び	い祢						
							—	あ	多満ハ 志や者 ^ゝ 108	—	飛多いハ	のい本ろ	—	口ノ内ニ而物のと	
							—	あ	満イト言事ハ	とふへ	109	—	口ノからいと言事ハ	は類可流	
							あ	ゆ	くしら						
	めよとり貝とて色赤ク形						あ	げびのごとく							
							—	あ	婦 ^ゝ ハ 志らう	—	婦よう	少もなし	—	うなかふし ゑ可ふ	
	起多るをハ	のと	飛り可	—	大波立る		あ	らいをハ	るやべ本						
				—	寒起をハ	めらいけ	—	あ	つ起をハ	本う婦け					
							—	あ	者 ^ゝ ハ あ者 ^ゝ 也	—	是ヨリハ同断	—	物のおれる事ヲ者		
	たんど	明日を	尔志や多	—			あ	さ川てヲ	おや志ゆむ						
				—			あ	の子といふ事	おつ可ひ	—	ま川寿くとハ	な尔おまん			
	本 ^ゝ う	—	弟をハ	者 ^ゝ 、起	—		あ	年を	志や者						
	可と言事ヲハ	ゑ可	—	殿と			い	ふ事ヲハ	かもいと						
	—	衣類をハ	ちめ婦	—	お川と、		い	ふ事をハ	ほく						
				—	むごひと		い	ふ事をハ	おのゝ	—	尔くひと	いふ事をハ	志とま		
	ごひと	いふ事をハ	おのゝ	—	尔くひと		い	ふ事をハ	志とま						
	言事をハ	ゑちやう可ひ	—	み多くな			い	と言事ハ	可もやし						
	ひと	言事ヲハ	い川志や介 ^り	—	さむ		い	と言事ハ	めいらいけ連						
				—	飛多 ^ゝ る		い	事ヲハ	者らさん多 ^ゝ ひけ連	—	餅をハ	しと			
				—	う連し		い	と言事ハ	きろゝあん	—	肴ト言事ハ	せ川婦			
							い	王し							
							い	祢							
	—	あ多満ハ	志や者 ^ゝ	—	飛多		い	ハ	のい本ろ	—	口ノ内ニ而物のとける事ヲハ	るう			
				—	あ満		い	ト言事ハ	とふへ	109	—	口ノからいと言事ハ	は類可流		
							い	ハ	も寿	—	蜂ハ	志 ^ゝ や屋			
	守	無之	—	蚊ハ	きゝ里	—	い	鷹	右同断	—	水こひ鳥	なし	—	鶯ハ	本 ^ゝ ほうくち
	—	や年ハ	可つしやう	—	四方のかこ		い	のな類ヲハ	志やまのふ						
			祢ま		だい		い	ろりハ	いぬへ	—	火者しハ	あ遍 ^ゝ 者し			
				—	惣而山の木をハ	ちく尔と	い	ふ	—	山ノ谷をハ	遍 ^ゝ つ徒る				
				—	骨折ハ	い志起 ^ゝ なんこ路	—	い	そけト言うをハ	右同断	—	御太儀ト言を	うちな可連		
				—	下ニ		い	よトハ	志りか多あ遍 ^ゝ						
				—	泊ると		い	ふ事ハ	連う志り	—	明日とハ	う志やた			
				—	いけとハ	おまん	—	い	けとハ	おまん	—	何ニ而も出ルといふ事ハ	へとく		
				—	何ニ而も出ルと		い	ふ事ハ	へとく						
				—	物の尔へ類と		い	ふハ	本う婦	—	な満尔へな類事ハ	婦			
				—	るをハ	のと	飛り可	—	い	をハ	るやべ本				
							い	とへ							
							い	能可と	い	ふ事を	飛 ^ゝ るか	—	山へ上ルをハ	の本り遍めれ寿おりた	
				—	休と言事	ゑ志起 ^ゝ なん	—	い	ふ事ヲ	ほつ本う					
				—	けと言ヲ	本起の者い	—	い	ふヲようしおまん						
				—	一塀と		い	ふヲ	なんこ路	—	くゝ里付多といふことを	志なゝ			
				—	といふヲ	なんこ路	—	い	ふことを	志なゝ					
				—	一沖をハ	連婦多	—	い	といふを	ゑち連ん可ひ					
				—	一沖をハ	連婦多	—	い	ふを	ゑち連ん可ひ					
				—	一主と		い	ふハ	ゑち	—	小袖ハ	志やら遍	—	頭ノ髪	いもくふ
				—	一よぶと		い	ふ事ヲ	本川ゑ	—	追懸るといふヲ	のし			
	よぶといふ事ヲ	本川ゑ	—	追懸ると			い	ふヲ	のし						

	— 徒なぐト	い	ふ	志りごて	— 物ヲとく事ヲ	飛 ^ゞ 多
— 者な寿事ヲ	志ゆら	— 物ヲ追と	い	ふ	おけ遍 ^ゞ	
夜の事	志りくん祢	— 夜明多ること	い	ふヲ	志り遍け	
	— 一晝と	い	ふヲ	志りおのまん	— 昼前といふヲ	とののしけ
暁といふヲ	志りおのまん	— 昼前と	い	ふヲ	とののしけ	
	— 見事ト	い	ふを	いらま可し尔	— 浦山敷を	あいの者 ^ゞ
— 恋事ヲ	ゑち本可ひ	— むさ	い	事ヲ	いつ志やけ連	
二言事ヲ	お志やうら	— よふ来多と	い	ふヲ	飛る可	
	— 皆此方へよれと	い	ふヲ	おふび多の志やたお可ひ		
いふヲ	飛る可のおまん	— よ	い	といふを	飛 ^ゞ るか	
行とふヲ	飛る可のおまん	— よいと	い	ふを	飛 ^ゞ るか	
	— こ連でもと	い	ふヲ	たん遍 ^ゞ 祢	可い起飛るか	— 物ヲ法を
	— 誰子ト	い	ふヲ	祢尔本 ^ゞ ほ	— 御身可子ト	いふヲ
ト	いふヲ	祢尔本 ^ゞ ほ	— 御身可子ト	い	ふヲ	や尔本 ^ゞ うほ
	— 何方ヨリ来ルト	い	ふヲハ	祢王ありき	— とこへ行ト	いふヲ
い	ふヲハ	祢王ありき	— とこへ行ト	い	ふヲ	祢多おまん
	— 御前様ト	い	ふを	ゑちお可ひ	— うぬとハ	や尔
人の物を	あんぬんくる遍 ^ゞ	— 何者と	い	ふヲ	祢んくう	— 一切の道具の
	— 万ノ物誰可物と	い	ふを	祢んこるべ	— 物をと可め類事ヲ	年ん、
— 我と	い	ふヲてう可ひ	— 爰へ来ルといふヲ	多んこ多んゑく本ろ		
— 我といふヲてう可ひ	— 爰へ来ルと	い	ふヲ	多んこ多んゑく本ろ		
米ハ	志る	— 人を同道シ而合せんと	い	ふ	徒らハゑくぬ可るなんころ	
— 物の曲多るを	へうけ	— 少ト	い	ふを	本ん	— 物の遍多を
	— 此方へよれと	い	ふを	遍満可らい	— 舟ニ乗レトハ	ち婦 ^ゞ おふ
	— 一色ト	い	ふを	連多類べ	黒ト	いふを
— 一色ト	い	ふを	くん祢			
— 下帯を	飛やう川、け	— 手ぬく	い	を	せん可起	
	— あの子と	い	ふ事	おつ可ひ	— ま川寿くとハ	ナルおまん
	— 者やく	い	そけといふヲ	本くれ者 ^ゞ へ	— 火打ハ	火うち也
	— 者やくいそけと	い	ふヲ	本くれ者 ^ゞ へ	— 火打ハ	火うち也
	— 一本し	い	ことを	らんるし	— 金ハ	カル
	— 達者と	い	ふ	お起らしの	410	— よ王川多可といふヲ
といふ	お起らしの	410	— よ王川多可といふヲ	志んぎ		
	— 不知と	い	ふ事ハ	いらもし可れ	— 腹を	くい
て起	— 乳呑事を	とつといく連と	い	ふ		— 痛事ヲ
			い	う	しおれの事	
			—	う	連しいと言事ハ	きろ、あん
	— 生子ハ	うた	—	う	久ひハ	志ぶん
	— あ婦 ^ゞ ハ	志らう	— 婦よ	う	少もなし	— うなかふし
志らう	— 婦よう	少もなし	—	う	なかふし	ゑ可ふ年
			—	う	くひ寿	
	ハ	てのま	— 豊ハ	右同断	—	う
— 御前様ト	いふを	ゑちお可ひ	—	う	ぬとハ	や尔
			—	う	せ	
			—	う	ミ	
い	ふヲ	本くれ者 ^ゞ へ	— 火打ハ	火	う	ち也
			— 一本	う	ぐ王んとの	お起くるミ
			— 一	う	お	れの事
	— 一休と言事	ゑ志起 ^ゞ なん	—	お	そ起事ハ	かつむいり
	— 也	— 是ヨリハ同断	— 一物の	お	けといふ事ヲ	ほつ本う
	同前	— 墨ハ	者 ^ゞ 川し	— 舟の	お	もてハ
	う	— 婦よう	少もなし	— うな	か	ふし
	— や年ハ	可つしやう	— 四方の	か	こいな類ヲハ	志やまのふ
— 一魚を突や	寿ハ	をうつ婦	— 自在	か	起ヲハ	志や王□
			—	か	川ぎをハ	な者堂類
			—	—	弓を	くう
			—	—	矢を	あい

			か	多	
		但さ	が	り多類言葉	
		— 来る	可	と言事ヲハ 彖可	— 殿といふ事ヲハ かもいとの
		貴様とハさ	可	り言葉	
		に	可	す	
		— あ多、	可	と言事ヲハ ほ川婦	— 痛ト言事ヲハ い多しや (、)
飛?	— 米	ちい志やまも	— 帰る	可	と言事ハ へと川ふ
			可	ハ寿	
			可	ら寿	とひ
	鷹類	王し	可	く満た	
			可	ハ可ら寿	
言葉なり		セミ	可	ら寿	
	い多	— 蟬ハ	や起	— 川鳥ハ	
			可	つけん	
			可	ハセミ	
			可	満	
	断	— 包丁ハ	彖びらけ	—	んなべハ いよまれ
		— 火のもゆるをハ	あ遍 ^〴 あり	—	つ堂、くをハ あへれん本う
			能	可	といふ事を 飛 ^〴 るか
			能	可	— 山へ上ルをハ の本り遍めれ寿おり
			飛	可	し
	連ら	— 東風ハ	あし	— 同飛	可
ヲハ	あしき年い	可志満本つ	右是迄物の数	可	そへ候事
	— 誰子ト	いふヲ 祢尔本 ^〴 ほ	— 御身	可	子トいふヲ や尔本 ^〴 うほ
			— 万ノ物誰	可	物といふを 祢んこるべ
	可物といふを	祢んこるべ	— 物をと	可	め類事ヲ 年ん、
	達者といふ	お起らしの	— よ王川多	可	といふヲ 志んぎ
	くち	— 肩ハ	本なし	— せな	可
			— まさ	可	りを むくかり
	— まさ可りを	むくかり	—	可	満ハ よく遍 ^〴 — 歙ハ く川く王
			能	可	といふ事を 飛 ^〴 るか
			能	可	— 山へ上ルをハ の本り遍めれ寿おり
			徒る	可	ん
			可	可	も
	— 燕ハ	ちひ屋川	—	可	もめハ 可ひこ
			—	可	川く尔くひ事ヲハ 本ろのやい志と満
			—	可	— 御身ト言事ハ や
			—	可	多ひと言事ヲハ い川志や介 ^〴 り
			—	可	— さむいと言事ハ めいら
			—	可	いけ連
	— 苦キ事ハ	志う	— 酸	可	事ハ 志や可け
			—	可	— よめ取ヲハ 志う
			—	可	き
	— 伯父ハ	志りか多者ちり	— 高	可	処へ上ルを へめ寿
	ら	— 舟の可ひを	かぢ	— 婦	可
			—	可	をハ ね
			—	可	をハ な者堂類
			—	可	— 弓を くう
			—	可	— 矢を あい
			—	可	事ヲハ い志やま
			—	可	— 物の在事ヲハ 年ハお可い
			—	可	と言事ヲハ お者く
			—	可	— 右道と言事ヲハ 者るきるう
			—	可	と言事ヲハ ほろ
			—	可	— 道寿く那支と言事ヲハ ほん
	— 口をハ	者 ^〴 ろう	— 貴	可	事ハ くミち 亦 志やう可い
			— 苦	可	— 骨折と言事ハ 志んき
			— 苦	可	事ハ 志う
			— 酸	可	事ハ 志や可け
			— よめ	可	取ヲハ 志う
			— 惣而丸	可	貝ヲハ 徒ふもこり、
			— のり	可	ハ お者こ婦 ^〴
	— 戸をハ	あ者 ^〴	— 何ニ而も長	可	物ハ 志をふ 茶ハ茶也
			— 青	可	事ヲ 志う年ん
			— 赤	可	— 赤キ事ヲ ふう連
	— 青キ事ヲ	志う年ん	— 赤	可	事ヲ ふう連
			セ、な	起	の
右同断	— 茶せん	右同断	— 右	起	を い多げ
			— 海上な	起	多るをハ のと飛り可
			— 寒	起	— 大波立るあらいをハ るやべ本
				起	をハ めらいけ
				起	— あつ起をハ 本う婦け

一 寒起をハ めらいけ 一 あつ 起 をハ 本う婦け
 一 志りをハ おそろ 一 玉く 起 ハ ち 一 玉門を 本川キ
 一 な多ハ 者満な多 一 ま 起 リハ ゑりけび
 王ろ 支 と言事ヲハ うゑん 一 死寿類と言事ヲハ らい
 道廣キと言事ヲハ ほろ 一 道寿く 支 と言事ヲハ ほん
 一 な く 事ヲハ ちし可類 一 念頃人ヲハ とくい 一 我と言
 事ヲハ てう可ひ
 一 道廣キと言事ヲハ ほろ 一 道寿く 那支と言事ヲハ ほん
 一 むごひといふ事をハ おのゝ 一 尔く ひとついふ事をハ 志とま
 一 き川く 尔くひ事ヲハ 本ろのやい志と満 一 御身ト言事ハ やル
 一 き川く 尔く 事ヲハ 本ろのやい志と満 一 御身ト言事ハ やル
 多と言事をハ ゑちやう可ひ 一 み多く ないと言事ハ 可もやし
 あゆく しら
 めよとり貝とて色赤ク形あげびのことく
 志ゆんぐ 一 松をハ 婦川婦 一 く りをハ やむ
 く ハ
 一 なめく ぢり 右同断 一 鳥ハ 者すく類 一 鳶ハ やと多
 鷹類 王し 満た可
 う 一 ひ寿
 水走り 右同断 一 志や 一 しをハ 可せう婦 一 飛さくハ 婦起な
 一 志やくしをハ 可せう婦 一 飛さく ハ 婦起な
 一 屋く はん 右同断 一 御なべ ふれ可尔志ゆ むしろ 右同断
 もゆるをハ あ遍^ゝあり 一 可^つ堂、く をハ あへれん本う
 一 火ヲさし 一 べるヲ 連ん本う 一 腹痛ヲ 徒いあ類可
 一 堀といふヲ なんご路 一 く 、里付多といふことを 志なゝ
 徒なぐ^ついふ 志りごて 一 物ヲとく 事ヲ 飛^ゝ多
 一 よく 行とふヲ 飛る可のおまん 一 よいといふを 飛^ゝるか
 一 下帯を 飛やう川、け 一 手ぬく いを せん可起
 一 よろこびを おのふゝ 一 なけく を お志よら 一 念頃成近付を
 あの子といふ事 おつ可ひ 一 ま川寿く とハ なるおまん
 一 五躰寿^ゝく 二とハ あち可せしけ 一 道をは る
 一 者やく 一 いそけといふヲ 本くれ者^ゝへ 一 火打ハ 火うち也
 火ヲもミて出スを ち起志やゝ 一 本く ちハ むるん
 一 木の耳の本く ちハ かる志 一 錢をハ いちゑん
 一 鼻を ゑ川婦 一 く 志やミを ゑしな 一 耳をき志やら
 一 本んのく 本^ゝハ くち 一 肩ハ 本なし 一 せな可ハ せ川る
 一 志りをハ おそろ 一 玉く 起ハ ち 一 玉門を 本川キ
 一 徒なぐ 一 といふ 志りごて 一 物ヲとく事ヲ 飛^ゝ多
 一 本うぐ 王んとの お起くるミ 一 弁慶をハ 志やまよん類
 めよとり貝とて色赤ク 形あげびのことく
 一 生子ハ うた 一 う久 一 ひハ 志ぶん 一 蟹ハ あんはや
 いハ のい本ろ 一 口ノ内ニ而物のと け 一 る事ヲハ るう
 一 峯ハ き多ひ 一 け 一 ら者^ゝハ の起 一 入口ハ 本ゝ
 け 多
 又ハき者^ゝ下 け 共言
 一 いそ け 一 と言をハ 右同断 一 御太儀ト言を うちな可連
 一 い け 一 とハ おまん 一 何ニ而も出ルといふ事ハ へとく
 一 休と言事 ゑ志起^ゝなん 一 お け 一 といふ事ヲ ほつ本う
 一 先ゆ け 一 と言ヲ 本起の者い 一 跡ニ残連といふヲようしおまん
 一 よろこびを おのふゝ 一 な け 一 くを お志よら 一 念頃成近付を
 一 者やくいそ け 一 といふヲ 本くれ者^ゝへ 一 火打ハ 火うち也
 めよとり貝とて色赤ク形あ げ 一 びのことく
 一 飛 げ 一 ヲ 連起 一 齒ヲハ みまけ 一 舌ヲ 者るう
 サケ
 一 介 一 むり立を 志ぶやあん 一 納る事ヲ ゑ志やむ 一 網をハ
 や

一 た	こ	をハ	あ川い那	一 鮑ヲハ	あい飛	一 稲ヲハ	セ
一 む	こ	取も	右同断	一 鮎ヲハ	む	一 鯨をハ	くん遍?
	こ	とく					
めよとり貝とて色赤ク形あげびの	こ	のことし					
猿ハ一匹も無シ	一	のことし					
一匹も無シ	一	のことし					
	尾長鳥の	こ	とし				
一 者い鷹	右同断	一 水	こ	ひ鳥	なし	一 鶯ハ	本 ^レ ほうくち
一 や年ハ	可 ^レ つしやう	一 四方のか	こ	いのな類ヲハ	志やまのふ		
			一	こ	もハ	てのま	一 壘ハ
			一	こ	ハ	かふ、	一 妻ハ
			一	こ	ハ	こしまち	一 女房を
			こ	い			まち
ふヲ	なんこ路	一 く、	こ	とを	志な、		
		里付多といふ	こ	本寿事ヲ	本いつけ	一 日の暮を	徒ふらんむ
一 夜の事	志りくん祢	一 夜明多る	こ	といふヲ	志り遍け		
			一	こ	連てもといふヲ	たん遍 ^レ 祢	可い起飛るか
り来ルトいふヲハ	祢王ありき	一 と	こ	へ行トいふヲ	祢多おまん		一 物ヲ法を
			一	こ	びを	おのふ、	一 なけくを
一 惜惜るとハ	へ届け	一 物の	こ	本る、	事ヲ	連うけ	お志よら
一 陸道を	屋べ可類	一 多者	こ	をハ	たん者 ^レ こ		一 念頃成近付を
			一	こ	とを	らんるし	一 金ハ
一 飛ぶざをハ	こ可しや者 ^レ	一	こ	むらをハ	う連べ	一 足ハ	て満
			一	ご	ひといふ事をハ	おの、	一 尔くひと
			一	ご	起を	い多げ	いふ事をハ
右同断	一 茶せん	右同断	一	さ	がり多類言葉		志とま
			但	さ	可 ^レ り言葉		
			貴様とハ	さ	むいと言事ハ	めいらいけ連	
き多ひと言事ヲハ	い川志や介 ^レ り	一	さ	る			
			さ	くハ	婦起な		
一 志やくしをハ	可せう婦	一 飛	さ	しくべるヲ	連ん本う	一 腹病ヲ	徒いあ類可
			一	さ	川てヲ	おや志ゆむ	
たんど	明日を	尔志や多	一	さ	い事ヲ	いつ志やけ連	
一 恋事ヲ	えち本可ひ	一	一	ま	可りを	むくかり	一 可満ハ
			一	飛	をハ	こ可しや者 ^レ	一 こむらをハ
			一	サ	ケ		う連べ
			一	シ	ヲハ	あま母	一 飛へヲハ
一 冬ハ	ま多	一	う	し	おれの事	飛や者 ^レ	
			一	う	連	し	いと
			い	王	し	しろ、	あん
			く	し	ら	一 肴ト	言事ハ
			く	し	ら	セ川	婦
も無シ	一 本う	るんと	こ	のこ	とし		
		獣物猫	こ	のこ	とし		
			尾長鳥の	こ	とし		
あ婦 ^レ ハ	志らう	一 婦よう	少もな	し	一	うな	かふし
			鷹類	王	し	く	満た可
一 者い鷹	右同断	一 水	こ	ひ鳥	なし	一	鶯ハ
			一	者	し	ハ	者 ^レ す
			一	志	やく	し	をハ
水走り	右同断	一	志	やく	し	をハ	可せう婦
断	一 御なべ	ふれ可	尔志ゆ	む	し	ろ	右同断
一 いろりハ	いぬへ	一	火者	し	ハ	あ遍 ^レ 者し	
			一	火	ヲ	さ	し
			飛	可	し	く	べるヲ
一切物の形ハ	志りき	一	浅黄の	ちら	し	ハ	に
			一	本	し	い	ことを
ぶら	一 舟の	可ひを	かぢ	一	婦	し	きをハ
				き	じ		
本らの木ハ	ふ志尔	一	猿ハ	一	匹も	無	シ
			一	雉子	ハ	無	シ

	一 米ハ 志ゐ	一 人を同道	シ	而合せんといふ 徒らハゑくぬ可るなんころ
			志	ゝや
		水走り 右同断	一	志 やくしをハ 可せう婦 一 飛さくハ 婦起な
	一 汗の出を 本婦らい	一	志	んをハ てろき 一 物ノ多有事を 遍ろ
	一 鼻を 糸川婦	一	志	やミを 糸しな 一 耳をき志やら
			志	りをハ おそろ 一 玉く起ハ ち 一 玉門を 本川キ
	一 大蛇ハ あい柵川婦	一	見	ハ とに
	てのま	一	疊ハ 右同断	一
		一	火ヲもミて出	ス
	王ろ支と言事ヲハ	うゑん	一	死 寿 類と言事ヲハ らい
	一 道廣キと言事ヲハ	ほろ	一	道 寿 く那支と言事ヲハ ほん
			可ハ	寿
			可ら	寿 とひ
			うくひ	寿
なり	せミ		可は可ら	寿
			一 魚を突や	寿
			一 者な	寿
			一 物ヲ二本	寿
	一 あの子といふ事	おつ可ひ	一	ま川 寿 くとハ ナルおまん
			一	五躰 寿 くとハ あち可せしけ 一 道をハ る
	是ノ下ノ国の言葉なり		せ	ミ 可ハ可ら寿
			可ハ	せ
	一 茶碗ハ	右同断	一	茶 せ せん 右同断 一 ご起を い多げ
			う	せ
	ハ ぐち	一	肩ハ 本なし	一
	一 米ハ 志ゐ	一	人を同道シ而合	セ
			一	そ 那多と言事をハ 糸ちやう可ひ 一 み多くないと言事ハ 可もやし
			一	としぬけと生物 一 川を せ 一 蛇ハ とく尔
			一	お せ 起事ハ かつむいり 一 者や起事ハ 徒いなし
			一	い せ けト言うをハ 右同断 一 御太儀ト言を うちな可連
ハ	あしき年い可志満本つ	右是迄物の数可	そ	へ候事
			一	者やくい せ けといふヲ 本くれ者へ 一 火打ハ 火うち也
			一	こをハ あ川い那 一 鮑ヲハ あい飛 一 稲ヲハ せ
			た	い
	鷹類 王し		く	満 だ 可
			一	き 多 ひと言事ヲハ い川志や介り 一 さむいと言事ハ めいらい
				け連
	一 堀といふヲ	なんこ路	一	く、里付 多 といふことを 志な、
				但さがり 多 類言葉
			一	そ那 多 と言事をハ 糸ちやう可ひ 一 み多くないと言事ハ 可も
				やし
	那多と言事をハ	糸ちやう可ひ	一	み 多 くないと言事ハ 可もやし
			一	飛 多 るい事ヲハ 者らさん多ひけ連 一 餅をハ しと
			一	あ 多 可と言事ヲハ ほ川婦 一 痛ト言事ヲハ い多しや(ゝ)
			一	あ 多 満ハ 志や者 108 一 飛多いハ のい本ろ 一 口ノ内ニ而物
				のとける
	一 あ多満ハ	志や者	一	飛 多 いハ のい本ろ 一 口ノ内ニ而物のとける事ヲハ るう
			け	多
			一	海上な起 多 るをハ のと飛り可 一 大波立るあらいをハ るやべ本
	ら	一	東風ハ あし	一
			同飛可	多
	一 夜の事	志りくん祢	一	夜明 多 ることいふヲ 志り遍け
	一 既ニ言事ヲ	お志やうら	一	よふ来 多 といふヲ 飛る可
			一	物の曲 多 るを へうけ 一 少といふを 本ん 一 物の遍多を やひや
				る
	一 少といふを	本ん	一	物の遍 多 を やひやる

一 陸道を 屋べ可類 一 多 者こをハ たん者^こ
 一 達者といふ お起らしの 一よ王川 多 可といふヲ 志んぎ
 か 多
 一 庄屋をハ おとな 一な 多 ハ 者満な多 一ま起りハ ゑりけび
 ハ おとな 一な多ハ 者満な 多 一ま起りハ ゑりけび
 火のもゆるをハ あ遍^{あり} 一可つ 堂 くとをハ あへれん本う
 ち ヤハン
 一切物の形ハ 志りき 一浅黄の ち らしハ に志やう
 ふヲ 本くれ者^へ 一火打ハ 火う ち 也
 ヲもミテ出スを ち起志や、 一本く ち ハ むルん
 一木の耳の本く ち ハ かる志 一銭をハ いちゑん
 う本う 一乳をハ ゑ可し 一飛 ち ^を 志
 一なめく ぢ り 右同断 一鳥ハ 者すく類 一鳶ハ やと多
 一火のもゆるをハ あ遍^{あり} 一可 っ 堂、くをハ あへれん本う
 つ 者^め
 一寒起をハ めらいけ 一あ っ 起をハ 本う婦け
 つ な
 三ツニハ 連婦 四 つ ニハ い年婦 五つニハ あし起年ふ 六つニハ い者ぬ遍[〃]
 三ツニハ 連婦 四つニハ い年婦 五 つ ニハ あし起年ふ 六つニハ い者ぬ遍[〃]
 ニハ い年婦 五つニハ あし起年ふ 六 つ ニハ い者ぬ遍[〃]
 七 つ ニハ あるあん遍[〃] 八つニハ 徒遍[〃]さん遍[〃] 九つニハ 志年
 遍[〃]さん遍[〃]
 七つニハ あるあん遍[〃] 八 つ ニハ 徒遍[〃]さん遍[〃] 九つニハ 志年遍[〃]さん遍[〃]
 るあん遍[〃] 八つニハ 徒遍[〃]さん遍[〃] 九 つ ニハ 志年遍[〃]さん遍[〃]
 五十八前ノ五 つ の言葉同前 百ハ あしき年本つ 千ハ 王ん遍[〃]志年まな本つ
 七 つ ニハ あるあん遍[〃] 八つニハ 徒遍[〃]さん遍[〃] 九つニハ 志年
 遍[〃]さん遍[〃]
 三 ツ ニハ 連婦 四つニハ い年婦 五つニハ あし起年ふ 六つ
 ニハ い者ぬ遍[〃]
 三 ツ ニハ 連婦 四つニハ い年婦 五つニハ あし起年ふ 六つ
 ニハ い者ぬ遍[〃]
 一 衣類をハ ちめ婦 一 お 川 と、いふ事をハ ほく
 一 き 川 くらくひ事ヲハ 本ろのやい志と満 一御身ト言事ハ やル
 んど 明日を 尔志や多 一あさ 川 てヲ おや志ゆむ
 一か 川 ぎをハ な者堂類 一弓を くう 一矢を あい
 一あの子といふ事 おつ可ひ 一ま 川 寿くとハ ナルおまん
 一達者といふ お起らしの 一よ王 川 多可といふヲ 志んぎ
 一 徒 ながと^いふ 志りごて 一物ヲとく事ヲ 飛^多
 徒 る 可^ん 可^も
 めよとり貝と
 一海草ハ何ニ て 色赤ク形あげびのこことく
 一海草ハ何ニても て も てむ尔 一濱ハ お多 一砂をハ右
 一こ連 て む尔 一濱ハ お多 一砂をハ右
 一墨ハ 者^川し 一舟のおも て ハ ちつふな
 一火ヲもミ て 出スを ち起志や、 一本くちハ むルん
 108 一飛多いハ のい本ろ 一口ノ内ニ 而 物のとける事ヲハ るう
 一惣 而 丸キ貝ヲハ 徒ふもこり、 一のりハ お者こ婦[〃]
 一戸をハ あ者[〃] 一何ニ 而 も長キ物ハ 志をふ 茶ハ茶也
 一惣 而 山の木をハ ちくるといふ 一山ノ谷をハ 遍つ徒る
 一いけとハ おまん 一何ニ 而 も出ルといふ事ハ へとく
 飛類可 一天をハ 志り 一何ニ 而 も
 一草ニ 而 も何ニ而も 菟候事を か満かり 一物を突を ゆだ
 一草ニ而も何ニ 而 も菟候事を か満かり 一物を突を ゆだ
 一米ハ 志ゑ 一人を同道シ 而 合せんといふ 徒らハゑくぬ可るなんころ
 但雨降る杯ハあふど免し
 類 一 念頃人ヲハ とく^い 一我 と 言事ヲハ てう可ひ
 王ろ支 と 言事ヲハ うゑん 一 死寿類と言事ヲハ らい

王ろ支と言事ヲハ	うゑん	— 死寿類	と	言事ヲハ	らい		
けり	— 川をハ	遍川	— 上川	と	言事ヲハ	遍 ^レ ないた	
			— 下川	と	言事ヲハ	者 ^レ 那 ^レ い多	
			— 同浅キ	と	言事ヲハ	お者く	
同浅キと言事ヲハ	お者く	— 右道	と	言事ヲハ	者るきるう		
		— 中道	と	言事ヲハ	志ん志起るう		
道と言事ヲハ	志ん志起るう	— 左道	と	言事ヲハ	志もんるう		
		— 道廣キ	と	言事ヲハ	ほろ		
廣キと言事ヲハ	ほろ	— 道寿く那支	と	言事ヲハ	ほん		
		— 来る可	と	言事ヲハ	ゑ可		
る可と言事ヲハ	ゑ可	— 殿	と	いふ事ヲハ	かもいとの		
神ヲハ	志いのの本り可もひ	— 侍	と	言事ヲハ	尔し者		
		— 内ノ者	と	言事ヲハ	うしおい		
ノ者と言事ヲハ	うしおい	— その物	と	言事ヲハ	婦		
あ遍 ^レ	— 吞事をハ	くう	— 薪	と	言事ハ	ちく尔	
			— 火薪	と	云事をハ	あべあ連	
			— お川	と	いふ事をハ	ほく	
			— むごひ	と	いふ事をハ	おのゝ	
むごひといふ事をハ	おのゝ	— 尔くひ	と	いふ事をハ	志とま		
		— その那多	と	言事をハ	ゑちやう可ひ		
					し		
事をハ	ゑちやう可ひ	— み多くない	と	言事ハ	可もやし		
		貴様	と	ハさ可 ^レ り言葉			
		— き多ひ	と	言事ヲハ	い川志や介 ^レ り		
と言事ヲハ	い川志や介 ^レ り	— さむい	と	言事ハ	めいらいけ連		
		— あ多ゝ可	と	言事ヲハ	ほ川婦		
		— う連しい	と	言事ハ	きろゝあん		
?	— 米	ちい志やまも	— 帰る可	と	言事ハ	へと川ふ	
ハ	くミち	亦	志やう可い	— 骨折	と	言事ハ	志んき
多いハ	のい本ろ	— 口ノ内ニ而物の	と	ける事ヲハ	るう		
満いト言事ハ	とふへ	109	— 口ノからい	と	言事ハ	は類可流	
			めよ	と	り貝とて色赤ク形あげびのこつく		
			めよとり貝	と	て色赤ク形あげびのこつく		
			めよとり貝とて色赤ク形あげびのこ	と	く		
匹も無シ	— 本うゑんと	獣物猫このこ	と	し			
		— としぬけ	と	生物	— 川をそハ		
		尾長鳥のこ	と	し	え志やまん		
		可ら寿	と	ひ	— 蛇ハ		
		とい多	と	も言	とく尔		
		— 惣而山の木をハ	と	いふ	— 山ノ谷をハ		
ノ尾をハ	くう	— 山ノ平ハ	と	り	— 山ノ頭上をハ		
		う類こ	と	く	ゆぶりきたい		
		ま多へて	と	ハ	志りか多あ遍 ^レ		
折ハ	い志起 ^レ	なんこ路	— 下ニいよ	と	いふ事ハ		
			— 泊る	と	ハ		
— 泊るといふ事ハ	連う志り	— 明日	と	ハ	う志やた		
		— いけ	と	ハ	おまん		
— いけとハ	おまん	— 何ニ而も出ル	と	いふ事ハ	へとく		
		— 物の尔へ類	と	いふハ	本う婦		
		— 舟ノ	と	満ハ	やれきな		
		能可	と	いふ事を	飛 ^レ るか		
		— 休	と	言事	ゑ志起 ^レ		
— 休と言事	ゑ志起 ^レ	なん	— おけ	と	いふ事ヲ		
			— 先ゆけ	と	言ヲ		
ゆけと言ヲ	本起の者い	— 跡ニ残連	と	いふヲ	ようしおまん		
		— 堀	と	いふヲ	なんこ路		
堀といふヲ	なんこ路	— くゝ里付多	と	いふことを	志なゝ		

ヲ なんこ路 一く、里付多といふこ と を 志なゝ
 婦多ん嶋の本^り 一石をハ ま多嶋 と 言
 一 沖をハ 連婦多 一 是悲ない と いふを ゑち連ん可ひ
 一 主 と いふハ ゑち 一 小袖ハ 志やら遍 一 頭ノ髪 いもくふ
 一 よぶ と いふ事ヲ 本川ゑ 一 追懸るといふヲ のし
 一 よぶといふ事ヲ 本川ゑ 一 追懸るといふヲ のし
 一 徒なぐトいふ 志りごて 一 物ヲ と いふヲ のし
 一 者な寿事ヲ 志ゆら 一 物ヲ追 と く事ヲ 飛^多
 一夜の事 志りくん祢 一 夜明多るこ と いふ おけ遍^多
 一 暁 と いふヲ 志り遍け
 一 暁といふヲ 志りおのまん 一 昼前といふヲ とののしけ と いふヲ 志りおのまん 一 昼前といふヲ とののしけ
 既ニ言事ヲ お志やうら 一 よふ来多 と いふヲ とののしけ
 一 皆此方へよれ と いふヲ 飛る可
 一 よく行 と いふヲ おふび多の志やたお可ひ
 一 こ連ても と いふヲ 飛る可のおまん 一 よいといふを 飛^るか
 一 行とふヲ 飛る可のおまん 一 よい と いふを 飛^るか
 一 こ連ても と いふヲ たん遍^祢 祢 可い起飛るか 一 物ヲ法を
 ヨリ来ルトいふヲハ 祢王ありき 一 と こへ行トいふヲ 祢多おまん
 御前様トいふを ゑちお可ひ 一 うぬ と ハ やル 一 一切の道具の
 人の物を あんぬんくる遍^多 一 何者 と いふヲ 祢んくう
 一 万ノ物誰可物 と いふを 祢んこるべ 一 物をと可め類事ヲ 年んゝ
 誰可物といふを 祢んこるべ 一 物を と 可め類事ヲ 年んゝ
 一 我 と いふヲてう可ひ 一 爰へ来ルといふヲ 多んこ多んゑく本ろ
 一 我といふヲてう可ひ 一 爰へ来ル と いふヲ 多んこ多んゑく本ろ
 一 舟の と いふヲ 多んこ多んゑく本ろ
 一 米ハ 志る 一 人を同道シ而合せん と いふ 徒らハゑくぬ可るなんころ
 一 此方へよれ と いふを 遍満可らい 一 舟ニ乗レトハ ち婦^おふ
 一 あの子 と いふ事 おつ可ひ 一 ま川寿くとハ ナルおまん
 の子といふ事 おつ可ひ 一 ま川寿く と ハ ナルおまん
 一 惜惜る と ハ へ婦け 一 物のこ本ろゝ事ヲ 連うけ
 一 五躰寿^くニ と ハ あち可せしけ 一 道をハ る
 一 者やくいそげ と いふヲ 本くれ者^へ 一 火打ハ 火うち也
 一 本しいこ と を らんるし 一 金ハ カル 一 銀ハ 連多るか
 一 達者 と いふ お起らしの 410 一 よ王川多可といふヲ 志んぎ
 者といふ お起らしの 410 一 よ王川多可 と いふヲ 志んぎ
 一 不知 と いふ事ハ いらもし可れ 一 腹を くい 一 痛事ヲ ある
 一 本うぐ王ん と の お起くるミ 一 弁慶をハ 志やまよん類
 又にし者 と も言
 くひ事ヲハ 本ろのやい志と満 一 御身 ト 言事ハ やル
 一 父殺 ト 言事をハ おな多ら 一 母殺ト言事ヲハ おなバ者
 一 父殺ト言事をハ おな多ら 一 母殺 ト 言事ヲハ おなバ者
 一 あ多ゝ可と言事ヲハ ほ川婦 一 痛 ト 言事ヲハ い多しや (ゝ)
 う連しいと言事ハ きろゝあん 一 肴 ト 言事ハ せ川婦
 一 海ノ神 ト 言事ヲハ あついで可い 一 酒ハ酒なり 一 熊ヲハ 本くゆ
 一 水神ヲハ 遍^川可もひ 一 久敷 ト 言事ハ な可らてい
 一 難儀をハ ころ 一 太儀 ト 言事ハ 右同断 一 煩ヲハ やいの婦
 一 あ満い ト 言事ハ とふへ 109 一 口ノからいと言事ハ は類可流
 一 いそげ ト 言うをハ 右同断 一 御太儀ト言を うちな可連
 一 徒なぐ ト 言を うちな可連
 一 見事 ト いふ 志りごて 一 物ヲとく事ヲ 飛^多
 一 誰子 ト いふを いらま可しル 一 浦山敷を あいの者^多
 子トいふヲ 祢尔本^ほ 一 御身可子 ト いふヲ 祢尔本^ほ 一 御身可子トいふヲ や尔本^うほ
 一 何方ヨリ来ル ト いふヲ や尔本^うほ
 トいふヲハ 祢王ありき 一 とこへ行トいふヲ 祢多おまん
 一 御前様 ト いふヲ 祢多おまん
 一 御前様 ト いふを ゑちお可ひ 一 うぬとハ やル 一 一切の道具の

一物の曲多るを へうけ 一少 ト いふを 本ん 一物の遍多を やひやる
 れといふを 遍満可らい 一舟ニ乗レ ト ハ ち婦 おふ
 一色 ト いふを 連多類ベ 黒トいふを くん祢
 一色トいふを 連多類ベ 黒 ト いふを くん祢
 一 な 一 事ヲハ ちし可類 一 念頃人ヲハ とくい 一 我と
 言事ヲハ てう
 と言事をハ ぬちやう可ひ 一 み多く な いと言事ハ 可もやし
 神ト言事ヲハ あつ可もい 一 酒ハ酒 な り 一 熊ヲハ 本くゆく
 一 榎ノ木ハ まさ 一 婦 な の木 右同断 一 ならノ木 尔志よ
 まさ 一 婦 なの木 右同断 一 な ならノ木 尔志よ
 セ、 な 起の
 一 あ婦 ハ 志らう 一 婦よう 少も な し 一 うなかふし ぬ可ふ年
 一 一者い鷹 右同断 一 水こひ鳥 な めくぢり 右同断 一 鳥ハ 者すく類 一 鷲ハ やと多
 是ノ下ノ国の言葉 な し 一 鷲ハ 本ほうくち
 一 者しハ 者す 一 な り セミ 可ハ可ら寿
 年ハ 可つしやう 一 四方のかこいの な べ 志う 一 釜 右同断
 一 ま な 類ヲハ 志やまのふ
 一 包丁ハ ぬびらけ 一 可ん な 板 右同断 一 包丁ハ ぬびらけ 一 可んなべハ いよ
 まれ
 一 屋くはん 右同断 一 御 な べハ いよまれ
 一 物の尔へ類といふハ 本う婦 一 な べ ふれ可尔志ゆ むしろ 右同断
 尔へ類といふハ 本う婦 一 な 満尔へな類事ハ 婦
 一 海上 な 類事ハ 婦
 一 沖をハ 連婦多 一 是悲 な 起多るをハ のと飛び可 一 大波立るあらいをハ るやべ本
 一 徒 な いといふを ぬち連ん可ひ
 一 者 な ぐといふ 志りごて 一 物ヲとく事ヲ 飛多
 つ な 寿事ヲ 志ゆら 一 物ヲ追といふ おけ遍
 亦いら志れ な 共
 一 よろこびを おのふ、 一 な けくを お志よら 一 念頃成近付を
 ハ ぐち 一 肩ハ 本なし 一 せ な 可ハ せ川る
 道廣キと言事ヲハ ほろ 一 道寿く 那 支と言事ヲハ ほん
 一 そ 那 多と言事をハ ぬちやう可ひ 一 み多くないと言事ハ 可
 もやし
 一 ま 那 こをハ し起 一 座當をハ 志起なへ 一 腹ヲハ 志川く
 満 一 畑をハ とひ 一 田ハ 田 那 り少も無之也
 に 可 一 す
 一 汗の出を 本婦らい 一 に 志んをハ てろき 一 物ノ多有事を 遍ろ
 108 一 飛多いハ のい本ろ 一 口ノ内 ニ 而物のとける事ヲハ るう
 一 海草ハ何 ニ テも てむ尔 一 濱ハ お多 一 砂をハ右
 一 戸をハ あ者 一 何 ニ 而も長キ物ハ 志をふ 茶ハ茶也
 一 骨折ハ い志起なんご路 一 下 ニ いよとハ 志りか多あ遍
 一 いけとハ おまん 一 何 ニ 而も出ルといふ事ハ へとく
 一 飛類可 一 天をハ 志り 一 何 ニ 而も
 一 先ゆけと言ヲ 本起の者い 一 跡 ニ 残連といふヲようしおまん
 一 沖 ニ 在嶋を 連婦多ん嶋の本り 一 石をハ 多嶋と言
 一 既 ニ 言事ヲ お志やうら 一 よふ来多といふヲ 飛る可
 三ツ ニ ハ 連婦 四つニハ い年婦 五つニハ あし起年ふ 六つニ
 ハ い者ぬ遍
 三ツニハ 連婦 四つ ニ ハ い年婦 五つニハ あし起年ふ 六つニハ い者ぬ遍
 三ツニハ 連婦 四つニハ い年婦 五つ ニ ハ あし起年ふ 六つニハ い者ぬ遍
 ニハ い年婦 五つニハ あし起年ふ 六つ ニ ハ い者ぬ遍
 七つ ニ ハ あるあん遍 八つニハ 徒遍さん遍 九つニハ 志年
 遍さん遍
 七つニハ あるあん遍 八つ ニ ハ 徒遍さん遍 九つニハ 志年遍さん遍
 あん遍 八つニハ 徒遍さん遍 九つ ニ ハ 志年遍さん遍

一 天をハ	里起多ん	一 雨	の	ふるをハ	あし	一 硯をハ	
同前	一 墨ハ	者`川し	一 舟	の	おもてハ	ちつふな	
			一 舟	の	ともをハ	ちつ婦お志よろ	一 舟ノ中を
			一 舟	の	帆を	可や	一 帆柱
			一 物	の	曲多るを	へうけ	一 少トいふを
						本ん	一 物の遍多を
うけ	一 少トいふを	本ん	一 物	の	遍多を	やひやる	
			一 一切物	の	形ハ	志りき	一 浅黄の
一 一切物の形ハ	志りき	一 浅黄	の	の	ちらしハ	に志やう	
			一 一	の	子といふ事	おつ可ひ	一 ま川寿くとハ
一 惜惜るとハ	へ婦け	一 物	の	こ本る、事ヲ	連うけ		な尔おまん
			一 木	の	耳の本くちハ	かる志	一 銭をハ
			一 木の耳	の	本くちハ	かる志	一 銭をハ
			一 汗	の	出を	本婦らい	一 に志んをハ
						てろき	一 物ノ多有事を
							遍ろ
一 笠ハ	かぶら	一 舟	の	可ひを	かぢ	一 婦しきをハ	ね
		一本ん	の	く本`ハ	くち	一 肩ハ	本なし
		一 内	ノ	者と言事ヲハ	うしおい	一 その物と言事ヲハ	婦
一 鯉の魚ヲハ	志べ	一 鯛	ノ	魚をハ	いじ屋耳		
一 坊主をハ	遍そり	一 山	ノ	神をハ	の本`類可もい	一 山ヲハ	
		一 海	ノ	神ト言事ヲハ	あつい可もい	一 酒ハ酒なり	一 熊ヲハ
							本
者` 108	一 飛多いハ	のい本ろ	一口	ノ	内ニ而物のとける事ヲハ	るう	
	一 あ満イト言事ハ	とふへ	一口	ノ	からいと言事ハ	は類可流	
			一 桑	ノ	木をハ	く連婦尔	一 梨の木ハ
						右同断	一 柿ハ右同断
						一本も	
						ノ	木ハ
						まさ	一 婦`なの木
						右同断	一 ならノ木
一 婦`なの木	右同断	一 なら	ノ	木	尔志よ		尔志よ
		是	ノ	下ノ国	の言葉なり	せミ	可ハ可ら寿
		是ノ下	ノ	国	の言葉なり	せミ	可ハ可ら寿
惣而山の木をハ	ちく尔といふ	一 山	ノ	谷をハ	遍つ徒る		
		一 山	ノ	尾をハ	くう	一 山ノ平ハ	う類ことり
							一 山ノ頭上を
							ゆ
							ぶり
一 山ノ尾をハ	くう	一 山	ノ	平ハ	う類ことり	一 山ノ頭上を	ゆぶりきたい
一 山ノ平ハ	う類ことり	一 山	ノ	頭上を	ゆぶりきたい		
		一 山	ノ	後ハ	おしまけ	一 山ノ下をハ	ゆぶりやうろうほう
一 山ノ後ハ	おしまけ	一 山	ノ	下をハ	ゆぶりやうろうほう		
		一 山	ノ	脇ハ	志やまけ	一 山ノ平地ハ	てなし
						一 山ノ奥ハ	かつ
							ち
一 山ノ脇ハ	志やまけ	一 山	ノ	平地ハ	てなし	一 山ノ奥ハ	かつち
け	一 山ノ平地ハ	てなし	一 山	ノ	奥ハ	かつち	
			一 舟	ノ	と満ハ	やれきな	観音立給ふ処をハ
ゑち	一 小袖ハ	志やら遍	一 頭	ノ	髪	いもくふ	
			五十八前	ノ	五つの言葉同前	百ハ	あしき年本つ
						千ハ	王ん遍`志年まな
							本つ
							物の内ニ在をハ
底をハ	ら婦`多	一 一切	ノ	物誰可物といふを	衿んこるべ	一 物をと可め類事ヲ	年
		一万	ノ	ん、			
舟のともをハ	ちつ婦お志よろ	一 舟	ノ	中を	ちつふのしけた		
		一 矢	ノ	根を	あいるむ	一 鉄砲ハ	鉄砲也
						一 合掌ハ	お可む
い	一 に志んをハ	てろき	一 物	ノ	多有事を	遍ろ	
			一 鶴	ハ	遍多ちり	一 雁ハ	くいとう
						一 鴨ハ	こべ志
一 鶴ハ	遍多ちり	一 雁	ハ	の	くいとう	一 鴨ハ	こべ志
ハ	遍多ちり	一 雁	ハ	の	くいとう	一 鴨ハ	こべ志
						一 燕	ハ
						ちひ屋川	一 可もめハ
						可ひこ	
一 燕ハ	ちひ屋川	一 可もめ	ハ	の	可ひこ		
の言葉なり	せミ	可	ハ	の	可ら寿		

一 春ハ 者い可類 一 夏ハ さく 一 秋ハ徒可くふ
 一 春ハ 者い可類 一 夏ハ さく 一 秋ハ徒可くふ
 春ハ 者い可類 一 夏ハ さく 一 秋ハ徒可くふ
 一 冬ハ ま多 一 めしヲハ あま母 一 飛へヲハ 飛や者
 一 冬ハ ま多 一 めしヲハ あま母 一 飛へヲハ 飛や者
 ま多 一 めしヲハ あま母 一 飛へヲハ 飛や者
 一 粟ヲハ むじ路 一 火ヲハ あ遍 一 あめヲハ あぶと
 一 粟ヲハ むじ路 一 火ヲハ あ遍 一 あめヲハ あぶと
 じ路 88 一 火ヲハ あ遍 一 あめヲハ あぶと
 ヲ
 但雨降る杯ハ あふど免しと言
 一 雪ヲハ お者せ 一 風ヲハ 連いら 一 日月ヲハ 徒、婦
 一 雪ヲハ お者せ 一 風ヲハ 連いら 一 日月ヲハ 徒、婦
 せ 一 風ヲハ 連いら 一 日月ヲハ 徒、婦
 一 星ヲハ のちう 一 雲ヲハ 尔しくろ 一 人ヲハ 志やも
 一 星ヲハ のちう 一 雲ヲハ 尔しくろ 一 人ヲハ 志やも
 う 一 雲ヲハ 尔しくろ 一 人ヲハ 志やも
 一 なく事ヲハ ちし可類 一 念頃人ヲハ とくい 一 我と言事ヲハ
 一 なく事ヲハ ちし可類 一 念頃人ヲハ とくい 一 我と言事ヲハ
 念頃人ヲハ とくい 一 我と言事ヲハ てう可ひ
 念頃人ヲハ とくい 一 我と言事ヲハ てう可ひ
 王ろ支と言事ヲハ うゑん 一 死寿類と言事ヲハ らい
 言事ヲハ うゑん 一 死寿類と言事ヲハ らい
 一 物之無キ事ヲハ い志やま 一 物の在事ヲハ あ年ハお可い
 無キ事ヲハ い志やま 一 物の在事ヲハ あ年ハお可い
 一 浪ヲハ の多 一 海ヲハ あ川い 一 舟をハ ちつ婦
 一 浪ヲハ の多 一 海ヲハ あ川い 一 舟をハ ちつ婦
 の多 一 海ヲハ あ川い 一 舟をハ ちつ婦
 一 足袋ヲハ けり 一 川をハ 遍川 一 上川と言事ヲハ 遍ないた
 一 足袋ヲハ けり 一 川をハ 遍川 一 上川と言事ヲハ 遍ないた
 一 川をハ 遍川 一 下川と言事ヲハ 者那い多 一 川の深事ヲハ お本
 言事ヲハ 者那い多 一 川の深事ヲハ お本
 一 同浅キと言事ヲハ お者く 一 右道と言事ヲハ 者るきるう
 と言事ヲハ お者く 一 右道と言事ヲハ 者るきるう
 一 中道と言事ヲハ 志ん志起るう 一 左道と言事ヲハ 志もんるう
 ヲハ 志ん志起るう 一 左道と言事ヲハ 志もんるう
 一 道廣キと言事ヲハ ほろ 一 道寿く那支と言事ヲハ ほん
 事ヲハ ほろ 一 道寿く那支と言事ヲハ ほん
 一 来る可と言事ヲハ ゑ可 一 殿といふ事ヲハ かもいと
 ヲハ ゑ可 一 殿といふ事ヲハ かもいと
 一 將軍様ヲハ ほんの可もひ 一 禁中様ヲハ ほんの可もひ
 軍様ヲハ ほんの可もひ 一 禁中様ヲハ ほんの可もひ
 一 神ヲハ 志いのの本り可もひ 一 侍と言事ヲハ 尔し者
 志いのの本り可もひ 一 侍と言事ヲハ 尔し者
 一 内ノ者と言事ヲハ うしおい 一 その物と言事ヲハ 婦
 事ヲハ うしおい 一 その物と言事ヲハ 婦
 一 喰事をハ あ遍 一 吞事をハ くう 一 薪と言事ハ ちく尔
 一 喰事をハ あ遍 一 吞事をハ くう 一 薪と言事ハ ちく尔
 一 吞事をハ くう 一 薪と言事ハ ちく尔
 一 火薪と云事をハ あべあ連 一 水をハ 王川可
 火薪と云事をハ あべあ連 一 水をハ 王川可
 一 湯をハ せ、可 一 汁をハ おは 一 塩をハ 尔し□
 一 湯をハ せ、可 一 汁をハ おは 一 塩をハ 尔し□
 せ、可 一 汁をハ おは 一 塩をハ 尔し□
 一 塩をハ 志川本 一 粥をハ うせ 一 行事ハ おま□

— 塩をハ	志川本	— 粥を	ハ	うせ	— 行事ハ	おま□			
志川本	— 粥をハ	うせ	— 行事	ハ	おま□				
			— 衣類を	ハ	ちめ婦	— お川と、いふ事をハ	ほく		
類をハ	ちめ婦	— お川と、いふ事を	ハ	ほく					
		— 妻を	ハ	まちい	— 女をハ	本川祢	— 子共ヲハ	本 ^ほ	
— 妻をハ	まちい	— 女を	ハ	本川祢	— 子共ヲハ	本 ^ほ			
い	— 女をハ	本川祢	— 子共ヲ	ハ	本 ^ほ				
		— 男の子を	ハ	本く年本 ^ほ	— 女の子をハ	ま川年本 ^ほ			
の子をハ	本く年本 ^ほ	— 女の子を	ハ	ま川年本 ^ほ					
		— むごひといふ事を	ハ	おの、	— 尔くひといふ事をハ	志とま			
ふ事をハ	おの、	— 尔くひといふ事を	ハ	志とま					
		— き川く尔くひ事ヲ	ハ	本ろのやい志と満	— 御身ト言事ハ	やル			
ヲハ	本ろのやい志と満	— 御身ト言事	ハ	やル					
		— そ那多と言事を	ハ	ゑちやう可ひ	— み多くないと言事ハ	可もやし			
ゑちやう可ひ	— み多くないと言事	ハ	可もやし						
		— 貴様と	ハ	さ可 ^り 言葉					
		— 父殺ト言事を	ハ	おな多ら	— 母殺ト言事ヲハ	おなバ者			
ト言事をハ	おな多ら	— 母殺ト言事ヲ	ハ	おなバ者					
おな多ら	— 母殺ト言事ヲハ	おなバ	ハ						
		— き多ひと言事ヲ	ハ	い川志や介 ^り	— さむいと言事ハ	めいらいけ連			
ヲハ	い川志や介 ^り	— さむいと言事	ハ	めいらいけ連					
		— 飛多 ^る い事ヲ	ハ	者らさん多 ^ひ け連	— 餅をハ	しと			
事ヲハ	者らさん多 ^ひ け連	— 餅を	ハ	しと					
		— あ多、可と言事ヲ	ハ	ほ川婦	— 痛ト言事ヲハ	い多しや(ゝ)			
、可と言事ヲハ	ほ川婦	— 痛ト言事ヲ	ハ	い多しや(ゝ)					
		— う連しいと言事	ハ	きろ、あん	— 肴ト言事ハ	せ川婦			
しいと言事ハ	きろ、あん	— 肴ト言事	ハ	せ川婦					
		— ま那こを	ハ	し起	— 座當をハ	志起なへ	— 腹ヲハ	志川く	
		— ま那こをハ	ハ	し起	— 座當を	ハ	志起なへ	— 腹ヲハ	志川く
し起	— 座當をハ	志起なへ	— 腹ヲ	ハ	志川く				
		— 鮭の魚ヲ	ハ	志べ	— 鱒ノ魚をハ	いじ屋耳			
		— 鮭の魚ヲハ	ハ	志べ	— 鱒ノ魚を	ハ	いじ屋耳		
		— たこを	ハ	あ川い那	— 鮑ヲハ	あい飛 ^ゝ	— 稲ヲハ	せ	
		— たこをハ	ハ	あ川い那	— 鮑ヲハ	あい飛 ^ゝ	— 稲ヲハ	せ	
い那	— 鮑ヲハ	あい飛 ^ゝ	— 稲ヲ	ハ	せ				
		— 坊主を	ハ	遍そり	— 山ノ神をハ	の本 ^ほ 類可もい	— 山ヲハ		
		— 坊主をハ	ハ	遍そり	— 山ノ神を	ハ	の本 ^ほ 類可もい	— 山ヲハ	
山ノ神をハ	の本 ^ほ 類可もい	— 山ヲ	ハ						
		— 海ノ神ト言事ヲ	ハ	あついで可もい	— 酒ハ酒なり	— 熊ヲハ	本くゆく		
海ノ神ト言事ヲハ	あついで可もい	— 酒	ハ	酒なり	— 熊ヲハ	本くゆく			
		— 酒ハ酒なり	ハ	本くゆく					
ついで可もい	— 酒ハ酒なり	— 熊ヲ	ハ	ゆつく	— 水神ヲハ	遍 ^り 川可もひ	— 久敷ト言事ハ	な可	
		— 鹿ヲ	ハ	らてい					
		— 鹿ヲハ	ハ	遍 ^り 川可もひ	— 久敷ト言事ハ	な可らてい			
水神ヲハ	遍 ^り 川可もひ	— 久敷ト言事	ハ	な可らてい					
		— 紙を	ハ	可ん飛 [?]	— 米	ちい志やまも	— 帰る可と言事ハ	へと川	
			ハ	ふ					
		— 米	ハ	へと川ふ					
		— 米	ハ	者 ^ろ う	— 貴キ事ハ	くミち	亦	志やう可い	— 骨折と
		— 米	ハ	者 ^ろ う	— 貴キ事ハ	くミち	亦	志やう可い	— 骨折と
		— 口を	ハ	くミち	亦	志やう可い	— 骨折と言事ハ	志んき	
		— 口をハ	ハ	くミち	亦	志やう可い	— 骨折と言事ハ	志んき	
ミち	亦	志やう可い	— 骨折と言事	ハ	ころ	— 太儀ト言事ハ	右同断	— 煩ヲハ	やいの婦
		— 難儀を	ハ	ころ	— 太儀ト言事ハ	右同断	— 煩ヲハ	やいの婦	
— 難儀をハ	ころ	— 太儀ト言事	ハ	右同断	— 煩ヲハ	やいの婦			
— 太儀ト言事ハ	右同断	— 煩ヲ	ハ	やいの婦					
		— あ多満	ハ	志や者 ^ろ	108	— 飛多いハ	のい本ろ	— 口ノ内ニ而物のとける	事ヲハ

ー あ多満ハ 志や者^ゝ ー 飛多い ハ のい本ろ ー 口ノ内ニ而物のとける事ヲハ るう
 い本ろ ー 口ノ内ニ而物のとける事ヲ ハ るう
 ー あ満いと言事 ハ とふへ 109 ー 口ノからいと言事ハ は類可流
 言事ハ とふへ 109 ー 口ノからいと言事 ハ は類可流
 ー 苦キ事 ハ 志う ー 酸キ事ハ 志や可け ー よめ取ヲハ 志う
 ー 苦キ事ハ 志う ー 酸キ事 ハ 志や可け ー よめ取ヲハ 志う
 ー 酸キ事ハ 志や可け ー よめ取ヲ ハ 志う
 ー むこ取も 右同断 ー 鮎ヲ ハ む ー 鯨をハ くん遍?
 右同断 ー 鮎ヲハ む ー 鯨を ハ くん遍?
 ー 鯛を ハ せいましけ ー 海川の貝類をハ せい
 鯛をハ せいましけ ー 海川の貝類を ハ せい
 ー 生子 ハ うた ー う久ひ ハ うた ー う久ひハ 志ぶん ー 蟹ハ あんはや
 ー 生子ハ うた ー う久ひ ハ 志ぶん ー 蟹ハ あんはや
 うた ー う久ひハ 志ぶん ー 蟹 ハ あんはや
 ー 惣而丸キ貝ヲ ハ 徒ふもこり、 ー のりハ お者こ婦^ゝ
 而丸キ貝ヲハ 徒ふもこり、 ー のり ハ お者こ婦^ゝ
 ー 海草ハ何ニても てむ尔 ー 濱ハ お多 ー 砂をハ右
 ー 海草ハ何ニても てむ尔 ハ お多 ー 砂をハ右
 てむ尔 ー 濱ハ お多 ー 砂を ハ 右
 ー 磯 ハ し満 ー 畑をハ とひ ー 田ハ 田那り少も無之也
 ー 磯ハ し満 ー 畑を ハ とひ ー 田ハ 田那り少も無之也
 ハ し満 ー 畑をハ とひ ー 田 ハ 田那り少も無之也
 ー 杉の木を ハ 志ゆんぐ^ゝ ー 松をハ 婦川婦 ー くりをハ やむ
 ー 杉の木をハ 志ゆんぐ^ゝ ー 松を ハ 婦川婦 ー くりをハ やむ
 ぐ ー 松をハ 婦川婦 ー くりを ハ やむ
 ー く
 ー 桑ノ木を ハ く連婦尔 ー 梨の木ハ 右同断 ー 柿ハ右同断 一本も無之
 ー 桑ノ木をハ く連婦尔 ー 梨の木 ハ 右同断 ー 柿ハ右同断 一本も無之
 婦尔 ー 梨の木ハ 右同断 ー 柿 ハ 右同断 一本も無之
 ー 檜ノ木 ハ まさ ー 婦^ゝなの木 右同断 ー ならノ木 尔志よ
 ー 本らの木 ハ ふ志尔 ー 猿 ハ 一匹も無シ ー 本うみんと獣物猫このことし
 ー 本らの木ハ ふ志尔 ー 猿 ハ 一匹も無シ ー 本うみんと獣物猫このことし
 ー としぬけと生物 ー 川をそ ハ え志やまん ー 蛇ハ とく尔
 ー 川をそハ え志やまん ー 蛇 ハ とく尔
 ー 可
 ー 蛙 ハ おま介るし ー 大蛇ハ あい祢川婦 ー 見、すハ とに
 ー 蛙ハ おま介るし ー 大蛇 ハ あい祢川婦 ー 見、すハ とに
 ー 大蛇ハ あい祢川婦 ー 見、す ハ とに
 ー 宮守 無之 ー 蚊 ハ き、里 ー 者いハ も寿 ー 蜂ハ 志^ゝや屋
 無之 ー 蚊ハ き、里 ー 者い ハ も寿 ー 蜂ハ 志^ゝや屋
 き、里 ー 者いハ も寿 ー 蜂 ハ 志^ゝや屋
 ー あ婦^ゝ ハ 志らう ー 婦よう 少もなし ー うなかふし ゑ可ふ年
 ー なめくぢり 右同断 ー 鳥 ハ 者すく類 ー 鳶ハ やと多
 右同断 ー 鳥ハ 者すく類 ー 鳶 ハ やと多
 ー 雉子 ハ 無シ ー 山鳥ハ 婦ミ類い ー 鳩ハ くしほ
 ー 雉子ハ無シ ー 山鳥 ハ 婦ミ類い ー 鳩ハ くしほ
 無シ ー 山鳥ハ 婦ミ類い ー 鳩 ハ くしほ
 ー 一家を ハ チセ ー 鷺 ハ か者^ゝちり ー 熊鷹 あち
 ー 一家をハ チセ ー 鷺 ハ か者^ゝちり ー 熊鷹 あち
 右同断 ー 水こひ鳥 なし ー 鶯 ハ 本^ゝほうくち
 ー 鶯 ハ くしゑとい多 ー 蟬ハ や起 ー 川鳥ハ 可つけん
 ー 鳩ハ くしゑとい多 ー 蟬 ハ や起 ー 川鳥ハ 可つけん
 ゑとい多 ー 蟬ハ や起 ー 川鳥 ハ 可つけん
 ー 可
 川蟬 ハ 志やう可ひ ー 山姥をハ 志よう多んころ ー や年ハ せ起
 た

川蟬ハ	志やう可ひ	一山姥を	ハ	志よう多んころ	一や年ハ	せ起たひ
一山姥をハ	志よう多んころ	一や年	ハ	せ起たひ		
		一峯	ハ	き多ひ	一けら者ハ	の起
		一峯ハ	ハ	き多ひ	一けら者ハ	の起
		一けら者ハ	ハ	の起	一入口ハ	本、
		ひ	ハ	の起	一入口ハ	本、
		一戸を	ハ	あ者	一何二而も長キ物ハ	志をふ
一戸をハ	あ者	一何二而も長キ物	ハ	志をふ	茶ハ茶也	
一何二而も長キ物ハ	志をふ	茶	ハ	茶也		
		ちや	ハ	ん		
		一茶碗	ハ	右同断	一茶せん	右同断
		一者し	ハ	者す	一なべ	志う
		一柱	ハ	ゆく寿へ	一?ハ	里可尔
		一柱ハ	ハ	ゆく寿へ	一?ハ	里可尔
く寿へ	一?ハ	里可尔	ハ	一者り	ハ	いてめル
		一や年	ハ	可つしやう	一四方のかこいのな類ヲハ	志やまのふ
可つしやう	一四方のかこいのな類ヲ	ハ	ハ	志やまのふ		
		一座敷を	ハ	しやう	一寝間を	しやうき
		水走り	ハ	右同断	一志やくしを	可せう婦
一志やくしをハ	可せう婦	一飛さく	ハ	婦起な		
		一まな板	ハ	右同断	一包丁	ハ
一包丁ハ	ゑびらけ	一可んなべ	ハ	いよまれ		
		又	ハ	き者下	け共言	
		一屋く	ハ	ん	右同断	一御なべ
		一こも	ハ	てのま	一豊ハ	右同断
		一こもハ	ハ	てのま	一豊ハ	右同断
		一魚を突や寿	ハ	をうつ婦	一自在か起ヲハ	志や王□
を突や寿ハ	をうつ婦	一自在か起ヲ	ハ	志や王□		
		一いろり	ハ	いぬへ	一火者しハ	あ遍者し
一いろりハ	いぬへ	一火者し	ハ	あ遍者し		
		一惣而山の木を	ハ	ちく尔といふ	一山ノ谷をハ	遍つ徒る
の木をハ	ちく尔といふ	一山ノ谷を	ハ	遍つ徒る		
		一山ノ尾を	ハ	くう	一山ノ平ハ	う類ことり
		一山ノ尾をハ	ハ	くう	一山ノ平ハ	う類ことり
		一山ノ平	ハ	う類ことり	一山ノ頭上を	ゆぶりきたい
		一山ノ後	ハ	おしまけ	一山ノ下をハ	ゆぶりやうろうほう
一山ノ後ハ	おしまけ	一山ノ下を	ハ	ゆぶりやうろうほう		
		一山ノ脇	ハ	志やまけ	一山ノ平地ハ	てなし
一山ノ脇ハ	志やまけ	一山ノ平地	ハ	てなし	一山ノ奥ハ	かつち
一山ノ平地ハ	てなし	一山ノ奥	ハ	かつち		
		一丈夫	ハ	く多り	一父ハ	者ん遍
く多り	一父ハ	者ん遍	ハ	者ん遍	一母ハ	者本う
		一むこ	ハ	かふ	一妻ハ	こしまち
一むこハ	かふ	一妻	ハ	こしまち	一女房を	まち
		一姪	ハ	ま川可りこ	一甥ハ	かりこ
一姪ハ	ま川可りこ	一甥	ハ	かりこ	一類共ハ	あ者
りこ	一甥ハ	かりこ	ハ	あ者		
		一伯父	ハ	志りか多者ちり	一高き処へ上ルを	へめ寿
おそ起事ハ	かつむいり	一者や起事	ハ	徒いなし		
		一いそけト言うを	ハ	右同断	一御太儀ト言を	うちな可連
		一骨折	ハ	い志起	なんこ路	一下二いよとハ
ハ	い志起	なんこ路	ハ	志りか多あ遍		
		一泊るといふ事	ハ	連う志り	一明日とハ	う志やた
泊るといふ事ハ	連う志り	一明日と	ハ	う志やた		
		一いけと	ハ	おまん	一何二而も出ルといふ事ハ	へとく

ハ おまん	一 何ニ而も出ルといふ事	ハ	へとく
	一 物の尔へ類といふ	ハ	本う婦
といふハ	本う婦	ハ	一 な満尔へな類事ハ 婦
	一 舟ノと満	ハ	やれきな
舟ノと満ハ	やれきな	ハ	観音立給ふ処をハ
	一 海上な起多るを	ハ	あなま希
ハ	のと飛び可	ハ	一 大波立るあらいをハ
	一 火のもゆるを	ハ	るやべ本
るをハ	あ遍 ^ゝ あり	ハ	あ遍 ^ゝ あり
	一 可つ堂 ^ゝ くを	ハ	あへれん本う
一 寒起をハ	めらいけ	ハ	一 あつ起をハ
	一 あつ起を	ハ	本う婦け
一 天氣能をハ	志り飛類可	ハ	志り飛類可
	一 天をハ	ハ	志り
といふ事を	飛 ^ゝ るか	ハ	一 何ニ而も
在嶋を	連婦多ん嶋の本 ^ゝ リ	ハ	の本り遍めれ寿おりた
	一 石を	ハ	ま多嶋と言
	一 沖を	ハ	連婦多
	一 主といふ	ハ	一 是悲ないといふを
一 主といふハ	ゑち	ハ	ゑち 連人可ひ
	一 小袖	ハ	志やら遍
一 飛びヲ	連起	ハ	一 頭ノ髪
	一 齒ヲ	ハ	いもくふ
一 西風ハ	志む連ら	ハ	みまけ
	一 東風	ハ	一 舌ヲ
一 南風ハ	同連いら	ハ	者るう
	一 北風	ハ	志む連ら
いら	一 北風ハ	ハ	一 東風ハ
一 納る事ヲ	ゑ志やむ	ハ	あし
	一 網を	ハ	一 同飛可多も同前
一 前者 ^ゝ ハ	前者 ^ゝ 也	ハ	あし
	一 是ヨリ	ハ	一 同飛可多も同前
一 昼をハ	とうかつふ	ハ	同連いら
	一 昼過を	ハ	一 北風ハ
三ツニ	ハ	ハ	まく那
	ハ	ハ	一 静ヲハ
三ツニハ	連婦	ハ	者うけ
連婦	四ツニ	ハ	者うけ
い年婦	五ツニ	ハ	ハ
五ツニハ	い年婦	ハ	ハ
あし起年ふ	六ツニ	ハ	ハ
	七ツニ	ハ	ハ
七ツニハ	あるあん遍 ^ゝ	ハ	ハ
八ツニ	八ツニ	ハ	ハ
八ツニハ	徒遍 ^ゝ さん遍 ^ゝ	ハ	ハ
九ツニ	九ツニ	ハ	ハ
十二	十二	ハ	ハ
十二ハ	王ん遍 ^ゝ	ハ	ハ
二十	二十	ハ	ハ
二十ハ	王ん遍 ^ゝ	ハ	ハ
三十	三十	ハ	ハ
本つ	本つ	ハ	ハ
三十八	王ん遍 ^ゝ 本つ	ハ	ハ
四十二	五十	ハ	ハ
五十	五十	ハ	ハ
五十ハ	前ノ五つの言葉同前	ハ	ハ
百	百	ハ	ハ
百ハ	あしき年本つ	ハ	ハ
千	千	ハ	ハ
万	万	ハ	ハ
万ハ	王な本つ	ハ	ハ
一東	一東	ハ	ハ
一東ハ	志年志やけ	ハ	ハ
二十五ヲ	二十五ヲ	ハ	ハ
何方ヨリ来ルトいふヲ	何方ヨリ来ルトいふヲ	ハ	ハ
前様といふを	ゑちお可ひ	ハ	ハ
一うぬと	底を	ハ	ハ
ハ	ら婦 ^ゝ 多	ハ	ハ
	一切ノ物の内ニ在を	ハ	ハ
	一天を	ハ	ハ

一天をハ	里起多ん	一雨のふるを	ハ	あし	一硯をハ
多ん	一雨のふるをハ	あし	一硯を	ハ	
	一筆も	同前	一墨	ハ	者川し
	一墨ハ	者川し	一舟のおもて	ハ	者川し
			一舟のおもて	ハ	一舟のおもてハ
			一舟のともを	ハ	ちつふな
			一王らを	ハ	ちつ婦お志よろ
			又	ハ	一舟ノ中を
			一米	ハ	ちつふのしけた
				ハ	王つてし
				ハ	一黒米
				ハ	むりくり
				ハ	一白米ヲ
				ハ	飛りけり
				ハ	もし共言
				ハ	志る
				ハ	一人を同道シ而合せんといふ
				ハ	徒らハゑくぬ可るなん
				ハ	ころ
				ハ	ゑくぬ可るなんころ
				ハ	ち婦おふ
				ハ	志りき
				ハ	一浅黄のちらしハ
				ハ	に志やう
				ハ	に志やう
				ハ	右同断
				ハ	一帯ヲ
				ハ	く
				ハ	な者堂類
				ハ	一弓を
				ハ	く
				ハ	一矢を
				ハ	あい
				ハ	鉄砲也
				ハ	一合掌ハ
				ハ	お可む
				ハ	お可む
				ハ	ナルおまん
				ハ	へ婦け
				ハ	一物のこ本る、事ヲ
				ハ	連うけ
				ハ	あち可せしけ
				ハ	一道を
				ハ	ハ
				ハ	たる者こ
				ハ	火うち也
				ハ	むルん
				ハ	かる志
				ハ	一銭をハ
				ハ	いちゑん
				ハ	いちゑん
				ハ	カル
				ハ	一銀ハ
				ハ	連多るカル
				ハ	連多るカル
				ハ	てろき
				ハ	一物ノ多有事を
				ハ	遍ろ
				ハ	者、起
				ハ	一あ年を
				ハ	志や者
				ハ	飛志やう本う
				ハ	一乳をハ
				ハ	ゑ可し
				ハ	一飛ちを
				ハ	志
				ハ	ゑ可し
				ハ	一飛ちを
				ハ	志
				ハ	かぶら
				ハ	一舟の可ひを
				ハ	かち
				ハ	一婦しきをハ
				ハ	ね
				ハ	いらもし可れ
				ハ	一腹を
				ハ	くい
				ハ	一痛事ヲ
				ハ	ある
				ハ	くち
				ハ	一肩ハ
				ハ	本なし
				ハ	一せな可ハ
				ハ	せ川る
				ハ	本なし
				ハ	一せな可ハ
				ハ	せ川る
				ハ	と川と
				ハ	一腰をハ
				ハ	いへけ
				ハ	一きんハ
				ハ	の起
				ハ	いへけ
				ハ	一きんハ
				ハ	の起
				ハ	おそろ
				ハ	一玉く起ハ
				ハ	ち
				ハ	一玉門を
				ハ	本川キ
				ハ	ち
				ハ	一玉門を
				ハ	本川キ
				ハ	おもひ
				ハ	一も、をハ
				ハ	おむ
				ハ	おむ
				ハ	可しや者
				ハ	一こむらをハ
				ハ	う連べ
				ハ	一足ハ
				ハ	て満
				ハ	う連べ
				ハ	一足ハ
				ハ	て満
				ハ	て起
				ハ	一乳吞事を
				ハ	とつといく連といふ
				ハ	志やまよん類
				ハ	おとな
				ハ	一な多ハ
				ハ	者満な多
				ハ	一ま起りハ
				ハ	ゑりけ
				ハ	び
				ハ	者満な多
				ハ	一ま起りハ
				ハ	ゑりけび
				ハ	ゑりけび
				ハ	よく遍
				ハ	一鉄ハ
				ハ	く川く王
				ハ	く川く王
				ハ	脇差
				ハ	ゑむし
				ハ	一やりハ
				ハ	おつ婦
				ハ	一大豆ハ大豆也

脇差ハ	ゑむし	一やり	ハ	おつ婦	一大豆ハ大豆也
むし	一やりハ	おつ婦	一大豆	ハ	大豆也
			万	ハ	王な本つ 一東ハ 志年志やけ 二十五ヲハ あしき年い可志
					満本つ 右是迄
宮守 無之	一蚊ハ	き、里	一者	いハ	も寿 一蜂ハ 志 ^ゝ や屋
	一峯ハ	き多ひ	一けら	者 ^ゝ ハ	の起 一入口ハ 本 ^ゝ 、
			一者	しハ	者 ^ゝ す 一なべ 志う 一釜 右同断
ゆく寿へ	一?ハ	里可尔	一者	りハ	いてめ尔
	一いろりハ	いぬへ	一火	者	しハ あ遍 ^ゝ 者し
一おそ起事ハ	かつむいり	一	一者	や起事ハ	徒いなし
			者		
			つ	者	ゝめ
			一者	な寿事ヲ	志ゆら 一物ヲ追といふ おけ遍 ^ゝ
			一あ	者	ゝハ あ者 ^ゝ 也 一是ヨリハ同断 一物のおれる事ヲ 者
					ちり
一陸道を	屋ベ可類	一多	一者	こをハ	たん者 ^ゝ こ
		一	一者	やくいそけといふヲ	本くれ者 ^ゝ へ 一火打ハ 火うち也
		一むご	ひ	といふ事をハ	おのゝ 一尔くひといふ事をハ 志とま
むごひといふ事をハ	おのゝ	一尔く	ひ	といふ事をハ	志とま
		一き川く	ひ	事ヲハ	本ろのやい志と満 一御身ト言事ハ や尔
		一き多	ひ	と言事ヲハ	い川志や介 ^ゝ り 一さむいと言事ハ めいらいけ
					連
一生子ハ	うた	一う久	ひ	ハ	志ぶん 一蟹ハ あんはや
可ら寿		と	ひ		
		うく	ひ	寿	
一者い鷹	右同断	一水こ	ひ	鳥	なし 一鶯ハ 本 ^ゝ ほうくち
一笠ハ	かぶら	一舟の可	ひ	を	かぢ 一婦しきをハ ね
		あ王	び	い祢	
めよとり貝とて色赤ク形あげ			び	のこことく	
		一よろこ	び	を	おのふゝ 一なけくを お志よら 一念頃成近付を
		一ゆ	び	ハ	て起 一乳呑事を とつといく連といふ
一なく事ヲハ	ちし可類	一念	比	人ヲハ	とくい 一我と言事ヲハ てう可ひ
		一なけくを	お志よら	一念	比 成近付を
		一女を	めのこ	一念	比 人ハ おもひ 一もゝをハ おむ
冬ハ	ま多	一めしヲハ	あま母	一飛	へヲハ 飛や者 ^ゝ
				一飛	多 ^ゝ るい事ヲハ 者らさん多 ^ゝ ひけ連 一餅をハ しと
		一あ多満ハ	志や者 ^ゝ	一飛	多いハ のい本ろ 一口ノ内ニ而物のとける事ヲハ るう
一志やくしをハ	可せう婦	一	一飛	さくハ	婦起な
			一飛	げヲ	連起 一菌ヲハ みまけ 一舌ヲ 者るう
			飛	可し	
む連ら	一東風ハ	あし	一同	飛	可多も同前
やう本う	一乳をハ	ゑ可し	一飛	ち ^ゝ を	志
			一飛	ざをハ	こ可しや者 ^ゝ 一こむらをハ う連べ 一足ハ て
と言事ヲハ	ゑ可	一殿とい	ふ	事ヲハ	かもいと
一衣類をハ	ちめ婦	一お川とゝい	ふ	事をハ	ほく
		一むごひとい	ふ	事をハ	おのゝ 一尔くひといふ事をハ 志とま
ひといふ事をハ	おのゝ	一尔くひとい	ふ	事をハ	志とま
		一惣而山の木をハ	ちく尔とい	ふ	一山ノ谷をハ 遍つ徒る
		一泊るとい	ふ	事ハ	連う志り 一明日とハ う志やた
けとハ	おまん	一何ニ而も出ルとい	ふ	事ハ	へとく
		一物の尔へ類とい	ふ	ハ	本う婦 一な満尔へな類事ハ 婦
一舟ノと満ハ	やれきな	観音立給	ふ	処をハ	あなま希
		能可とい	ふ	事を	飛 ^ゝ るか 一山へ上ルをハ の本り遍めれ寿おりた
休と言事	ゑ志起 ^ゝ なん	一おけとい	ふ	事ヲ	ほつ本う
と言ヲ	本起の者い	一跡ニ残連とい	ふ	ヲ	ようしおまん

	一 擧とい	ふ	ヲ	なんご路	一 く、里付多といふことを	志な、
いふヲ	なんご路	一 く、里付多とい	ふ	ことを	志な、	
	一 沖をハ	連婦多	一	是悲ないとい	ふ	を ぬち連ん可ひ
		一 主とい	ふ	ハ	ぬち	一 小袖ハ 志やら遍
		一 よぶとい	ふ	事ヲ	本川ぬ	一 追懸るといふヲ のし
ぶといふ事ヲ	本川ぬ	一 追懸るとい	ふ	ヲ	のし	
		一 徒なぐとい	ふ	志りごて	一 物ヲとく事ヲ	飛`多
一 者な寿事ヲ	志ゆら	一 物ヲ追とい	ふ	おけ遍`		
の事	志りくん祢	一 夜明多ること	い	ふ	ヲ	志り遍け
		一 暁とい	ふ	ヲ	志りおのまん	一 昼前といふヲ とののしけ
といふヲ	志りおのまん	一 昼前とい	ふ	ヲ	とののしけ	
		一 見事とい	ふ	を	いらま可しル	一 浦山敷を あいの者`
	一 既ニ言事ヲ	お志やうら	一	よ	来多といふヲ	飛る可
言事ヲ	お志やうら	一 よふ来多とい	ふ	ヲ	飛る可	
		一 皆此方へよれとい	ふ	ヲ	おふび多の志やたお可ひ	
		一 よく行とい	ふ	ヲ	飛る可のおまん	一 よいといふを 飛`るか
とふヲ	飛る可のおまん	一 よいとい	ふ	を	飛`るか	
		一 こ連れてとい	ふ	ヲ	たん遍`祢	可い起飛るか
		一 誰子とい	ふ	ヲ	祢尔本`ほ	一 御身可子といふヲ や尔本`うほ
いふヲ	祢尔本`ほ	一 御身可子とい	ふ	ヲ	や尔本`うほ	
		一 何方ヨリ来ルトい	ふ	ヲハ	祢王ありき	一 とこへ行トいふヲ 祢多おまん
ふヲハ	祢王ありき	一 とこへ行トい	ふ	ヲ	祢多おまん	
		一 御前様トい	ふ	を	ぬちお可ひ	一 うぬとハ や尔
の物を	あんぬんくる遍`	一 何者とい	ふ	ヲ	祢んくう	一 一切の道具の
		一 万ノ物誰可物とい	ふ	を	祢んこるべ	一 物をと可め類事ヲ 年ん、
		一 我とい	ふ	ヲてう可ひ	一 爰へ来ルといふヲ 多んこ多んぬく本ろ	
我といふヲてう可ひ	一 爰へ来ルとい	ふ	ヲ	多んこ多んぬく本ろ		
	一 天をハ	里起多ん	一	雨の	ふ	るをハ あし
ハ	志ぬ	一 人を同道シ而合せんとい	ふ	徒らハ	ぬちぬ可るなんころ	
		一 物の曲多るを	へうけ	一 少ト	い	ふ
		一 此方へよれとい	ふ	を	本ん	一 物の遍多を やひやる
		一 色ト	い	ふ	を	遍満可らい
		一 色ト	い	ふ	を	連多類べ
一 色ト	い	ふ	を	連多類べ	黒ト	い
		一 黒ト	い	ふ	を	くん祢
		一 あの子とい	ふ	事	おつ可ひ	一 ま川寿くとハ なるおまん
		一 者やくいそけとい	ふ	ヲ	本くれ者`へ	一 火打ハ 火うち也
		一 達者とい	ふ	お起らしの	410	一 よ王川多可といふヲ 志んぎ
		一 不知とい	ふ	事ハ	いらもし可れ	一 腹を くい
		一 よ	ぶ	といふ事ヲ	本川ぬ	一 追懸るといふヲ のし
	一 檜ノ木ハ	まさ	一	婦	`なノ木 右同断	一 ならノ木 尔志よ
		一 あ	婦	ハ	志らう	一 婦よう 少もなし
			婦	よう	少もなし	一 うなかふし ぬ可ふ年
	一 あ婦`ハ	志らう	一	婦	よう 少もなし	一 うなかふし ぬ可ふ年
	かぶら	一 舟の可ひを	かち	一	婦	しきをハ ぬ
ハ	ま多	一 めしヲハ	あま母	一	飛	ヘ
一 伯父ハ	志りか多者ちり	一 高き処	へ	上ルを	へめ寿	
		一 物の尔	へ	類といふハ	本う婦	一 な満尔へな類事ハ 婦
の尔へ類といふハ	本う婦	一 な満尔	へ	な類事ハ	婦	
		亦	いと	へ		
	能可といふ事を	飛`るか	一	山	へ	上ルをハ の本り遍めれ寿おりた
一 山ヨリ下ルを	志やん	一 天上	へ	上ル事ヲ	里起多あ満	
		一 皆此方	へ	よれといふヲ	おふび多の志やたお可ひ	
あしき年い可志満本つ	右是迄物の数可そ	へ	候事			
来ルトいふヲハ	祢王ありき	一 とこ	へ	行トいふヲ	祢多おまん	
		一 我といふヲてう可ひ	一	爰	へ	来ルといふヲ 多んこ多んぬく本ろ
		一 此方	へ	よれといふを	遍満可らい	一 舟ニ乗レトハ ち婦`おふ
	一 者しハ	者`す	一	な	べ	志う
			一	釜	右同断	

- 一 包丁ハ 糸びらけ 一 可んな べ ハ いよまれ
 一 屋くはん 右同断 一 御な べ ふれ可尔志ゆ むしろ 右同断
 一 火ヲさしく べ るヲ 連ん本う 一 腹痛ヲ 徒いあ類可
 一 本 らの木ハ ふ志尔 一 猿ハ一匹も無シ 一 本うゐんと獣物猫
 一 こ
 一 物ヲこ 本 寿事ヲ 本いつけ 一 日の暮を 徒ふらんむ
 一 惜惜るとハ へ婦け 一 物のこ 本 る、事ヲ 連うけ
 一 火ヲもミテ出スを ち起志や、 一 本 くちハ むしろん
 一 木の耳の 本 くちハ かる志 一 銭をハ いちゑん
 一 本 しいことを らんるし 一金ハ カル 一 銀ハ 連多るカル
 一 本 んのく本ハ くち 一 肩ハ 本なし 一 せな可ハ せ川る
 一 一本のく 本 ハ くち 一 肩ハ 本なし 一 せな可ハ せ川る
 一 本 うぐ王んとの お起くるミ 一 弁慶をハ 志やまよん類
 一 本 多を やひやる
 一 少トいふを 本ん 一 物の 遍 ま 那こをハ し起 一 座當をハ 志起なへ 一 腹ヲハ 志川く
 一 一 ま だいで
 一 一 ま な板 右同断 一 包丁ハ 糸びらけ 一 可んなべハ い
 一 一 ま よ
 一 一 ま 川寿くとハ ナルおまん
 一 一 ま 起りハ ゑりけび
 一 一 ま さ可りを むくかり 一 可満ハ よく遍 一 嶽ハ く川く
 一 一 王
 一 あ多 満 ハ 志や者 108 一 飛多いハ のい本ろ 一 口ノ内ニ而物の
 一 一 あ 満 イト言事ハ とふへ 109 一 口ノからいと言事ハ は類可流
 一 一 可 満 た可
 一 一 可 満 尔へな類事ハ 婦
 一 一 な 満 ハ やれきな 観音立給ふ処をハ あなま希
 一 一 舟ノと 満 ハ よく遍 一 嶽ハ く川く王
 一 一 可 満 ハ よく遍 一 嶽ハ く川く王
 そ那多と言事をハ 糸ちやう可ひ 一 み 多くないと言事ハ 可もやし
 是ノ下ノ国の言葉なり 一 せ ミ 可ハ可ら寿
 一 一 可 ハ せ ミ 可
 一 一 ミ 可 襟
 一 一 ミ 可 襟
 一 一 う ミ 可
 一 一 火ヲも ミ て出スを ち起志や、 一 本くちハ むしろん
 一 一 鼻を 糸川婦 一 く 志や ミ を 糸しな 一 耳をき志やら
 一 一 む ごひといふ事をハ おの、 一 尔くひといふ事をハ 志とま
 多ひと言事ヲハ い川志や介り 一 さ む いと言事ハ めいらいけ連
 一 一 む こ取も 右同断 一 鮎ヲハ む 一 鯨をハ くん遍
 同断 一 御なべ ふれ可尔志ゆ 一 む しろ 右同断
 一 一 む こハ かふ、 一 妻ハ こしまち 一 女房を まち
 一 一 介 む り立を 志ぶやあん 一 納る事ヲ 糸志やむ 一 綱をハ や
 一 一 恋事ヲ 糸ち本可ひ 一 む さい事ヲ いつ志やけ連
 一 一 飛ぶぎをハ こ可しや者 一 こ む らをハ う連べ 一 足ハ て満
 一 一 冬ハ ま多 一 め しヲハ あま母 一 飛へヲハ 飛や者
 むじ路 88 一 火ヲハ あ遍 一 あ め ヲハ あぶと
 一 一 う 酸き事ハ 志や可け 一 よ め 取ヲハ 志う
 一 一 め よとり貝とて色赤ク形あげびのことく
 一 一 つ者 め
 一 一 燕ハ ちひ屋川 一 可も め ハ 可ひこ
 一 一 可ん 可 も
 一 一 燕ハ ちひ屋川 一 可も め ハ 可ひこ
 一 一 むこ取 も 右同断 一 鮎ヲハ む 一 鯨をハ くん遍
 一 一 海草ハ何にて も てむ尔 一 濱ハ お多 一 砂をハ右
 一 畑をハ とひ 一 田ハ 田那り少 も 無之也
 の木ハ 右同断 一 柿ハ右同断 一本 も 無之

一本らの木ハ	ふ志尔	一 猿ハ一匹	も	無シ	一 本うゑんと獸物猫このことし
一 あ婦ハ	志らう	一 婦よう 少	も	なし	一 うなかふし ゑ可ふ年
		とい多と	も	言	
	一 戸をハ	あ者	一 何ニ而	も	長キ物ハ 志をふ 茶ハ茶也
			一 一こ	も	ハ てのま 一 疊ハ 右同断 一 うす縁 右同断
	一 いけとハ	おまん	一 何ニ而	も	出ルといふ事ハ へとく
			一 火の	も	ゆるをハ あ遍あり 一 可つ堂、くをハ あへれん本う
類可	一 天をハ	志り	一 何ニ而	も	
	一 東風ハ	あし	一 同飛可多	も	同前
			一 一こ連て	も	といふヲ たん遍 祢 可い起飛るか 一 物ヲ法を
			一 一筆	も	同前 一 墨ハ 者 川し 一 舟のおもてハ ちつふな
前	一 墨ハ	者 川し	一 舟のお	も	てハ ちつふな
			一 舟のと	も	をハ ちつ婦お志よろ 一 舟ノ中を ちつふのしけた
			一 草ニ而	も	何ニ而も 苅候事を か満かり 一 物を突を ゆだ
		一 草ニ而も何ニ而	も	苅候事を か満かり 一 物を突を ゆだ	
			一 火ヲ	も	ミて出スを ち起志や、 一 本くちハ むルん
一 女を	めのこ	一 念頃人ハ	お	も	ひ 一 も、をハ おむ
めのこ	一 念頃人ハ	おもひ	一	も	、をハ おむ
		又にし者と	も	言	
		志	や		
		ち	や	はん	
		一	や	年ハ 可つしやう 一 四方のかこいのな類ヲハ 志やまのふ	
水走り	右同断	一 志	や	くしをハ 可せう婦 一 飛さくハ 婦起な	
		一 魚を突	や	寿ハ をうつ婦 一 自在か起ヲハ 志や王□	
一 おそ起事ハ	かつむいり	一 者	や	起事ハ 徒いなし	
		一 者	や	くいそけといふヲ 本くれ者へ 一 火打ハ 火うち也	
	一 脇差ハ	ゑむし	一	や	りハ おつ婦 一 大豆ハ大豆也
			一	屋	くはん 右同断 一 御なべ ふれ可尔志ゆ 一 むしろ
			一 火のも	ゆ	るをハ あ遍あり 一 可つ堂、くをハ あへれん本う
			一 先	ゆ	けと言ヲ 本起の者い 一 跡ニ残連といふヲようしおまん
			一	ゆ	びハ て起 一 乳吞事を とつといく連といふ
志う	一 酸き事ハ	志や可け	一	よ	め取ヲハ 志う
			一	め	とり貝とて色赤ク形あげびのこつく
骨折ハ	い志起	なんこ路	一 下ニい	よ	とハ 志りか多あ遍
			一	よ	ぶといふ事ヲ 本川ゑ 一 追懸るといふヲ のし
	一 既ニ言事ヲ	お志やうら	一	よ	ふ来多といふヲ 飛る可
		一 皆此方へ	一	よ	れといふヲ おふび多の志やたお可ひ
			一	よ	く行とふヲ 飛る可のおまん 一 よいといふを 飛るか
一 よく行とふヲ	飛る可のおまん	一	一	よ	いといふを 飛るか
		一 此方へ	一	よ	れといふを 遍満可らい 一 舟ニ乗レトハ ち婦おふ
			一	よ	ろこびを おのふ、 一 なけくを お志よら 一 念頃成近付
			一 山	ヨ	リ下ルを 志やん 一 天上へ上ル事ヲ 里起多あ満
一 あ者ハ	あ者也	一 是	ヨ	リハ同断 一 物のおれる事ヲ 者ちり	
		一 何方	ヨ	リ来ルトいふヲハ 祢王ありき 一 とこへ行トいふヲ 祢多	
					おまん
一 あ満いと言事ハ	とふへ	一 口ノか	ら	いと言事ハ	は類可流
	あゆ	くし	ら		
さ	一 婦	な	ら	ノ木	尔志よ
		右同断	一 一	ら	の本ハ ふ志尔 一 猿ハ一匹も無シ 一 本うゑんと獸物猫このこ
			一 可	ら	寿 とひ
葉なり	せミ	可	は	ら	寿
	一 峯ハ	き多ひ	一 け	ら	者ハ の起 一 入口ハ 本、
多るをハ	のと飛り可	一 大波立るあ	ら	い	をハ るやべ本
		亦	ら	ん	

	一 王	ら	をハ	王つてし	一 黒米	むりくり	一 白米ヲ	飛りけり				
一切物の形ハ	志りき	一 浅黄のち	ら	しハ	に志やう							
一 飛ぶぞをハ	こ可しや者	一 こむ	ら	をハ	う連べ	一 足ハ	て満					
	但さが				多類言葉							
	貴様とハさ可				り 言葉							
ト言事ヲハ	あつい可もい	一 酒ハ酒な	り	一 熊ヲハ	本くゆく							
惣而丸キ貝ヲハ	徒ふもこり、	一 の	り	ハ	お者こ婦							
	めよと				貝とて色赤ク形あげびのこことく							
一 畑をハ	とひ	一 田ハ	田那	り	少も無之也							
ゆんぐ	一 松をハ	婦川婦	一 くる	り	をハ	やむ						
	一 なめくち			り	右同断	一 鳥ハ	者すく類	一 鳶ハ	やと多			
	是ノ下ノ国の言葉な			り	セミ		可ハ	可ら寿				
ゆく寿へ	一?ハ	里可尔	一 者	り	ハ	いてめ尔						
					水走	り	右同断	一 志やくしをハ	可せう婦	一 飛さくハ	婦起な	
					一 いろ	り	ハ	いぬへ	一 火者しハ	あ遍	者し	
					一 山ヨ	リ	下ルを	志やん	一 天上へ上ル事ヲ	里起多あ満		
					一 介む	リ	立を	志ぶやあん	一 納る事ヲ	ゑ志やむ	一 綱をハ	や
一 あ者ハ	あ者也	一 是ヨ	リ	ハ同断	一 物のおれる事ヲ	者ちり						
		一 何方ヨ	リ	来ルトいふヲハ	祢王ありき	一 とこへ行トいふヲ	祢多おまん					
					上	り	言葉				下言葉	
					一 志	り	をハ	おそろ	一 玉く起ハ	ち	一 玉門を	本川キ
一 な多ハ	者満な多	一 ま起	り	ハ	ゑりけび							
		一 まさ可	り	を	むくかり	一 可満ハ	よく遍	一 鉄ハ	く川ク王			
	一 脇差ハ	ゑむし	一 や	り	ハ	おつ婦	一 大豆ハ大豆也					
一 塀といふヲ	なんご路	一 く、	里	付多といふことを	志な、							
		徒	る	可ん		可も						
		但雨降	る	杯ハあふど免しと言								
		一 来	る	可と言事ヲハ	ゑ可	一 殿といふ事ヲハ	かもい					
				との								
		一 飛多	る	い事ヲハ	者らさん多	ひけ連	一 餅をハ	しと				
ん飛?	一 米	ちい志やまも	一 帰	る	可と言事ハ	へと川ふ						
ハ	のい本ろ	一 口ノ内ニ而物のとけ	さ	る	事ヲハ	るう						
		一 泊	る	といふ事ハ	連う志り	一 明日とハ	う志やた					
		一 海上な起多	る	をハ	のと飛り可	一 大波立る	あらいをハ	るやベ本				
な起多るをハ	のと飛り可	一 大波立	る	あらいをハ	るやベ本							
		一 火のもゆ	る	をハ	あ遍	あり	一 可つ堂、くをハ	あへれん本う				
		一 火ヲさしくべ	る	ヲ	連ん本う	一 腹病ヲ	徒いあ類可					
一 よふといふ事ヲ	本川ゑ	一 追懸	る	といふヲ	のし							
一 介むり立を	志ぶやあん	一 納	る	事ヲ	ゑ志やむ	一 綱をハ	や					
一 是ヨリハ	同断	一 物のおれ	る	事ヲ	者ちり							
一夜の事	志りくん祢	一 夜明多	る	こといふヲ	志り遍け							
一切の道具外底ヲ	あ志やま	一 破れ	る	物を	あん遍	うぶし						
一天をハ	里起多ん	一 雨のふ	る	をハ	あし	一 硯をハ						
		一 物の曲多	る	を	へうけ	一 少トいふを	本ん	一 物の遍多を	やひやる			
一 惜惜るとハ	へ婦け	一 物のこ本	る	、事ヲ	連うけ							
一 我といふヲてう可ひ	一 爰へ来		ル	といふヲ	多んこ多んゑく本ろ							
父ハ	志りか多者ちり	一 高き処へ上	ル	を	へめ寿							
一 いけとハ	おまん	一 何ニ而も出	ル	といふ事ハ	へとく							
能可といふ事を	飛るか	一 山へ上	ル	をハ	の本り遍めれ寿おりた							
		一 山ヨリ下	ル	を	志やん	一 天上へ上ル事ヲ	里起多あ満					
一 山ヨリ下	ル	志やん	一 天上へ上	ル	事ヲ	里起多あ満						
		一 何方ヨリ来	ル	トいふヲハ	祢王ありき	一 とこへ行トいふヲ	祢多おまん					
王ろ支と言事ヲハ	うゑん	一 死寿	類	と言事ヲハ	らい							
		但さがり多	類	言葉								

ハ 可つしやう — 四方のかこいのな 類 ヲハ 志やまのふ
 — 物の尔へ 類 といふハ 本う婦 — な満尔へな類事ハ 婦
 へ類といふハ 本う婦 — な満尔へな 類 事ハ 婦
 といふを 祢んこるべ — 物をと可め 類 事ヲ 年ん、
 うしお れ の事
 也 — 是ヨリハ同断 — 物のお れ る事ヲ 者ちり
 — 皆此方へよ れ といふヲ おふび多の志やたお可ひ
 — 一切の道具外底ヲ あ志やま — 破 れ る物を あん遍^うぶし
 — 此方へよ れ といふを 遍満可らい — 舟ニ乗レトハ ち婦^おふ
 よれといふを 遍満可らい — 舟ニ乗 レトハ ち婦^おふ
 — う 連 しいと言事ハ きろ、あん — 肴ト言事ハ せ川婦
 先ゆけと言ヲ 本起の者い — 跡ニ残 連 といふヲようしおまん
 — こ 連 てもといふヲ たん遍^祢 可い起飛るか — 物ヲ法を
 王 ろ 支と言事ヲハ うゑん — 死寿類と言事ヲハ らい
 右同断
 一 御なべ ふれ可尔志ゆ — むし ろ りハ いぬへ — 火者しハ あ遍^者し
 — い ろ ーハ あ遍^者 — 吞事をハ くう — 薪と言事ハ ちく尔
 一 喰事をハ あ遍^者 — 吞事 を ハ くう — 薪と言事ハ ちく尔
 — 火薪と云事 を ハ あべあ連 — 水をハ 王川可
 一 火薪と云事をハ あべあ連 — 水 を ハ 王川可
 — 湯 を ハ せ、可 — 汁をハ おは — 塩をハ 尔し□
 — 湯をハ せ、可 — 汁をハ おは — 塩をハ 尔し□
 せ、可 — 汁をハ おは — 塩をハ 尔し□
 — 塩をハ 志川本 — 粥をハ うせ — 行事ハ おま□
 一 塩をハ 志川本 — 粥をハ うせ — 行事ハ おま□
 — 衣類 を ハ ちめ婦 — お川と、いふ事をハ ほく
 衣類をハ ちめ婦 — お川と、いふ事 を ハ ほく
 — 妻 を ハ まちい — 女をハ 本川祢 — 子共ヲハ 本^ほ
 一 妻をハ まちい — 女 を ハ 本川祢 — 子共ヲハ 本^ほ
 — 男の子 を ハ 本く年本^ほ — 女の子をハ ま川年本^ほ
 男の子をハ 本く年本^ほ — 女の子 を ハ ま川年本^ほ
 — むごひといふ事 を ハ おの、 — 尔くひといふ事をハ 志とま
 いふ事をハ おの、 — 尔くひといふ事 を ハ 志とま
 — そ那多と言事 を ハ ちちやう可ひ — み多くないと言事ハ 可もやし
 — 父殺ト言事 を ハ おな多ら — 母殺ト言事ヲハ おなバ者
 い事ヲハ 者らさん多^ひけ連 — 餅 を ハ しと
 — ま那こ を ハ し起 — 座當をハ 志起なへ — 腹ヲハ 志川く
 一 ま那こをハ し起 — 座當 を ハ 志起なへ — 腹ヲハ 志川く
 一 鮭ノ魚ヲハ 志べ 鱒ノ魚 を ハ いじ屋耳
 — たこ を ハ あ川い那 — 鮑ヲハ あい飛^者 — 稲ヲハ せ
 一 坊主をハ 遍そり — 山ノ神 を ハ 遍そり — 山ノ神をハ の本^類可もい — 山ヲハ
 — 紙 を ハ 可ん飛? — 米 ちい志やまも — 帰る可と言事ハ へ
 一口 を ハ 者^{ろう} — 貴キ事ハ くミち 亦 志やう可い — 骨
 折と
 — 難儀 を ハ ころ — 太儀ト言事ハ 右同断 — 煩ヲハ やいの婦
 も 右同断 — 鮎ヲハ む — 鯨 を ハ くん遍?
 — 鯛 を ハ せいましけ — 海川の貝類をハ せい
 一 鯛をハ せいましけ — 海川の貝類 を ハ せい
 も てむ尔 — 濱ハ お多 — 砂 を ハ 右
 — 磯ハ し満 — 畑 を ハ とひ — 田ハ 田那り少も無之也
 — 杉の木 を ハ 志ゆんぐ — 松をハ 婦川婦 — くりをハ やむ
 一 杉の木をハ 志ゆんぐ — 松 を ハ 婦川婦 — くりをハ やむ
 んぐ — 松をハ 婦川婦 — くり を ハ やむ

一 桑ノ木 を ハ く連婦尔 一 梨の木ハ 右同断 一 柿ハ右同断 一本も
 無之
 一 としぬけと生物 一 川 を そハ え志やまん 一 蛇ハ とく尔
 一家 を ハ チセ 一 鷺ハ か者^ゝちり 一 熊鷹 あち
 川蟬ハ 志やう可ひ 一 山姥 を ハ 志よう多んころ 一 や年ハ せ起たひ
 一 戸 を ハ あ者^ゝ 一 何ニ而も長キ物ハ 志をふ 茶ハ茶也
 同断 一 茶せん 右同断 一 ご起 を い多げ
 一 座敷をハ しゃう 一 寝間を しゃうき 一 臺所を う志や
 一 寝間を しゃうき 一 臺所 を しゃうき 一 臺所を う志や
 う 一 寝間を しゃうき 一 臺所 を う志や
 水走り 右同断 一 志やくし を ハ 可せう婦 一 飛さくハ 婦起な
 一 魚 を 突や寿ハ をうつ婦 一 自在か起ヲハ 志や王□
 一 魚を突や寿ハ を うつ婦 一 自在か起ヲハ 志や王□
 一 惣而山の木 を ハ ちく尔といふ 一 山ノ谷をハ 遍つ徒る
 山の木をハ ちく尔といふ 一 山ノ谷 を ハ 遍つ徒る
 一 山ノ尾 を ハ くう 一 山ノ平ハ う類ことり 一 山ノ頭上を ゆぶり
 きたい
 一 山ノ平ハ う類ことり 一 山ノ頭上 を ゆぶりきたい
 一 山ノ後ハ おしまけ 一 山ノ下 を ハ ゆぶりやうろうほう
 ふ、 一 妻ハ こしまち 一 女房 を まち
 ハ 志りか多者ちり 一 高き処へ上ル を へめ寿
 一 いそけト言う を ハ 右同断 一 御太儀ト言を うちな可連
 けト言うをハ 右同断 一 御太儀ト言 を うちな可連
 舟ノと満ハ やれきな 観音立給ふ処 を ハ あなま希
 一 海上な起多る を ハ のと飛り可 一 大波立るあらいをハ るやベ本
 をハ のと飛り可 一 大波立るあらい を ハ るやベ本
 一 火のもゆる を ハ あ遍^ゝあり 一 可つ堂、くをハ あへれん本う
 ゆるをハ あ遍^ゝあり 一 可つ堂、く を ハ あへれん本う
 一 寒起 を ハ めらいけ 一 あつ起をハ 本う婦け
 一 寒起をハ めらいけ 一 あつ起 を ハ 本う婦け
 一 天氣能 を ハ 志り飛類可 一 天をハ 志り 一 何ニ而も
 一 天氣能をハ 志り飛類可 一 天 を ハ 志り 一 何ニ而も
 可といふ事を 飛^ゝるか 一 山へ上ル を 飛^ゝるか 一 山へ上ルをハ の本り遍めれ寿おりた
 一 山ヨリ下ル を ハ の本り遍めれ寿おりた
 なんご路 一 く、里付多といふこと を 志やん 一 天上へ上ル事ヲ 里起多あ満
 一 沖ニ在嶋 を 志な、
 一 沖ニ在嶋 を 連婦多ん嶋の本^ゝり 一 石をハ しま多嶋と言
 一 石 を ハ しま多嶋と言
 一 沖 を ハ 連婦多 一 是悲ないといふを ち連ん可ひ
 一 沖をハ 連婦多 一 是悲ないといふ を ち連ん可ひ
 一 介むり立 を 志ぶやあん 一 納る事ヲ ち志やむ 一 綱をハ や
 ん 一 納る事ヲ ち志やむ 一 綱 を ハ や
 物ヲこ本寿事ヲ 本いつけ 一 日の暮 を 徒ふらんむ
 一 昼 を ハ とうかつふ 一 昼過をハ とうかつふ本け連
 一 昼をハ とうかつふ 一 昼過 を ハ とうかつふ本け連
 一 今日 を たんど 明日を 尔志や多 一 あさ川てヲ おや志ゆむ
 一 今日を たんど 明日 を 尔志や多 一 あさ川てヲ おや志ゆむ
 一 明後日を 志むけ 一 昨日を ぬまん 一 昨日を 本しけのぬまん
 一 明後日を 志むけ 一 昨日を ぬまん 一 昨日を 本しけのぬまん
 一 昨日を ぬまん 一 昨日を 本しけのぬまん
 一 昨日を ぬまん 一 昨日を 本しけのぬまん
 一 見事といふ を いらま可し尔 一 浦山敷を あいの者^ゝ
 いふを いらま可し尔 一 浦山敷 を あいの者^ゝ
 ふヲ 飛る可のおまん 一 よいといふ を 飛^ゝるか
 たん遍^ゝ祢 可い起飛るか 一 物ヲ法 を
 一 御前様といふ を ちお可ひ 一 うぬとハ や尔 一 一切の道具の
 底 を ハ ら婦^ゝ多 一 一切ノ物の内ニ在をハ ら婦^ゝ多お可ひ

をハ	ら婦 ^ゞ 多	一切ノ物の内ニ在	を	ハ	ら婦 ^ゞ 多お可ひ
の道具外底ヲ	あ志やま	— 破れる物	を	あん遍 ^ゞ うぶし	
		— 一人の物	を	あんぬんくる遍 ^ゞ	— 何者といふヲ 衿んくう
		— 一万ノ物誰可物といふ	を	衿んこるべ	— 物をと可め類事ヲ 年ん、
物誰可物といふを	衿んこるべ	— 物	を	と可め類事ヲ 年ん、	
		— 天	を	ハ	里起多ん
— 天をハ	里起多ん	— 雨のふる	を	ハ	あし
起多ん	— 雨のふるをハ	あし	を	ハ	— 硯をハ
		— 一舟のとも	を	ハ	
ともをハ	ちつ婦お志よろ	— 舟ノ中	を	ハ	ちつ婦お志よろ
		— 舟の帆	を	ハ	ちつふのしけた
や	— 帆柱 ち川婦可や尔	— 繩	を	可や	— 帆柱 ち川婦可や尔
		— 王ら	を	を	— 繩を 者りき可
		— 草二而も何二而も苜候事	を	ハ	王つてし
而も苜候事を	か満かり	— 物	を	を	— 黒米 むりくり
苜候事を	か満かり	— 物を突	を	を	— 白米ヲ 飛 ^ゞ りけり
	— 米ハ 志あ	— 人	を	を	か満かり
		— 正月	を	を	— 物を突を ゆだ
— 一物の曲多る	を	— 一物の曲多る	を	を	を
— 一物の曲多るを	へうけ	— 少トいふ	を	を	同道シ而合せんといふ
— 少トいふを	本ん	— 物の遍多	を	を	— 徒らハゑくぬ可るなんころ
	— 一方へよれといふ	— 色トいふ	を	を	とい多年
— 色トいふを	連多類べ	— 黒トいふ	を	を	— 二月ヲ 者ぶらく
		— 木綿	を	を	— 三月ヲ もちうふ
— 下帯を	飛やう川、け	— 手ぬくい	を	を	へうけ
		— 一川ぎ	を	を	— 少トいふを 本ん
— 一川ぎをハ	な者堂類	— 弓	を	を	— 一物の遍多を やひやる
な者堂類	— 弓を くう	— 矢	を	を	— 本ん
		— 矢ノ根	を	を	— 一物の遍多を やひやる
— 一よろこびを	おのふ、	— 一なけく	を	を	を
— 一なけくを	お志よら	— 一念頃成近付	を	を	を
躰寿 ^ゞ くニとハ	あち可セしけ	— 一道	を	を	を
		— 陸道	を	を	を
— 陸道を	屋べ可類	— 多者こ	を	を	を
		— 火ヲもミテ出ス	を	を	を
— 木の耳の本くちハ	かる志	— 一銭	を	を	を
		— 一本しいこと	を	を	を
— 汗の出を	本婦らい	— 一に志ん	を	を	を
— 一に志んをハ	てろき	— 一物ノ多有事	を	を	を
		— 一兄	を	を	を
— 一兄を	ゆふ本 ^ゞ う	— 一弟	を	を	を
う	— 一弟をハ	者 ^ゞ 、起	を	を	を
		— 一妹	を	を	を
— 一妹をハ	飛志やう本 ^ゞ う	— 一乳	を	を	を
う	— 一乳をハ	ゑ可し	を	を	を
		— 一飛ち ^ゞ	を	を	を
— 一笠ハ	かぶら	— 一舟の可ひ	を	を	を
— 一舟の可ひを	かぢ	— 一婦しき	を	を	を
不知といふ事ハ	いらもし可れ	— 一腹	を	を	を
		— 一鼻	を	を	を
— 一鼻を	ゑ川婦	— 一く志やミ	を	を	を
婦	— 一く志やミを	ゑしな	を	を	を
		— 一耳	を	を	を
		— 一血	を	を	を
			を	を	を

一 血をハ	と川と	一 腰	を	ハ	いへけ	一 きんハ	の起
おそろ	一 玉く起ハ	ち	一 志り	を	ハ	おそろ	一 玉く起ハ
	ち	一 玉門	を	本川キ			一 玉門を
		一 女	を	め	のこ	一 念頃人ハ	おもひ
こ	一 念頃人ハ	おもひ	一 も、	を	ハ	おむ	一 も、をハ
			一 飛ぶざ	を	ハ	こ可しや者	一 こむらをハ
飛ぶざをハ	こ可しや者	一 こむら	を	ハ	う連べ	一 足ハ	て満
	一 ゆびハ	て起	一 乳吞事	を	とつと	いく連といふ	
本うぐ王んとの	お起くるミ	一 弁慶	を	ハ	志やまよん類		
		一 庄屋	を	ハ	おとな	一 な多ハ	者満な多
						一 ま起りハ	ゑりけび
		一 まさ可り	を	むく	かり	一 可満ハ	よく遍
	一 冬ハ	ま多	一 めし	ヲ	ハ	あま母	一 飛ヘヲハ
ま多	一 めしヲハ	あま母	一 飛ヘ	ヲ	ハ	飛や者	
			一 粟	ヲ	ハ	むじ路	88
						一 火ヲハ	あ遍
						一 あめヲハ	あぶと
一 粟ヲハ	むじ路	一 火	ヲ	ハ	あ遍	一 あめヲハ	あぶと
むじ路	88	一 火ヲハ	あ遍	一 あ	ヲ	ハ	あぶと
		一 雪	ヲ	ハ	お者	せ	一 風ヲハ
	一 雪ヲハ	お者	せ	一 風	ヲ	ハ	連いら
	せ	一 風ヲハ	連いら	一 日月	ヲ	ハ	徒、婦
				一 星	ヲ	ハ	のちう
	一 星ヲハ	のちう	一 雲	ヲ	ハ	のちう	一 雲ヲハ
ちう	一 雲ヲハ	のちう	一 人	ヲ	ハ	志やも	一 人ヲハ
			一 なく事	ヲ	ハ	ちし可類	一 念頃人ヲハ
						ハ	とくい
一 なく事ヲハ	ちし可類	一 念頃人	ヲ	ハ	とくい	一 我と言事ヲ	ハ
一 念頃人ヲハ	とくい	一 我と言事	ヲ	ハ	てう可ひ		
		王ろ支と言事	ヲ	ハ	うゑん	一 死寿類と言事ヲハ	らい
と言事ヲハ	うゑん	一 死寿類と言事	ヲ	ハ	らい		
		一 物之無キ事	ヲ	ハ	い志やま	一 物の在事ヲハ	あ年ハお可い
之無キ事ヲハ	い志やま	一 物の在事	ヲ	ハ	あ年ハお可い		
		一 浪	ヲ	ハ	の多	一 海ヲハ	あ川い
	一 浪ヲハ	の多	一 海	ヲ	ハ	あ川い	一 舟をハ
			一 足袋	ヲ	ハ	けり	一 川をハ
						遍川	一 上川と言事ヲハ
						いた	遍
の多	一 海ヲハ	あ川い	一 舟	を	ハ	ちつ婦	
	一 足袋ヲハ	けり	一 川	を	ハ	遍川	一 上川と言事ヲハ
			一 川をハ	遍川	一 上川と言事	ヲ	ハ
						遍	ないた
と言事ヲハ	者	那い多	一 川の深事	ヲ	ハ	お本	
			一 同浅キと言事	ヲ	ハ	お者く	一 右道と言事ヲハ
キと言事ヲハ	お者く	一 右道と言事	ヲ	ハ	者るきるう		
		一 中道と言事	ヲ	ハ	志ん志起るう	一 左道と言事ヲハ	志もんるう
事ヲハ	志ん志起るう	一 左道と言事	ヲ	ハ	志もんるう		
		一 道廣キと言事	ヲ	ハ	ほろ	一 道寿く那支と言事ヲハ	ほん
言事ヲハ	ほろ	一 道寿く那支と言事	ヲ	ハ	ほん		
		一 来る可と言事	ヲ	ハ	ゑ可	一 殿といふ事ヲハ	かもいと
事ヲハ	ゑ可	一 殿といふ事	ヲ	ハ	かもいと		
		一 將軍様	ヲ	ハ	ほんの可もひ	一 禁中様ヲハ	ほんの可もひ
將軍様ヲハ	ほんの可もひ	一 禁中様	ヲ	ハ	ほんの可もひ		
		一 神	ヲ	ハ	志いのの本り可もひ	一 侍と言事ヲハ	尔し者
ハ	志いのの本り可もひ	一 侍と言事	ヲ	ハ	尔し者		
		一 内ノ者と言事	ヲ	ハ	うしおい	一 その物と言事ヲハ	婦
言事ヲハ	うしおい	一 その物と言事	ヲ	ハ	婦		
ちい	一 女をハ	本川祢	一 子共	ヲ	ハ	本	ほ

— き川く尔くひ事	ヲ	ハ	本ろのやい志と満	— 御身ト言事ハ	や尔
殺ト言事をハ おな多ら	ヲ	ハ	おなバ者		
— き多ひと言事	ヲ	ハ	い川志や介り	— さむいと言事ハ	めいらいけ連
— 飛多るい事	ヲ	ハ	者らさん多ひけ連	— 餅をハ	しと
— あ多、可と言事	ヲ	ハ	ほ川婦	— 痛ト言事ヲハ	い多しや(ゝ)
多、可と言事ヲハ	ヲ	ハ	い多しや(ゝ)		
し起	ヲ	ハ	志川く		
— 座當をハ 志起なへ	ヲ	ハ	志べ	鱒ノ魚をハ	いじ屋耳
— 鮭の魚	ヲ	ハ	あい飛	— 稲ヲハ	せ
— たこをハ あ川い那	ヲ	ハ	せ		
川い那	ヲ	ハ	— 稲ヲハ		
— 鮑ヲハ	ヲ	ハ			
— 稲	ヲ	ハ			
— 山ノ神をハ の本類可もい	ヲ	ハ			
— 山	ヲ	ハ			
— 海ノ神ト言事	ヲ	ハ	あついで可もい	— 酒ハ酒なり	— 熊ヲハ
あついで可もい	ヲ	ハ	本くゆく		
— 熊	ヲ	ハ	本くゆく		
— 鹿	ヲ	ハ	ゆつく	— 水ヲハ	遍川可もひ
	ヲ	ハ	ゆつく	— 水ヲハ	遍川可もひ
— 鹿ヲハ	ヲ	ハ	遍川可もひ	— 久敷ト言事ハ	な可らて
— 水神	ヲ	ハ	遍川可もひ	— 久敷ト言事ハ	な可らてい
— 太儀ト言事ハ	ヲ	ハ	やいの婦		
右同断	ヲ	ハ	やいの婦		
— 煩	ヲ	ハ	るう		
のい本ろ	ヲ	ハ	るう		
— 口ノ内ニ而物のとける事	ヲ	ハ	るう		
— 酸き事ハ	ヲ	ハ	志う		
志や可け	ヲ	ハ	志う		
— よめ取	ヲ	ハ	志う		
— むこ取も	ヲ	ハ	む	— 鯨をハ	くん遍?
右同断	ヲ	ハ	む	— 鯨をハ	くん遍?
— 鮎	ヲ	ハ	徒ふもこりゝ	— のりハ	お者こ婦
— 惣而丸キ貝	ヲ	ハ	徒ふもこりゝ	— のりハ	お者こ婦
可つしやう	ヲ	ハ	志やまのふ		
— 四方のかこいのな類	ヲ	ハ	志やまのふ		
魚を突や寿ハ	ヲ	ハ	志や王□		
をうつ婦	ヲ	ハ	志や王□		
— 自在か起	ヲ	ハ	志や王□		
人	ヲ	ハ	志や王□		
— 火	ヲ	ハ	さしくべるヲ	連ん本う	— 腹病ヲ
— 火ヲさしくべる	ヲ	ハ	さしくべるヲ	連ん本う	徒いあ類可
連ん本う	ヲ	ハ	連ん本う	— 腹病ヲ	徒いあ類可
— 腹病	ヲ	ハ	徒いあ類可		
火ヲさしくべるヲ	ヲ	ハ	徒いあ類可		
連ん本う	ヲ	ハ	徒いあ類可		
— 腹病	ヲ	ハ	徒いあ類可		
ヨリ下ルを	ヲ	ハ	里起多あ満		
志やん	ヲ	ハ	里起多あ満		
— 天上へ上ル事	ヲ	ハ	里起多あ満		
言事	ヲ	ハ	ほつ本う		
ゑ志起なん	ヲ	ハ	ほつ本う		
— おけといふ事	ヲ	ハ	ほつ本う		
— 先ゆけと言	ヲ	ハ	本起の者い	— 跡ニ残連といふヲ	ようしおまん
言ヲ	ヲ	ハ	本起の者い	— 跡ニ残連といふヲ	ようしおまん
本起の者い	ヲ	ハ	ようしおまん		
— 跡ニ残連といふ	ヲ	ハ	ようしおまん		
— 堀といふ	ヲ	ハ	なんご路	— く、里付多といふことを	志なゝ
— 堀	ヲ	ハ	なんご路	— く、里付多といふことを	志なゝ
— 飛げ	ヲ	ハ	連起	— 齒ヲハ	みまけ
— 飛げヲ	ヲ	ハ	連起	— 齒ヲハ	みまけ
連起	ヲ	ハ	連起	— 齒ヲハ	みまけ
— 齒ヲハ	ヲ	ハ	みまけ	— 舌ヲ	者るう
みまけ	ヲ	ハ	みまけ	— 舌ヲ	者るう
— 舌	ヲ	ハ	者るう		
— よぶといふ事	ヲ	ハ	者るう		
— よぶ	ヲ	ハ	者るう		
といふ事ヲ	ヲ	ハ	本川ゑ	— 追懸るといふヲ	のし
本川ゑ	ヲ	ハ	本川ゑ	— 追懸るといふヲ	のし
— 追懸るといふ	ヲ	ハ	のし		
— 徒なぐといふ	ヲ	ハ	とく事ヲ	飛多	
志りごて	ヲ	ハ	とく事ヲ	飛多	
— 物	ヲ	ハ	とく事ヲ	飛多	
なぐといふ	ヲ	ハ	飛多		
志りごて	ヲ	ハ	飛多		
— 物ヲとく事	ヲ	ハ	飛多		
— 者な寿事	ヲ	ハ	志ゆら	— 物ヲ追といふ	おけ遍
— 者な寿事ヲ	ヲ	ハ	志ゆら	— 物ヲ追といふ	おけ遍
志ゆら	ヲ	ハ	追といふ	おけ遍	
— 物	ヲ	ハ	追といふ	おけ遍	
連いら	ヲ	ハ	ハ	者うけ	
— 北風ハ	ヲ	ハ	ハ	者うけ	
まく那	ヲ	ハ	ハ	者うけ	
— 静	ヲ	ハ	ハ	者うけ	
— 介むり立を	ヲ	ハ	ゑ志やむ	— 網をハ	や
志ぶやあん	ヲ	ハ	ゑ志やむ	— 網をハ	や
— 納る事	ヲ	ハ	者ちり		
— 是ヨリハ同断	ヲ	ハ	者ちり		
— 物のおれる事	ヲ	ハ	者ちり		
— 物	ヲ	ハ	者ちり		
— 物ヲ本寿事	ヲ	ハ	本いつけ	— 日の暮を	徒ふらんむ
— 物ヲ	ヲ	ハ	本いつけ	— 日の暮を	徒ふらんむ
本いつけ	ヲ	ハ	本いつけ	— 日の暮を	徒ふらんむ
— 日の暮を	ヲ	ハ	徒ふらんむ		
事	ヲ	ハ	志り遍け		
志りくん祢	ヲ	ハ	志り遍け		
— 夜明多ること	ヲ	ハ	志り遍け		
いふヲ	ヲ	ハ	志りおのまん	— 昼前といふヲ	とののしけ
志りおのまん	ヲ	ハ	志りおのまん	— 昼前といふヲ	とののしけ
— 昼前といふ	ヲ	ハ	とののしけ		
— 暁といふ	ヲ	ハ	とののしけ		
— 暁	ヲ	ハ	とののしけ		
いふヲ	ヲ	ハ	おや志ゆむ		
志りおのまん	ヲ	ハ	おや志ゆむ		
— 昼前といふ	ヲ	ハ	おや志ゆむ		
明日を	ヲ	ハ	おや志ゆむ		
— あさ川て	ヲ	ハ	おや志ゆむ		
— 恋事	ヲ	ハ	ゑち本可ひ	— むさい事ヲ	いつ志やけ連
— 恋事ヲ	ヲ	ハ	ゑち本可ひ	— むさい事ヲ	いつ志やけ連
ゑち本可ひ	ヲ	ハ	いつ志やけ連		
— むさい事	ヲ	ハ	いつ志やけ連		
— 既ニ言事	ヲ	ハ	お志やうら	— よふ来多といふヲ	飛る可
— 既	ヲ	ハ	お志やうら	— よふ来多といふヲ	飛る可
事ヲ	ヲ	ハ	お志やうら	— よふ来多といふヲ	飛る可
お志やうら	ヲ	ハ	お志やうら	— よふ来多といふヲ	飛る可
— よふ来多といふ	ヲ	ハ	飛る可		
— 皆此方へよれといふ	ヲ	ハ	飛る可		
— 皆	ヲ	ハ	飛る可		
此方へよれといふ	ヲ	ハ	おふび多の志やたお可ひ		
— 皆此方へよれといふ	ヲ	ハ	おふび多の志やたお可ひ		
— よく行とふ	ヲ	ハ	飛る可のおまん	— よいといふを	飛るか
— よく	ヲ	ハ	飛る可のおまん	— よいといふを	飛るか
行とふ	ヲ	ハ	飛る可のおまん	— よいといふを	飛るか

	— こ連でもといふ	ヲ	たん遍 [〃] 祢 可い起飛るか	— 物ヲ法を
	ヲ たん遍 [〃] 祢 可い起飛るか	ヲ	法を	
ハ	王な本つ 一東ハ 志年志やけ 二十五	ヲ	ハ あしき年い可志満本つ	右是迄物の数可そへ候事
	— 誰子トといふ	ヲ	祢尔本 [〃] ほ	— 御身可子トといふヲ や尔本 [〃] うほ
	ふヲ 祢尔本 [〃] ほ	ヲ	や尔本 [〃] うほ	
	— 何方ヨリ来ルトといふ	ヲ	ハ 祢王ありき	— とこへ行トといふヲ 祢多おまん
ヲハ	祢王ありき	ヲ	祢多おまん	
	— 一切の道具外底	ヲ	あ志やま	— 破れる物を あん遍 [〃] うぶし
物を	あんぬんくる遍 [〃]	ヲ	祢んくう	
	てし — 黒米 むりくり	ヲ	飛 [〃] りけり	
ふを	祢んこるべ	ヲ	年ん、	
	— 物をと可め類事	ヲ	てう可ひ	— 爰へ来ルといふヲ 多んこ多んゑく本ろ
	— 我といふ	ヲ	多んこ多んゑく本ろ	
我といふヲ	てう可ひ	ヲ	者ぶらく	— 三月ヲ もちうふ
	— 正月を	ヲ	もちうふ	
年	— 二月ヲ 者ぶらく	ヲ	きうう堂川ふ	— 五月ヲ 志ん志 [〃] つ婦
	— 三月	ヲ	志ん志 [〃] つ婦	
	— 四月ヲ きうう堂川ふ	ヲ	まうつ、婦	— 七月ヲ 尔よらく徒ふ
	— 五月	ヲ	尔よらく徒ふ	— 八月ヲ やるいつふ
	— 六月	ヲ	やるいつふ	
	— 六月ヲ まうつ、婦	ヲ	う連ほけつ婦	— 十月ヲ 志ゆなん徒婦
	— 七月ヲ 尔よらく徒ふ	ヲ	志ゆなん徒婦	
	— 八月	ヲ	くゑ可ひつ婦	— 十二月ヲ ちう類徒婦
	— 九月	ヲ	ちう類徒婦	
	— 九月ヲ う連ほけつ婦	ヲ	志う年ん	— 赤キ事ヲ ふう連
	— 十月	ヲ	ふう連	
	— 十一月	ヲ	く	
— 十一月ヲ	くゑ可ひつ婦	ヲ	連うけ	
	— 十二月	ヲ	本くれ者 [〃] へ	— 火打ハ 火うち也
	— 青キ事	ヲ	もミて出スを	ち起志や、
— 青キ事ヲ	志う年ん	ヲ	志んぎ	— 本くちハ む尔ん
	— 赤キ事	ヲ	ある	
うせ川	— 袋ハ 右同断	ヲ	王	る支と言事ヲハ うゑん
惜るとハ	へ婦け	ヲ	王	— 死寿類と言事ヲハ らい
	— 物のこ本る、事	ヲ	し	
	— 者やくいそけといふ	ヲ	び	い祢
	— 火	ヲ	王	く満た可
ふ	お起らしの 410	ヲ	王	らをハ 王つてし
	— よ王川多可といふ	ヲ	ら	— 黒米 むりくり
もしけれ	— 腹を くい	ヲ	り	— 白米ヲ 飛 [〃] りけり
	— 痛事	ヲ	王	んとの お起くるミ
		ヲ	し	— 弁慶をハ 志やまよん類
		ヲ	あ	
		ヲ	鷹類	
		ヲ	—	
		ヲ	王	んとの お起くるミ
		ヲ	ん	— 弁慶をハ 志やまよん類
		ヲ	可	
		ヲ	可	
		ヲ	、	くをハ あへれん本う
		ヲ	、	里付多といふことを 志な、
		ヲ	、	事ヲ 連うけ
		ヲ	、	をハ おむ
		ヲ	、	廻申候節有増
		ヲ	、	いふ事をハ ほく
		ヲ	、	可と言事ヲハ ほ川婦
		ヲ	、	— 痛ト言事ヲハ い多しや (ゝ)
		ヲ	、	すハ とに

アイヌ語表記仮名索引

— 冬ハ	ま多	— めしヲハ	あ	ま母	— 飛ヘヲハ	飛や者 ^ゝ
— 粟ヲハ	むじ路	— 火ヲハ	あ	遍 ^ゝ	— あめヲハ	あぶと
— 火ヲハ	あ遍 ^ゝ	— あめヲハ	あ	ぶと		
		但雨降る杯ハ	あ	ふど免しと言		
事ヲハ	い志やま	— 物の在事ヲハ	あ	年ハおこい		
— 浪ヲハ	の多	— 海ヲハ	あ	川い	— 舟をハ	ちつ婦
		— 喰事をハ	あ	遍 ^ゝ	— 吞事をハ	くう
		— 火薪と云事をハ	あ	べあ連	— 水をハ	王川可
— 火薪と云事をハ	あべ		あ	連	— 水をハ	王川可
			あ	多、可と言事ヲハ	ほ川婦	— 痛ト言事ヲハ
— う連しいと言事ハ	きろゝ		あ	ん	— 肴ト言事ハ	せ川婦
	— たこをハ	— 鮑ヲハ	あ	川い那	— 鮑ヲハ	あい飛 ^ゝ
— たこをハ	あ川い那	— 鮑ヲハ	あ	い飛 ^ゝ	— 稲ヲハ	せ
	— 海ノ神ト言事ヲハ		あ	ついで	— 稲ヲハ	せ
— う久ひハ	志ぶん	— 蟹ハ	あ	ついで	— 酒ハ酒なり	— 熊ヲハ
— 蛙ハ	おま介るし	— 大蛇ハ	あ	ん者や		本くゆく
— 鷺ハ	か者 ^ゝ ちり	— 熊鷹	あ	い祢川婦	— 見ゝすハ	とに
		— 戸をハ	あ	者 ^ゝ	— 何ニ而も長キ物ハ	志をふ
— いろりハ	いぬへ	— 火者しハ	あ	遍 ^ゝ 者し		
— 朔ハ	かりこ	— 類共ハ	あ	者 ^ゝ		
なんご路	— 下二いよとハ	志りか多	あ	遍 ^ゝ		
と満ハ	やれきな	観音立給ふ処をハ	あ	なま希		
		— 火のもゆるをハ	あ	遍 ^ゝ あり	— 可つ堂ゝくをハ	あへれん本う
		— 火のもゆるをハ	あ	り	— 可つ堂ゝくをハ	あへれん本う
ハ	あ遍 ^ゝ あり	— 可つ堂ゝくをハ	あ	へれん本う		
くべるヲ	連ん本う	— 腹痛ヲ	あ	類可		
志やん	— 天上へ上ル事ヲ	里起多	あ	満		
— 西風ハ	志む連ら	— 東風ハ	あ	し	— 同飛可多も同前	
	— 介むり立を	志ぶや	あ	ん	— 納る事ヲ	ゑ志やむ
	— あ者 ^ゝ ハ		あ	者 ^ゝ 也	— 是ヨリハ同断	— 物のおれる事ヲ
を	いらま可しル	— 浦山敷を	あ	いの者 ^ゝ		者ちり
ニハ	連婦	四つニハ	あ	し起年ふ	六つニハ	い者ぬ遍 ^ゝ
		い年婦	あ	るあん遍 ^ゝ	八つニハ	徒遍 ^ゝ さん遍 ^ゝ
		五つニハ	あ	ん遍 ^ゝ	九つニハ	志年遍 ^ゝ さん遍 ^ゝ
		七つニハ	あ	ん遍 ^ゝ	八つニハ	徒遍 ^ゝ さん遍 ^ゝ
			あ	ん遍 ^ゝ	九つニハ	志年遍 ^ゝ さん遍 ^ゝ
			あ	しき年本つ	千ハ	王ん遍 ^ゝ 志年まな本つ
な本つ	— 一東ハ	志年志やけ	あ	しき年い可志満本つ	右是迄物の数可そへ候事	
— 何方ヨリ来ルトいふヲハ	祢王		あ	りき	— とこへ行トいふヲ	祢多おまん
	— 一切の道具外底ヲ		あ	志やま	— 破れる物を	あん遍 ^ゝ うぶし
具外底ヲ	あ志やま	— 破れる物を	あ	ん遍 ^ゝ うぶし		
		— 一人の物を	あ	んぬんくる遍 ^ゝ	— 何者といふヲ	祢んくう
天をハ	里起多ん	— 雨のふるをハ	あ	し	— 硯をハ	
者堂類	— 弓を	くう	あ	い		
		— 矢を	あ	いるむ	— 鉄砲ハ	鉄砲也
		— 矢ノ根を	あ	ち可せしけ	— 道をハ	る
		— 五躰寿 ^ゝ くことハ	あ	る		
可れ	— 腹を	くい	あ	とう	— 鴨ハ	こべ志
— 鶴ハ	遍多ちり	— 雁ハ	い	者やこ		
			い	ほれ		
			い	ち		
— 雪ヲハ	お者 ^ゝ せ	— 風ヲハ	い	可類	— 夏ハ	さく
ヲハ	ちし可類	— 念比人ヲハ	い	ら	— 日月ヲハ	徒ゝ婦
ハ	うゑん	— 死寿類と言事ヲハ	い	— 我と言事ヲハ	てう可ひ	
		— 物之無キ事ヲハ	い	志やま	— 物の在事ヲハ	あ年ハおこい
志やま	— 物の在事ヲハ	あ年ハおこ	い			

一 浪ヲハ の多 一 海ヲハ あ川 い 一 舟をハ ちつ婦
 ハ 遍川 一 上川と言事ヲハ 遍^レな い た
 一 下川と言事ヲハ 者^レ那 い 多 一 川の深事ヲハ お本
 可 一 殿といふ事ヲハ かも い との
 一 神ヲハ 志 い のの本り可もひ 一 侍と言事ヲハ 尔し者
 一 内ノ者と言事ヲハ うしお い 一 その物と言事ヲハ 婦
 一 妻をハ まち い 一 女をハ 本川祢 一 子共ヲハ 本^レほ
 一 き川く尔くひ事ヲハ 本^レのや い 志と満 一 御身と言事ハ やル
 一 き多ひと言事ヲハ い 川志や介^レり 一 さむいと言事ハ めいらいけ連
 い川志や介^レり 一 さむいと言事ハ めいらいけ連
 志や介^レり 一 さむいと言事ハ めいらいけ連
 と言事ヲハ ほ川婦 一 痛ト言事ヲハ い 多しや(ゝ)
 一 鮭ノ魚ヲハ 志べ 鱒ノ魚をハ い じ屋耳
 一 たこをハ あ川 い 那 一 鮑ヲハ あい飛^レ 一 稲ヲハ せ
 一 たこをハ あ川い那 一 鮑ヲハ あ い 飛^レ 一 稲ヲハ せ
 遍そり 一 山ノ神をハ の本^レ類可も い 一 山ヲハ
 一 海ノ神ト言事ヲハ あつ い 可もい 一 酒ハ酒なり 一 熊ヲハ 本くゆく
 一 海ノ神ト言事ヲハ あつ^レい可も い 一 酒ハ酒なり 一 熊ヲハ 本くゆく
 川可もひ 一 久敷ト言事ハ な可らて い
 一 紙をハ 可ん飛^レ? 一 米 ち い 志やまも 一 帰る可と言事ハ へと川ふ
 一 貴キ事ハ くミち 亦 志やう可 い 一 骨折と言事ハ 志んき
 太儀ト言事ハ 右同断 一 煩ヲハ や い の婦
 一 あ多満ハ 志や者^レ 一 飛多いハ の い 本ろ 一 口ノ内ニ而物のとける事ヲハ るう
 あ満いと言事ハ とふへ 一 口ノから い と言事ハ は類可流
 一 鯛をハ せ い ましけ 一 海川の貝類をハ せい
 せいましけ 一 海川の貝類をハ せ い
 一 蛙ハ おま介るし 一 大蛇ハ あ い 祢川婦 一 見、すハ とに
 一 雉子ハ無シ 一 山鳥ハ 婦ミ類 い 一 鳩ハ くしほ
 と い 多とも言
 一 鳩ハ くしゑと い 多 一 蟬ハ や起 一 川鳥ハ 可つけん
 一 茶せん 右同断 一 ご起を い 多げ
 へ 一?ハ 里可尔 一 者りハ い てめ尔
 丁ハ ゑびらけ 一 可んなべハ い よまれ
 一 一 ろりハ い ろりハ いぬへ 一 火者しハ あ遍^レ者し
 一 一 ろりハ いぬへ 一 火者しハ あ遍^レ者し
 類ことり 一 山ノ頭上を ゆぶりきた い
 一 おそ起事ハ かつむ い り 一 者や起事ハ 徒いなし
 事ハ かつむいり 一 者や起事ハ 徒 い なし
 一 骨折ハ い 志起^レなんご路 一 下二いとハ 志りか多あ遍^レ
 しくべるヲ 連ん本う 一 腹病ヲ 徒 い あ類可
 一 寒起をハ めら い け 一 あつ起をハ 本う婦け
 一 先ゆけと言ヲ 本起の者 い 一 跡ニ残連といふヲようしおまん
 一 小袖ハ 志やら遍 一 頭ノ髪 い もくふ
 一 南風ハ 同連 い ら 一 北風ハ まく那 一 静ヲハ 者うけ
 一 物ヲこ本寿事ヲ 本 い つけ 一 日の暮を 徒ふらんむ
 一 見事トいふを い らま可し尔 一 浦山敷を あいの者^レ
 いらま可し尔 一 浦山敷を あ い の者^レ
 亦 い ら志れな共
 恋事ヲ ゑち本可ひ 一 むさい事ヲ い つ志やけ連
 一 こ連てもといふヲ たん遍^レ祢 可 い 起飛るか 一 物ヲ法を
 三ツニハ 連婦 四つニハ い 年婦 五つニハ あし起年ふ 六つニハ い者ぬ遍^レ
 い年婦 五つニハ あし起年ふ 六つニハ い 者ぬ遍^レ
 一東ハ 志年志やけ 二十五ヲハ あしき年 い 可志満本つ 右是迄物の数可そへ候事
 一 正月を と い 多年 一 二月ヲ 者ぶらく 一 三月ヲ もちうふ
 月ヲ 尔よらく徒ふ 一 八月ヲ やる い つふ
 一 此方へよれといふを 遍満可ら い 一 舟ニ乗レトハ ち婦^レおふ

堂類	一弓を	くう	一矢を	あ	い	るむ	一鉄砲ハ	鉄砲也	一合掌ハ	お可む				
			一矢ノ根を	あ	い	ちゑん								
の耳の本くちハ	かる志	一銭をハ	一汗の出を	本婦ら	い	一に志んをハ	てろき	一物ノ多有事を	遍ろ					
			一不知といふ事ハ		い	らもし可れ	一腹を	くい	一痛事ヲ	ある				
いふ事ハ	いらもし可れ	一腹を	く	い	い	痛事ヲ	ある							
	一血をハ	と川と	一腰をハ	い	へけ	一きんハ	の起							
一ゆびハ	て起	一乳呑事を	とつと	い	く連といふ									
	同断	一御なべ	ふれ可尔志ゆ	一	むしろ	右同断								
			者や	こ	い									
			一星ヲハ	のち	う	一雲ヲハ	尔しくろ	一	人ヲハ	志やも				
人ヲハ	とくい	一我と言事ヲハ	て	う	可ひ									
		王ろ支と言事ヲハ		う	ゑん	一	死寿類と言事ヲハ	らい						
お者く	一	右道と言事ヲハ	者るきる	う										
		一	中道と言事ヲハ	志ん志起る	う	一	左道と言事ヲハ	志もんるう						
起るう	一	左道と言事ヲハ	志もんる	う										
			一	内ノ者と言事ヲハ	う	しおい	一	その物と言事ヲハ	婦					
喰事をハ	あ遍	一	呑事をハ	く	う	一	薪と言事ハ	ちく尔						
		一	塩をハ	志川本	一	粥をハ	う	せ	一	行事ハ	おま□			
			一	そ那多と言事をハ	ゑちや	う	可ひ	一	み多くないと	言事ハ	可もやし			
			一	口をハ	者ろ	う	一	貴キ事ハ	くミち	亦	志やう可い	一	骨折と言事ハ	志
						う	んき							
ろう	一	貴キ事ハ	くミち	亦	志や	う	可い	一	骨折と言事ハ	志んき				
		一	口ノ内ニ而物の	とける事ヲハ	る	う								
			一	苦キ事ハ	志	う	一	酸キ事ハ	志や可け	一	よめ取ヲハ	志う		
キ事ハ	志や可け	一	よめ取ヲハ	志	う									
				一	生子ハ	う	た	一	う久ひハ	志ぶん	一	蟹ハ	あんはや	
ふ志尔	一	猿ハ	一匹も無シ	一本	う	みんと	獣物猫このことし							
			一	あ婦ハ	志ら	う	一	婦よう	少もなし	一	うなかふし	ゑ可ふ年		
一	水こひ鳥	なし	一	鶯ハ	本ほ	う	くち							
				川蟬ハ	志や	う	可ひ	一	山姥をハ	志よう多んころ	一	や年ハ	せ起たひ	
蟬ハ	志やう可ひ	一	山姥をハ	志よ	う	多んころ	一	や年ハ	せ起たひ					
		一	者しハ	者す	一	なべ	志	う	一	釜	右同断			
				一	や年ハ	可つしや	う	一	四方のかこいのな類ヲハ	志やまのふ				
				一	座敷をハ	しや	う	一	寝間を	しやうき	一	臺所を	う志や	
一座敷をハ	しやう	一	寝間を	しや	う	き	一	臺所を	う志や					
		一	寝間を	しやうき	一	臺所を	う	志や						
走り	右同断	一	志やくしをハ	可せ	う	婦	一	飛さくハ	婦起な					
			一	魚を突や寿ハ	を	う	つ婦	一	自在か起ヲハ	志や王□				
				一	山ノ尾をハ	く	う	一	山ノ平ハ	う類ことり	一	山ノ頭上を	ゆぶりきたい	
一	山ノ尾をハ	くう	一	山ノ平ハ	う	類ことり	一	山ノ頭上を	ゆぶりきたい					
おしまけ	一	山ノ下をハ	ゆぶりや	う	ろうほう									
しまけ	一	山ノ下をハ	ゆぶりやうろ	う	ほう									
け	一	山ノ下をハ	ゆぶりやうろ	う	ほう									
		一	父ハ	者ん遍	一	母ハ	者本	う						
言うをハ	右同断	一	御太儀ト言を	連	う	ちな	可連							
			一	泊るといふ事ハ	連	う	志り	一	明日とハ	う志やた				
といふ事ハ	連う志り	一	明日とハ	う	志やた									
		一	物の尔へ類といふハ	本	う	婦	一	な満尔へな類事ハ	婦					
あり	一	可つ堂くをハ	あへれん本	う										
		一	火ヲさしくべるヲ	連ん本	う	一	腹痛ヲ	徒いあ類可						
起をハ	めらいけ	一	あつ起をハ	本	う	婦け								
起	なん	一	おけといふ事ヲ	ほつ本	う									
本起の者い	一	跡ニ残連といふヲよ	う	しおまん										
		一	齒ヲハ	みまけ	一	舌ヲ	者る	う						
		一	北風ハ	まく那	一	静ヲハ	者	う	け					

一 昼をハ と う かつふ 一 昼過をハ と う かつふ本け連
 昼をハ と う かつふ 一 昼過をハ と う かつふ本け連
 一 既ニ言事ヲ お志や う ら 一 よふ来多といふヲ 飛る可
 ぼ 一 御身可子トいふヲ や尔本 う ぼ
 あ志やま 一 破れる物を あん遍 う ぶし
 ぬんくる遍 一 何者といふヲ 祢んく う
 一 我といふヲて う 可ひ 一 爰へ来ルといふヲ 多んこ多んゑく本ろ
 一 二月ヲ 者ぶらく 一 三月ヲ もち う ぶ
 一 四月ヲ き う う堂川ふ 一 五月ヲ 志ん志^つ婦
 一 四月ヲ きう う 堂川ふ 一 五月ヲ 志ん志^つ婦
 一 六月ヲ ま う つ、婦 一 七月ヲ 尔よらく徒ふ 一 八月ヲ やるいつふ
 一 九月ヲ う 連ほけつ婦 一 十月ヲ 志ゆなん徒婦
 月ヲ くゑ可ひつ婦 一 十二月ヲ ち う 類徒婦
 一 物の曲多るを へ う け 一 少トいふを 本ん 一 物の遍多を やひやる
 一 青キ事ヲ 志 う 年ん 一 赤キ事ヲ ふ う 連
 青キ事ヲ 志う年ん 一 赤キ事ヲ ふ う 連
 志りき 一 浅黄のちらしハ に志や う
 一 木綿を う せ川 一 袋ハ 右同断 一 帯ヲ く
 一 下帯を 飛や う 川、け 一 手ぬくいを せん可起
 一 か川ぎをハ な者堂類 一 弓を く う 一 矢を あい
 ハ へ婦け 一 物のこ本る、事ヲ 連 う け
 一 兄を ゆふ本^う う 一 弟をハ 者、起 一 あ年を 志や者
 一 妹をハ 飛志や う 本う 一 乳をハ ゑ可し 一 飛ち^を 志
 一 妹をハ 飛志やう本 う 一 乳をハ ゑ可し 一 飛ち^を 志
 をハ こ可しや者^う 一 こむらをハ う 連べ 一 足ハ て満
 一 雪ヲハ お 者^せ 一 風ヲハ 連いら 一 日月ヲハ 徒、婦
 い志やま 一 物の在事ヲハ あ年ハ お 可い
 ヲハ 者^那い多 一 川の深事ヲハ お 本
 一 同浅キと言事ヲハ お 者く 一 右道と言事ヲハ 者るきるう
 一 内ノ者と言事ヲハ うし お い 一 その物と言事ヲハ 婦
 一 湯をハ せ、可 一 汁をハ お 者 一 塩をハ 尔し□
 本 一 粥をハ うせ 一 行事ハ お ま□
 一 衣類をハ ちめ婦 一 お 川と、いふ事をハ ほく
 一 むごひといふ事をハ お の、 一 尔くひといふ事をハ 志とま
 一 父殺ト言事をハ お な多ら 一 母殺ト言事ヲハ おなばハ
 事をハ おな多ら 一 母殺ト言事ヲハ お なバ者
 キ貝ヲハ 徒ふもこり、 一のりハ お 者こ婦^う
 一 海草ハ何ニても てむ尔 一 濱ハ お 多 一 砂をハ右
 一 蛙ハ お ま介るし 一 大蛇ハ あい祢川婦 一 見、すハ とに
 一 山ノ後ハ お しまけ 一 山ノ下をハ ゆぶりやうろうほう
 一 いけとハ お まん 一 何ニ而も出ルといふ事ハ へとく
 か 一 山へ上ルをハ の本り遍めれ寿 お りた
 起の者い 一 跡ニ残連といふヲようし お まん
 な寿事ヲ 志ゆら 一 物ヲ追といふ お け遍^う
 一 暁といふヲ 志り お のまん 一 昼前といふヲ とののしけ
 明日を 尔志や多 一 あさ川てヲ お や志ゆむ
 一 既ニ言事ヲ お 志やうら 一 よふ来多といふヲ 飛る可
 一 皆此方へよれといふヲ お ぶび多の志やたお可ひ
 皆此方へよれといふヲ おぶび多の志やた お 可ひ
 一 よく行とふヲ 飛る可の お まん 一 よいといふを 飛^るか
 王ありき 一 とこへ行トいふヲ 祢多 お まん
 一 御前様トいふを ゑち お 可ひ 一 うぬとハ や尔 一 一切の道具の
 一 一切ノ物の内ニ在をハ ら婦^多 お 可ひ
 一 舟のともをハ ちつ婦 お 志よろ 一 舟ノ中を ちつふのしけた
 遍満可らい 一 舟ニ乗レトハ ち婦^う お ぶ
 一 鉄砲ハ 鉄砲也 一 合掌ハ お 可む

	— よろこびを	お	のふ、	— なけくを	お	志よら	— 念比成近付を	
よろこびを	おのふ、	— なけくを	お	志よら	— 念比成近付を			
	— あの子といふ事	お	つ可ひ	— ま川寿くとハ	な	おまん		
事	おつ可ひ	— ま川寿くとハ	な	お	まん			
	— 違者といふ	お	起らしの	— よ王川多可といふヲ	志	んぎ		
	— 志りをハ	お	そろ	— 玉く起ハ	ち	— 玉門を	本川キ	
— 女を	めのこ	— 念比人ハ	お	もひ	— も、をハ	お	む	
— 念比人ハ	おもひ	— も、をハ	お	む				
	— 本うぐ王んとの	お	起くるミ	— 弁慶をハ	志	やまよん類		
	— 庄屋をハ	お	とな	— な多ハ	者満な多	— ま起りハ	ゑりけび	
— 脇差ハ	ゑむし	— やりハ	お	つ婦	— 大豆ハ	大豆也		
ゑ可	— 殿といふ事ヲハ	か	もいと	の				
— あ満いト言事ハ	とふへ	— 口ノ	か	らいと言事ハ	は	類可流		
	— 家をハ	ちせ	— 鶯ハ	か	者ちり	— 熊鷹	あち	
— 山ノ平地ハ	てなし	— 山ノ奥ハ	か	つち				
	— むこハ	か	ふ、	— 妻ハ	こしまち	— 女房を	まち	
— 姪ハ	ま川可りこ	— 甥ハ	か	りこ	— 一類共ハ	あ者		
	— 伯父ハ	志り	か	多者ちり	— 高き処へ上ルを	へめ寿		
	— おそ起事ハ	か	つむいり	— 者や起事ハ	徒いなし			
起	なんこ路	— 下二いよとハ	志り	か	多あ遍			
	能可といふ事を	飛	る	か	— 山へ上ルをハ	の	本り遍めれ寿おりた	
	— 昼をハ	とう	か	つふ	— 昼過をハ	とう	かつふ本け連	
をハ	とうかつふ	— 昼過をハ	とう	か	つふ本け連			
可のおまん	— よいといふを	飛	る	か				
こ連でもといふヲ	たん遍 ^レ 祢	可い	起飛	る	か	— 物ヲ法を		
	— 草二而も何二而も	菟候	事を	か	満かり	— 物を突を	ゆだ	
— 草二而も何二而も	菟候	事を	か	満	かり	— 物を突を	ゆだ	
	よつたなしの	か	る					
	— 木の耳の本くちハ	か	る	志	— 銭をハ	いちゑん		
— 本しいことを	らんるし	— 金ハ	か	尔	— 銀ハ	連多る	カル	
— 金ハ	カル	— 銀ハ	連	多	る	カ	ル	
	— 笠ハ	か	ぶら	— 舟の可ひを	か	ち	— 婦しきをハ	ね
— 笠ハ	かぶら	— 舟の可ひを	か	ち	— 婦しきをハ	ね		
	— まさ可りを	む	く	か	り	— 可満ハ	よく遍 ^レ	
	— 春ハ	者い	可	類	— 夏ハ	さく	— 秋ハ	徒可 ^レ くふ
者い可類	— 夏ハ	さく	— 秋ハ	徒	可 ^レ くふ			
	— なく事ヲハ	ちし	可	類	— 念比人ヲハ	とくい	— 我と言事ヲハ	てう可ひ
ヲハ	とくい	— 我と言事ヲハ	てう	可	ひ			
い	志やま	— 物の在事ヲハ	あ	年ハ	お	可	い	
	— 来る可と言事ヲハ	ゑ	可	— 殿といふ事ヲハ	か	もいと		
	— 将軍様ヲハ	ほんの	可	もひ	— 禁中様ヲハ	ほん、の	可もひ	
んの可もひ	— 禁中様ヲハ	ほん、の	可	もひ				
	— 神ヲハ	志いの	本	り	可	もひ	— 侍と言事ヲハ	尔し者
云事をハ	あべあ連	— 水をハ	王	川	可			
	— 湯をハ	せ、	可	— 汁をハ	お	者	— 塩をハ	尔し□
— そ那多と言事をハ	ゑちやう	可	ひ	— み多くないと	言	事ハ	可もやし	
ちやう可ひ	— み多くないと	言	事ハ	可	もやし			
をハ	遍そり	— 山ノ神をハ	の	本 ^レ	類	可	もい	
	— 海ノ神ト	言	事ヲハ	あ	つ	い	可	
鹿ヲハ	ゆつく	— 水神ヲハ	遍 ^レ	川	可	もひ	— 久敷ト	言
ハ	遍 ^レ	川	可	もひ	— 久敷ト	言	事ハ	
	— 紙をハ	可	ん	飛?	— 米	ちい	志	
う	— 貴き事ハ	く	ミ	ち	志	や	ま	
とふへ	— 口ノ	から	い	と	言	事ハ	者	
— 苦き事ハ	志う	— 酸	き	事ハ	志	や	可	
婦よう	少もなし	— う	な	か	ふ	し	ゑ	
							可	

川蟬ハ 志やう 可 ひ 一山姥をハ 志よう多んころ 一や年ハ せ起たひ
 一柱ハ ゆく寿へ 一?ハ 里 可 尔 一者りハ いてめ尔
 一や年ハ 可 つしやう 一四方のかこいのな類ヲハ 志やまのふ
 水走り 右同断 一志やくしをハ 可 せう婦 一飛さくハ 婦起な
 一屋くハん 右同断 一御なべ ふれ 可 尔志ゆ 一むしろ 右同断
 一姪ハ ま川 可 りこ 一甥ハ かりこ 一類共ハ あ者
 ハ 右同断 一御太儀ト言を うちな 可 連
 一海上な起多るをハ のと飛び 可 一大波立るあらいをハ るやべ本
 るヲ 連ん本う 一腹痛ヲ 徒いあ類 可
 一天氣能をハ 志り飛類 可 一天をハ 志り 一何二而も
 婦多 一是悲ないといふを ぬち連ん 可 ひ
 一見事トいふを いらま 可 し尔 一浦山敷を あいの者
 一恋事ヲ ぬち本 可 ひ 一むさい事ヲ いつ志やけ連
 志やうら 一よふ来多といふヲ 飛る 可
 皆此方へよれといふヲ おふび多の志やたお 可 ひ
 一よく行とふヲ 飛る 可 のおまん 一よいといふを 飛るか
 一こ連てもといふヲ たん遍^レ祢 可 い起飛るか 一物ヲ法を
 東ハ 志年志やけ 二十五ヲハ あしき年い 可 志満本つ 右是迄物の数可そへ候事
 一御前様トいふを ぬちお 可 ひ 一うぬとハ や尔 一一切の道具の
 一一切ノ物の内二在をハ ら婦^レ多お 可 ひ
 一我といふヲてう 可 ひ 一爰へ来ルといふヲ 多んこ多んぬく本ろ
 一舟の帆を 可 や 一帆柱 ち川婦可や尔 一繩を 者りき可
 一舟の帆を 可 や 一帆柱 ち川婦 可 や尔 一繩を 者りき可
 帆柱 ち川婦可や尔 一繩を 者りき 可
 人を同道シ而合せんといふ 徒らハぬくぬ 可 るなんころ
 一十一月ヲ くゑ 可 ひつ婦 一十二月ヲ ちう類徒婦
 一此方へよれといふを 遍満 可 らい 一舟二乗レトハ ち婦^レおふ
 飛やう川、け 一手ぬくいを せん 可 起
 一鉄砲ハ 鉄砲也 一合掌ハ お 可 む
 一あの子といふ事 おつ 可 ひ 一ま川寿くとハ ナルおまん
 一五躰寿^レくにとハ あち 可 せしけ 一道をハ る
 一陸道を 屋べ 可 類 一多者こをハ たん者^レこ
 妹をハ 飛志やう本う 一乳をハ ぬ 可 し 一飛ち^レを 志
 一笠ハ かぶら 一舟の 可 ひを かし 一婦しきをハ ね
 一不知といふ事ハ いらもし 可 れ 一腹を くい 一痛事ヲ ある
 一飛ぶぎをハ こ 可 しや者^レ 一こむらをハ う連べ 一足ハ て満
 ハ お者く 一右道と言事ヲハ 者る 可 きるう
 一う連しいと言事ハ 可 きろ、あん 一肴ト言事ハ せ川婦
 志やう可い 一骨折と言事ハ 志ん 可 き
 一宮守 無之 一蚊ハ 可 き、里 一者いハ も寿 一蜂ハ 志^レや屋
 一峯ハ 可 き 多ひ 一けら者^レハ の起 一入口ハ 本^レ、
 座敷をハ しやう 一寝間を しやう 可 き 一臺所を う志や
 又ハ 可 き者^レ下け共言
 う類ことり 一山ノ頭上を ゆぶり 可 きたい
 一舟ノと満ハ やれ 可 きな 観音立給ふ処をハ あなま希
 ころ志ん 可 き
 五十八前ノ五ツの言葉同前 百ハ あし 可 き 年本つ 千ハ 王ん遍^レ志年まな本つ
 つ 一東ハ 志年志やけ 二十五ヲハ あし 可 き 年い可志満本つ 右是迄物の数可そへ候事
 一何方ヨリ来ルトいふヲハ 祢王あり 可 き 一とこへ行トいふヲ 祢多おまん
 一帆柱 ち川婦可や尔 一繩を 者り 可
 一四月ヲ 可 き うう堂川ふ 一五月ヲ 志ん志^レつ婦
 一一切物の形ハ 志り 可 き 一浅黄のちらしハ に志やう
 出を 本婦らい 一に志んをハ てろ 可 き 一物ノ多有事を 遍ろ
 一く志やミを ぬしな 一耳を 可 き 志やら
 と川と 一腰をハ いへけ 一 可 き んハ の起
 一 中道と言事ヲハ 志ん志 可 起るう 一左道と言事ヲハ 志もんるう

一ま那こをハ	し起	一座當をハ	志起	一腹ヲハ	志川く
一鳩ハ	くしゑとい多	一蟬ハ	や起	一川鳥ハ	可つけん
をハ	志よう多んころ	一や年ハ	せ起		たひ
一峯ハ	き多ひ	一けら者ハ	の起	一入口ハ	本ゝ
くしをハ	可せう婦	一飛さくハ	婦起		な
一魚を突や寿ハ	をうつ婦	一自在か	起	ヲハ	志や王□
		一おそ	起	事ハ	かつむいり
一おそ起事ハ	かつむいり	一者や	起	事ハ	徒いなし
		一骨折ハ	い志起		なんご路
ルを	志やん	一天上へ上ル事ヲ	里起		下二いよとハ
		一休と言事	ゑ志起		志りか多あ遍
		一先ゆけと言ヲ	本起		なん
		一飛びヲ	連起		一おけといふ事ヲ
一こ連てもといふヲ	たん遍	祢	可い起		ほつ本う
連婦	四つニハ	い年婦	五つニハ	あし起	の者い
					一跡ニ残連といふヲ
					ようしおまん
					一齒ヲハ
					みまけ
					一舌ヲ
					者るう
					飛るか
					一物ヲ法を
					年ふ
					六つニハ
					い者ぬ遍
					多ん
					一雨のふるをハ
					あし
					一硯をハ
					起
					志やゝ
					一本くちハ
					むるん
					らしの
					一よ王川多可といふヲ
					志んぎ
					一あ年を
					志や者
					起
					一乳吞事を
					とつといく連といふ
					くるミ
					一弁慶をハ
					志やまよん類
					起
					一秋ハ徒可
					くふ
					く
					一星ヲハ
					のちう
					一雲ヲハ
					尔し
					く
					一我と言事ヲハ
					てう可ひ
					く
					一右道と言事ヲハ
					者るきるう
					く
					や共言
					く
					う
					一薪と言事ハ
					ちく尔
					く
					尔
					く
					年本
					ほ
					一女の子をハ
					ま川年本
					ほ
					く
					一水神ヲハ
					遍
					川可もひ
					一久敷ト言事ハ
					な可らてい
					く
					ミち
					亦
					志やう可い
					一骨折と言事ハ
					志んき
					ん遍?
					く
					連婦尔
					一梨の木ハ
					右同断
					一柿ハ右同断
					一本も無之
					尔
					く
					類
					一鶯ハ
					やと多
					く
					しほ
					く
					ち
					く
					しゑとい多
					一蟬ハ
					や起
					一川鳥ハ
					可つけん
					く
					一柱ハ
					ゆ
					く
					一山ノ尾をハ
					く
					う
					一山ノ平ハ
					う類ことり
					一山ノ頭上を
					ゆぶりきたい
					く
					多り
					一父ハ
					者ん遍
					一母ハ
					者本う
					く
					へと
					く
					ふ
					く
					那
					一静ヲハ
					者うけ
					く
					ん祢
					一夜明多ることいふヲ
					志り遍け

一人の物を あんぬん く る遍^〴 一何者といふヲ 祢んくう
 んぬんくる遍^〴 一何者といふヲ 祢ん く
 ひ 一爰へ来ルといふヲ 多んこ多んゑ く
 一王らをハ 王つてし 一黒米 むり く
 一人を同道シ而合せんといふ 徒らハゑ く
 正月を とい多年 一二月ヲ 者ぶら く
 六月ヲ まうつゝ婦 一七月ヲ 尔よら く
 一十一月ヲ く
 色トいふを 連多類ベ 黒トいふを く
 せ川 一袋ハ 右同断 一带ヲ く
 一か川ぎをハ な者堂類 一弓を く
 一者やくいそけといふヲ 本 く
 といふ事ハ いらもしけれ 一腹を く
 一本んのく本^〴ハ く
 ゆびハ て起 一乳吞事を とつとい く
 一本うぐ王んとの お起 く
 一まさ可りを むく 一まさ可りを むく
 一可満ハ よく遍^〴 一歙ハ く
 一可満ハ よく遍^〴 一歙ハ く
 一杉の木をハ 志ゆん ぐ
 一足袋ヲハ け
 や介^〴り 一さむいと言事ハ めいらい け
 一飛多^〴るい事ヲハ 者らさん多^〴ひ け
 苦キ事ハ 志う 一酸キ事ハ 志や可 け
 一鯛をハ せいまし け
 一としぬ け
 一蟬ハ や起 一川烏ハ 可つ け
 一まな板 右同断 一包丁ハ ゑびら け
 一山ノ後ハ おしま け
 一山ノ脇ハ 志やま け
 一寒起をハ めらい け
 ハ めらいけ 一あつ起をハ 本う婦 け
 一飛ばヲ 連起 一齒ヲハ みま け
 寿事ヲ 志ゆら 一物ヲ追といふ お け
 一北風ハ まく那 一静ヲハ 者う け
 一物ヲこ本寿事ヲ 本いつ け
 ん祢 一夜明多ることいふヲ 志り遍 け
 おのまん 一昼前といふヲ とののし け
 うかつふ 一昼過をハ とうかつふ本 け
 一明後日を 志む け
 昨日を ぬまん 一昨日を 本し け
 ぬち本可ひ 一むさい事ヲ いつ志や け
 万ハ 王な本つ 一東ハ 志年志や け
 婦お志よろ 一舟ノ中を ちつふのし け
 一黒米 むりくり 一白米ヲ 飛^〴り け
 一九月ヲ う連ほ け
 一物の曲多るを へう け
 一下帯を 飛やう川、 け
 一惜惜るとハ へ婦 け
 へ婦け 一物のこ本るゝ事ヲ 連う け
 一五躰寿^〴くことハ あち可せし け
 一血をハ と川と 一腰をハ いへ け
 な多ハ 者満な多 一ま起りハ ゑり け
 一茶せん 右同断 一ご起を い多 け
 一き多ひと言事ヲハ い川志や 介^〴り 一さむいと言事ハ めいらいけ連

一 燕ハ	ちひ屋川	一 可もめハ	可ひ	介	るし	一 大蛇ハ	あい祢川婦	一 見、すハ	とに
		一 難儀をハ		こ	ろ	一 太儀ト言事ハ	右同断	一 煩ヲハ	やいの婦
		一 惣而丸キ貝ヲハ	徒ふも	こ	り、	一 のりハ	お者こ婦		
ヲハ	徒ふも	こり、	一 のりハ	お者	こ	婦			
志やう	可ひ	一 山姥をハ	志よう	多	こ	ろ	一 や年ハ	せ起たひ	
山ノ	尾をハ	くう	一 山ノ	平ハ	う	類	こ	とり	一 山ノ頭上を
		一 むこハ	かふ、	一 妻ハ	こ	しまち	一 女房を	まち	
		一 姪ハ	ま川可り	一 甥ハ	かり	こ	一 類共ハ	あ者	
一 姪ハ	ま川可り	こ	一 甥ハ	かり	こ	一 類共ハ	あ者		
		一 骨折ハ	い志起	なん	こ	路	一 下ニ	いよとハ	志りか多あ遍
				なん	こ	ろ			
		一 癖といふヲ	なん	こ	路	一 く、	里付多といふことを	志な、	
		一 万ノ物誰可物といふを	祢ん	こ	る	べ	一 物をと	可め類事ヲ	年ん、
ヲてう	可ひ	一 爰へ	来ルといふヲ	多	こ	多	ん	ゑく	本ろ
道シ	而合	せんといふ	徒らハ	ゑく	ぬ	可	る	なん	こ
		屋ベ	可類	一 多者	こ	を	ハ	たん者	
		一 女を	めの	こ	一 念比人ハ	おもひ	一 も、	をハ	おむ
		一 飛ぎ	をハ	こ	可	し	や者	一 こむ	らをハ
		一 徒なぐ	といふ	志	ご	て	一 物ヲ	とく	事ヲ
		一 春ハ	者い	可類	一 夏ハ	さ	く	一 秋ハ	徒可
		一 飛多	る	い	事ヲハ	者	ら	さ	ん
		一 檜ノ	木ハ	ま	さ	一 婦	な	の	木
七つ	ニハ	ある	あん	遍	八つ	ニハ	徒	遍	
二ハ	徒	遍	さん	遍	九つ	ニハ	志	年	遍
				又	ハ	き	者	下	
		但	雨降	る	杯ハ	あ	ふ	ど	免
一 星	ヲハ	の	ち	う	一 雲	ヲハ	尔	し	く
		一 なく	事ヲハ	ち	し	可類	一 念比人	ヲハ	と
				の	本	り	可	も	ひ
		一 侍	ト	言	事ヲハ	尔	し	者	
		一 内ノ	者	ト	言	事ヲハ	う	し	お
		一 汁を	ハ	お	者	一 塩を	ハ	尔	し
可	ひ	一 み	多	く	な	い	ト	言	事ハ
		ハ	者	ら	さん	多	ひ	け	連
事	ヲハ	ほ	川	婦	一 痛	ト	言	事ヲハ	い
		一 ま	那	こ	を	ハ	し	起	一 座
		一 鯛	を	ハ	せい	ま	し	け	一 海
		一 磯	ハ	一 と	蛙ハ	お	ま	介	る
		一 婦	よう	少	も	な	し	一 う	な
		一 山	鳥ハ	婦	ミ	類	い	一 鳩	ハ
		一 鳩	ハ	く	し	ゑ	と	い	多
		一 や	年ハ	可	つ	し	や	う	一 四
		一 座	敷	を	ハ	し	や	う	き
		一 座	敷	を	ハ	し	や	う	き
		一 山	ノ	後	ハ	お	し	ま	け
脇	ハ	志	や	ま	け	一 山	ノ	下	を
		一 む	こ	ハ	か	ふ、	一 妻	ハ	こ
		かつ	む	い	り	一 者	や	起	事ハ
本	起	の	者	い	一 跡	ニ	残	連	といふ
事	ヲ	本	川	ゑ	一 追	懸	るといふ	ヲ	の
		一 西	風	ハ	志	む	連	ら	一 東

りおのまん 一 昼前といふヲ とのの し け
 一 昨日を ぬまん 一 昨日を 本 し けのぬまん
 一 見事トいふを いらま可 し 尔 一 浦山敷を あいの者
 ハ 連婦 四つニハ い年婦 五つニハ あ し 起年ふ 六つニハ い者ぬ遍
 五十八前ノ五つの言葉同前 百ハ あ し き年本つ 千ハ 王ん遍 志年まな本つ
 本つ 一 束ハ 志年志やけ 二十五ヲハ あ し き年い可志満本つ 右是迄物の数可ぞへ候事
 志やま 一 破れる物を あん遍 うぶ し
 をハ 里起多ん 一 雨のふるをハ あ し 一 硯をハ
 一 筆も 同前 一 墨ハ 者 川 し 一 舟のおもてハ ちつふな
 つ婦お志よろ 一 舟ノ中を ちつふの し けた
 一 王らをハ 王つて し 一 黒米 むりくり 一 白米ヲ 飛りけり
 又ハ も し 共言
 よつたな し のかる
 一 五躰寿くニとハ あち可セ し け 一 道をハ る
 一 本しいことを らんる し 一 金ハ カル 一 銀ハ 連多るか
 一 達者といふ お起ら し の 一 よ王川多可といふヲ 志んぎ
 をハ 飛志やう本う 一 乳をハ 糸可 し 一 飛ちを 志
 一 不知といふ事ハ いらも し 可れ 一 腹を くい 一 痛事ヲ ある
 一 鼻を 糸川婦 一 く志やミを 糸 し な 一 耳をき志やら
 本んのく本ハ ぐち 一 肩ハ 本な し 一 せな可ハ せ川る
 一 飛ぎをハ 可可 し や者 一 こむらをハ う連べ 一 足ハ て満
 又し 者とも言 し 一 やりハ おつ婦 一 大豆ハ大豆也
 一 脇差ハ 糸む し 路 一 火ヲハ あ遍 一 あめヲハ あぶと
 一 鯉の魚ヲハ 志べ 鱒ノ魚をハ い じ 屋耳
 一 雲ヲハ 尔しくろ 一 人ヲハ 志 やも
 一 物之無キ事ヲハ い 志 やま 一 物の在事ヲハ あ年ハお可い
 一 中道と言事ヲハ 志 ん志起るう 一 左道と言事ヲハ 志もんるう
 一 中道と言事ヲハ 志 起るう 一 左道と言事ヲハ 志もんるう
 志ん志起るう 一 左道と言事ヲハ 志 もんるう
 一 神ヲハ 志 いのの本り可もひ 一 侍と言事ヲハ 尔し者
 一 塩をハ 志 川本 一 粥をハ うせ 一 行事ハ おま□
 をハ おの、 一 尔くひといふ事をハ 志 とま
 一 き川く尔くひ事ヲハ 本ろのやい 志 と満 一 御身ト言事ハ や尔
 一 き多ひと言事ヲハ い川 志 や介り 一 さむいと言事ハ めいらいけ連
 一 ま那こをハ し起 一 座當をハ 志 起なへ 一 腹ヲハ 志 川く
 ちり 一 雁ハ くいとう 一 鴨ハ こべ 志 川く
 一 座當をハ 志起なへ 一 腹ヲハ 志 川く
 一 鯉の魚ヲハ 志 べ 鱒ノ魚をハ いじ屋耳
 一 紙をハ 可ん飛? 一 米 ちい 志 やまも 一 帰る可と言事ハ へと川ふ
 者ろう 一 貴キ事ハ くミち 亦 志 やう可い 一 骨折と言事ハ 志んき
 亦 志やう可い 一 骨折と言事ハ 志 んき
 一 あ多満ハ 志 や者 一 飛多いハ のい本ろ 一 口ノ内ニ而物のとける事ヲ
 一 苦キ事ハ 志 う 一 酸キ事ハ 志や可け 一 よめ取ヲハ 志う
 一 苦キ事ハ 志う 一 酸キ事ハ 志 や可け 一 よめ取ヲハ 志う
 酸キ事ハ 志や可け 一 よめ取ヲハ 志 う
 一 生子ハ うた 一 う久ひハ 志 ぶん 一 蟹ハ あんはや
 一 杉の木をハ 志 ゆんぐ 一 松をハ 婦川婦 一 くりをハ やむ
 婦 なの木 右同断 一 ならノ木 尔 志 よ
 一 本らの木ハ ふ 志 尔 一 猿ハ一匹も無シ 一 本うゑんと獸物猫このことし
 一 としぬけと生物 一 川をそハ え 志 やまん 一 蛇ハ とく尔
 一 里 一 者いハ も寿 一 蜂ハ 志 や屋
 一 あ婦ハ 志 らう 一 婦よう 少もなし 一 うなかふし 糸可ふ年
 川蟬ハ 志 やう可ひ 一 山姥をハ 志よう多んころ 一 や年ハ せ起た
 ひ

川蟬ハ 志やう可ひ 一 山姥をハ 志 よう多んころ 一 や年ハ せ起たひ
 をハ あ者^ゞ 一 何二而も長キ物ハ 志 をふ 茶ハ茶也
 一 者しハ 者^ゞす 一 なべ 志 う 一 釜 右同断
 しゃう 一 四方のかこいのな類ヲハ 志 やまのふ
 一 寝間を しゃうき 一 臺所を う 志 や
 くはん 右同断 一 御なべ ふれ可尔 志 ゆ 一 むしろ 右同断
 や寿ハ をうつ婦 一 自在か起ヲハ 志 や王□
 一 山ノ脇ハ 志 やまけ 一 山ノ平地ハ てなし 一 山ノ奥ハ かつち
 一 伯父ハ 志 りか多者ちり 一 高き処へ上ルを へめ寿
 一 骨折ハ い 志 起^ゞなんご路 一 下二いよとハ 志 りか多あ遍^ゞ
 い志起^ゞなんご路 一 下二いよとハ 志 りか多あ遍^ゞ
 一 泊るといふ事ハ 連う 志 り 一 明日とハ う志やた
 いふ事ハ 連う志り 一 明日とハ う 志 やた
 一 天氣能をハ 志 り飛類可 一 天をハ 志 り 一 何二而も
 天氣能をハ 志 り飛類可 一 天をハ 志 り 一 何二而も
 一 山ヨリ下ルを 志 やん 一 天上へ上ル事ヲ 里起多あ満
 一 休と言事 志 起^ゞなん 一 おけといふ事ヲ ほつ本う
 ころ 志 んき
 んご路 一 く、里付多といふことを 志 なゝ
 一 主といふハ 志 ゑち 一 小袖ハ 志 やら遍 一 頭ノ髪 いもくふ
 一 徒なぐといふ 志 りごて 一 物ヲとく事ヲ 飛^ゞ多
 一 者な寿事ヲ 志 ゆら 一 物ヲ追といふ おけ遍^ゞ
 一 西風ハ 志 む連ら 一 東風ハ あし 一 同飛可多も同前
 一 介むり立を 志 ぶやあん 一 納る事ヲ 志 ゑ志やむ 一 綱をハ や
 り立を 志 ぶやあん 一 納る事ヲ 志 やむ 一 綱をハ や
 一 夜の事 志 りくん祢 一 夜明多ることいふヲ 志 りり遍け
 志 りくん祢 一 夜明多ることいふヲ 志 りり遍け
 一 暁といふヲ 志 りおのまん 一 昼前といふヲ とののしけ
 一 今日を たんど 明日を 尔 志 や多 一 あさ川てヲ おや志ゆむ
 日を 尔志や多 一 あさ川てヲ おや 志 ゆむ
 一 明後日を 志 むけ 一 昨日を ぬまん 一 昨日を 本しけのぬまん
 亦いら 志 れな共
 志 やけ連
 ヲ 志 ゑち本可ひ 一 むさい事ヲ 志 志
 一 既ニ言事ヲ お 志 志
 一 皆此方へよれといふヲ おふび多の 志 やうら 一 よふ来多といふヲ 飛る可
 一 志 やたお可ひ
 志 年ふ
 志 年遍^ゞさん遍^ゞ
 志 年まな本つ
 志 年志やけ 二十五ヲハ あしき年い可志満本つ 右是迄物の数
 可そへ候事
 志 やけ 二十五ヲハ あしき年い可志満本つ 右是迄物の数可そ
 へ候事
 志 満本つ 右是迄物の数可そへ候事
 志 やま 一 破れる物を あん遍^ゞうぶし
 志 よろ 一 舟ノ中を ちつふのしけた
 志 ゐ 一 人を同道シ而合センといふ 徒らハ 志 ゑくぬ可るなんこ
 ろ
 志 ん志^ゞつ婦
 志 ^ゞつ婦
 志 ゆなん徒婦
 志 う年ん 一 赤キ事ヲ 志 ふう連
 志 りき 一 浅黄のちらしハ 志 に志やう
 志 やう
 志 よら 一 念比成近付を
 志 やゝ 一 本くちハ 志 む尔ん
 志 一 銭をハ 志 いちゑん

お起らしの	一よ王川多可といふヲ	志	んぎ
	一弟をハ 者ゝ起	志	や者
	一妹をハ 飛	志	やう本う
	一乳をハ 糸可し	志	一乳をハ 糸可し
	一飛ちゝを	志	一飛ちゝを 志
	一く志やミを 糸しな	志	やら
	一耳をき	志	やまよん類
王んとの	お起くるミ	志	く類
	一弁慶をハ	志	一鷹ハ やと多
	一なめくぢり	す	一なべ 志う
	右同断	す	一釜 右同断
	一鳥ハ 者	す	一蜂ハ 志や屋
	一者しハ 者	す	へ
	一蚊ハ きゝ里	寿	一?ハ 里可尔
	一者いハ も	寿	一者りハ いてめ尔
	一柱ハ ゆく	寿	
か多者ちり	一高さ処へ上ルを	寿	
	へめ	寿	
るか	一山へ上ルをハ	寿	おりた
	のホリ遍めれ	寿	一風ヲハ 連いら
	一雪ヲハ お者	せ	一日月ヲハ 徒ゝ婦
	一湯をハ	せ	ゝ可
	一粥をハ う	せ	一汁をハ お者
一塩をハ	志川本	せ	一塩をハ 尔し□
	一粥をハ う	せ	一行事ハ おま□
と言事ハ	きろゝあん	せ	川婦
	一肴ト言事ハ	せ	
	一鮑ヲハ あい飛	せ	
	一稲ヲハ	せ	
	一鯛をハ	せ	いましけ
ハ	せいましけ	せ	一海川の貝類をハ せい
	一惣而山の木をハ	く	い
	ち	く	尔といふ
	一家をハ	せ	一山ノ谷をハ 遍つ徒る
	ち	せ	一鷹ハ か者ちり
姥をハ	志よう多んころ	せ	一熊鷹 あち
	一や年ハ	せ	起たひ
水走り	右同断	せ	う婦
	一志やくしをハ	せ	一飛さくハ 婦起な
	可	せ	川
	一木綿を う	せ	一袋ハ 右同断
	せ	せ	一帯ヲ く
帯を	飛やう川ゝけ	せ	ん可起
	一手ぬくいを	せ	川る
	一肩ハ 本なし	せ	ゝな起の
	一せな可ハ	セ	しけ
	一五躰寿ゝくことハ	セ	一道をハ る
	あち可	そ	り
	一坊主をハ 遍	そ	一山ノ神をハ の本類可もい
	一志りをハ お	そ	一山ヲハ
遍川	一上川と言事ヲハ 遍	そ	ろ
	ない	そ	一玉く起ハ ち
	一生子ハ う	そ	一玉門を 本川キ
ハ	志よう多んころ	そ	
	一や年ハ せ起	そ	一う久ひハ 志ぶん
	た	そ	一蟹ハ あんはや
う類ことり	一山ノ頭上を	そ	ひ
	ゆぶりき	そ	たい
事ハ	連う志り	そ	たい
	一明日とハ う志や	そ	たい
	一山へ上ルをハ	そ	たい
	のホリ遍めれ	そ	たい
	寿おり	そ	たい
	一今日を	そ	たい
一皆此方へよれといふヲ	おふび多の志や	そ	たい
	一こ連てもといふヲ	そ	たい
	お志よろ	そ	たい
	一舟ノ中を	そ	たい
	ちつふのしけ	そ	たい
	よつ	そ	たい
一陸道を	屋べ可類	そ	たい
	一多者こをハ	そ	たい
	を	そ	たい
	か満かり	そ	たい
	一物を突を	そ	たい
	ゆ	そ	たい
	一冬ハ	そ	たい
	ま	そ	たい
	一浪ヲハ	そ	たい
	の	そ	たい
一	下川と言事ヲハ	そ	たい
	者那い	そ	たい
	一父殺ト言事をハ	そ	たい
	おな	そ	たい
	一飛多るい事ヲハ	そ	たい
	者らさん	そ	たい
言事ヲハ	ほ川婦	そ	たい
	一痛ト言事ヲハ	そ	たい
	い	そ	たい
海草ハ何ニても	てむル	そ	たい
	一濱ハ お	そ	たい
	一鳥ハ 者すく類	そ	たい
	一鷹ハ やと	そ	たい
	とい	そ	たい
	多	そ	たい
	一鳩ハ くしゑとい	そ	たい
	多	そ	たい
ハ	志やう可ひ	そ	たい
	一山姥をハ	そ	たい
	志よう	そ	たい
	一峯ハ	そ	たい
	き	そ	たい
一茶せん	右同断	そ	たい
	一ご起を	そ	たい
	い	そ	たい

	ま	多	へてとく
	一 丈夫ハ	く	多
	一 伯父ハ	志りか	多
°なんご路	一 下ニいよとハ	志りか	多
を	志やん	一 天上へ上ル事ヲ	里起
		一 沖ニ在嶋を	連婦
	連婦多ん嶋の本°リ	一 石をハ	ま
		一 沖をハ	連婦
ふ	志りごて	一 物ヲとく事ヲ	飛°
	一 今日を	たんど	明日を
	一 皆此方へよれといふヲ	おふび	
祢王ありき	一 とこへ行トいふヲ	祢	多
		底をハ	ら婦°
多	一 一切ノ物の内ニ在をハ	ら婦°	多
	いふヲてう可ひ	一 爰へ来ルといふヲ	多
てう可ひ	一 爰へ来ルといふヲ	多	んこ
		一 天をハ	里起
		一 正月を	とい
		一 色トいふを	連
るし	一 金ハ	カル	一 銀ハ
		連	多
		一 鶴ハ	遍
	一 四月ヲ	きうう	堂
	一 か川ぎをハ	な者	堂
	一 鶴ハ	遍	多
		ほれい	ち
	一 燕ハ	ち	ひ屋川
	一 星ヲハ	の	ち
	一 なく事ヲハ	ち	う
			し可類
			一 念比人ヲハ
			とくい
			一 我と言事ヲハ
			てう
			可ひ
	一 海ヲハ	あ川い	一 舟をハ
一	吞事をハ	くう	一 薪と言事ハ
			一 衣類をハ
			一 妻をハ
	一 そ那多と言事をハ	え	ち
	一 紙をハ	可ん飛°	一 米
口をハ	者°ろう	一 貴キ事ハ	くミ
		一家をハ	ち
	一 家をハ	ちせ	一 鷺ハ
	一 鷺ハ	か者°	ち
	一 鷺ハ	か者°	ち
	一 鷺ハ	か者°	ち
水こひ鳥	なし	一 鷺ハ	本°ほうく
		一 惣而山の木をハ	ち
ノ平地ハ	てなし	一 山ノ奥ハ	かつ
	一 むこハ	かふ、	一 妻ハ
	一 妻ハ	こしま	ち
		一 妻ハ	こしま
		一 女房を	ま
		一 伯父ハ	志りか
		一 御太儀ト言を	う
うをハ	右同断	一 是悲ないといふを	え
ハ	連婦多	一 主といふハ	え
		一 物のおれる事ヲ	者
是ヨリハ同断	一 恋事ヲ	え	ち
	一 御前様トいふを	え	ち
	一 墨ハ	者°川し	一 舟のおもてハ
		一 舟のともをハ	ち
をハ	ちつ婦お志よろ	一 舟ノ中を	ち
	一 舟の帆を	可や	一 帆柱
一 二月ヲ	者ぶらく	一 三月ヲ	も
			ち
			うふ
			り
			者ん遍°
			一 母ハ
			者本う
			者ちり
			一 高き処へ上ルを
			へめ寿
			あ遍°
			あ満
			ん嶋の本°リ
			一 石をハ
			ま
			多
			嶋と言
			嶋と言
			一 是悲ないといふを
			えち連ん可ひ
			多
			一 あさ川てヲ
			おや志ゆむ
			の志やたお可ひ
			多
			おまん
			一 一切ノ物の内ニ在をハ
			ら婦°
			多
			お可ひ
			多
			んこ
			多
			んこ
			多
			ん
			一 雨のふるをハ
			あし
			一 硯をハ
			多
			年
			一 二月ヲ
			者ぶらく
			一 三月ヲ
			もちうふ
			多
			類
			べ
			黒トいふを
			くん祢
			多
			る
			カル
			多
			ちり
			一 雁ハ
			くいと
			一 鴨ハ
			こべ志
			堂
			川ふ
			一 五月ヲ
			志ん志°
			つ婦
			堂
			類
			一 弓を
			くう
			一 矢を
			あい
			ち
			り
			一 雁ハ
			くいと
			一 鴨ハ
			こべ志
			ち
			ひ屋川
			一 可もめハ
			可ひこ
			う
			一 雲ヲハ
			尔しくろ
			一 人ヲハ
			志やも
			し可類
			一 念比人ヲハ
			とくい
			一 我と言事ヲハ
			てう
			可ひ
			ち
			つ婦
			く
			ル
			ち
			め婦
			一 お川と、いふ事をハ
			ほく
			い
			一 女をハ
			本川祢
			一 子共ヲハ
			本°ほ
			ち
			やう可ひ
			一 み多くないと言事ハ
			可もやし
			ち
			い志やまも
			一 帰る可と言事ハ
			へと川ふ
			ち
			亦
			志やう可い
			一 骨折と言事ハ
			志んき
			ち
			せ
			一 鷺ハ
			か者°
			ちり
			一 熊鷹
			あち
			ち
			り
			一 熊鷹
			あち
			ち
			く
			尔といふ
			一 山ノ谷をハ
			遍°つ徒る
			ち
			一 女房を
			まち
			ち
			り
			一 高き処へ上ルを
			へめ寿
			ち
			な可連
			ち
			連ん可ひ
			ち
			一 小袖ハ
			志やら遍
			一 頭ノ髪
			いもくふ
			ち
			り
			本可ひ
			一 むさい事ヲ
			いつ志やけ連
			ち
			お可ひ
			一 うぬとハ
			やル
			一 一切の道具ノ
			ち
			つふな
			ち
			つ婦お志よろ
			一 舟ノ中を
			ちつふのしけた
			ち
			つふのしけた
			ち
			川婦可やル
			一 縄を
			者りき可
			ち
			うふ

一月ヲ	くゑ可ひつ婦	一十二月ヲ	ち	う類徒婦
ふを	遍満可らい	一舟二乗レトハ	ち	婦 ^ゝ おふ
	一五躰寿 ^ゝ くとハ	あ	ち	可せしけ
	一火ヲもミテ出スを	ち	起志や ^ゝ	一 道をはる
耳の本くちハ	かる志	一 錢をは	ち	ゑん
	一本んのく本 ^ゝ ハ	く	ち	一 肩ハ 本なし
	一 志りをハ	おそろ	一 玉く起ハ	ち
一 笠ハ	かぶら	一 舟の可ひを	か	ち
一 海ヲハ	あ川い	一 舟をは	ち	婦
	一 海ノ神ト言事ヲハ	あ	つ	い可もい
	一 鹿ヲハ	ゆ	つ	く
			つ	く
多	一 蟬ハ	や起	一 川鳥ハ	可
			一 や年ハ	可
	一 魚を突や寿 ^ゝ ハ	をう	つ	婦
ハ	ちく尔といふ	一 山ノ谷をは	遍	つ
山ノ平地ハ	てなし	一 山ノ奥ハ	か	つ
	一 おそ起事ハ	か	つ	むいり
ゑ志起 ^ゝ なん	一 おけといふ事ヲ	ほ	つ	本う
	一 物ヲこ本寿事ヲ	本い	つ	け
	一 昼をは	とうか	つ	ふ
ハ	とうかつふ	一 昼過をは	とうか	つ
事ヲ	ゑち本可ひ	一 むさい事ヲ	い	つ
	十二ハ	王ん遍 ^ゝ	二十ハ	本
	二十ハ	本つ	三十ハ	王ん遍 ^ゝ 本
ハ前ノ五つの言葉同前	百ハ	あしき年本	つ	千ハ
あしき年本つ	千ハ	王ん遍 ^ゝ 志年まな本	つ	万ハ
		王な本	つ	
やけ	二十五ヲハ	あしき年い可志満本	つ	右
墨ハ	者 ^ゝ 川し	一 舟のおもてハ	ち	
	一 舟のともをは	ち	つ	ふな
ハ	ちつ婦お志よろ	一 舟ノ中を	ち	つ
	一 王らをは	王	つ	てし
きう堂川ふ	一 五月ヲ	志ん志 ^ゝ	つ	婦
	一 六月ヲ	まう	つ	ゝ婦
ヲ	尔よらく徒ふ	一 八月ヲ	やるい	つ
	一 九月ヲ	う連ほけ	つ	婦
	一 十一月ヲ	くゑ可ひ	つ	婦
		よ	つ	たなしのかる
	一 あの子といふ事	お	つ	可ひ
一 ゆびハ	て起	一 乳呑事を	と	つ
一 脇差ハ	ゑむし	一 やりハ	お	つ
			二	つ
一 浪ヲハ	の多	一 海ヲハ	あ	川
一 足袋ヲハ	けり	一 川をは	遍	川
			ゑ	川
と云事をハ	あべあ連	一 水をは	王	川
	一 塩をは	志	川	可
一 妻をは	まちい	一 女をは	本	川
ハ	本く年本 ^ゝ ほ	一 女の子をは	ま	川
	一 き多ひと言事ヲハ	い	川	志や介 ^ゝ り
	一 あ多ゝ可と言事ヲハ	ほ	川	婦
言事ハ	きろゝあん	一 肴ト言事ハ	せ	川
一 座當をは	志起なへ	一 腹ヲハ	志	川
	一 たこをは	あ	川	く
			あ	川
			い	那
			一	鮑ヲハ
			あい	飛 ^ゝ
			一	稲ヲハ
			せ	

一 鹿ヲハ	ゆつく	一 水神ヲハ	遍	川	可もひ	一 久敷ト言事ハ	な可らてい	
ちい志やまも	一 帰る可と言事ハ	へと	川	ふ				
杉の木をハ	志ゆんぐ	一 松をハ	婦	川	婦	一 くりをハ	やむ	
蛙ハ	おま介るし	一 大蛇ハ	あい祢	川	婦	一 見ゝすハ	とに	
			一 姪ハ	ま	川	可りこ	一 甥ハ	かりこ
	一 よぶといふ事ヲ	本	川	え	一 追懸るといふヲ	のし		
つ 三十八	王ん遍	本つ	四十二ハ	徒本	川	し	一 舟のおもてハ	ちつふな
	一 筆も	同前	一 墨ハ	者	川	婦可やル	一 繩を	者りき可
	一 舟の帆を	可や	一 帆柱	ち	川	ふ	一 五月ヲ	志ん志
		一 四月ヲ	きうう堂	川	一 袋ハ	右同断	一 帯ヲ	く
		一 木綿を	うせ	川	け	一 手ぬくいを	せん可起	
		一 下帯を	飛やう	川	婦	一 志やミを	えしな	一 耳を
		一 鼻を	え	川	る			
	一 肩ハ	本なし	一 せな可ハ	せ	川	と	一 腰をハ	いへけ
			一 血をハ	と	川	キ	一 きんハ	の起
	一 玉く起ハ	ち	一 玉門を	本	川	く王		
	一 可満ハ	よく遍	一 鍬ハ	く	川	一 可もめハ	可ひこ	
			一 燕ハ	ちひ屋	徒	可	くふ	
ハ	者い可類	一 夏ハ	さく	一 秋ハ	徒	ゝ婦		
	一 風ヲハ	連いら	一 日月ヲハ	徒	ふもこりゝ	一 のりハ	お者こ婦	
			一 惣而丸キ貝ヲハ	徒	る			
	ちく尔といふ	一 山ノ谷をハ	遍つ	徒	いなし			
	起事ハ	かつむいり	一 者や起事ハ	徒	いあ類可			
	さしくべるヲ	連ん本う	一 腹痛ヲ	徒	ふらんむ			
	こ本寿事ヲ	本いつけ	一日の暮を	徒	遍	さん遍	九つニハ	志年遍
	七つニハ	あるあん遍	八つニハ	徒	本川			
本つ	三十八	王ん遍	本つ	四十二ハ	徒	らハ	えくぬ可る	なんころ
	志ぬ	一人を同道シ	而合せんといふ	徒	ふ	一 八月ヲ	やるいつふ	
月ヲ	まうつゝ婦	一 七月ヲ	尔よらく	徒	婦			
	う連ほけつ婦	一 十月ヲ	志ゆなん	徒	婦			
	くゑ可ひつ婦	一 十二月ヲ	ちう類	徒	て	う可ひ		
	比人ヲハ	とくい	一 我と言事ヲハ	て	い			
遍	川可もひ	一 久敷ト言事ハ	な可ら	て	めル			
	一 ?ハ	里可尔	一 者りハ	い	て	のま	一 豊ハ	右同断
			一 こもハ	て	なし	一 山ノ奥ハ	かつち	
山ノ脇ハ	志やまけ	一 山ノ平地ハ	て	とく	て	一 物ヲとく事ヲ	飛	多
		ま多へ	て	ヲ	おや志ゆむ			
	一 徒なぐト	いふ	志りご	て	う可ひ	一 爰へ来ルといふヲ	多ん	多ん
	ど	明日を	尔志や多	一 あさ川	て	し	一 黒米	むりくり
			一 我といふヲ	王つ	て	ろき	一 物ノ多有事を	遍ろ
	汗の出を	本婦らい	一 に志んをハ	て	満			
	一 こむらをハ	う連べ	一 足ハ	て	起	一 乳吞事を	とつといく	連といふ
			一 ゆびハ	と	う	一 鴨ハ	こべ志	
	一 鶴ハ	遍多ちり	一 雁ハ	くい	と			
一	火ヲハ	あ遍	一 あめヲハ	あぶ	と			
	く事ヲハ	ちし可類	一 念比人ヲハ	と	くい	一 我と言事ヲハ	てう可ひ	
			一 殿といふ事ヲハ	かもい	と			
ハ	おのゝ	一 尔くひと	いふ事をハ	志	と	満	一 御身ト言事ハ	やル
一	き川く	尔くひ事ヲハ	本ろのやい志	と	と			
	者らさん多	ひけ連	一 餅をハ	し	と			
	ちい志やまも	一 帰る可と言事ハ	へ	と	川	ふ	一 口ノからいと	言事ハ
			一 あ満いと	言事ハ	と	ひ	一 田ハ	田那り
			一 磯ハ	し満	一 畑をハ	と		
	一 猿ハ	一匹も無シ	一 本う	あん	と	獣物猫	このことし	
			一	と	と	しぬけ	と生物	一 川をそハ
						え志	やまん	一 蛇ハ
								とく

一 川をそハ え志やまん 一 蛇ハ と く 尔
 一 大蛇ハ あい衿川婦 一 見ゝすハ と に
 一 鳥ハ 者すく類 一 鶯ハ や と 多
 一 鳩ハ くしゑ と い多とも言
 まん 一 何二而も出ルといふ事ハ へ と く
 一 海上な起多るをハ の と 飛び可 一 大波立るあらいをハ るやべ本
 亦 い と へ
 ヲ 志りおのまん 一 昼前といふヲ と ののしけ
 一 昼をハ と うかつふ 一 昼過をハ と うかつふ本け連
 一 昼をハ と うかつふ 一 昼過をハ と うかつふ本け連
 一 正月を と い多年 一 二月ヲ 者ぶらく 一 三月ヲ もちうふ
 一 血をハ と 川と 一 腰をハ いへけ 一 きんハ の起
 一 血をハ と 川と 一 腰をハ いへけ 一 きんハ の起
 一 ゆびハ て起 一 乳吞事を と つといく連といふ
 一 ゆびハ て起 一 乳吞事を と つ と いく連といふ
 ハ て起 一 乳吞事を と つといく連 と いふ
 一 庄屋をハ お と な 一 な多ハ 者満な多 一 ま起りハ ゑりけび
 但雨降る杯ハあふ ど 免しと言
 一 今日を たん ど 明日を 尔志や多 一 あさ川てヲ おや志ゆむ
 をハ 遍川 一 上川と言事ヲハ 遍 な いた
 一 父殺ト言事をハ お な 多ら 一 母殺ト言事ヲハ おなばハ
 をハ おな多ら 一 母殺ト言事ヲハ お な ば者
 一 ま那こをハ し起 一 座當をハ 志起 な へ 一 腹ヲハ 志川く
 ヲハ 遍川可もひ 一 久敷ト言事ハ な 可らてい
 らう 一 婦よう 少もなし 一 う な かふし ゑ可ふ年
 しをハ 可せう婦 一 飛さくハ 婦起 な な
 ノ脇ハ 志やまけ 一 山ノ平地ハ て な し 一 山ノ奥ハ かつち
 ハ かつむいり 一 者や起事ハ 徒い な し
 をハ 右同断 一 御太儀ト言を うち な 可連
 一 骨折ハ い志起 な んご路 一 下二いよとハ 志りか多あ遍
 一 舟ノと満ハ やれき な 観音立給ふ処をハ あなま希
 満ハ やれきな 観音立給ふ処をハ あ な ま 希
 一 休と言事 ゑ志起 な ん 一 おけといふ事ヲ ほつ本う
 一 塀といふヲ な んご路 一 くゝ里付多といふことを 志なゝ
 こ路 一 くゝ里付多といふことを 志 な ゝ
 百ハ あしき年本つ 千ハ 王ん遍志年ま な 本つ
 万ハ 王 な 本つ 一 東ハ 志年志やけ 二十五ヲハ あしき年い可志満本
 つ 右是迄物の数可そへ候事
 者ゝ川し 一 舟のおもてハ ちつふ な
 を同道シ而合せんといふ 徒らハゑくぬ可る な んころ
 月ヲ う連ほけつ婦 一 十月ヲ 志ゆ な ん徒婦
 一 か川ぎをハ な 者堂類 一 弓を くう 一 矢を あい
 よつた な しのかる
 いふ事 おつ可ひ 一 ま川寿くとハ な 尔おまん
 一 鼻を ゑ川婦 一 く志やミを ゑし な 一 耳をき志やら
 一本んのく本ハ くち 一 肩ハ 本 な し 一 せな可ハ せ川る
 一 庄屋をハ おと な 一 な多ハ 者満な多 一 ま起りハ ゑりけび
 をハ おとな 一 な多ハ 者満 な 多ハ 者満な多 一 ま起りハ ゑりけび
 一 下川と言事ヲハ 者 那 い多 一 川の深事ヲハ お本
 一 たこをハ あ川い 那 一 鮑ヲハ あい飛 一 稲ヲハ せ
 一 南風ハ 同連いら 一 北風ハ まく 那 一 静ヲハ 者うけ
 大蛇ハ あい衿川婦 一 見ゝすハ と に
 の形ハ 志りき 一 浅黄のちらしハ に 志やう
 又 に し者とも言

鯉の魚ヲハ 志ベ 鯛ノ魚をハ いじ屋	耳	
— 星ヲハ のちう — 雲ヲハ	尔	しくろ — 人ヲハ 志やも
いののり可もひ — 侍と言事ヲハ	尔	し者
吞事をハ くう — 薪と言事ハ ちく	尔	
可 — 汁をハ お者 — 塩をハ	尔	し□
本ろのやい志と満 — 御身ト言事ハ や	尔	
— 海草ハ何ニても てむ	尔	— 濱ハ お多 — 砂をハ右
— 桑ノ木をハ く連婦	尔	— 梨の木ハ 右同断 — 柿ハ右同断 一本も無之
— 婦 ^レ なの木 右同断 — ならノ木	尔	志よ
— 本らの木ハ ふ志	尔	— 猿ハ一匹も無シ — 本うゑんと獣物猫このことし
川をそハ え志やまん — 蛇ハ とく	尔	
— 柱ハ ゆく寿へ — ?ハ 里可	尔	— 者りハ いてめ尔
— ?ハ 里可尔 — 者りハ いてめ	尔	
屋くはん 右同断 — 御なべ ふれ可	尔	志ゆ — むしろ 右同断
— 惣而山の木をハ ちく	尔	といふ — 山ノ谷をハ 遍つ徒る
— 今日を たんど 明日を	尔	志や多 — あさ川てヲ おや志ゆむ
— 見事トいふを いらま可し	尔	— 浦山敷を あいの者 ^レ
— 誰子トいふヲ 祢	尔	本 ^レ ほ — 御身可子トいふヲ や尔本 ^レ うほ
祢尔本 ^レ ほ — 御身可子トいふヲ や	尔	本 ^レ うほ
いふを ちちお可ひ — うぬとハ や	尔	— 一切の道具の
舟の帆を 可や — 帆柱 ち川婦可や	尔	— 繩を 者りき可
— 六月ヲ まうつ、婦 — 七月ヲ	尔	よらく徒ふ — 八月ヲ やるいつふ
ふ事 おつ可ひ — ま川寿くとハ な	尔	おまん
出スを ち起志や、 — 本くちハ む	尔	ん
本しいことを らんるし — 金ハ か	尔	— 銀ハ 連多るか尔
— 金ハ カル — 銀ハ 連多るか	尔	
— とし	ぬ	けと生物 — 川をそハ え志やまん — 蛇ハ とく尔
— いろりハ い	ぬ	へ — 火者しハ あ遍 ^レ 者し
— 明後日を 志むけ — 昨日を	ぬ	まん — 昨日を 本しけのぬまん
日を ぬまん — 昨日を 本しけの	ぬ	まん
つ二ハ あし起年ふ 六つ二ハ い者	ぬ	遍 ^レ
— 一人の物を あん	ぬ	んくる遍 ^レ — 何者といふヲ 祢んくう
一人を同道シ而合せんといふ 徒らハ悉く	ぬ	可るなんころ
— 舟の可ひを かぢ — 婦しきをハ	ね	
— 妻をハ まちい — 女をハ 本川	祢	— 子共ヲハ 本 ^レ ほ
— 蛙ハ おま介るし — 大蛇ハ あい	祢	川婦 — 見、すハ とに
— 夜の事 志りくん	祢	— 夜明多ることいふヲ 志り遍け
— こ連てもといふヲ たん遍 ^レ	祢	可い起飛るか — 物ヲ法を
— 誰子トいふヲ	祢	尔本 ^レ ほ — 御身可子トいふヲ や尔本 ^レ うほ
— 何方ヨリ来ルトいふヲハ	祢	王ありき — とこへ行トいふヲ 祢多おまん
祢王ありき — とこへ行トいふヲ	祢	多おまん
あんぬんくる遍 ^レ — 何者といふヲ	祢	んくう
— 万ノ物誰可物といふを	祢	んこるべ — 物をと可め類事ヲ 年ん、
トいふを 連多類べ 黒トいふを くん	祢	
ヲハ い志やま — 物の在事ヲハ あ	年	ハお可い
— 男の子をハ 本く	年	本 ^レ ほ — 女の子をハ ま川年本 ^レ ほ
本く年本 ^レ ほ — 女の子をハ ま川	年	本 ^レ ほ
う 少もなし — うなかふし ち可ふ	年	
— 志	ふ	
三ツ二ハ 連婦 四つ二ハ い	年	婦 五つ二ハ あし起年ふ 六つ二ハ い者ぬ遍 ^レ
連婦 四つ二ハ い年婦 五つ二ハ あし起	年	ふ 六つ二ハ い者ぬ遍 ^レ
八つ二ハ 徒遍 ^レ さん遍 ^レ 九つ二ハ 志	年	遍 ^レ さん遍 ^レ
五十ハ前ノ五つの言葉同前 百ハ あしき	年	本つ 千ハ 王ん遍 ^レ 志年まな本つ
前 百ハ あしき年本つ 千ハ 王ん遍 ^レ 志	年	まな本つ
万ハ 王な本つ 一東ハ 志	年	志やけ 二十五ヲハ あしき年い可志満本つ 右是迄物の数可
		そへ候事

一東ハ 志年志やけ 二十五ヲハ あしき 年 い可志満本つ 右是迄物の数可そへ候事
 祢んこるべ 一物をと可め類事ヲ 年 ん、
 一 正月を とい多 年 一二月ヲ 者ぶらく 一三月ヲ もちうふ
 一 青キ事ヲ 志う 年 ん 一赤キ事ヲ ふう連
 一 星ヲハ の ちう 一 雲ヲハ 尔しくろ 一 人ヲハ 志やも
 一 浪ヲハ の 多 一 海ヲハ あ川い 一 舟をハ ちつ婦
 一 殿といふ事ヲハ かもいと の
 一 將軍様ヲハ ほん の 可もひ 一 禁中様ヲハ ほん、の可もひ
 ほんの可もひ 一 禁中様ヲハ ほん、 の 可もひ
 一 神ヲハ 志い の の本り可もひ 一 侍と言事ヲハ 尔し者
 一 神ヲハ 志いの の 本り可もひ 一 侍と言事ヲハ 尔し者
 一 むごひといふ事をハ お の 、 一 尔くひといふ事をハ 志とま
 一 き川く尔くひ事ヲハ 本ろ の やい志と満 一 御身と言事ハ や尔
 一 坊主をハ 遍そり 一 山ノ神をハ の 本類可もい 一 山ヲハ
 儀と言事ハ 右同断 一 煩ヲハ やい の 婦
 一 人多満ハ 志や者ゝ 一 飛多いハ の い本ろ 一 口ノ内ニ而物のとける事ヲハ るう
 一 峯ハ き多ひ 一 けら者ゝハ 起 一 入口ハ 本ゝ、
 一 四方のかこいな類ヲハ 志やま の ふ
 一 こもハ て の ま 一 豊ハ 右同断 一 うす縁 右同断
 一 海上な起多るをハ の と飛び可 一 大波立るあらいをハ るやべ本
 ふ事を 飛ゝるか 一 山へ上ルをハ の 本り遍めれ寿おりた
 一 先ゆけと言ヲ 本起 の 者い 一 跡ニ残連といふヲようしおまん
 一 沖ニ在嶋を 連婦多ん嶋 の 本り 一 石をハ 万多嶋と言
 ふ事ヲ 本川ゑ 一 追懸るといふヲ の し
 一 暁といふヲ 志りお の まん 一 昼前といふヲ とののしけ
 志りおのまん 一 昼前といふヲ と の のしけ
 志りおのまん 一 昼前といふヲ との の しけ
 昨日を ぬまん 一 昨日を 本しけ の ぬまん
 いらま可し尔 一 浦山敷を あい の 者ゝ
 一 皆此方へよれといふヲ おふび多 の 志やたお可ひ
 一 よく行とふヲ 飛る可 の おまん 一 よいといふを 飛ゝるか
 ちつ婦お志よろ 一 舟ノ中を ちつふ の しけた
 一 よろこびを お の ふゝ 一 なけくを お志よら 一 念比成近付を
 よつたなし の かる
 一 達者といふ お起らし の 一 よ王川多可といふヲ 志んぎ
 一 腰をハ いへけ 一 きんハ の 起
 一 女を め の こ 一 念比人ハ おもひ 一 もゝをハ おむ
 一 本うぐ王んと の お起くるミ 一 弁慶をハ 志やまよん類
 ハ い志やま 一 物の在事ヲハ あ年 ハ お可い
 ハ おな多ら 一 母殺と言事ヲハ おな バ 者
 一 春ハ 者 い可類 一 夏ハ さく 一 秋ハ徒可くふ
 一 めしヲハ あま母 一 飛へヲハ 飛や 者
 一 雪ヲハ お 者 せ 一 風ヲハ 連いら 一 日月ヲハ 徒ゝ婦
 一 下川と言事ヲハ 者 那い多 一 川の深事ヲハ お本
 一 同浅キと言事ヲハ お 者 く 一 右道と言事ヲハ 者るきるう
 事ヲハ お者く 一 右道と言事ヲハ 者 るきるう
 の本り可もひ 一 侍と言事ヲハ 尔し 者
 一 湯をハ せゝ可 一 汁をハ お 者 一 塩をハ 尔し□
 おな多ら 一 母殺と言事ヲハ おなバ 者
 一 飛多るい事ヲハ 者 らさん多ひけ連 一 餅をハ しと
 一 口をハ 者 〴〵 一 貴キ事ハ くミち 亦 志やう可い 一 骨折と言
 事ハ 志ん 事ハ 志ん
 一 人多満ハ 志や 者 〴〵 一 飛多いハ のい本ろ 一 口ノ内ニ而物のとける事ヲハ
 るう
 ハ とふへ 一 口ノからいと言事ハ 者 類可流
 一 う久ひハ 志ぶん 一 蟹ハ あん 者 や

一なめくぢり	右同断	一鳥ハ	者	すく類	一鶯ハ	やと多
一家をハ	ちせ	一鶯ハ	者	ちり	一熊鷹	あち
			者	い鷹	右同断	一水こひ鳥
		一戸をハ	者	何ニ而も	長キ物ハ	志をふ
		一者しハ	者	なべ	志う	一釜
		又ハ	者	下け	共言	
ろりハ	いぬへ	一火者しハ	者	し		
		一丈夫ハ	者	ん遍	一母ハ	者本う
		り	者	本う		
一甥ハ	かりこ	一類共ハ	者			
		一伯父ハ	者	ちり	一高き処へ上ルを	へめ寿
		一先ゆけと言ヲ	者	い	一跡ニ残連といふヲ	ようしおまん
起	一齒ヲハ	みまけ	者	るう		
	一北風ハ	まく那	者	うけ		
		一あ者ハ	者	也	一是ヨリハ同断	一物のおれる事ヲ
是ヨリハ同断	一物のおれる事ヲ		者	ちり		
らま可しル	一浦山敷を	あいの	者			
年婦	五つニハ	あし起年ふ	者	ぬ遍		
		六つニハ	者	川し	一舟のおもてハ	ちつふな
		一筆も	者	りき可		
		一帆柱	者	ぶらく	一三月ヲ	もちうふ
		一正月を	者	堂類	一弓を	くう
		一二月ヲ	者	こ	一矢を	あい
道	屋ベ可類	一多者こをハ	者	へ	一火打ハ	火うち也
		一者やくいそけといふヲ	者	起	一あ年を	志や者
		一兄を	者			
一弟をハ	者	起	者			
		一飛ぶぎをハ	者			
庄屋をハ	おとな	一な多ハ	者			
		又にし	者			
			者			
		一燕ハ	者			
一燕ハ	ちひ屋川	一可もめハ	者			
ハ	とくい	一我と言事ヲハ	者			
		一將軍様ヲハ	者			
可もひ	一禁中様ヲハ	ほんの可も	者			
		一神ヲハ	者			
		一そ那多と言事ヲハ	者			
		一飛多るい事ヲハ	者			
ヲハ	ゆつく	一水神ヲハ	者			
		一磯ハ	者			
		一山姥をハ	者			
志よう多んころ	一や年ハ	せ起た	者			
		一峯ハ	者			
多	一是悲ないといふを	えち連ん可	者			
		一恋事ヲ	者			
此方へよれといふヲ	おふび多の志やた	お可	者			
		一御前様ト	者			
一切ノ物の内ニ在をハ	ら婦多	お可	者			
		一我といふヲ	者			
		一十一月ヲ	者			
少トいふを	本ん	一物の遍多を	者			
		一あの子といふ事	者			
		一女を	者			
		一まな板	者			
		一皆此方へよれといふヲ	者			
多ハ	者満な多	一ま起りハ	者			

一めしヲハ	あま母	一飛ヘヲハ	飛	や者 ^ゝ
たこをハ	あ川い那	一鮑ヲハ	飛	^ゝ 一稲ヲハ
		一紙をハ	飛	? 一米
		一海上な起多るをハ	飛	ちい志やまも
		一天氣能をハ	飛	一帰る可と言事ハ
		能可といふ事を	飛	へと川ふ
トいふ	志りごて	一物ヲとく事ヲ	飛	り可
お志やうら	一よふ来多といふヲ	一よく行とふヲ	飛	類可
		飛る可のおまん	飛	一何をハ
		一よいといふを	飛	志り
一こ連てもといふヲ	たん遍 ^レ 祢	可い起	飛	一何二而も
	一黒米	一白米ヲ	飛	^ゝ るか
		一下帯を	飛	一山へ上ルをハ
		一妹をハ	飛	の本り遍めれ寿おりた
可類	一夏ハ	一秋ハ徒可 ^く	ふ	^ゝ 多
		但雨降る杯ハあ	ふ	る可
い志やまも	一帰る可と言事ハ	へと川	ふ	る可のおまん
	一あ満いト言事ハ	と	ふ	一よいといふを
	一惣而丸キ貝ヲハ	徒	ふ	^ゝ るか
	一本らの木ハ	ふ	ふ	るか
	一婦よう	少もなし	ふ	一物ヲ法を
	一うなか	ふ	ふ	^ゝ りけり
よう	少もなし	一うなか	ふ	飛
	あ者 ^ゝ	一何二而も長キ物ハ	ふ	やう川、け
	一四方のかこいのな類ヲハ	志やまの	ふ	一手ぬくいを
	一屋くはん	右同断	ふ	せん可起
		一御なべ	ふ	志やう本う
		一むこハ	ふ	一乳をハ
小袖ハ	志やら遍	一頭ノ髪	ふ	ゑ可し
本寿事ヲ	本いつけ	一日の暮を	ふ	一飛ち ^ゝ を
	一昼をハ	とうかつ	ふ	志
	とうかつ	一皆此方へよれといふヲ	ふ	
		一志年	ふ	ど免しと言
婦	四つニハ	い年婦	五つニハ	あし起年
	ハ者 ^ゝ 川し	一舟のおもてハ	ちつ	ふ
	ちつ婦お志よろ	一舟ノ中を	ちつ	ふ
	二月ヲ	者ぶらく	一三月ヲ	もちう
		一四月ヲ	きう堂川	ふ
		一五月ヲ	志ん志 ^ゝ つ婦	ふ
		一六月ヲ	やるいつふ	ふ
		一七月ヲ	尔よらく徒	ふ
		一八月ヲ	やるいつ	ふ
		満可らい	一舟二乗レトハ	ち婦 ^ゝ お
		一青キ事ヲ	志う年ん	一赤キ事ヲ
		いふ	お起らしの	一よ王川多可とい
		一兄を	ゆ	ふ
		て起	一乳吞事を	とつといく連とい
		一火ヲハ	あ遍 ^ゝ	一あめヲハ
		一生子ハ	うた	一う久ひハ
		平ハ	う類ことり	一山ノ頭上を
		ノ後ハ	おしまけ	一山ノ下をハ
		あ志やま	一破れる物を	あん遍 ^ゝ う
		一正月を	とい多年	一二月ヲ
			者	ぶ
			一笠ハ	か
		風ヲハ	連いら	一日月ヲハ
		一海ヲハ	あ川い	一舟をハ
		ハ	うしおい	一その物と言事ヲハ

事ハ	— 衣類をハ	ちめ	婦	— お川と、いふ事をハ	ほく
	— あ多、可と言事ヲハ	ほ川	婦	— 痛ト言事ヲハ	い多しや(、)
ハ	— 肴ト言事ハ	せ川	婦		
ト	— 煩ヲハ	やいの	婦		
ハ	— 徒ふもこり、	— のりハ	お者	婦	
	— 杉の木をハ	志ゆんぐ	— 松をハ	婦	川婦 — くりをハ
の木	をハ	志ゆんぐ	— 松をハ	婦	— くりをハ
	— 桑ノ木をハ	く連	婦	尔	— 梨の木ハ
ハ	— おま介るし	— 大蛇ハ	あい	婦	右同断
	— 雉子ハ	無シ	— 山鳥ハ	婦	— 柿ハ
り	右同断	— 志やくし	をハ	可せう	婦
やくし	をハ	可せう	婦	— 飛さくハ	婦
	— 魚を突や	寿ハ	をうつ	婦	— 自在か
	— 物の尔へ	類といふ	ハ	本う	婦
ふハ	本う	婦	— な満尔へ	な類	事ハ
をハ	めらい	け	— あつ起	をハ	本う
	— 沖ニ	在嶋を	連	婦	多
	— 沖をハ	連	婦	多	— 是悲ない
		二	ツ	婦	多
		三ツ	ニハ	連	婦
		三ツ	ニハ	連	婦
		四つ	ニハ	い年	婦
		底をハ	ら	婦	多
婦	多	— 一切ノ物	の内ニ	在をハ	ら
		— 舟のとも	をハ	ちつ	婦
		— 舟の帆を	可や	— 帆柱	ち川
		きう	う堂川	ふ	婦
		— 六月	ヲ	まう	つ、
		— 九月	ヲ	う連	ほけ
う	連	ほけ	つ婦	— 十月	ヲ
		— 十一月	ヲ	く	ゑ可
く	ゑ可	ひつ	婦	— 十二月	ヲ
を	遍	満可	ら	い	婦
		— 舟ニ	乗レ	トハ	ち
		— 惜惜	とハ	へ	婦
		— 汗の出	を	本	婦
		— 鼻を	ゑ	川	婦
		— 脇差	ハ	ゑ	むし
ま	那	こ	をハ	し	起
米	ち	い	志	や	まも
		— 帰	る	可	と
		— 満	い	ト	言
		— 柱	ハ	ゆ	く
		— いろ	り	ハ	い
		ま	多	へ	婦
志	り	か	多	者	ち
お	ま	ん	— 何	二	而
あ	遍	有	り	— 可	つ
		— 物	の	曲	多
		— 惜	惜	と	ハ
— 者	や	く	い	そ	け
— 血	を	ハ	と	川	と
多	ち	り	— 雁	ハ	く
		— 火	薪	と	云
		— 鮭	の	魚	ヲ
飛	り	可	— 大	波	立
		— 万	ノ	物	誰
		— 色	ト	い	ふ
		— 連	多	類	婦
		— 痛	ト	言	事
		— 飛	さ	く	ハ
		— 魚	を	突	や
		— 物	の	尔	へ
		— 沖	ニ	在	嶋
		— 沖	を	ハ	連
		— 二	ツ	婦	多
		— 三	ツ	ニ	ハ
		— 四	つ	ニ	ハ
		— 五	つ	ニ	ハ
		— 六	つ	ニ	ハ
		— 七	月	ヲ	尔
		— 八	月	ヲ	や
		— 九	月	ヲ	志
		— 十	月	ヲ	志
		— 十	一	月	ヲ
		— 十	二	月	ヲ
		— 物	の	こ	本
		— 汗	の	出	を
		— 志	や	ミ	を
		— 大	豆	ハ	大
		— 腹	ヲ	ハ	志
		— 口	ノ	か	ら
		— 火	者	シ	ハ
		— 火	打	ハ	火
		— 火	者	シ	ハ
		— 水	を	ハ	王
		— 鱒	ノ	魚	を
		— 物	を	と	可
		— 黒	ト	い	ふ

	— 陸道を 屋	べ	可類	— 多者こをハ	たん者°こ
	こ可しや者°	— こむらをハ	う連	べ	— 足ハ て満
— 粟ヲハ	むじ路	— 火ヲハ	あ	遍	° — あめヲハ あぶと
— 足袋ヲハ	けり	— 川をハ	遍	川	— 上川と言事ヲハ 遍°ないた
川をハ	遍川	— 上川と言事ヲハ	遍	°ないた	
	— 喰事をハ	あ	遍	°	— 吞事をハ くう
	— 鶴ハ	遍	多ちり	— 雁ハ	くいと
	— 坊主をハ	遍	そり	— 山ノ神をハ	の本°類可もい
— 鹿ヲハ	ゆつく	— 水神ヲハ	遍	°川可もひ	— 久敷ト言事ハ
— 鮎ヲハ	む	— 鯨をハ	くん	遍	?
— いろりハ	いぬへ	— 火者しハ	あ	遍	°者し
をハ	ちくるといふ	— 山ノ谷をハ	遍	つ徒る	
— 丈夫ハ	く多り	— 父ハ	者ん	遍	° — 母ハ 者本う
んご路	— 下二いよとハ	志りか多あ	遍	°	
	— 火のもゆるをハ	あ	遍	°あり	— 可つ堂、くをハ
飛°るか	— 山へ上ルをハ	の本り	遍	めれ寿おりた	
主といふハ	ゑち	— 小袖ハ	志やら	遍	— 頭ノ髪 いもくふ
事ヲ	志ゆら	— 物ヲ追といふ	おけ	遍	°
くん祢	— 夜明多ることいふヲ	志り	遍	け	
	— こ連てもといふヲ	たん	遍	°祢 可い起飛るか	— 物ヲ法を
五つニハ	あし起年ふ	六つニハ	い者ぬ	遍	°
	七つニハ	あるあん	遍	°	八つニハ 徒遍°さん遍°
七つニハ	あるあん遍°	八つニハ	徒	遍	°さん遍° 九つニハ 志年遍°さん遍°
ニハ	あるあん遍°	八つニハ	徒遍°さん	遍	° 九つニハ 志年遍°さん遍°
八つニハ	徒遍°さん遍°	九つニハ	志年	遍	°さん遍°
徒遍°さん遍°	九つニハ	志年遍°さん	遍	°	
	十二ハ	王ん	遍	°	二十八 本つ 三十八 王ん遍°本つ 四十二ハ 徒本川
ハ	王ん遍°	二十ハ	本つ	三十八	王ん
言葉同前	百ハ	あしき年本つ	千ハ	王ん	遍
底ヲ	あ志やま	— 破れる物を	あん	遍	°うぶし
	— 人の物を	あんぬんくる	遍	°	— 何者と
	— 此方へよれといふを	遍	満可らい	— 舟ニ乗レトハ	ち婦°おふ
志んをハ	てろき	— 物ノ多有事を	遍	ろ	
さ可りを	むくかり	— 可満ハ	よく	遍	° — 鍛ハ く川く王
				ほ	れいち
	— 道廣キと言事ヲハ	ほ	ろ	— 道寿く那支と言事ヲハ	ほん
ハ	ほろ	— 道寿く那支と言事ヲハ	ほ	ん	
ハ	ちめ婦	— お川と、いふ事をハ	ほ	く	
女をハ	本川祢	— 子共ヲハ	本°	ほ	
	— 男の子をハ	本く年本°	ほ	— 女の子をハ	ま川年本°ほ
年本°ほ	— 女の子をハ	ま川年本°	ほ		
	— あ多、可と言事ヲハ	遍	川婦	— 痛ト言事ヲハ	い多しや(ゝ)
— 山鳥ハ	婦ミ類い	— 鳩ハ	くし	ほ	
— 水こひ鳥	なし	— 鶯ハ	本°	ほ	うくち
まけ	— 山ノ下をハ	ゆぶりやうろう	ほ	う	
	ゑ志起°なん	— おけといふ事ヲ	ほ	つ本う	
	— 誰子ト	いふヲ	祢尔本°	ほ	— 御身可子ト
ほ	— 御身可子ト	いふヲ	や尔本°う	ほ	
	— 九月ヲ	う連	ほ	けつ婦	— 十月ヲ
	— 將軍様ヲハ	遍	んの可もひ	— 禁中様ヲハ	ほん、の可もひ
ヲハ	ほんの可もひ	— 禁中様ヲハ	遍	ん、の可もひ	
ハ	者°那い多	— 川の深事ヲハ	お	本	
	— 神ヲハ	志いのの	本	り可もひ	— 侍と言事ヲハ
	— 塩をハ	志川	本	— 粥をハ	うせ
— 妻をハ	まちい	— 女をハ	本	川祢	— 子共ヲハ
— 女をハ	本川祢	— 子共ヲハ	本	°ほ	

ゑびらけ	— 可んなべハ	いよ	ま	れ
	— こもハ	ての	ま	— 疊ハ 右同断 — うす縁 右同断
	— 山ノ後ハ	おし	ま	け — 山ノ下をハ ゆぶりやうろうほう
	— 山ノ脇ハ	志や	ま	け — 山ノ平地ハ てなし — 山ノ奥ハ かつち
			ま	多へてとく
— むこハ	かふゝ	— 妻ハ	こし	ま
	— 妻ハ	こしまち	— 女房を	ま
		— 姪ハ	ま	ち — 女房を まち
		— いけとハ	お	ま
ハ	やれきな	観音立給ふ処をハ	あな	ま
	の者い	— 跡ニ残連といふヲ	ようし	お
	を	連婦多ん嶋の本 ^り	— 石をハ	ま
	— 飛びヲ	連起	— 齒ヲハ	み
	— 南風ハ	同連いら	— 北風ハ	ま
		— 暁といふヲ	志り	おの
— 明後日	を	志むけ	— 昨日を	ぬ
	を	ぬまん	— 昨日を	本しけのぬ
		— 見事ト	いふを	いら
	— よく行	とふヲ	飛る可	のお
百ハ	あしき年	本つ	千ハ	王ん遍 ^り 志年
	ありき	— とこへ行	ト	いふヲ
		— 一切の道具	外底ヲ	あ志や
			— 六月ヲ	ま
おつ可	ひ	— ま川	寿くとハ	な
	との	お起くる	ミ	— 弁慶をハ
— き川	く	る	ひ事ヲハ	本
			のや	い志と
			— 磯ハ	し
志やん	— 天上へ	上ル事ヲ	里起	多あ
志年	志や	け	二十五ヲハ	あしき年
		— 草ニ	而も何ニ	而も
		— 此方へ	よれとい	ふを
	— こむら	をハ	う連	べ
	屋をハ	おとな	— な多	ハ
— 口をハ	者 ^ろ	う	— 貴キ	事ハ
	— 雉子	ハ無シ	— 山鳥	ハ
	— 本う	ぐ	王んとの	お起くる
		— 粟ヲ	ハ	む
— むこ	取も	右同断	— 鮎ヲ	ハ
		— 海草	ハ何ニ	ても
— 松を	ハ	婦川	婦	— くりを
		— おそ	起事ハ	かつ
		— 西風	ハ	志
を	志ぶ	やあん	— 納る	事ヲ
	ヲ	本いつ	け	— 一日の暮
	尔志	や多	— あさ	川てヲ
		— 明後日	を	志
— 王ら	をハ	王つて	し	— 黒米
		— 矢ノ	根を	あいる
— 鉄砲	ハ	鉄砲也	— 合掌	ハ
		— 出ス	を	ち起
— 念比	人ハ	おも	ひ	— もゝ
		— ま	さ	可りを
		— 脇	差ハ	ゑ
		— 衣類	をハ	ち
い川	志や	介 ^り	— さ	むいと
		— な		め

— ?ハ 里可尔	— 者リハ	いて	め	尔
りか多者ちり	— 高き処へ上ルを	へ	め	寿
	— 寒起をハ		め	らいけ
飛 ^る か	— 山へ上ルをハ	の	め	れ
物といふを	祢んこるべ	— 物をと	め	類事ヲ 年ん、
	— 女を		め	のこ
	但雨降る杯ハあふど		免	しと言
雲ヲハ	尔しくろ	— 人ヲハ	志	や
志ん志起るう	— 左道と言事ヲハ	志	も	んるう
ゑ可	— 殿といふ事ヲハ	か	も	いと
	— 將軍様ヲハ	ほんの	も	ひ
の可もひ	— 禁中様ヲハ	ほん、の	も	ひ
	— 神ヲハ	志いの	も	ひ
やう可ひ	— み多くないと言事ハ	可	も	やし
ハ	遍そり	— 山ノ神をハ	の	本 ^レ 類可
	— 海ノ神ト言事ヲハ	あつ	い	可
鹿ヲハ	ゆつく	— 水神ヲハ	遍 ^レ 川	可
— 紙をハ	可ん飛?	— 米	ち	い
	— 惣而丸キ貝ヲハ	徒	ふ	も
之	— 蚊ハ	き、	里	— 者いハ
— 小袖ハ	志やら遍	— 頭ノ	髪	い
		又	ハ	も
— 二月ヲ	者ぶらく	— 三月ヲ		も
	— 不知といふ事ハ	いら	者	や
— めしヲハ	あま母	— 飛へヲハ	飛	者 ^レ
— 雲ヲハ	尔しくろ	— 人ヲハ	志	や
	— 物之無キ事ヲハ	い	志	や
		ゑ	川	く
	— き川く	尔く	ひ	事ヲハ
	本ろの	や	い	志と満
	— 御身ト言事ハ	や	尔	
	— そ那多と言事ハ	ゑ	ち	や
う可ひ	— み多くないと言事ハ	可	も	やし
	— き多ひと言事ヲハ	い	川	志
ヲハ	ほ川婦	— 痛ト言事ヲハ	い	多
	— 紙をハ	可ん	飛?	— 米
	— 貴キ事ハ	く	ミ	ち
	— 太儀ト言事ハ	右	同	断
		— 煩ヲハ	や	い
		— あ多満ハ	志	や
				る
— 苦キ事ハ	志う	— 酸キ事ハ	志	や
— う久ひハ	志ぶん	— 蟹ハ	あ	ん
	— 松をハ	婦	川	婦
— としぬけと生物	— 川をそ	ハ	え	志
	— 者いハ	も	寿	— 蜂ハ
	断	— 鳥ハ	者	す
	— 鳩ハ	く	し	ゑ
		— 鱒ハ	川	鱒
	— 山姥をハ	志	よ	う
		— 年ハ	可	つ
やう	— 四方のかこいのな類ヲハ	志	や	ま
	— 座敷をハ	し	や	う
— 座敷をハ	し	やう	— 寝間を	し
— 寝間を	し	やう	— 臺所を	う
寿ハ	をう	つ	婦	— 自在
ハ	おしま	け	— 山	ノ

ふ事ハ	連う志り	— 明日とハ	う志	や	まけ	— 山ノ平地ハ	てなし	— 山ノ奥ハ	かつち
と飛り可	— 大波立る	あらいをハ	る	や	た				
		— 山ヨリ下	る	や	れきな	観音立給ふ	処をハ	あなま希	
— 主といふハ	ゑち	— 小袖ハ	志	や	ん	— 天上へ上	ル事ヲ	里起多あ満	
立を	志ぶやあん	— 納る事ヲ	ゑ志	や	ら遍	— 頭ノ髪	いもくふ		
— 納る事ヲ	ゑ志やむ	— 綱をハ	や	や	あん	— 納る事ヲ	ゑ志やむ	— 綱をハ	や
				や	む	— 綱をハ	や		
明日を	尔志や多	— あさ川てヲ	お	や	多	— あさ川てヲ	おや志ゆむ		
ゑち本可ひ	— むさい事ヲ	いつ志	や	や	志ゆむ				
— 皆此方へ	よれといふヲ	おふび多の志	や	や	け連				
万ハ	王な本つ	— 東ハ	志年志	や	うら	— よふ来多といふヲ	飛る可		
				や	たお可ひ				
				や	け	二十五ヲハ	あしき年い可志満本つ	右是迄物の数可そへ	
				や	候事				
祢尔本 ^ほ	— 御身可子ト	いふヲ	や	や	尔本 ^{うほ}				
トいふを	ゑちお可ひ	— うぬとハ	や	や	尔	— 一切の道具の			
		— 一切の道具外底ヲ	あ志	や	ま	— 破れる物を	あん遍 ^{うぶし}		
— 舟の帆を	可		や	や	帆柱	ち川婦可や尔	— 繩を	者りき可	
— 七月ヲ	尔よらく徒ふ	— 八月ヲ	や	や	尔	— 繩を	者りき可		
— 少トいふを	本ん	— 物の遍多を	や	や	るいつふ				
トいふを	本ん	— 物の遍多を	や	や	ひやる				
ハ	志りき	— 浅黄のちらしハ	に志	や	る				
				や	う				
		— 下帯を	飛	や	う川、け	— 手ぬくいを	せん可起		
— 弟をハ	者 ^ゝ 起	— あ年を	志	や	ゝ	— 本くちハ	む尔ん		
				や	者				
— 鼻を	ゑ川婦	— く志	や	や	う本う	— 乳をハ	ゑ可し	— 飛ち ^を	志
— く志やミを	ゑしな	— 耳をき志	や	や	ミを	ゑしな	— 耳をき志	やら	
— 飛ぶぎをハ	こ可し		や	や	ら				
んとの	お起くるミ	— 弁慶をハ	志	や	者 ^ゝ	— こむらをハ	う連べ	— 足ハ	て満
— 鯉の魚ヲハ	志べ	鱒ノ魚をハ	いじ	や	まよん類				
— 者いハ	も寿	— 蜂ハ	志 ^ゝ や	屋	耳				
				屋					
		— 陸道を		屋	べ可類	— 多者こをハ	たん者 ^ゝ こ		
		— 燕ハ	ちひ	屋	川	— 可もめハ	可ひこ		
い	— 酒ハ酒なり	— 熊ヲハ	本く	ゆ	く				
		— 鹿ヲハ		ゆ	つく	— 水神ヲハ	遍 ^ゝ 川可もひ	— 久敷ト言事ハ	な可ら
					てい				
		— 杉の木をハ	志	ゆ	んぐ	— 松をハ	婦川婦	— くりをハ	やむ
はん	右同断	— 御なべ	ふれ可尔志	ゆ	く寿へ	— ?ハ	里可尔	— 者りハ	いてめ尔
ノ平ハ	う類ことり	— 山ノ頭上を	ゆ	ゆ	— むしろ	右同断			
山ノ後ハ	おしまけ	— 山ノ下をハ	ゆ	ゆ	ぶりきたい				
		— 者な寿事ヲ	志	ゆ	ぶりやうろうほう				
を	尔志や多	— あさ川てヲ	おや志	ゆ	ら	— 物ヲ追といふ	おけ遍 ^ゝ		
				ゆ	む				
		事を	か満かり	ゆ	だ				
九月ヲ	う連ほけつ婦	— 十月ヲ	志	ゆ	なん徒婦				
		— 兄を		ゆ	ふ本 ^う	— 弟をハ	者 ^ゝ 起	— あ年を	志や者
				よ					
ゝ	な	木	右同断	— ならノ木	尔志				
川	蟬ハ	志やう可ひ	— 山姥をハ	志	よ	う	少もなし	— うなかふし	ゑ可ふ年
ハ	ゑびらけ	— 可んなべハ	い	よ	う	多んころ	— や年ハ	せ起たひ	
ヲ	本起の者い	— 跡ニ残連といふヲ		よ	まれ				
		— 舟のとをもハ	ちつ婦お志	よ	うしおまん				
				よ	ろ	— 舟ノ中を	ちつふのしけた		

一 六月ヲ まうつゝ婦	一 七月ヲ 尔	よ	らく徒ふ	一 八月ヲ やるいつふ
こびを おのふゝ	一 なけくを お志	よ	ら	一 念比成近付を
		よ	つたなしのかる	
一 達者といふ お起らしの	一	よ	王川多可といふヲ	志んぎ
の お起くるミ	一 弁慶をハ	よ	ん類	
一 まさ可りを むくかり	一 可満ハ	よ	く遍	一 鍬ハ く川く王
雪ヲハ お者 ^せ	一 風ヲハ 連い	ら	一 日月ヲハ 徒ゝ婦	
ヲハ うゑん	一 死寿類と言事ヲハ	ら	い	
	一 父殺ト言事をハ	ら	一 母殺ト言事ヲハ	おなばハ
川志や介 ^り	一 さむいと言事ハ	ら	いけ連	
	一 飛多 ^る い事ヲハ	ら	さん多 ^ひ け連	一 餅をハ しと
遍 ^川 可もひ	一 久敷ト言事ハ	ら	てい	
	一 あ婦 ^ハ 志	ら	う	一 婦よう 少もなし
一 まな板 右同断	一 包丁ハ	ら	け	一 可んなべハ いよまれ
	一 寒起をハ	ら	いけ	一 あつ起をハ 本う婦け
一 主といふハ	ゑち	ら	遍	一 頭ノ髪 いもくふ
	一 小袖ハ	ら	一 物ヲ追といふ	おけ遍 ^ら
	一 者な寿事ヲ	ら	一 東風ハ あし	一 同飛可多も同前
	一 西風ハ	ら	一 北風ハ	まく那
	一 南風ハ	ら	一 静ヲハ	者うけ
寿事ヲ 本いつけ	一 日の暮を	ら	ら	んむ
	一 見事トいふを	ら	ま可し尔	一 浦山敷を
	亦い	ら	志れな共	あいの者 ^ら
	一 既ニ言事ヲ	ら	よふ来多といふヲ	飛る可
	底をハ	ら	婦 ^多	一 一切ノ物の内ニ在をハ
	ら婦 ^多	ら	婦 ^多 お可ひ	ら婦 ^多 お可ひ
	ら	ら	ハゑくぬ可るなんころ	
ゐ	一 人を同道シ而合せんといふ	ら	く	一 三月ヲ もちうふ
一 正月を	とい多年	ら	く徒ふ	一 八月ヲ やるいつふ
六月ヲ まうつゝ婦	一 七月ヲ 尔	ら	い	一 舟ニ乗レトハ
	一 此方へよれといふを	ら	一 念比成近付を	ち婦 ^ら おふ
びを おのふゝ	一 なけくを お志	ら	ら	んるし
	一本しいことを	ら	しの	一 金ハ かる
	一 達者といふ	ら	い	一 銀ハ 連多るか
	一 汗の出を	ら	一 舟の可ひを	かち
	一 笠ハ	ら	もし可れ	一 腹を
	一 不知といふ事ハ	ら	り	く
一 く志やミを	ゑしな	ら	一 雁ハ	くいと
	一 鶴ハ	ら	一 鴨ハ	こべ志
	一 足袋ヲハ	ら	一 川をハ	遍川
	一 神ヲハ	ら	可もひ	一 侍と言事ヲハ
一 き多ひと言事ヲハ	い川志や介 ^ら	ら	一 さむいと言事ハ	めいらいけ連
	一 坊主をハ	ら	一 山ノ神をハ	の本 ^ら 類可もい
	一 惣而丸キ貝ヲハ	ら	一 熊鷹	あち
一家をハ	ちせ	ら	一 山ノ頭上を	ゆぶりきたい
尾をハ	くう	ら	り	きたい
ハ	う類こと	ら	り	やうろうほう
後ハ	おしまけ	ら	一 父ハ	者ん遍 ^ら
	一 丈夫ハ	ら	こ	一 甥ハ
	一 姪ハ	ら	り	一 類共ハ
一 姪ハ	ま川可り	ら	り	か多者ちり
	一 伯父ハ	ら	り	一 高き処へ上ルを
	一 伯父ハ	ら	り	一 高き処へ上ルを
	一 おそ起事ハ	ら	り	一 者や起事ハ
志起 ^ら なんこ路	一 下二いよとハ	ら	り	か多あ遍 ^ら
	一 泊るといふ事ハ	ら	り	一 明日とハ
	一 海上な起多るをハ	ら	り	可
	一 火のもゆるをハ	ら	り	一 可つ堂ゝくをハ

<p> 一 天氣能をハ 志 氣能をハ 志り飛類可 一天をハ 志 を 飛るか 一 山へ上ルをハ の本 一 山へ上ルをハ の本り遍めれ寿お 一 沖ニ在嶋を 連婦多ん嶋の本 一 徒なくといふ 志 ヨリハ同断 一 物のおれる事ヲ 者ち 一 夜の事 志 りくん祢 一 夜明多ることいふヲ 志 一 暁といふヲ 志 一 何方ヨリ来ルといふヲハ 祢王あ 一 帆柱 ち川婦可や尔 一 繩を 者 一 王らをハ 王つてし 一 黒米 む 王らをハ 王つてし 一 黒米 むりく 一 黒米 むりくり 一 白米ヲ 飛 黒米 むりくり 一 白米ヲ 飛りけ 一 草ニ而も何ニ而も蒞候事を か満か 一 一切物の形ハ 志 一 な多ハ 者満な多 一 ま起りハ ゑ 一 まさ可りを むくか 一 宮守 無之 一 蚊ハ き、 一 柱ハ ゆく寿へ 一 ?ハ 王ん 下ルを 志やん 一 天上へ上ル事ヲ 一天をハ ヲハ お者く 一 右道と言事ヲハ 者 お者く 一 右道と言事ヲハ 者るき 一 中道と言事ヲハ 志ん志起 志起るう 一 左道と言事ヲハ 志もん る 一 口ノ内ニ而物のとける事ヲハ 一 蛙ハ おま介 ちく尔といふ 一 山ノ谷をハ 遍つ徒 のと飛り可 一 大波立るあらいをハ 王ん里 能可といふ事を 飛 一 齒ヲハ みまけ 一 舌ヲ 者 お志やうら 一 よふ来多といふヲ 飛 一 よく行とふヲ 飛 る可のおまん 一 よいといふを 飛 こ連てもといふヲ たん遍 祢 可い起飛 七つニハ あ 一人の物を あんぬんく 一 万ノ物誰可物といふを 祢んこ 人を同道シ而合せんといふ 徒らハゑくぬ可 七月ヲ 尔よらく徒ふ 一 八月ヲ や いふを 本ん 一 物の遍多を やひや 一 矢ノ根を あい よつたなしのか 一 惜惜 くニとハ あち可せしけ 一 道をハ 一 木の耳の本くちハ か 一 本しいことを らん し 一 金ハ 卡尔 一 銀ハ 連多 れ 一 腹を くい 一 痛事ヲ あ 一 肩ハ 本なし 一 せな可ハ せ川 一 本うぐ王んとの お起く </p>	<p> り 飛類可 一天をハ 志り 一 何ニ而も 一 何ニ而も 遍めれ寿おりた 一 石をハ ま多嶋と言 一 物ヲとく事ヲ 飛多 一 夜明多ることいふヲ 志り遍け 遍け おのまん 一 昼前といふヲ とののしけ き 一 とこへ行といふヲ 祢多おまん き可 くり 一 白米ヲ 飛りけり 一 白米ヲ 飛りけり 一 物を突を ゆだ き 一 浅黄のちらしハ に志やう けび 一 可満ハ よく遍 一 鎌ハ く川く王 一 者いハ も寿 一 蜂ハ 志や屋 可尔 一 者りハ いてめ尔 王ん 起多あ満 起多ん 一 雨のふるをハ あし 一 硯をハ きるう う う 一 左道と言事ヲハ 志もんるう う う し 一 大蛇ハ あい祢川婦 一 見、すハ とに やべ本 る か 一 山へ上ルをハ の本り遍めれ寿おりた う 可 可のおまん 一 よいといふを 飛るか か 一 物ヲ法を る あん遍 八つニハ 徒遍 さん遍 九つニハ 志年遍 さん遍 遍 一 何者といふヲ 祢んくう べ 一 物をと可め類事ヲ 年ん、 る なんころ る いつふ る む 一 鉄砲ハ 鉄砲也 一 合掌ハ お可む る とハ へ婦け 一 物のこ本る、事ヲ 連うけ る 志 一 銭をハ いちゑん る し 一 金ハ 卡尔 一 銀ハ 連多るカル る 卡尔 る る ミ 一 弁慶をハ 志やまよん類 </p>
--	--

ふへ	一口ノからいと	言事ハ	者類可	流	
			— 春ハ	者い可	類
			— なく事ヲハ	ちし可	類
主をハ	遍そり	— 山ノ神をハ	の本	類	可もい
					— 山ヲハ
	とふへ	一口ノからいと	言事ハ	者	類
			— 鯛をハ	せいましけ	— 海川の貝
			なめくぢり	右同断	— 鳥ハ
			— 雉子ハ	無シ	— 山鳥ハ
			— 山ノ尾をハ	くう	— 山ノ平ハ
			う	べるヲ	連ん本う
			— 腹病ヲ	徒いあ	類
			— 天氣能をハ	志り飛	類
			ヲ	くゑ可ひつ婦	— 十二月ヲ
					ちう
					— 色トいふを
					連多
					— か川ぎをハ
					な者堂
					— 陸道を
					屋べ可
お起くるミ	— 弁慶をハ	志やまよん	類	ほ	いち
				れ	
				れ	可尔志ゆ
				れ	— むしろ
				れ	右同断
				れ	きな
				れ	観音立給ふ処をハ
				れ	あなま希
				れ	ん本う
				れ	寿おりた
				れ	な共
				れ	者へ
				れ	— 火打ハ
				連	— 腹を
				連	— 痛事ヲ
				連	— 水をハ
				連	王川可
				連	
				連	— 餅をハ
				連	しと
				連	婦尔
				連	— 梨の木ハ
				連	右同断
				連	— 柿ハ
				連	右同断
				連	一本も無之
				連	う志り
				連	— 明日とハ
				連	う志やた
				連	ん本う
				連	— 腹病ヲ
				連	徒いあ類可
				連	婦多ん嶋の本り
				連	— 石をハ
				連	ま多嶋と言
				連	婦多
				連	— 是悲ないといふを
				連	ゑち連ん可ひ
				連	ん可ひ
				連	起
				連	— 齒ヲハ
				連	みまけ
				連	— 舌ヲ
				連	者るう
				連	ら
				連	— 東風ハ
				連	あし
				連	— 同飛可多も同前
				連	いら
				連	— 北風ハ
				連	まく那
				連	— 静ヲハ
				連	者うけ
				連	
				連	婦
				連	四つニハ
				連	い年婦
				連	五つニハ
				連	あし起年ふ
				連	六つニハ
				連	い
				連	者ぬ遍
				連	ほけつ婦
				連	— 十月ヲ
				連	志ゆなん徒婦
				連	多類べ
				連	黒トいふを
				連	くん祢
キ事ヲ	志う年ん	— 赤キ事ヲ	ふう	連	
				連	
				連	うけ
				連	
				連	多るカル
				連	べ
				連	— 足ハ
				連	て満
				連	といふ
				連	
				連	— 人ヲハ
				連	志やも
				連	
				連	— 道寿く那支と言事ヲハ
				連	ほん
				連	のやい志と満
				連	— 御身ト言事ハ
				連	やル
				連	ゝあん
				連	— 肴ト言事ハ
				連	せ川婦
				連	う
				連	— 貴キ事ハ
				連	くミち
				連	亦
				連	志やう可い
				連	— 骨折と言事ハ
				連	志んき

一難儀をハ ころ 一太儀ト言事ハ 右同断 一煩ヲハ やいの婦
 多満ハ 志や者[?] 一飛多いハ のい本 ころ 一ノ内ニ而物のとける事ヲハ るう
 やう可ひ 一山姥をハ 志よう多んこ ころ 一や年ハ せ起たひ
 おしまけ 一山ノ下をハ ゆぶりやう ころ うほう
 ころ 志んき
 なんこ ころ
 一爰へ来ルといふヲ 多んこ多んゑく本 ころ
 一舟のともをハ ちつ婦お志よ ころ 一舟ノ中を ちつふのしけた
 合せんといふ 徒らハゑくぬ可るなんこ ころ
 一よ ころ 一おのふ、 一なけくを お志よら 一念比成近付を
 の出を 本婦らい 一に志んをハ て ころ き 一物ノ多有事を 遍ろ
 んをハ てろき 一物ノ多有事を 遍 ころ
 一志りをハ おそ ころ 一玉く起ハ ち 一玉門を 本川キ
 一粟ヲハ むじ 路 一火ヲハ あ遍[?] 一あめヲハ あぶと
 一骨折ハ い志起[?] なんこ 路 一下二いよとハ 志りか多あ遍[?]
 一瞬といふヲ なんこ 路 一く、里付多といふことを 志な、
 志尔 一猿ハ一匹も無シ 一本う んと獣物猫このことし
 一米ハ 志 ん 一人を同道シ而合せんといふ 徒らハゑくぬ可るなんころ
 王ろ支と言事ヲハ う ゑん 一死寿類と言事ヲハ らい
 一来る可と言事ヲハ 可 一殿といふ事ヲハ かもいとの
 一そ那多と言事をハ 川くや共言
 一婦よう 少もなし 一うなかふし ころ ちやう可ひ 一み多くないと言事ハ 可もやし
 一鳩ハ くし ころ 可ふ年
 一まな板 右同断 一包丁ハ ころ とい多 一蟬ハ や起 一川鳥ハ 可つけん
 一休と言事 ころ びらけ 一可んなべハ いよまれ
 をハ 連婦多 一是悲ないといふを ころ 志起[?]なん 一おけといふ事ヲ ほつ本う
 一主といふハ ころ ち連ん可ひ
 一よぶといふ事ヲ 本川 ころ ち 一小袖ハ 志やら遍 一頭ノ髪 いもくふ
 むり立を 志ぶやあん 一納る事ヲ ころ 一追懸るといふヲ のし
 一恋事ヲ ころ 志やむ 一綱をハ や
 一御前様トいふを ころ ち本可ひ 一むさい事ヲ いつ志やけ連
 可ひ 一爰へ来ルといふヲ 多んこ多ん ころ ちお可ひ 一うぬとハ や尔 一一切の道具の
 一人を同道シ而合せんといふ 徒らハ ころ くぬ可るなんころ
 一十一月ヲ く ころ 可ひつ婦 一十二月ヲ ちう類徒婦
 の本くちハ かる志 一銭をハ いち ころ ん
 一妹をハ 飛志やう本う 一乳をハ ころ 可し 一飛ち[?]を 志
 一鼻を ころ 一鼻を ころ 川婦 一く志やミを ゑしな 一耳をき志やら
 一な多ハ 者満な多 一ま起りハ ころ しな 一耳をき志やら
 一としぬけと生物 一川をそハ ころ りけび
 一脇差ハ ころ 志やまん 一蛇ハ とく尔
 ハ あ者 一何ニ而も長キ物ハ 志 ゑむし 一やりハ おつ婦 一大豆ハ大豆也
 王ろ支と言事ヲハ う ゑん を 一茶ハ茶也
 一中道と言事ヲハ 志 ん 一死寿類と言事ヲハ らい
 ん志起るう 一左道と言事ヲハ 志 ん 志起るう 一左道と言事ヲハ 志もるう
 ころ 一 道寿く那支と言事ヲハ ほん ん ころ
 一 將軍様ヲハ ほん の可もひ 一 禁中様ヲハ ほん、の可もひ
 ハ ほんの可もひ 一 禁中様ヲハ ほん、の可もひ
 一飛多[?]るい事ヲハ 者らさ ん 多[?]ひけ連 一餅をハ しと
 一う連しいと言事ハ きろ、あ ん 一肴ト言事ハ せ川婦
 一紙をハ 可 ん 飛? 一米 ちい志やまも 一帰る可と言事ハ へと川ふ
 亦 志やう可い 一骨折と言事ハ 志 ん き
 断 一鮎ヲハ む 一鯨をハ く ん 遍?
 一生子ハ うた 一う久ひハ 志ぶ ん 一蟹ハ あんはや
 一う久ひハ 志ぶん 一蟹ハ あ ん 者や

一 杉の木をハ 志ゆ ん ぐ 一 松をハ 婦川婦 一 くりをハ やむ
 尔 一 猿ハ一匹も無シ 一 本うみ ん と 獣物猫このことし
 しぬけと生物 一 川をそハ え志やま ん 一 蛇ハ とく尔
 一 蟬ハ や起 一 川鳥ハ 可つけ ん
 志やう可ひ 一 山姥をハ 志よう多 ん ころ 一 元年ハ せ起たひ
 一 丈夫ハ く多り 一 父ハ 者 ん 遍 一 母ハ 者本う
 一 骨折ハ い志起 なる ん ころ 一 下ニいよとハ 志りか多あ遍
 一 いけとハ おま ん 一 何ニ而も 出ルといふ事ハ へとく
 王 ん 里る
 遍 あり 一 可つ堂、くをハ あへれ ん 本う
 一 火ヲさしくべるヲ 連 ん 本う 一 腹病ヲ 徒いあ類可
 一 山ヨリ下ルを 志や ん 一 天上へ上ル事ヲ 里起多あ満
 亦ら ん
 一 休と言事 志起 なる ん 一 おけといふ事ヲ ほつ本う
 ころ志 ん き
 者い 一 跡ニ残連といふヲようしおま ん
 な ん ころ
 一 堀といふヲ な ん ころ 一 く、里付多といふことを 志な、
 一 沖ニ在嶋を 連婦多 ん 嶋の本 一 石をハ 万多嶋と言
 連婦多 一 是悲ないといふを 志ち連 ん 可ひ
 一 介むり立を 志ぶやあ ん 一 納る事ヲ 志志やむ 一 綱をハ や
 事ヲ 本いつけ 一 日の暮を 徒ふら ん む
 一 夜の事 志りく ん 祢 一 夜明多ることいふヲ 志り遍け
 一 暁といふヲ 志りおのま ん 一 昼前といふヲ とのしけ
 一 今日を た ん 一 明日を 尔志や多 一 あさ川てヲ おや志ゆむ
 一 明後日を 志むけ 一 昨日を ぬま ん 一 昨日を 本しけのぬまん
 ぬまん 一 一昨日を 本しけのぬま ん
 一 よく行とふヲ 飛る可のおま ん 一 よいといふを 飛るか
 一 こ連てもといふヲ た ん 遍 祢 可い起飛るか 一 物ヲ法を
 七つニハ あるあ ん 遍 八つニハ 徒遍 さん遍 九つニハ 志年遍 さん遍
 ニハ あるあん遍 八つニハ 徒遍 さん 遍 九つニハ 志年遍 さん遍
 ハ 徒遍 さん遍 九つニハ 志年遍 さん 遍
 十二ハ 王 ん 遍 二十八 本つ 三十八 王ん遍 本つ 四十二ハ 徒本川
 王ん遍 二十八 本つ 三十八 王 ん 遍 本つ 四十二ハ 徒本川
 同百ハ あしき年本つ 千ハ 王 ん 遍 志年まな本つ
 りき 一 とこへ行といふヲ 祢多おま ん
 外底ヲ あ志やま 一 破れる物を あ ん 遍 うぶし
 一人の物を あ ん ぬんくる遍 一 何者といふヲ 祢んくう
 一人の物を あんぬ ん くる遍 一 何者といふヲ 祢んくう
 あんぬんくる遍 一 何者といふヲ 祢 ん くるべ 一 物をと可め類事ヲ 年ん、
 一 万ノ物誰可物といふを 祢 ん くるべ 一 物をと可め類事ヲ 年ん、
 祢んくるべ 一 物をと可め類事ヲ 年 ん、
 ふヲてう可ひ 一 爰へ来ルといふヲ 多 ん ころ 一 多んゑく本ろ
 う可ひ 一 爰へ来ルといふヲ 多んこ多 ん ゑく本ろ
 一 天をハ 里起多 ん 一 雨のふるをハ あし 一 硯をハ
 一米ハ 志ぬ 一人を同道シ而合セ ん といふ 徒らハゑくぬ可るなんころ
 同道シ而合せんといふ 徒らハゑくぬ可るな ん ころ
 四月ヲ きうう堂川ふ 一 五月ヲ 志 ん 志 一 つ婦
 ヲう連ほけつ婦 一 十月ヲ 志ゆな ん 徒婦
 曲多るを へうけ 一 少といふを 本 ん 一 物の遍多を やひやる
 色といふを 連多類べ 黒といふを く ん 祢
 一 青キ事ヲ 志う年 ん 一 赤キ事ヲ ふう連
 を 飛やう川、け 一手ぬくいを せ ん 可起
 おつ可ひ 一 ま川寿くとハ ナルおま ん
 陸道を 屋べ可類 一 多者こをハ た ん 者 一 こ
 スを ち起志や、 一本くちハ む尔 ん

本くちハ かる志 一 銭をハ いちゑ ん
 一 本しいことを ら ん
 起らしの 一 よ王川多可といふヲ 志 ん
 お起くるミ 一 弁慶をハ 志やまよ ん
 薪と云事をハ あべあ連 一 水をハ 王
 ハ をうつ婦 一 自在か起ヲハ 志や 王
 王 □
 王 ん里る
 十二ハ 王 ん遍^ゝ 二十八 本つ 三十八 王ん遍^ゝ本つ 四十二ハ 徒本
 川
 十二ハ 王ん遍^ゝ 二十八 本つ 三十八 王 ん遍^ゝ本つ 四十二ハ 徒本川
 つの言葉同前 百ハ あしき年本つ 千ハ 王 ん遍^ゝ志年まな本つ
 万ハ 王 なる本つ 一東ハ 志年志やけ 二十五ヲハ あしき年い可志満
 本つ 右是迄物の数可ぞへ
 一 何方ヨリ来ルトいふヲハ 祢 王 ありき 一とこへ行トいふヲ 祢多おまん
 一 王らをハ 王 つてし 一黒米 むりくり 一白米ヲ 飛^ゝりけり
 一 達者といふ お起らしの 一よ 王 川多可といふヲ 志んぎ
 一 可満ハ よく遍^ゝ 一 嶽ハ く川く 王
 川をハ 遍川 一 上川と言事ヲハ 遍^ゝ
 一 き多ひと言事ヲハ い川志や介^ゝ
 一 飛多^ゝるい事ヲハ 者らさん多^ゝ
 一 口をハ 者^ゝ
 一 人多満ハ 志や者^ゝ
 徒ふもこり、 一 のりハ お者こ婦^ゝ
 里 一 者いハ も寿 一 蜂ハ 志^ゝ
 一家をハ ちせ 一 鷺ハ か者^ゝ
 一 水こひ鳥 なし 一 鷺ハ 本^ゝ
 一 峯ハ き多ひ 一 けら者^ゝ
 一 けら者^ゝハ の起 一 入口ハ 本^ゝ
 一 戸をハ あ者^ゝ
 一 者しハ 者^ゝ
 又ハき者^ゝ
 いろりハ いぬへ 一 火者しハ あ遍^ゝ
 一 丈夫ハ く多り 一 父ハ 者ん遍^ゝ
 一 甥ハ かりこ 一 類共ハ あ者^ゝ
 一 骨折ハ い志起^ゝ
 こ路 一 下二いよとハ 志りか多あ遍^ゝ
 一 火のもゆるをハ あ遍^ゝ
 能可といふ事を 飛^ゝ
 一 休と言事 ゑ志起^ゝ
 一 沖ニ在嶋を 連婦多ん嶋の本^ゝ
 いふ 志りごて 一 物ヲとく事ヲ 飛^ゝ
 ヲ 志ゆら 一 物ヲ追といふ おけ遍^ゝ
 一 あ者^ゝハ あ者^ゝ
 ま可し尔 一 浦山敷を あいの者^ゝ
 飛る可のおまん 一 よいといふを 飛^ゝ
 一 こそ連てもといふヲ たん遍^ゝ
 五つニハ あし起年ふ 六つニハ い者ぬ遍^ゝ
 七つニハ あるあん遍^ゝ
 七つニハ あるあん遍^ゝ 八つニハ 徒遍^ゝ
 ハ あるあん遍^ゝ 八つニハ 徒遍^ゝさん遍^ゝ
 二つニハ 徒遍^ゝさん遍^ゝ 九つニハ 志年遍^ゝ
 徒遍^ゝさん遍^ゝ 九つニハ 志年遍^ゝさん遍^ゝ
 十二ハ 王ん遍^ゝ
 王ん遍^ゝ 二十八 本つ 三十八 王ん遍^ゝ
 んし 一 金ハ カル 一 銀ハ 連多るカル
 んぎ
 ん類
 王 川可
 王 □
 王 ん里る
 王 ん遍^ゝ 二十八 本つ 三十八 王ん遍^ゝ本つ 四十二ハ 徒本
 川
 王 ん遍^ゝ本つ 四十二ハ 徒本川
 王 ん遍^ゝ志年まな本つ
 王 なる本つ 一東ハ 志年志やけ 二十五ヲハ あしき年い可志満
 本つ 右是迄物の数可ぞへ
 王 ありき 一とこへ行トいふヲ 祢多おまん
 王 つてし 一黒米 むりくり 一白米ヲ 飛^ゝりけり
 王 川多可といふヲ 志んぎ
 王^ゝ
 ないた
 ゝ り 一 さむいと言事ハ めいらいけ連
 ゝ ひけ連 一 餅をハ しと
 ゝ ろう 一 貴キ事ハ くミち 亦 志やう可い 一 骨折と言事
 ハ 志んき
 ゝ 一 飛多いハ のい本ろ 一 口ノ内ニ而物のとける事ヲハ る
 う
 ゝ や屋
 ゝ ちり 一 熊鷹 あち
 ゝ ほうくち
 ゝ ハ の起 一 入口ハ 本^ゝ
 ゝ
 ゝ 一 何ニ而も長キ物ハ 志をふ 茶ハ茶也
 ゝ す 一 なべ 志う 一 釜 右同断
 ゝ 下け共言
 ゝ 者し
 ゝ 一 母ハ 者本う
 ゝ
 ゝ なんこ路 一 下二いよとハ 志りか多あ遍^ゝ
 ゝ
 ゝ あり 一 可つ堂、くをハ あへれん本う
 ゝ るか 一 山へ上ルをハ の本り遍めれ寿おりた
 ゝ なん 一 おけといふ事ヲ ほつ本う
 ゝ リ 一 石をハ ま多嶋と言
 ゝ 多
 ゝ 也 一 是ヨリハ同断 一 物のおれる事ヲ 者ちり
 ゝ
 ゝ るか
 ゝ 祢 可い起飛るか 一 物ヲ法を
 ゝ
 ゝ 八つニハ 徒遍^ゝさん遍^ゝ 九つニハ 志年遍^ゝさん遍^ゝ
 ゝ さん遍^ゝ 九つニハ 志年遍^ゝさん遍^ゝ
 ゝ 九つニハ 志年遍^ゝさん遍^ゝ
 ゝ さん遍^ゝ
 ゝ
 ゝ 二十八 本つ 三十八 王ん遍^ゝ本つ 四十二ハ 徒本川
 本つ 四十二ハ 徒本川

葉同前	百ハ	あしき年本つ	千ハ	王ん遍	°	志年まな本つ	
		— 誰子トいふヲ	祢尔本		°	ほ — 御身可子トいふヲ や尔本 ^う ほ	
	本 ^う ほ	— 御身可子トいふヲ	や尔本		°	うほ	
			底をハ	ら婦	°	多 — 一切ノ物の内ニ在をハ	
	°多	— 一切ノ物の内ニ在をハ	ら婦		°	多お可ひ	
	ヲ	あ志やま	— 破れる物を	あん遍	°	うぶし	
		— 一人の物を	あんぬんくる遍		°	— 何者といふヲ 祢んくう	
		— 筆も	同前	— 墨ハ	者	°	川し — 舟のおもてハ ちつふな
		— 黒米	むりくり	— 白米ヲ	飛	°	りけり
	ヲ	きう堂川ふ	— 五月ヲ	志ん志		°	つ婦
		遍満可らい	— 舟ニ乗レトハ	ち婦		°	おふ
	を	屋ベ可類	— 多者こをハ	たん者		°	こ
		— 者やくいそけといふヲ	本くれ者			°	へ — 火打ハ 火うち也
			— 兄を	ゆふ本		°	う — 弟をハ 者 ^う 起 — あ年を 志や者
		— 兄を	ゆふ本 ^う	— 弟をハ	者	°	う起 — あ年を 志や者
			— 飛ぶざをハ	こ可しや者		°	— こむらをハ う連ベ — 足ハ て満
	可りを	むくかり	— 可満ハ	よく遍		°	— 鋏ハ く川く王
	者可類	— 夏ハ	さく	— 秋ハ徒可		°	くふ
	めしヲハ	あま母	— 飛へヲハ	飛や者		°	
	— 粟ヲハ	むじ路	— 火ヲハ	あ遍		°	— あめヲハ あぶと
			— 雪ヲハ	お者		°	せ — 風ヲハ 連いら — 日月ヲハ 徒、婦
			— 下川と言事ヲハ	者		°	那い多 — 川の深事ヲハ お本
			— 喰事をハ	あ遍		°	— 呑事をハ くう — 薪と言事ハ ちく尔
	— 女をハ	本川祢	— 子共ヲハ	本		°	ほ
		— 男の子をハ	本く年本			°	ほ — 女の子をハ ま川年本 ^う ほ
	く年本 ^う ほ	— 女の子をハ	ま川年本			°	ほ
	たこをハ	あ川い那	— 鮑ヲハ	あい飛		°	— 稲ヲハ せ
	坊主をハ	遍そり	— 山ノ神をハ	の本		°	類可もい — 山ヲハ
		— 鹿ヲハ	ゆつく	— 水神ヲハ	遍	°	川可もひ — 久敷ト言事ハ な可らてい
	— 風ヲハ	連いら	— 日月ヲハ	徒		°	婦
	ぼんの可もひ	— 禁中様ヲハ	ぼん			°	の可もひ
		— 湯をハ	せ			°	可 — 汁をハ お者 — 塩をハ 尔し□
	— むごひといふ事をハ	おの				°	— 尔くひといふ事をハ 志とま
	ほ川婦	— 痛ト言事ヲハ	い多しや(°)
		— う連しいと言事ハ	きろ			°	あん — 肴ト言事ハ せ川婦
		— 惣而丸キ貝ヲハ	徒ふもこり			°	— のりハ お者こ婦
		— 宮守	無之	— 蚊ハ	き	°	里 — 者いハ も寿 — 蜂ハ 志 ^う や屋
					セ	°	な起の
	— けら者 ^う ハ	の起	— 入口ハ	本		°	
			— むこハ	かふ		°	— 妻ハ こしまち — 女房を まち
	路	— く、里付多といふことを	志な			°	
	んこるべ	— 物をと可め類事ヲ	年ん			°	
		— 六月ヲ	まうつ			°	婦 — 七月ヲ 尔よらく徒ふ — 八月ヲ やるいつふ
		— 下帯を	飛やう川			°	け — 手ぬくいを せん可起
		— よろこびを	おのふ			°	— なけくを お志よら — 念比成近付を
		— 火ヲもミて出スを	ち起志や			°	— 本くちハ む尔ん
	— 兄を	ゆふ本 ^う	— 弟をハ	者 ^う		°	起 — あ年を 志や者

仮名引きアイヌ語索引

あい	や (矢)	385
あいねつふ	だいじゃ (大蛇)	145
あいのば	うらやましき (羨ましき)	311
あいび	あわび	85
あいるむ	やのね (矢の根)	386
あし	ひがしかぜ (東風)	285
あし	あめのふる (雨の降る)	338
あしきねいかしまほつ	にじゅうご (二十五)	320
あしきねふ	いつつ (五つ)	320
あしきねほつ	ひゃく (百)	320
あしやま	そこ (底)	329
あち	くまたか (熊鷹)	167
あちかせしけ	ごたいずくに (五体ずくに)	396
あつい	うみ (海)	24
あついかもい	うみのかみ (海ノ神)	90
あついな	たこ	84
あなまき	かんのんたちたまふところ (観音立ち給う所)	247
あねはおかい	もののあること (物の在事)	22
あば	と (戸)	180
あば	いちるいども (一類共)	231
あぶと	あめ	9
あふどめし	あめふる (雨降る)	9
あべ	ひ (火)	8
あべ	くうこと (喰事)	45
あべあり	もゆる (燃ゆる)	250
あべあれ	ひたく (火薪)	48
あべはし	ひはし (火箸)	212
あへれんほう	かつたたく	251
あまも	めし	5
あるあんべ	ななつ (七つ)	320
あるあんべ	いたい (痛)	425
あんぬんくるべ	ひとのもの (人の物)	331
あんはや	かに (蟹)	120
あんべうぶし	やぶれるもの (破れる物)	330
いしぎなんころ	ほねおり (骨折)	238
いじやに	いわし (鱒)	83
いしやま	ものなきこと (物之無き事)	21
いたげ	ごき (御器)	185
いたしや	いたい (痛)	76
いちゑん	ぜに (銭)	405
いつしやげり	きたひ	71
いつしやけれ	むさい	313
いてめに	はり (梁)	191
いとへ	あらい (荒い)	249
いぬへ	いろり	211
いねふ	よつつ (四つ)	320
いはぬべ	むつつ (六つ)	320
いへけ	こし (腰)	433
いもくふ	かみ (髪)	274
いよまれ	かんなべ (爛鍋)	202
いらしれな	みごと (見事)	310
いらまかしに	みごと (見事)	310
いらもしかれ	しらざる (不知)	423
うしおい	うちのもの (内ノ者)	43
うしや	だいどころ (台所)	196
うしやた	あす (明日)	241

うせ	かゆ(粥)	54
うせ	あさぎのちらし(浅黄のちらし)	377
うせつ	もめん(木綿)	378
うた	なまこ(生子)	118
うちなかれ	ごたいぎ(御大儀)	237
うることり	やまのひら(山の平)	216
うれべ	こむら(腓)	442
うれほけつふ	くがつ(九月)	363
うゑん	わろき	19
えしぎなんころしんき	やすむ(休む)	262
えしやまん	かわおそ(川をそ)	142
おかむ	がっしょう(合掌)	388
おきくるみ	ほうぐわんと(判官殿)	446
おきらしの	たっしゃ(達者)	409
おけべ	おう(追う)	283
おしまけ	やまのうしろ(山の後ろ)	218
おしやうら	すでにいう(既に言う)	314
おしよら	なけく(嘆く)	390
おそろ	しり(尻)	435
おた	はま(濱)	124
おつかひ	あの子(あの子)	392
おつふ	やり(槍)	455
おとな	しょうや(庄屋)	448
おなたら	ちちころし(父殺)	69
おなばは	ははころし(母殺)	70
おのの	むごひ	63
おのふゝ	よろこび	389
おは	しる(汁)	51
おはく	あさき(浅キ)	31
おはこぶ	のり	122
おばせ	ゆき(雪)	10
おふびたのしやたおかひ	みなこなたへよれ(皆此方へよれ)	316
おほ	かわのふかいこと(川の深事)	30
おま	いく(行く)	55
おまけるし	かわず(蛙)	144
おまん	いけ(行け)	242
おむ	もも(腿)	440
おもひ	ねんごろひと(懇ろ人)	439
おやしゆむ	あさって	306
かせうふ	しやくし(杓子)	198
かぢ	かひ(權)	421
かつけん	かわがらす	173
かつしやう	やね(屋根)	192
かつち	やまのおく(山の奥)	222
かつむいり	おそき(遅き)	234
かに	かね(金)	407
かばちり	わし(鷺)	166
かひこ	かもめ	164
かふゝ	むこ(婿)	226
かぶら	かさ(笠)	420
かまかり	かる(刈る)	351
かもいとの	との(殿)	38
かもやし	みたくない	68
かや	ほ(帆)	345
かりこ	おい(甥)	230
かるし	ほくち	404
かんび	かみ(紙)	96

きううたつふ	しがつ (四月)	358
ききり	か (蚊)	148
きしやら	みみ (耳)	428
きたひ	みね (峯)	177
きばさけ	ほうちょう (包丁)	201
きろろあん	うれしい	77
く	おび (帯)	380
くい	はら (腹)	424
くいとう	がん (雁)	161
くう	のむこと (吞事)	46
くう	やまのお (山の尾)	215
くう	ゆみ (弓)	384
くしほ	はと (鳩)	159
くしゑ	はと (鳩)	171
くたり	てんじょう (?)	223
くち	ほんのくぼ (盆の窪)	429
くつくわ	くわ (鋏)	453
くみち	たつきこと (貴キ事)	100
くれふに	くわのき (桑ノ木)	132
くゑかひつふ	じゅういちがつ (十一月)	365
くんね	くろ (黒)	373
くんべ	くじら (鯨)	115
けり	たび (足袋)	26
こい	あらい (荒い)	249
こかしゃば	ひざ (膝)	441
こしまち	つま (妻)	227
ころ	なんぎ (難儀)	102
さく	なつ (夏)	2
酒	さけ (酒)	91
し	ひぢ (肘)	419
しいののほりかもひ	かみ (神)	41
しう	にがきこと (にがき事)	110
しう	よめとり (よめ取)	112
しう	むことり (むこ取)	113
しう	なべ (鍋)	187
しうねん	あおき (青き)	374
しき	まなこ	79
しきなへ	たか (鷹)	80
しつく	はら (腹)	81
しつほ	しお (塩)	53
しと	もち (餅)	74
しとま	にくひ	64
しなゝ	くくりつけた	267
しねしやけ	いっそく (一束)	320
しねふ	ひとつ (一)	320
しねべさんべ	ここのつ (九つ)	320
しぶやあん	けむり (煙)	290
しぶん	うぐい (うくひ)	119
しべ	さけ (鮭)	82
しま	いそ (磯)	126
しむけ	みようごにち (明後日)	307
しむれら	にしかぜ (西風)	284
しもんるう	ひだりみち (左道)	34
しやう	ざしき (座敷)	194
しやうかい	たつきこと (貴キ事)	100
しやうかひ	かわせみ (翡翠)	174
しやうき	ねま (寝間)	195

しやかけ	すきこと (酸き事)	111
しやは	あね (姉)	416
しやば	あたま (頭)	105
しやまけ	やまのわき (山の脇)	220
しやまのふ	かこい (囲い)	193
しやまよんる	べんけい (弁慶)	447
しやも	ひと (人)	15
じやや	はち (蜂)	150
しやらへ	こそで (小袖)	273
しやわ	じざいかき (自在鉤)	210
しやん	くだる (下る)	260
しゆなんつふ	じゅうがつ (十月)	364
しゆら	はなす (放す)	282
しゆんぐ	すぎのき (杉の木)	129
しょうたんころ	やまうば (山姥)	175
しらう	あぶ (虻)	151
しり	てん (天)	257
しりおのまん	あかつき (暁)	300
しりかたあべ	したにいよ (下に居よ)	239
しりかたはちり	おじ (伯父)	232
しりき	かたち (形)	376
しりくんね	よる (夜)	298
しりごて	つなぐ	280
しりひるか	てんきよい (天気良い)	256
しりへけ	あけたる (明けたる)	299
しゐ	こめ (米)	353
しをふ	ながきもの	181
しんき	ほねおり (骨折)	101
しんぎ	よわつたか (弱ったか)	410
しんしきるう	なかみち (中道)	33
しんじつふ	ごがく (五月)	359
せ	いね (稲)	86
せい	かいるい (貝類)	117
せいましけ	たい (鯛)	116
せきたいひ	やね (屋根)	176
せせか	ゆ (湯)	50
せつふ	さかな (肴)	78
せつる	せなか (背中)	431
せんかき	てぬくい (手ぬぐい)	382
たんこたんゑくほろ	ここへくる (ここへ来る)	336
たんど	きょう (今日)	304
たんばこ	たはこ (煙草)	399
たんべねかいきひるか	これでも (これでも)	319
ち	たまくき (玉茎)	436
ちいしやまも	こめ (米)	97
ちうるつふ	じゅうにがつ (十二月)	366
ちきしやゝ	もみてだす (揉みて出す)	402
ちくに	まき (薪)	47
ちくに	き (木)	213
ちしかる	なく	16
ちせ	いえ (家)	165
ちつふ	ふね (舟)	25
ちつふおしよろ	ふねのとも (舟の艫)	343
ちつふかやに	ほばしら (帆柱)	346
ちつふな	ふねのおもて (舟の表)	342
ちつふのしけた	ふねのなか (舟の中)	344
ちひやつ	つばめ	163

ちぶおふ	ふねにのれ (舟に乗れ)	371
ちめふ	いるい (衣類)	56
ついあるか	はらやみ (腹病)	253
ついなし	はやき (早き)	235
つがくふ	あき (秋)	3
つつふ	にちげつ (日月)	12
つふ	ふたつ (二つ)	320
つふもこりり	まるきかい (丸き貝)	121
つふらんむ	ひのくれ (日の暮れ)	297
つべさんべ	やっつ (八つ)	320
つほつ	しじゅう (四十)	320
つらはゑくぬかるなんころ	どうどうしてあはせん (同道して会わせん)	354
てうかひ	われ (我)	18
てうかひ	われ (我)	335
てき	ゆび (指)	444
てなし	やまのへいち (山の平地)	221
てのま	こも (菰)	206
てま	あし (足)	443
てむに	かいそう (海藻)	123
てろき	にしん (ニシン)	412
といた	はと (鳩)	159
といたね	しょうがつ (正月)	355
とうかつふ	ひる (昼)	302
とうかつふほけれ	ひるすぎ (昼過ぎ)	303
とくい	おもいひと (念比人)	17
とくに	へび (蛇)	143
としぬけ	いきものおながとりのごとし (生物尾長鳥のごとし)	141
とつと	ち (血)	432
とつといくれ	ちちのむ (乳呑)	445
とに	みみす (見、す)	146
とののしけ	ひるまえ (昼前)	301
とひ	はたけ (畑)	127
とふへ	あまい	108
なからてい	ひさしき (久敷)	95
なにおまん	まつすく (まつすぐ)	393
なはたる	かつぎ	383
なんころ	へい (塀)	266
にし	しお (塩)	52
にしくろ	くも (雲)	14
にしは	さむらい (侍)	42
にしは	しょうや (庄屋)	448
にしやう	あさぎのちらし (浅黄のちらし)	377
にしやた	あす (明日)	305
にしよ	ならのき (ならノ木)	137
によらくつふ	しちがつ (七月)	361
ぬまん	きのう (昨日)	308
ね	ふしき (不思議)	422
ねたおまん	とこへいく (どこへ行く)	324
ねにぼほ	だれこ (誰子)	321
ねわありき	いずかたよりきたる (何方より来たる)	323
ねんくう	なにもの (何物)	332
ねんこるべ	たれかもの (誰が物)	333
ねん、	とがめる (咎める)	334
のいほろ	ひたい	106
のき	けらば (蝶羽)	178
のき	きん (金)	434
のし	おいかける	279

のた	なみ (浪)	23
のちう	ほし (星)	13
のとひりか	なきたる (風ぎたる)	248
のほりへめれすおりた	のぼる (上る)	259
のぼるかもい	やまのかみ (山ノ神)	88
はいかる	はる (春)	1
はうけ	しずか (静か)	289
ばす	はし (箸)	186
はすくる	からす (烏)	155
はちり	おれる (折れる)	295
ばつし	すみ (墨)	341
ばないた	しもかわ (下川)	29
ばゝき	おとうと (弟)	415
はぶらく	にがつ (二月)	356
はほう	はは (母)	225
はまなた	なた (鉋)	449
はらさんだひけれ	ひだるい	73
はりきか	なわ (縄)	347
はるう	した (舌)	277
はるかる	からい	109
はるきるう	みぎみち (右道)	32
ばろう	くち (口)	99
はんべ	ちち (父)	224
ひしやうほう	いもうと (妹)	417
びた	とく (解く)	281
ひやうつ、け	したおび (下帯)	381
ひやば	ひへ	6
びりけり	はくまい (白米)	350
ひるか	よふきた (良う来た)	315
びるか	よいか (良いか)	258
びるか	よい (良い)	318
ひるかのおまん	よくいく (良く行く)	317
ふ	そのもの (その物)	44
ふ	なまにえ (生煮え)	245
ふうれ	赤き (赤き)	375
ふきな	ひさく (柄杓)	199
ふしに	ほらのき (ほらの木)	138
ふつふ	まつ (松)	130
ふみるい	やまどり (山鳥)	158
ふれかにしゆ	おなべ (お鍋)	204
へうけ	まがる (曲がる)	367
へそり	ほうす (坊主)	87
へたちり	つる (鶴)	160
へつ	かわ (川)	27
べつかもひ	すいじん (水神)	94
へつつる	たに (谷)	214
へてとく	やまのおく (山の奥)	222
へとく	でる (出る)	243
へとつふ	かえるか (帰るか)	98
べないた	かみかわ (上川)	28
へふけ	ぐちる (?)	394
へまからい	よれ (寄れ)	370
へめす	のぼる (上る)	233
へろ	おおい (多い)	413
ほいつけ	こほす (こぼす)	296
ほうふ	にえる (煮える)	244
ほうふけ	あつき (暑き)	255

ほうめん	じゅうぶつねこのごとし (獣物猫このごとし)	140
ほきのはい	さきゆけ (先行け)	264
ほく	おつと	57
ほくねぼほ	おとこのこ (男の子)	61
ほくゆく	くま (熊)	92
ほくればへ	いそげ (急げ)	400
ほしけのぬまん	いっさくじつ (一昨日)	309
ほつ	にじゅう (二十)	320
ほつき	ぎよくもん (玉門)	437
ほつね	おんな (女)	59
ほつふ	あたたか	75
ほつほう	おけ (置け)	263
ほつゑ	よぶ (呼ぶ)	278
ほなし	かた (肩)	430
ほふらい	あせのでる (汗の出る)	411
ぼほ	こども (子供)	60
ぼゝ	いりぐち (入口)	179
ぼほうくち	うぐいす (鶯)	170
ほれいち	かも (鴨)	162
ほろ	みちひろき (道廣キ)	35
ほろのやいしとま	きつくにくひ	65
ほん	みちすくなき (道すくなき)	36
ほん	すくない (少ない)	368
ほんのかもひ	しょうぐんさま (將軍様)	39
ほんほんのかもひ	きんちゅうさま (禁中様)	40
まうつゝふ	ろくがつ (六月)	360
まくな	きたかぜ (北風)	288
まさ	ひのき (檜ノ木)	135
また	ふゆ (冬)	4
またしま	いし (石)	269
まち	にょうぼう (女房)	228
まちい	つま (妻)	58
まつかりこ	めい (姪)	229
まつねぼほ	おんなのこ (女の子)	62
みまけ	は (菌)	275
む	あゆ (鮎)	114
むくかり	まさかり	451
むじろ	あわ (粟)	7
むにん	ほくち	403
むりくり	こくまい (黒米)	349
めいらいけれ	さむい	72
めのこ	おんな (女)	438
めらいけ	さむき (寒き)	254
もし	かる (刈る)	351
もす	はい	149
もちうふ	さんがつ (三月)	357
や	つな (綱)	292
やいのふ	わずらう (煩)	104
やき	せみ	172
やとた	とび (鳶)	156
やに	おんみ (御身)	66
やに	うぬ (汝)	326
やにぼうほ	おんみかこ (御身が子)	322
やひやる	もののへた (物のへた)	369
やべかる	りくどう (陸道)	398
やむ	くり	131
やるいつふ	はちがつ (八月)	362

やれきな	ふねのとま（舟の苔）	246
ゆくすへ	はしら（柱）	189
ゆだ	つく（搦く）	352
ゆつく	しか（鹿）	93
ゆふぼう	あに（兄）	414
ゆぶりきたい	やまのずじょう（山の頭上）	217
ゆぶりきたいやうろうほう	やまのした（山の下）	219
ようしおまんなんころ	のこれ（残れ）	265
よくべ	かま（鎌）	452
よつたなしのかる	ねんごろ（懇ろ）	391
らい	しする（死する）	20
らぶた	そこ（底）	327
らぶたおかひ	うちにある（内にある）	328
らん	くだる（下る）	260
らんるし	ほしい（欲しい）	406
りかに	けた（楯）	190
りきたあま	のぼる（上る）	261
りきたん	天	337
る	みち（道）	397
るう	とける	107
るやべほ	あらい（荒い）	249
れいら	かぜ（風）	11
れいら	みなみかぜ（南風）	287
れうけ	こほるる（零るる）	395
れうしり	とめる（泊る）	240
れき	ひげ（鬚）	276
れたるかに	ぎん（銀）	408
れたるべ	いろ（色）	372
れふ	みつつ（三つ）	320
れふた	おき（沖）	270
れふたんしまのほり	おきにあるしま（沖にある島）	268
れんほう	さしくべる	252
わつか	みず（水）	49
わつてし	わら（藁）	348
わなほつ	まん（万）	320
わんべ	とお（十）	320
わんべしねまなほつ	せん（千）	320
わんべほつ	さんじゅう（三十）	320
わんりる	あらい（荒い）	249
ゑか	くるか（来るか）	37
ゑかし	ちち（乳）	418
ゑかふね	うなかふし	153
ゑしな	くしやみ	427
ゑしやむ	おさめる（納める）	291
ゑち	ぬし（主）	272
ゑちおかひ	おまえさま（御前様）	325
ゑちほかひ	こたえる（応）	312
ゑちやうかひ	そなた	67
ゑちれんかひ	ぜひない（是非ない）	271
ゑつくや	くるか（来るか）	37
ゑつふ	はな（鼻）	426
ゑびらけ	ほうちょう（包丁）	201
ゑむし	わきざし（脇差し）	454
ゑりけび	まきり	450
をうつふ	やす	209

日本語見出し語索引

あおき (青き)	しうねん	374
あかき (赤き)	ふうれ	375
あかつき (暁)	しりおのまん	300
あき (秋)	つがくふ	3
あけたる (明けたる)	しりへけ	299
あさき (浅キ)	おはく	31
あさぎのちらし (浅黄のちらし)	うせ	377
あさぎのちらし (浅黄のちらし)	にしやう	377
あさって	おやしゆむ	306
あし (足)	てま	443
あす (明日)	うしやた	241
あす (明日)	にしやた	305
あせのでる (汗の出る)	ほふらい	411
あたたか	ほつふ	75
あたま (頭)	しやば	105
あつき (暑き)	ほうふけ	255
あに (兄)	ゆふほう	414
あね (姉)	しやは	416
あの子 (あの子)	おつかひ	392
あば (浮子)		293
あぶ (虻)	しらう	151
あまい	とふへ	108
あめ	あぶと	9
あめのふる (雨の降る)	あし	338
あめふる (雨降る)	あふどめし	9
あゆ (鮎)	む	114
あらい (荒い)	いとへ	249
あらい (荒い)	こい	249
あらい (荒い)	るやべほ	249
あらい (荒い)	わんりる	249
あわ (粟)	むじろ	7
あわび	あいび	85
いえ (家)	ちせ	165
いきものおながとりのごとし (生物尾長鳥のごとし)	としぬけ	141
いく (行く)	おま	55
いけ (行け)	おまん	242
いし (石)	またしま	269
いずかたよりきたる (何方より来たる)	ねわありき	323
いそ (磯)	しま	126
いそけ (急げ)	ほくればへ	400
いそけ (急げ)		236
いたい (痛)	あるあんべ	425
いたい (痛)	いたしや	76
いちるいども (一類共)	あば	231
いっさくじつ (一昨日)	ほしけのぬまん	309
いっそく (一束)	しねしやけ	320
いつつ (五つ)	あしきねふ	320
いね (稲)	せ	86
いもうと (妹)	ひしやうほう	417
いりぐち (入口)	ぼゝ	179
いるい (衣類)	ちめふ	56
いろ (色)	れたるべ	372
いろり	いぬへ	211
いわし (鱒)	いじやに	83
うぐい (うくひ)	しぶん	119

うぐいす (鶯)	ほほうくち	170
うすべり (うす縁)		208
うちにある (内にある)	らぶたおかひ	328
うちのもの (内ノ者)	うしおい	43
うなかふし	ゑかふね	153
うぬ (汝)	やに	326
うみ (海)	あつい	24
うみのかみ (海ノ神)	あついかもい	90
うらやましき (羨ましき)	あいのば	311
うれしい	きろろあん	77
おい (甥)	かりこ	230
おいかける	のし	279
おう (追う)	おけべ	283
おおい (多い)	へろ	413
おき (沖)	れふた	270
おきにあるしま (沖にある島)	れふたんしまのほり	268
おけ (置け)	ほつほう	263
おさめる (納める)	ゑしやむ	291
おじ (伯父)	しりかたはちり	232
おそき (遅き)	かつむいり	234
おつと	ほく	57
おとうと (弟)	ばゝき	415
おとこのこ (男の子)	ほくねほほ	61
おなべ (お鍋)	ふれかにしゆ	204
おび (帯)	く	380
おまえさま (御前様)	ゑちおかひ	325
おもいひと (念比人)	とくい	17
おれる (折れる)	はちり	295
おんな (女)	ほつね	59
おんな (女)	めのこ	438
おんなのこ (女の子)	まつねほほ	62
おんみ (御身)	やに	66
おんみかこ (御身が子)	やにほうほ	322
か (蚊)	きぎり	148
かいそう (海藻)	てむに	123
かいるい (貝類)	せい	117
かえるか (帰るか)	へとつふ	98
かき (柿)		134
かこい (囲い)	しやまのふ	193
かさ (笠)	かぶら	420
かぜ (風)	れいら	11
かた (肩)	ほなし	430
かたち (形)	しりき	376
かつぎ	なはたる	383
がっしょう (合掌)	おかむ	388
かつたたく	あへれんほう	251
かに (蟹)	あんはや	120
かね (金)	かに	407
かひ (權)	かぢ	421
かま (釜)		188
かま (鎌)	よくべ	452
かみ (紙)	かんび	96
かみ (神)	しいののほりかもひ	41
かみ (髪)	いもくふ	274
かみかわ (上川)	べないた	28
かも (鴨)	ほれいち	162

かもめ	かひこ	164
かゆ (粥)	うせ	54
からい	はるかる	109
からす (烏)	はすくる	155
かる (刈る)	かまかり	351
かる (刈る)	もし	351
かわ (川)	へつ	27
かわおそ (川をそ)	えしやまん	142
かわがらす	かつけん	173
かわず (蛙)	おまけるし	144
かわせみ (翡翠)	しやうかひ	174
かわのふかいこと (川の深事)	おほ	30
がん (雁)	くいとう	161
かんなべ (柵鍋)	いよまれ	202
かんのんたちたまふところ (観音立ち給う所)	あなまき	247
き (木)	ちくに	213
きじ (雉子)		157
きたかぜ (北風)	まくな	288
きたひ	いつしやげり	71
きつくにくひ	ほろのやいしとま	65
きのう (昨日)	ぬまん	308
きょう (今日)	たんど	304
ぎよくもん (玉門)	ほつき	437
きん (金)	のき	434
ぎん (銀)	れたるかに	408
きんちゆうさま (禁中様)	ほんほんのかもひ	40
くうこと (喰事)	あべ	45
くがつ (九月)	うれほけつふ	363
くくりつけた	しなゝ	267
くしやみ	ゑしな	427
くじら (鯨)	くんべ	115
くだる (下る)	しやん	260
くだる (下る)	らん	260
くち (口)	ばろう	99
ぐちる (?)	へふけ	394
くま (熊)	ほくゆく	92
くまたか (熊鷹)	あち	167
くも (雲)	にしくろ	14
くり	やむ	131
くるか (来るか)	ゑか	37
くるか (来るか)	ゑつくや	37
くろ (黒)	くんね	373
くわ (鋏)	くつくわ	453
くわのき (桑ノ木)	くれふに	132
けた (桁)	りかに	190
けむり (煙)	しぶやあん	290
けらば (螻羽)	のき	178
ごがく (五月)	しんじつふ	359
ごき (御器)	いたげ	185
こくまい (黒米)	むりくり	349
ここのつ (九つ)	しねべさんべ	320
ここへくる (ここへ来る)	たんこたんゑくほろ	336
こし (腰)	いへけ	433
ごじゅう (五十)		320
こそで (小袖)	しやらへ	273
ごたいぎ (御大儀)	うちなかれ	237

ごたいづくに (五体づくに)	あちかせしけ	396
こたえる (応)	ゑちほかひ	312
こども (子供)	ぼほ	60
こほす (こぼす)	ほいつけ	296
こほるる (零るる)	れうけ	395
こむら (腓)	うれべ	442
こめ (米)	しゐ	353
こめ (米)	ちいしやまも	97
こも (菰)	てのま	206
これでも (これでも)	たんべねかいきひるか	319
さかな (肴)	せつふ	78
さきゆけ (先行け)	ほきのはい	264
さけ (鮭)	しべ	82
さけ (酒)	酒	91
ざしき (座敷)	しやう	194
さしくべる	れんほう	252
さむい	めいらいけれ	72
さむき (寒き)	めらいけ	254
さむらい (侍)	にしは	42
さる (猿)		139
さんがつ (三月)	もちうふ	357
さんじゅう (三十)	わんべほつ	320
しお (塩)	しつほ	53
しお (塩)	にし	52
しか (鹿)	ゆつく	93
しがつ (四月)	きううたつふ	358
じざいかき (自在鉤)	しやわ	210
しじゅう (四十)	つほつ	320
しずか (静か)	はうけ	289
しする (死する)	らい	20
した (舌)	はるう	277
したおび (下帯)	ひやうつ、け	381
したにいよ (下に居よ)	しりかたあべ	239
しちがつ (七月)	によらくつふ	361
しもかわ (下川)	ばないた	29
しやくし (杓子)	かせうふ	198
じゅういちがつ (十一月)	くゑかひつふ	365
じゅうがつ (十月)	しゆなんつふ	364
じゅうにがつ (十二月)	ちうるつふ	366
じゅうぶつねこのごとし (獣物猫のごとし)	ほうるん	140
しょうがつ (正月)	といたね	355
しょうぐんさま (將軍様)	ほんのかもひ	39
しょうや (庄屋)	おとな	448
しょうや (庄屋)	にしは	448
しらざる (不知)	いらもしかれ	423
しり (尻)	おそろ	435
しる (汁)	おは	51
すいじん (水神)	べつかもひ	94
すきこと (酸き事)	しやかけ	111
すぎのき (杉の木)	しゆんぐ	129
すくない (少ない)	ほん	368
すずり (硯)		339
すでにいう (既に言う)	おしやうら	314
すな (砂)		125
すみ (墨)	ばつし	341
せなか (背中)	せつる	431

ぜに (銭)	いちゑん	405
ぜひない (是非ない)	ゑちれんかひ	271
せみ	やき	172
せん (千)	わんべしねまなほつ	320
そこ (底)	あしやま	329
そこ (底)	らぶた	327
そなた	ゑちやうかひ	67
そのもの (その物)	ふ	44
た (田)		128
たい (鯛)	せいましけ	116
たいぎ (太儀)		103
だいじゃ (大蛇)	あいねつふ	145
だいず (大豆)		456
だいどころ (台所)	うしや	196
たか (鷹)	しきなへ	80
たこ	あついな	84
たたみ (畳)		207
たっしゃ (達者)	おきらしの	409
たっときこと (貴キ事)	くみち	100
たっときこと (貴キ事)	しやうかい	100
たに (谷)	へつつる	214
たはこ (煙草)	たんばこ	399
たび (足袋)	けり	26
たまき (玉茎)	ち	436
たれかも (誰が物)	ねんこるべ	333
だれこ (誰子)	ねにほほ	321
ち (血)	とつと	432
ちち (乳)	ゑかし	418
ちち (父)	はんべ	224
ちちころし (父殺)	おなたら	69
ちちのむ (乳呑)	とつといくれ	445
ちゃ (茶)		182
ちゃせん (茶筌)		184
ちゃわん (茶碗)		183
つく (搗く)	ゆだ	352
つな (綱)	や	292
つなぐ	しりごて	280
つばめ	ちひやつ	163
つま (妻)	こしまち	227
つま (妻)	まちい	58
つる (鶴)	へたちり	160
てっぽう (鉄砲)		387
てぬくい (手ぬぐい)	せんかき	382
でる (出る)	へとく	243
天	りきたん	337
てん (天)	しり	257
てんきよい (天気良い)	しりひるか	256
てんじょう (?)	くたり	223
と (戸)	あば	180
どうどうしてあはせん (同道して会わせん)	つらはゑくぬかるなんころ	354
とお (十)	わんべ	320
とがめる (咎める)	ねんゝ	334
とく (解く)	びた	281
とける	るう	107
とこへいく (どこへ行く)	ねたおまん	324
との (殿)	かもいと	38

とび (鳶)	やとた	156
とめる (泊る)	れうしり	240
ながきもの	しをふ	181
なかみち (中道)	しんしきるう	33
なきたる (凧ぎたる)	のとひりか	248
なく	ちしかる	16
なけく (嘆く)	おしよら	390
なしのき (梨の木)		133
なた (鉞)	はまなた	449
なつ (夏)	さく	2
ななつ (七つ)	あるあんべ	320
なにもの (何物)	ねんくう	332
なべ (鍋)	しう	187
なまこ (生子)	うた	118
なまにえ (生煮え)	ふ	245
なみ (浪)	のた	23
なめくぢり		154
ならのき (ならノ木)	にしよ	137
なわ (縄)	はりきか	347
なんぎ (難儀)	ころ	102
にえる (煮える)	ほうふ	244
にがきこと (にがき事)	しう	110
にがつ (二月)	はぶらく	356
にくひ	しとま	64
にしかぜ (西風)	しむれら	284
にじゅう (二十)	ほつ	320
にじゅうご (二十五)	あしきねいかしまほつ	320
にしん (ニシン)	てろき	412
にちげつ (日月)	つつふ	12
にようぼう (女房)	まち	228
ぬし (主)	ゑち	272
ねま (寝間)	しやうき	195
ねんごろ (懇ろ)	よつたなしのかる	391
ねんごろひと (懇ろ人)	おもひ	439
のこれ (残れ)	ようしおまんなんころ	265
のぼる (上る)	のほりへめれすおりた	259
のぼる (上る)	へめす	233
のぼる (上る)	りきたあま	261
のむこと (吞事)	くう	46
のり	おほこぶ	122
は (菌)	みまけ	275
はい	もす	149
はいたか		168
はくまい (白米)	びりけり	350
はし (箸)	ばす	186
はしら (柱)	ゆくすへ	189
はたけ (畑)	とひ	127
はち (蜂)	じやや	150
はちがつ (八月)	やるいつふ	362
はと (鳩)	くしほ	159
はと (鳩)	くしゑ	171
はと (鳩)	といた	159
はな (鼻)	ゑつふ	426
はなす (放す)	しゆら	282
はは (母)	はほう	225
ははころし (母殺)	おなばは	70

はま (濱)	おた	124
はやき (早き)	ついなし	235
はら (腹)	くい	424
はら (腹)	しつく	81
はらやみ (腹病)	ついあるか	253
はり (梁)	いてめに	191
はる (春)	はいかる	1
ひ (火)	あべ	8
ひうち (火打ち)		401
ひがしかぜ (東風)	あし	285
ひかた		286
ひげ (鬚)	れき	276
ひざ (膝)	こかしば	441
ひさく (柄杓)	ふきな	199
ひさしき (久敷)	なからてい	95
ひたい	のいほろ	106
ひたく (火薪)	あべあれ	48
ひだりみち (左道)	しもんるう	34
ひだるい	はらさんだひけれ	73
ひぢ (肘)	し	419
ひと (人)	しやも	15
ひとつ (一)	しねふ	320
ひとのもの (人の物)	あんぬんくるべ	331
ひのき (檜ノ木)	まさ	135
ひのくれ (日の暮れ)	つふらんむ	297
ひはし (火箸)	あべはし	212
ひへ	ひやば	6
ひゃく (百)	あしきねほつ	320
ひる (昼)	とうかつふ	302
ひるすぎ (昼過ぎ)	とうかつふほけれ	303
ひるまえ (昼前)	とののしけ	301
ふくろ (袋)		379
ふしき (不思議)	ね	422
ふたつ (二つ)	つふ	320
ふで (筆)		340
ぶなのき (ぶなの木)		136
ふね (舟)	ちつふ	25
ふねにのれ (舟に乗れ)	ちぶおふ	371
ふねのおもて (舟の表)	ちつふな	342
ふねのとま (舟の苫)	やれきな	246
ふねのとも (舟の艫)	ちつふおしよろ	343
ふねのなか (舟の中)	ちつふのしけた	344
ふゆ (冬)	また	4
ふよう		152
へい (塀)	なんころ	266
へび (蛇)	とくに	143
べんけい (弁慶)	しやまよる	447
ほ (帆)	かや	345
ほうぐわんと (判官殿)	おきくるみ	446
ほうす (坊主)	へそり	87
ほうちよう (包丁)	きばさけ	201
ほうちよう (包丁)	ゑびらけ	201
ほくち	かるし	404
ほくち	むにん	403
ほし (星)	のちう	13
ほしい (欲しい)	らんるし	406

ほねおり (骨折)	いしぎなんころ	238
ほねおり (骨折)	しんき	101
ほぼしら (帆柱)	ちつふかやに	346
ほらのき (ほらの木)	ふしに	138
ほんのくぼ (盆の窪)	くち	429
まがる (曲がる)	へうけ	367
まき (薪)	ちくに	47
まきり	ゑりけび	450
まさかり	むくかり	451
まつ (松)	ふつふ	130
まつすく (まっすぐ)	なにおまん	393
まないた (まな板)		200
まなこ	しき	79
まるきかい (丸き貝)	つふもこりり	121
まん (万)	わなほつ	320
みぎみち (右道)	はるきるう	32
みごと (見事)	いらしれな	310
みごと (見事)	いらまかしに	310
みず (水)	わつか	49
みずこひどり (水恋鳥)		169
みずはしり (水はしり)		197
みたくない	かもやし	68
みち (道)	る	397
みちすくなき (道すくなき)	ほん	36
みちひろき (道廣キ)	ほろ	35
みつつ (三つ)	れふ	320
みなこなたへよれ (皆此方へよれ)	おふびたのしやたおかひ	316
みなみかぜ (南風)	れいら	287
みね (峯)	きたひ	177
みみ (耳)	きしやら	428
みみす (見ゝす)	とに	146
みょうごにち (明後日)	しむけ	307
むこ (婿)	かふゝ	226
むことり (むこ取)	しう	113
むごひ	おのの	63
むさい	いつしやけれ	313
むしろ (筵)		205
むつつ (六つ)	いはぬべ	320
めい (姪)	まつかりこ	229
めし	あまも	5
もち (餅)	しと	74
もののあること (物の在事)	あねはおかい	22
もののないこと (物之無き事)	いしやま	21
もののへた (物のへた)	やひやる	369
もみてだす (揉みて出す)	ちきしやゝ	402
もめん (木綿)	うせつ	378
もも (腿)	おむ	440
もゆる (燃ゆる)	あべあり	250
や (矢)	あい	385
やくはん (葉缶)		203
やす	をうつふ	209
やすむ (休む)	えしぎなんころしんき	262
やつつ (八つ)	つべさんべ	320
やね (屋根)	かつしやう	192
やね (屋根)	せきたいひ	176
やのね (矢の根)	あいるむ	386

やぶれるもの (破れる物)	あんべうぶし	330
やまうば (山姥)	しようたんころ	175
やまどり (山鳥)	ふみるい	158
やまのうしろ (山の後ろ)	おしまけ	218
やまのお (山の尾)	くう	215
やまのおく (山の奥)	かつち	222
やまのおく (山の奥)	へてとく	222
やまのかみ (山ノ神)	のぼるかもい	88
やまのした (山の下)	ゆぶりきたいやうろうほう	219
やまのずじょう (山の頭上)	ゆぶりきたい	217
やまのひら (山の平)	うることり	216
やまのへいち (山の平地)	てなし	221
やまのわき (山の脇)	しやまけ	220
やもり (宮守)		147
やり (槍)	おつふ	455
ゆ (湯)	せせか	50
ゆき (雪)	おばせ	10
ゆび (指)	てき	444
ゆみ (弓)	くう	384
よい (良い)	びるか	318
よいか (良いか)	びるか	258
よくいく (良く行く)	ひるかのおまん	317
よつつ (四つ)	いねふ	320
よぶ (呼ぶ)	ほつゑ	278
よふきた (良う来た)	ひるか	315
よめとり (よめ取)	しう	112
よる (夜)	しりくんね	298
よれ (寄れ)	へまからい	370
よろこび	おのふゝ	389
よわつたか (弱ったか)	しんぎ	410
りくどう (陸道)	やべかる	398
ろくがつ (六月)	まうつゝふ	360
わきざし (脇差し)	ゑむし	454
わし (鷺)	かばちり	166
わずらう (煩)	やいのふ	104
わら (藁)	わつてし	348
われ (我)	てうかひ	18
われ (我)	てうかひ	335
わろき (悪き)	うゑん	19

引用アイヌ語索引

a	～か	37
ainupata	うらやましい	311
aki	弟	415
amam	米、飯	5
an	ある	337
anpayaya	カニ	120
anun	他人	331
apa	戸	180
apa	親戚	231
ape	火	251
apeare	火を焚く	250
apepasuy	火箸	212
apto	雨	9
arka	痛い	253
arka	痛い	425
arki	来る	323
arwanpe	七	320
as	降る	9
as	降る	338
asama	底	329
asikne	五つの	320
asiknep	五	320
atuy	海	24
atuy	海	90
atuynaw	タコ	84
ay	矢	385
aype	アワビ	85
cep	魚	78
chi-hotke-i	禪	381
chiurepchup	十二月	366
ci-	自発	402
ci	煮える	97
cikuni	木	213
cimip	着物	56
cip	舟	25
cipiyak	シギ	163
cise	家	165
cise	家	176
ciskar	嘆く	16
cokay	私達	18
cokay	私達	100
cokay	私達	335
corpok	下	219
cuk	秋	3
cup	太陽、月	12
e-	お前が ^s	262
eani	お前	322
eani	お前	326
eci-	お前達が ^s	271
eci-	お前達が ^s	272
eciokay	お前達が ^s	67
eciokay	お前達が ^s	100
eciokay	お前達が ^s	312
ek	来る	37
ekasi	祖父	418
emus	刀	454
epirkep	小刀	450

eramuskari	知らない	423
erepo	くべる	251
esaman	カワウソ	142
esna	くしゃみする	427
etuhu	鼻	426
hacir	落ちる	295
hanpe	父	224
hapo	母	225
haprap	二月	356
harki	右座の	32
harkika	綱	347
hawke	弱い	289
hemakaraiba	川の方へ戻る	370
hemesu	登る	259
heroki	ニシン	412
hesuri	僧	87
hetopo	戻って	98
hetuku	出る	243
heuke	曲がる	367
hoku	夫	57
hoku	夫	61
hokure	さあ	400
hokuyuk	雄グマ	92
honne	弱い	59
hoppa	残す	263
horka	逆である	98
hoskino	先に	264
hoskinuman	一昨日	309
hot	二十	320
hotke	横たわる	381
hotuye	呼ぶ	278
hoynu	テン	140
hu	生である	245
humiruy	ヤマバト	158
hunpe	クジラ	115
hur	坂	216
hure	赤い	373
hurekani	銅	204
i	所	384
icakkere	汚い	313
icaniw	マス	83
icen	お金	405
ikasma	余る	320
ikkewe	腰	433
ikure	飲ませる	445
ikuspe	柱	189
inankarapte	こんにちは	95
inep	四	320
inunpe	炉縁	211
ipe	食事する	45
iranmakaka	立派に	310
isam	ない	291
itanki	椀	185
itasasa	虐待する	76
itemeni	梁	192
iwanpe	六	320
iyokpe	鎌	452
iyomare	酒を注ぐ	202
iyos	後に	265

iyuta	搗く	352
ka	上	239
kakken	カワガラス	173
kamanata	大きなナイフ	449
kamuy	神	38
kamuy	神	39
kamuy	神	40
kamuy	神	41
kamuy	神	88
kamuy	神	90
kamuy	神	94
kamyasi	化け物	68
kanci	梶	421
kani	金属	407
kani	金属	408
kanpi	金属	96
kapatcir	ワシ	166
kapiw	カモメ	164
karku	甥	230
karus	キノコ	404
kasup	杓子	198
katu	様子	234
kaya	帆	345
kaya	帆	346
kayki	も	319
kema	足	443
kenas	河畔林	221
ker	靴	26
kikir	虫	148
kina	草、ごぎ	246
kiroro an	うれしい	77
kisa	揉む	402
kisara	耳	428
kitay	頂上	176
kitay	頂上	177
kitay	頂上	217
kiutachup	三月四月	358
kohemesu	登る	259
kokkasapa	膝	441
kokow	婿	226
kon	持つ	406
kopeca	カモ	162
kopepka	苦勞話をする	394
kor	持つ	331
kosmaci	嫁	227
kotan	村	336
kotor	湾曲面	216
koy	波	249
ku	弓	384
kuikaichup	十一月	365
kunne	黒い	373
kupka	鍬	453
kur	人	332
kusuwep	ヤマバト	159
kusuwep	ヤマバト	171
kut	帯	380
kuytop	ガン	161
maci	妻	228
macihi	妻	58

maknaw	北風	228
masa	桩	135
mata	冬	4
matkarku	姪	229
matne	女である	62
menoko	女	438
merayke	寒い	72
merayke	寒い	254
mici	父	100
mimak	齒	276
mokiutachup	三月	357
mokorir	巻き貝	121
mos	ハエ	149
mose	刈る	351
moyre	遅い	234
mukar	まさかり	451
munciro	粟	7
munin	腐る	403
nan	顔	342
nani	すぐ	393
nankor	だろう	238
nankor	だろう	262
nankor	だろう	265
nankor	だろう	266
nankor	だろう	354
ne	である	61
nen	誰	321
nen	誰	332
nen	誰	333
ney	どこ	323
ney	どこ	324
ni	木	346
nihorakchup	七月	361
nisatta	明日	241
nisew	ドングリ	137
niskur	雲	14
nispa	旦那	42
no	とても～だ	38
no	とても～だ	39
nociw	星	13
noki	軒	178
noki	擧丸	434
noski	真ん中	33
noski	真ん中	344
nospa	追う	279
nota	良い天気	29
noto	良い天気	23
noto	良い天気	248
noyporo	額	106
nukar	見る	354
numan	昨日	308
nupur	霊力がある	41
nupuri	山	88
nupuri	山	217
nupuri	山	219
nupuri	山	259
ocinakkari	日本人	237
ohak	浅い	31
ohaw	汁	51

ohawkop	海草	122
ohetke	こぼす	296
okay	ある、いる	22
okay	ある、いる	314
okay	ある、いる	328
okere	終える	303
okewe	追い出す	283
okikurmi	オキクルミ	446
okirashnu	強い	409
okkay	男	392
om	腿	440
omakirus	キリギリス	144
oman	行く	55
oman	行く	242
oman	行く	265
oman	行く	317
oman	行く	324
oman	行く	393
omoye	馴染男	439
onkami		388
onono	ばんざい	63
ononosh	めでたい	389
ooho	深い	30
op	槍	209
opas	雪	10
opittano	皆	316
opus	穴が開く	330
osmake	後ろ	218
osor	尻	343
osoro	尻	435
osura	捨てる	390
ota	砂	124
ota	砂	125
ottena	えらい人	448
oyasim	あさって	306
oyasim simke	しあさって	307
p	もの	44
pana	下流	29
parkar	辛い	109
paroho	口	277
pas	炭	341
paskur	カラス	155
pasuy	箸	186
paye	行く	264
paye	行く	400
paykar	春	1
pe	もの	239
pe	もの	331
pe	もの	371
peka	通って	398
pena	上流	28
pet	川	27
pet	川	94
petetok	川の源流	222
pikata	風の一種	286
pirka	良い	248
pirka	良い	258
pirka	良い	315
pirka	良い	318

pirka	良い	319
pirkano	良く	317
pita	解く	281
piwci	火打ち	401
piyapa	ヒエ	6
poho	子供	321
poho	子供	322
pokihi	女陰	437
pon	小さい	36
pon	小さい	38
pon	小さい	39
pon	小さい	40
pon	小さい	368
pop	沸く	75
popke	暑い	255
popokociw	ウグイス	170
poro	大きい	35
poronno	たくさん	65
pukuru	袋	379
pusni	ホオノキ	138
ram	低い	297
ran	降りる	260
raw	下	327
raw	下	328
ray	死ぬ	20
reki	髭	275
renkayne	思い通りに	271
rep	沖	268
rep	沖	270
repo	炉の中央に入る	252
rera	風	11
retar	白い	371
retatcir	白鳥(?)	160
rewke	曲がる	395
rewsire	泊める	240
rik	上	261
rik	上	337
rikani	桁	190
rir	波	249
ru	道	32
ru	道	33
ru	道	34
ru	道	397
ru	道	398
ru	解ける	107
rum	矢の先端	386
rusuy	たい	406
ruyanpe	荒天	248
saha	姉	416
sak	夏	2
sake	酒	91
samake	側	220
samayunkukr	サマユンクル	447
samo	日本人	15
san	下る	260
santaykere	空腹である	73
sapa	頭	105
saranpe	上等の着物	273
sata	手前に	316

senkaki	布きれ	382
seseikka	湯	50
seturu	背中	431
sey	貝	117
shinanchup	十月	364
shinchichup	五月	359
si-	本当の	33
sik	目 (?)	81
sike	束 (サケの)	320
siki	目	78
siknak	盲人	80
simon	左座の	34
sinasina	縛る	267
sine	一つの	320
sine	一つの	321
sinep	一	320
sinepesanpe	九つ	320
sinki	疲れる	101
sinki	疲れる	238
sino	本当に	41
sipe	サケ	82
sippo	塩	53
sir	地面	239
sir	天気	257
siraw	あぶ	151
sirki	模様	376
sirkote	つなぐ	280
sirkunne	夜になる	298
sironuman	日が暮れる	300
sirpeker	夜が明ける	299
sirpirka	天気が良い	256
sisam	日本人	15
sito	団子	74
sitoma	恐れる	64
siw	苦い	110
siwnin	青い	374
siyamam	米	97
so	床	194
sokai	カワセミ	174
sotki	部屋	195
soya	蜂	150
su	鍋	187
su	鍋	204
sukkake	酸っぱい	111
suma	石	268
suma	石	269
sumrera	西風	284
sunku	エゾマツ	129
supun	ウグイ	119
supuya	煙	290
sura	放す	282
suwat	鍋鈎	210
suwop	箱	181
ta	に	28
ta	に	29
ta	に	239
ta	に	261
ta	に	268
ta	に	324

ta	に	328
ta	に	337
ta	に	344
tan	この	336
tanpaku	タバコ	399
tanpe	これ	319
tanto	今日	304
teke	手	444
tenmun	海草	123
teppo	鉄砲	387
toetanne	一月	355
tokap	昼間	302
tokkoni	ママシ	143
tokuy	友人	17
tono	殿様	38
tononoski	お昼	301
topen	甘い	108
totto	乳	445
toy	畑	127
toyta	畑を耕す	159
tu	尾根	215
tunas	早い	235
tunas	早い	236
tunin	ミミズ	146
tup	二	320
tupesanpe	八	320
tura	連れる	354
turepni	クワ	132
tusuninke	リス	141
tuy	内臓	424
tuye	内臓	253
upas	雪	10
usarun mintar	台所	196
usep	反物	378
ussiw	召使	43
wa	て	354
wa	から	323
wa	よ	22
wakka	水	49
wanpe	十	320
wattesh	わら	348
wen	悪い	19
ya	か	37
ya	綱	292
yaki	セミ	172
yam	栗	131
yar	ぼろぼろである	246
yaruichup	八月	362
yatotta	トビ	156
ayaynu	思う	104
yaysitoma	恥ずかしがる	65
yuk	鹿	93
yupo	兄	414

Abstract:

A Study of the Ainu Vocabulary Collected in 1704 by the Venerable Kunen

Tomomi SATO

Keywords: the Venerable Kunen, old Ainu documents, historical linguistics

In this paper, I analyze 狄言葉 *Ezokotoba*, a copy of a vocabulary collected by a priest called Kunen in 1704, which can be thought as the oldest clearly dated Ainu vocabulary ever known.

The important points are summarized as follows:

1) It includes examples showing that the present Ainu /hu/ may have pronounced as [hu], unlike the present [ɸu]. This is likely to account for the apparently mysterious occurrence of /p/ in loan words from Japanese: e.g., *puri* 'habit' (Jap. ふり *furi* [ɸuri] 'appearance'), for if Ainu had had [ɸu] at the time of the borrowing, it should have copied [ɸu] easily, without bothering to modify it as [pu].

2) It includes examples serving to assume that Ainu might have had an unknown glide *H. For example, in 連ん本う *renhou* = *répo* 'to place log on the fire', ん and う are likely to be the reflexes of this *H. Although the modern form *rép-o* has irregular accent on the first syllable, the assumption of this *H enables us to explain why some CVC-stems exhibit an irregular pattern of accent: *reHp-oH > *rép-o* (cf. *sir-epa > *sir-épa* 'to arrive' (not **sírepa*): *sir-* 'place', *epa* 'to reach').

3) It includes words found only in very old documents: e.g., な可れてい *nakaretei* (*inankarapte* 'Hello') found also in 松前ノ言 *Matsumaenokoto*, allegedly the oldest Ainu vocabulary but not dated. This shows that *Ezokotoba* is also useful in evaluating the value of other documents which seem to be old but are not clearly dated.

